

平成19年度
神戸市埋蔵文化財年報



2010

神戸市教育委員会

平成19年度
神戸市埋蔵文化財年報

2010

神戸市教育委員会



fig. 1 出合遺跡・堂ノ上 1号墳全景



fig. 2 同・堂ノ上 4～7号墳全景



fig. 3 出合遺跡・堂ノ上 7号墳全景



fig. 4 同上遺物出土状況



fig. 5 舞子古墳群・東石ヶ谷 2号墳調査区全景



fig. 6 同上 填丘断面



fig. 7 今津遺跡第20次調査 S B 02遺物出土状況

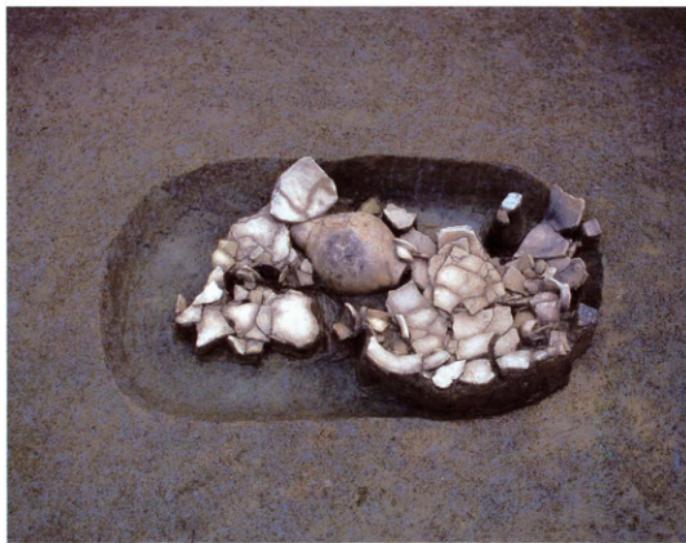


fig. 8 同・S K 04遺物出土状況



fig. 9 玉津田中遺跡弥生土器・木製器台出土状況



fig. 10 同上出土弥生土器壺・木製器台



fig. 11 兵庫津遺跡第44次調査出土龍文七宝飾り



fig. 12 同・尾部拡大



fig. 13 同・頭部拡大

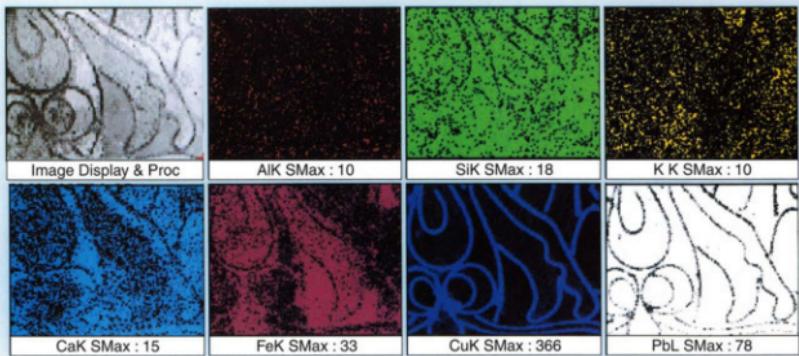


fig. 14 同・元素マッピング画像

序

私たちの暮らしている町の下には、私たちの祖先の暮らしの様子を示す埋蔵文化財が数多く眠っています。神戸市では、これら埋蔵文化財のうち開発行為に伴って消滅してしまうものについて、遺跡の発掘調査を行うことにより記録としての保存を図ってきました。

これらの調査によって得られた記録や出土遺物などはいうまでもなく、地域にお住まいの皆様をはじめとした国民の共有財産として広く活用されるべきものであり、神戸市では様々な機会をとらえて、調査成果の公表や活用に努めています。本書に掲載しております平成19年度に実施致しました調査成果も今後大いに活用されるべきものであり、本書が自分たちの住む地域の歴史を考えていく上で、その一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および本年報を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成19年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

横上重光　前　神戸女子短期大学教授（平成19年7月14日まで）
工楽善通　大阪府立狭山池博物館館長
和田晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教　　育　　長	小川雄二
社会教　育　部　長	黒住章久
参事(文化財課長事務取扱)	柏木一孝
主幹(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	丸山潔
事務担当学芸員	谷正俊　松林宏典 井尻格　関野豊
埋蔵文化財調査係長	千種浩
文化財課主査	安田滋
事務担当学芸員	阿部敬生　中谷正 口野博史　黒田恭正　須藤宏
調査担当学芸員	富山直人　佐伯二郎　内藤俊哉 浅谷誠吾　川上厚志　石島三和 阿部功　中村大介　磯崎朋子
主幹(埋蔵文化財センター所長事務取扱)	渡辺伸行
文化財課主査	丹治康明
	西岡誠司　池田毅

助神戸市体育協会

会　　長	表孟宏
副会長(専務理事事務取扱)	水田祐次
常　務　理　事	碩弘四郎
総　務　課　長	横関勇
総務課主査(兼務)	山本雅和
調査担当学芸員	東喜代秀　斎木巖　藤井太郎

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500万分の1都市計画図を使用した。調査範囲が広域な遺跡や目標となるものが入らない地点の遺跡の位置図については、キャプションに縮尺を表記している。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成19年度事業の概要1～5については千種 浩が執筆し、I-6については渡辺伸行が執筆した。また、平成19年神戸市埋蔵文化財調査地点図と調査地点位置図、出土遺跡で発見された古墳の位置については丸山 潔が作成した。編集については、千種の指導のもとに阿部敬生が行った。
4. 芝崎遺跡第4次調査、玉津田中遺跡第36次調査の報告中の木製品の樹種同定については(株)パレオ・ラボに依頼したもので、小林克也氏の執筆によるものである。
5. 掘団写真の撮影、遺構図のトレースについては、fig.279・280・330は杉本和樹氏（西大寺フォト）が、fig.42は丸山が撮影を行い、その他のものについては各調査担当者が撮影を行った。
6. 卷頭カラーは、fig.1・2は(株)G E Oソリューションズが、fig.10は杉本和樹氏が撮影を行い、その他のものについては各調査担当者が撮影・作成を行った。
7. 表紙写真は舞子古墳群第21次調査（本文141頁）出土の須恵器器台で、裏表紙写真は兵庫津遺跡第44次調査（本文203頁）出土の七宝製品である。撮影は牛嶋茂氏の指導の下、杉本和樹氏が行った。
8. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。

目 次

序
例言

I. 平成19年度 事業の概要	1
平成19年度 埋蔵文化財発掘調査一覧	8
平成19年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図	11
II. 平成19年度の発掘調査	
1. 森北町遺跡 第27次調査	15
2. 本山中野遺跡 第3次調査	19
3. 本山北遺跡 第4次調査	21
4. 岡本北遺跡 第9次調査	22
5. 西岡木遺跡 第6次調査	23
6. 魚崎郷古酒蔵群 第3次調査	25
7. 郡家遺跡 第83次調査	39
8. 滝ノ奥遺跡 第4次調査	41
9. 篠原遺跡 第26次調査	43
10. 西郷古酒蔵群 第6次調査	45
11. 日暮遺跡 第30次調査	49
12. 日暮遺跡 第31次調査	53
13. 生田遺跡 第5次調査	57
14. 生田遺跡 第6次調査	58
15. 中山手遺跡 第4次調査	59
16. 下山村遺跡 第5次調査	61
17. 元町遺跡 第5・B次調査	63
18. 楠・荒川町遺跡 第39次調査	65
19. 楠・荒田町遺跡 第40・41次調査	69
20. 楠・荒田町遺跡 第42次調査	73
21. 兵庫津遺跡 第45次調査	75
22. 兵庫津遺跡 第46次調査	77
23. 兵庫津遺跡 第47次調査	79
24. 塚本遺跡 第4次調査	81
25. 上沢遺跡 第55次調査	83
26. 日下部遺跡・中遺跡	85
27. 長田神社境内遺跡 第16次調査	95
28. 長田神社境内遺跡 第17次調査	97
29. 御蔵遺跡 第64・65次調査	99
30. 御蔵遺跡 第66・67次調査	103
31. 御蔵遺跡 第68次調査	107
32. 水笠遺跡 第29次調査	109
33. 若松町東遺跡 第1次調査	111
34. 二葉町遺跡 第21-1・2次調査	119
35. 若松町遺跡 第6次調査	121
36. 戎町遺跡 第66次調査	123
37. 大田町遺跡 第14次調査	127
38. 大田町遺跡 第15次調査	131
39. 行幸町遺跡 第8次調査	135
40. 垂水・日向遺跡 第34次調査	137
41. 舞子古墳群 第21次調査	141
42. 伊川谷町潤和 所在確認調査	147
43. 高津橋岡遺跡 第9・10次調査	151
44. 今津遺跡 第19次調査	153
45. 今津遺跡 第20次調査	155
46. 今津遺跡 第21次調査	157
47. 日輪寺遺跡 第10~12次調査	159
48. 芝崎遺跡 第4次調査	163
49. 玉津田中遺跡 第36次調査	175
50. 居住遺跡 第11次調査	182
51. 出合遺跡 第37・39次調査	183
52. 出合遺跡 第38次調査	199
III. 平成19年度の保存科学調査・作業の概要	203

挿図目次

fig. 1	出土遺跡・堂ノ上 1号墳全貌〔巻頭カラー〕	
fig. 2	同・堂ノ上 4～7号墳全貌〔巻頭カラー〕	
fig. 3	出土遺跡・堂ノ上 7号墳全貌〔巻頭カラー〕	
fig. 4	同上遺物出土状況〔巻頭カラー〕	
fig. 5	舞子古墳群・東石ヶ谷 2号墳調査区全貌〔巻頭カラー〕	
fig. 6	同上墳丘断面土層断面図〔巻頭カラー〕	
fig. 7	今津瀬跡第20次発掘 S B02遺物出土状況〔巻頭カラー〕	
fig. 8	同・S K04遺物出土状況〔巻頭カラー〕	
fig. 9	玉津田中遺跡弥生土器・木製器台出土状況〔巻頭カラー〕	
fig. 10	同上出土弥生土器臺・木製器台〔巻頭カラー〕	
fig. 11	兵庫津瀬跡第4次調査出土龍文七宝鏡〔巻頭カラー〕	
fig. 12	同・尾部拡大〔巻頭カラー〕	
fig. 13	同・頭部拡大〔巻頭カラー〕	
fig. 14	同・元素マッピング画像〔巻頭カラー〕	
fig. 15	滑川学上発掘：規則複数：斜斜・斜傾斜断面図〔写真〕	7
fig. 16	出張調査：土器作り〔写真〕	7
fig. 17	地域連携：西神オリジナルホテル展示〔写真〕	7
fig. 18	地域連携：神出町里づくり土器焼きイベント〔写真〕	7
fig. 19	大歳山まつり〔写真〕	7
fig. 20	冬季企画展示「昭和のくらし・昔のくらし」〔写真〕	7
fig. 21	平成19年度 埋蔵文化財年報掲載追跡位置図	11
fig. 22	調査地点位置図（1）・（2）	12
fig. 23	調査地点位置図（3）・（4）	13
fig. 24	調査地点位置図（5）・（6）	14
fig. 25	調査位置図	15
fig. 26	調査区上層断面図	16
fig. 27	第1～4遺構面平面図	17
fig. 28	S B01全貌〔写真〕	18
fig. 29	調査位置図	19
fig. 30	第1遺構面平面図	20
fig. 31	調査位置図	21
fig. 32	調査区平面図	21
fig. 33	調査位置図	22
fig. 34	調査区平面図	22
fig. 35	調査位置図	23
fig. 36	4区平面図	24
fig. 37	調査位置図	25
fig. 38	1区（大歳）土層断面図	25
fig. 39	第1遺構面平面図	26
fig. 40	第2遺構面平面図	28
fig. 41	S K19断面状況〔写真〕	29
fig. 42	S K19内部〔写真〕	29
fig. 43	1区墳場全貌〔写真〕	30
fig. 44	2区塚場昭和時代面〔写真〕	30
fig. 45	2区塚場明治時代面〔写真〕	30
fig. 46	2区塚場明治時代面（燧炎基礎）〔写真〕	31
fig. 47	2区塚場江戸時代面〔写真〕	31
fig. 48	出土遺物実測図（1）	33
fig. 49	出土遺物実測図（2）	34
fig. 50	出土遺物実測図（3）	35
fig. 51	出土遺物実測図（4）	36
fig. 52	出土遺物実測図（5）	37
fig. 53	出土遺物拓本	38
fig. 54	調査位置図	39
fig. 55	II～V区 第2遺構面平面図	40
fig. 56	調査位置図	41
fig. 57	調査区北壁上層断面図	41
fig. 58	調査区平面図	42
fig. 59	調査位置図	43
fig. 60	調査区平・断面図	44
fig. 61	出土遺物実測図	44
fig. 62	調査区全景〔写真〕	44
fig. 63	調査位置図	45
fig. 64	調査区平面図	46
fig. 65	槽場平・立面図	47
fig. 66	X 4トレント槽場西端全貌〔写真〕	47
fig. 67	槽場歪垂検出状況〔写真〕	47
fig. 68	B区全景〔写真〕	48
fig. 69	X 6トレント大歳石垣全景〔写真〕	48
fig. 70	X 6トレント石垣全景〔写真〕	48
fig. 71	調査位置図	49
fig. 72	調査範囲位置図	49
fig. 73	調査区南壁土層断面図	50
fig. 74	第1・2遺構面平面図	50
fig. 75	西半部第1遺構面全貌〔写真〕	50
fig. 76	S K01断面〔写真〕	50
fig. 77	第3遺構面平面図	51
fig. 78	S B02土器出土状況〔写真〕	51
fig. 79	流路全貌〔写真〕	51
fig. 80	東半部第3遺構面全貌〔写真〕	52
fig. 81	調査位置図	53
fig. 82	調査区土層断面図	53
fig. 83	第1遺構面全貌〔写真〕	54
fig. 84	第1遺構面平面図	55
fig. 85	S P26・61平・断面見通し図	55
fig. 86	S P26全景〔写真〕	55
fig. 87	S P61全景〔写真〕	55
fig. 88	第2遺構面平面図	56
fig. 89	調査位置図	57
fig. 90	調査区平面図	57

挿図目次

fig. 91 調査地位図	58	fig. 136 1区調査範囲位置図	86
fig. 92 調査区平面図	58	fig. 137 1区土層断面図	86
fig. 93 調査地位図	59	fig. 138 1区平面図	86
fig. 94 調査区西壁上層断面図	60	fig. 139 S K03平・断面図	87
fig. 95 調査区平面図	60	fig. 140 S K03全景〔写真〕	87
fig. 96 S B01平・断面図	60	fig. 141 S K04平・断面図	88
fig. 97 調査地位図	61	fig. 142 S K04全景〔写真〕	88
fig. 98 調査区半・断面図	62	fig. 143 2区平面図	89
fig. 99 調査地位図	63	fig. 145 3区トレチ配置図	90
fig. 100 調査グリッド配置図	63	fig. 146 3区1トレチ平・断面図	90
fig. 101 G 1グリッド土層断面図・平面図	64	fig. 147 3区3・4トレチ平面図	91
fig. 102 調査地位図	65	fig. 148 3区5トレチ平・断面図	92
fig. 103 調査区中央土層断面図	65	fig. 149 3区5トレチ全景〔写真〕	92
fig. 104 調査区北半全景〔写真〕	66	fig. 150 3区6トレチ平・断面図	93
fig. 105 S B01北半全景〔写真〕	66	fig. 151 3区6トレチ北半全景〔写真〕	94
fig. 106 調査区平面図	68	fig. 152 3区6トレチ南半全景〔写真〕	94
fig. 107 出上遺物実測図	68	fig. 153 調査地位図	95
fig. 108 調査地位図	69	fig. 154 調査区西壁上層断面図	96
fig. 109 調査区配図	69	fig. 155 調査区平面図	96
fig. 110 第40次調査区平面図	70	fig. 156 S D01遺物出土状況平面図	96
fig. 111 第40次調査出土器実測図	70	fig. 157 S D01遺物出土状況〔写真〕	96
fig. 112 第41次調査区土層断面図	71	fig. 158 調査地位図	97
fig. 113 第41次調査区平面図	72	fig. 159 調査区平面図	98
fig. 114 第41次調査出土器実測図	72	fig. 160 調査区全景〔写真〕	98
fig. 115 調査地位図	73	fig. 161 調査地位図	99
fig. 116 調査区土層断面模式図	73	fig. 162 第64次調査区土層断面図	100
fig. 117 第1・2遺構面平面図	74	fig. 163 第64次調査区平面図	100
fig. 118 第1遺構面全景〔写真〕	74	fig. 164 第64次調査区全景〔写真〕	100
fig. 119 第2遺構面全景〔写真〕	74	fig. 165 第64次調査区西壁土層断面〔写真〕	100
fig. 120 調査地位図	75	fig. 166 第65次調査区土層断面図	101
fig. 121 調査区配図	75	fig. 167 第65次調査区平面図	102
fig. 122 近世遺構配図	76	fig. 168 第65次調査区全景〔写真〕	102
fig. 123 中世遺構配図	76	fig. 169 調査地位図	103
fig. 124 調査地位図	77	fig. 170 第66次調査区配図	103
fig. 125 調査区半・断面図	78	fig. 171 第66次調査 1・2トレチ平面図	104
fig. 126 調査地位図	79	fig. 172 第67次調査 Aトレチ全景〔写真〕	105
fig. 127 A区北壁七層断面図	80	fig. 173 第67次調査区平面図	106
fig. 128 第1遺構面平面図	80	fig. 174 第67次調査 Bトレチ全景〔写真〕	106
fig. 129 調査地位図	81	fig. 175 調査地位図	107
fig. 130 調査区土層断面図	81	fig. 176 調査範囲位置図	107
fig. 131 調査区平面図	82	fig. 177 第3遺構面半・断面図	108
fig. 132 調査区全景〔写真〕	82	fig. 178 調査区西半第3遺構面全景〔写真〕	108
fig. 133 調査地位図	83	fig. 179 調査地位図	109
fig. 134 第1～3遺構面平面図	84	fig. 180 調査区平面図	110
fig. 135 調査地位図	85		

挿図目次

fig. 181 調査地位置図	111	fig. 226 S X01平・断面図	138
fig. 182 1区平面図	111	fig. 227 調査区北半第1遺構面全景〔写真〕	138
fig. 183 調査区配図	111	fig. 228 S X01遺物出土状況〔写真〕	138
fig. 184 2・5区平面図	112	fig. 229 第2遺構面平面図	139
fig. 185 3区平面図	113	fig. 230 S D03全景〔写真〕	139
fig. 186 4区平面図	114	fig. 231 第3遺構面平面図	140
fig. 187 6区平面図	117	fig. 232 調査区南半第3遺構面全景〔写真〕	140
fig. 188 7区平面図	118	fig. 233 調査地位置図	141
fig. 189 調査地位置図	119	fig. 234 南側墳丘断面及び周溝断面図	142
fig. 190 調査区平面図	120	fig. 235 東石ヶ谷2号墳墳丘測量図・調査区地形測量図	142
fig. 191 第21・1次調査区全景〔写真〕	120	fig. 236 遺物出土状況〔写真〕	144
fig. 192 第21・2次調査区全景〔写真〕	120	fig. 237 墳丘土層断面〔写真〕	144
fig. 193 調査地位置図	121	fig. 238 調査区全景〔写真〕	144
fig. 194 調査区西壁土層断面図	121	fig. 239 出土遺物実測図(1)	145
fig. 195 調査区平面図	122	fig. 240 出土遺物実測図(2)	146
fig. 196 1区全景〔写真〕	122	fig. 241 調査地位置図	147
fig. 197 2区全景〔写真〕	122	fig. 242 6・7トレンチ平面図	148
fig. 198 調査地位置図	123	fig. 243 23~26トレンチ平面図	150
fig. 199 調査区西壁上層断面図	123	fig. 244 調査地位置図	151
fig. 200 調査範囲位置図	124	fig. 245 第9・10次調査区平面図	152
fig. 201 S X01平・断面図	124	fig. 246 調査地位置図	153
fig. 202 S X01出土遺物実測図	124	fig. 247 第2遺構面平面図	154
fig. 203 S X01全景〔写真〕	125	fig. 248 調査地位置図	155
fig. 204 旧河道出土遺物実測図	126	fig. 249 第2遺構面平面図	155
fig. 205 調査地位置図	127	fig. 250 S B02全景〔写真〕	156
fig. 206 第4・5トレンチ土層断面図	127	fig. 251 13号坑平面図	156
fig. 207 調査区平面図	128	fig. 252 調査地位置図	157
fig. 208 第3トレンチ南端落ち込み〔写真〕	129	fig. 253 調査区南壁上層断面図	157
fig. 209 第5トレンチ水田平面図	130	fig. 254 調査区平面図	158
fig. 210 第5トレンチ水田全景〔写真〕	130	fig. 255 調査地位置図	159
fig. 211 調査地位置図	131	fig. 256 調査範囲位置図	159
fig. 212 調査範囲位置図	131	fig. 257 第10~12次調査区平面図	160
fig. 213 調査区土層断面図	132	fig. 258 第10~12次調査区全景〔写真〕	161
fig. 214 第1遺構面平面図	132	fig. 259 調査地位置図	163
fig. 215 第1遺構面全景〔写真〕	133	fig. 260 調査範囲位置図	163
fig. 216 S B01全景〔写真〕	133	fig. 261 調査区平面図	165
fig. 217 S B11全景〔写真〕	133	fig. 262 S E01全景〔写真〕	166
fig. 218 第2遺構面平面図	133	fig. 263 S E02全景〔写真〕	166
fig. 219 第3・4遺構面平面図	134	fig. 264 S E02平・立・断面図	166
fig. 220 調査地位置図	135	fig. 265 調査区全景〔写真〕	167
fig. 221 調査区平・断面図	136	fig. 266 出土遺物実測図(1)	168
fig. 222 第5・3・5次・8次調査区平面図	136	fig. 267 出土遺物実測図(2)	169
fig. 223 調査地位置図	137	fig. 268 出土遺物実測図(3)	170
fig. 224 調査区北半東壁土層断面図	137	fig. 269 芝崎跡出土木製品の光学顕微鏡写真	174
fig. 225 第1遺構面平面図	138	fig. 270 調査地位置図	175

挿図目次

- fig. 271 調査区平面図 176
 fig. 272 A区上層断面図 176
 fig. 273 A区第3遺構面遺物出土状況〔写真〕 177
 fig. 274 A区第4遺構面遺物出土状況〔写真〕 177
 fig. 275 A区第4遺構面遺物出土状況平・断面見通し図 177
 fig. 276 B区第4遺構面遺物出土状況〔写真〕 178
 fig. 277 D区第3遺構面遺物出土状況〔写真〕 178
 fig. 278 A区出土遺物実測図 179
 fig. 279 A区出土遺物写真(1)〔赤生土器類〕〔写真〕 179
 fig. 280 A区出土遺物写真(2)〔木製器台〕〔写真〕 179
 fig. 281 玉浦町小瀬第36次調査出土木製品の光学顕微鏡写真 181
 fig. 282 調査地位置図 182
 fig. 283 レンチ配置図 183
 fig. 284 21レンチ2区平面図 184
 fig. 285 21レンチ3区平面図 184
 fig. 286 21レンチ3区S B01平・断面図 185
 fig. 287 21レンチ3区S B01全景〔写真〕 185
 fig. 288 21レンチ4区・24レンチ平面図 186
 fig. 289 2号埴全景〔写真〕 186
 fig. 290 21レンチ5区平面図 187
 fig. 291 21レンチ5区S K04平面図 187
 fig. 292 22・23レンチ平面図 187
 fig. 293 25レンチ・範囲確認拡張部平面図 189
 fig. 294 1号埴全景〔写真〕 189
 fig. 295 26・27レンチ2区・範囲確認拡張部平面図 190
 fig. 296 7号埴全景〔写真〕 190
 fig. 297 27レンチ平面図 191
 fig. 298 出合遺跡で発見された古墳の位置 193
 fig. 299 30レンチ平面図 194
 fig. 300 31レンチ1区平面図 195
 fig. 301 31レンチ2区・32レンチ平面図 195
 fig. 302 31レンチ4区・33レンチSD01・02全景〔写真〕 195
 fig. 303 33レンチ全景〔写真〕 196
 fig. 304 33レンチ平面図 197
 fig. 305 33レンチS B01平・断面図 197
 fig. 306 33レンチS B02平・断面図 197
 fig. 307 調査地位直圖 199
 fig. 308 2トレンチ東壁土層断面図 199
 fig. 309 調査区平面図 200
 fig. 310 2トレンチS D02全景〔写真〕 201
 fig. 311 出土遺物実測図 202
 fig. 312 人骨(S T01)出土状況〔写真〕 203
 fig. 313 梱包作業〔写真〕 203
 fig. 314 吊り上げ作業〔写真〕 203
 fig. 315 保存処理完了状況〔写真〕 203
 fig. 316 青銅鏡X線透過画像(部分)〔写真〕 204
 fig. 317 鋏剣把系巻き残存状況〔写真〕 204
 fig. 318 青銅鏡保存処理前〔写真〕 205
 fig. 319 同左保存処理完了後〔写真〕 205
 fig. 320 部分マクロ写真(2.4倍)〔写真〕 206
 fig. 321 同左X線透過画像〔写真〕 206
 fig. 322 眼球部分拡大(35倍)〔写真〕 206
 fig. 323 角部分拡大(35倍)〔写真〕 206
 fig. 324 分析作業状況〔写真〕 207
 fig. 325 P E G合浸前養生〔写真〕 208
 fig. 326 P E G合浸後水洗作業〔写真〕 208
 fig. 327 真空凍結乾燥作業〔写真〕 209
 fig. 328 欠損部補填作業〔写真〕 209
 fig. 329 備塗合成樹脂整形作業〔写真〕 209
 fig. 330 復元完了状況〔写真〕 209

表目次

表 1	文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	1	表 10	平成19年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧表	10
表 2	発掘調査面積	1	表 11	芝崎遺跡樹種同定結果一覧	171
表 3	発掘調査面積別件数	1	表 12	芝崎遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧	173
表 4	企画展など入館者数	6	表 13	玉浦町小瀬第36次調査出土木製品の樹種同定結果	180
表 5	講演会 神戸を知る考古学(5回シリーズ)	6	表 14	玉浦町小瀬第36次調査出土木製品の樹種同定結果一覧	181
表 6	講演会 神戸の文化遺産に秘む(3回シリーズ)	6	表 15	平成19年度出土金銀製品	210
表 7	平成19年度埋蔵文化財発掘調査一覧表(1)	8	表 16	平成19年度出土木製品	210
表 8	平成19年度埋蔵文化財発掘調査一覧表(2)	9	表 17	平成19年度自然科学分析委託	210
表 9	平成19年度埋蔵文化財発掘調査一覧表(3)	10			

I. 平成19年度 事業の概要

1. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、開発面積の大小に関わらず、文化財保護法に基づく届出・通知（文化財保護法第93条・第94条）が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を指示している。

平成11年度以降は、建築確認申請に伴う事前届出制度（『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』）における事前届出書の閲覧を実施し、埋蔵文化財発掘届出書の提出および土木工事等についての文化財の取り扱いの指導を行っている。

平成19年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、770件（前年度786件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が724件（前年度749件）であった。また、開発行為事前審査願170件（前年度188件）、試掘調査依頼226件（前年度245件）ともに件数では前年度に比べてわずかに減少しているが、平成17年度の件数とはほぼ同数である。件数としてはここ2~3年の傾向として、安定しているといえる。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法93・94条関係）	770件
	i 民間の事業に伴う発掘届（93条）	724件
	ii 公共の事業に伴う発掘通知（94条）	46件
	iii 発掘届・発見通知（92条）	9件
2	発掘調査の報告（99条）	46件
3	開発行為事前審査等各種申請	170件
4	分布調査依頼書（埋蔵文化財所在の有無の確認依頼書・調査件数）	106件
5	試掘調査（依頼件数）	226件
6	発掘調査（大規模確認調査も含む）	60件
i	民間事業に伴う発掘調査	53件
	ii 公共事業に伴う発掘調査	5件
	iii 園場整備事業に伴う発掘調査	2件
7	工事立会	65件
8	整理作業（復興調査整理作業を含む）	11件

表2 発掘調査面積

	民間関連事業	公共関連事業	合計
調査面積	15,912	8,027	23,939
延べ調査面積	24,225	8,027	32,252

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
~100m ²	26件	40.6	1,001~2,000m ²	5件	7.8
101~300m ²	14件	21.9	2,001~5,000m ²	1件	1.6
301~500m ²	13件	20.3	5,001m ² 以上	0件	0
501~1,000m ²	5件	7.8	合 計	64件	100

※調査件数64件は表1発掘調査件数60件に山田遺跡国庫補助金発立2件、同範明跡認調査2件を加えた件数。

2. 刊行物一覧

平成19年度に刊行した埋蔵文化財関係の刊行物は下記のとおりである。

- 『平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報』額価1,000円 『神戸市埋蔵文化財分布図』額価 500円 『五番町遺跡発掘調査報告書－第12次調査－』額価なし 『御影郷占酒藏群第4次発掘調査報告書』額価 900円 『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』額価 800円 『兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書』額価 900円 『精・荒川町遺跡第40・41次発掘調査報告書』額価なし 『郡家遺跡第83次発掘調査報告書』額価2,000円 『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』額価4,500円 『神戸臨港線南木町架道橋範囲確認調査報告書』額価なし 『二葉町遺跡発掘調査報告書 第14~21次調査』額価1,900円 『大橋町遺跡第2次発掘調査報告書』額価1,100円 『塩田北山東古墳発掘調査報告書』額価2,000円

3. 発掘調査事業 平成19年度に実施した発掘調査事業に要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、363,311千円であった。これらの内訳は、

開発事業に伴う本発掘調査	345,909 千円
試掘・確認調査	17,402 千円 である。

国庫補助事業 文化財保護法の規程と国の補助事業の採択基準により採択を受けたものについて、調査事業と保存処理事業を実施している。埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業は、事業費78,000千円であった。

このうち、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として塩川北山東古墳（八幡神社古墳群9号墳）出土の鉄製品、青銅製品や兵庫津遺跡第21次調査出土の銅製品、鉄製品、端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸などの保存処理を実施した。また、復興調査整理として、平成10年度に調査を実施した兵庫津遺跡の出土遺物整理を継続して行った。

市内発掘調査 発掘調査件数は昨年度（73件）と比較すると、景気動向の影響を受けて、やや減少しているが、発掘調査面積は23,939m²（延べ32,252m²）で、昨年度の22,405m²に比べると微増している。事業全体としては、ほぼ横ばいの傾向にある。個人住宅の建替えや、集合住宅への転換などが全体を支えているようである。このうち民間関連事業によるものが15,912m²（延べ24,225m²）と昨年度と同様に6割強を占めている。面積別でみると、300m²以下の件数が40件と6割を占めており、小規模な調査が多い傾向が継続していることが指摘できる。

震災復興土地区画整理事業地内の個人住宅・共同住宅等に伴う調査は、引き続き実施されている。また、市街地再開発事業関連調査は、昨年度から引き続き、長田区水笠遺跡や二葉町遺跡などで調査を実施し、古墳時代後期の堅穴住居や掘立柱建物、平安時代～鎌倉時代のピット、上坑などを確認している。

現地説明会 発掘調査の現地において、実際に体感していただく機会として、現地説明会を3回開催した。5月27日の郡家遺跡第83次調査で201名、11月10日の水笠遺跡第29次調査で400名、12月16日の出合遺跡第37次調査に100名の参加があった。

資料の活用 発掘調査によって保存された資料には、主に出土品、写真や図面の記録類があり、これらは他の機関等からの要望があれば、貸出等を行っている。写真・図面については、平成19年度は64件の依頼があり205点を貸出した。貸出資料としては、五色塚古墳関係が最も多く、19件、34点を数える。これらは主に学校教育関連図書、博物館等の展示図録等、歴史関係図書、情報誌などへの掲載を利用目的としている。

出土遺物の貸出は11件、324点あり、北青木遺跡出土銅鐸は「発掘された日本列島2007」展に出品されて全国を回り、西求女塚古墳や本山遺跡、新方遺跡、五色塚古墳、垂水・日向遺跡等の資料は国立歴史民俗博物館や関西の博物館で展示された。

その他に、資料調査の依頼が23件あり、大学生、研究者が兵庫津遺跡、祇園遺跡、西求女塚古墳などの資料を調査された。

4. 史跡名勝天然記念物

国指定史跡等の管理

史跡五色塚古墳の維持管理及び公開と大歳山遺跡の見学対応は、特定非営利活動法人輝

かすみが丘に委託している。日常的な公開業務の他に、五色塚古墳から日の出を見る会等の行事を企画し、地域での史跡の活用を図っている。その他に、史跡処女塚古墳と天王山5号墳の除草と植栽の管理を行った。

国指定史跡の保存修理事業

和田岬砲台は、江戸幕府の浜海防備策のひとつとして勝海舟の設計により元治元年に完成し、大正10年に国史跡に指定されている。その後、幾たびかの修理が行われてきたが、近年外壁の剥落や、内部木組みの劣化も進行し、所有者である三菱重工業株式会社からの要望で本年度から5ヶ月計画で国宝重要文化財等保存整備事業を行うことになった。

県指定天然記念物

兵庫県指定文化財である灘区所在の神前の大クスについて、兵庫県の補助事業により3ヶ月計画の保存修理事業を行ってきた。最終年度にあたる平成19年度は、保全対策として主に腐朽部にFRPフィルムのカバーを取り付けと、根の活性化を促進するための薬剤注入と土壤の膨軟化を行い、石柱柵の設置を行った。

さらに、『神前の大クス—600年の歳月とこれからの姿』と題して、修理を担当された樹木医の河合浩彦氏による記念講演と実演を平成20年2月9日に都会館で開催し、67名の参加があった。

市指定天然記念物

神戸市指定文化財である東灘区所在の鷺ノ森のケヤキについて、神戸市文化財保護条例に基づく補助事業として3ヶ月計画の保存修理事業を行っている。最終年度となる平成19年度は、主に根の発達を促進させる土壤改良と、FRPフィルムカバーによる腐朽空洞部位の閉塞、説明板の設置を行った。さらに、記念講演会として、『鷺の森のケヤキ—800年の歳月とこれからの姿』を平成20年3月8日に北畠会館で開催し、32人の参加があった。

5. 地域連携事業

淡河町自治協議会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの連携事業の取り組みとして、淡河歴史セミナー（第9、10回）を共催して行った。平成19年8月26日に神戸大学大学院研究员木村修二氏『江戸時代久留米藩士淡河來訪記』（参加者40名）、平成20年2月25日に神戸市立博物館学芸員川野憲一氏『中世の輝き—石峯寺伝来の仏教』（参加者60名）を淡河連絡所で行った。

神戸市文書館と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの協力により、新修神戸市史歴史編「古代・中世」調査成果中間報告会を3回開催した。平成19年8月18日兵庫公会堂で「羽柴秀吉制札・松原城・萩原城・端谷城跡出土品」の展示を行い、京都光華女子大学准教授野川泰三氏『戦国・織懃期の神戸市域—旧三木郡域を中心に』、神戸大学大学院教授藤田裕嗣氏『瀬戸内と兵庫津—瀬戸内海と兵庫津—主に15世紀の史料から』の講演を行い、235名の参加があった。平成20年1月26日神戸市勤労会館において同上のテーマで写真パネルの展示を行った。平成20年2月8日～2月17日文書館で薄絵桜花南蛮人文絵軸・端谷城跡出土甲・市内遺跡山上中國製陶磁器を展示了。

平成19年11月2日～3日、道場町の農村改善センターで行われた道場町文化祭に「道場町の古墳-鹿の子台に残る道場の古墳-」をテーマに展示を行い、700人の見学者があった。

6. 普及啓発事業（埋蔵文化財センター）

平成19年度は大学と連携協定、高校との連携等の新たな取り組みや、地域行事等の参加によってさらに地域に根づいた文化財啓発を展開できた。また来館者数は44,310人（内学校・団体146校、9,295人）を数え、昨年度を大きく上回った。

① 学校との様々な連携

大学との連携協定締結

埋蔵文化財センターでは、以前より学校との連携を強めてきたが、専門知識を保持する大学との連携によって、研究教育機関の利用促進、最新の研究成果を取り入れた事業展開を目指とし、市内及び近隣地域との連携事業を展開した。平成19年9月に神戸山手大学及び大手前大学との連携協定を締結し、また、神戸学院大学とも西区との包括的連携協定に基づき、具体的な連携内容について話し合いを始めた。平成19年度は、大手前大学の博物館実習課程における学外実習の協力を行った。

啓明学院土曜講座の開講

平成19年度においては、新たに啓明学院中学校・高等学校の土曜講座を埋蔵文化財センターで担当することになった。この土曜講座は、平常の授業において学習できないことを、生徒の将来計画に沿って選択・受講するもので、教養講座・芸術講座・理数系講座・英検講座などの講座が組まれているが、教養講座に属する「神戸の文化遺産を学ぶ」というカリキュラムを設定し、前期と後期あわせて14回の授業を担当した。前期は考古学に関するテーマ、後期は近代遺産のテーマで坐学と校外の実習・見学を取り混ぜて実施し、中学生・高校生・保護者の36名が受講した。

高校や神小研社会科部との連携

神戸市立六甲アイランド高校の選定科目「フィールドワーク」3回と兵庫県立友が丘高校の設定科目「考古学」2回のカリキュラムを埋蔵文化財センターが担当し、それぞれと、授業と体験学習、遺跡見学などを行った。

神戸市小学校教育研究会社会科部との連携の中で、コミスタこうべで開催される市内各小学校の生徒による夏休みの学習成果を展示する「神戸市小学校社会科作品展」において、優秀作品を埋蔵文化財センター賞として表彰し、さらにその受賞作品を、9月22日～30日まで埋蔵文化財センターのエントランスホールにおいて展示した。会期中に受賞者及びその関係者など656名の来館があった。

出張講座・授業

各小学校へ出張して勾玉作りや土器作りの体验考古学講座を31校で行い、出張授業を2校で行った。出張授業は、これまでの出張展示に代わるメニューで、実物資料を用いた授業を行うことにより、古代を体感してもらうねらいで実施した。利用者は、33校2,654人である。

② 地域との連携

埋蔵文化財センターの有効性を高める事業のひとつである。地域連携事業では、地域行事等に積極的に参加し、埋蔵文化財センターの紹介と埋蔵文化財の普及活動を行った。5月の「みどりと太陽のまつり」、8月の櫛谷町の「櫛谷川まつり」、11月の「神出町里作

くりイベント」に参加、パネル展示や上器作り体験などを実施した。

また、西神工業会館を中心に関かれた地域企業の公開行事、西神工業団地のインダストリアルパークフェア（8月24日開催）に参加し、西神工業会館において、遺物展示を含めた西区内の遺跡紹介と埋蔵文化財センターの紹介を行った。参加者は500名を数えた。

その他、市内各公民館の夏休み行事であるサマースクールに協力し、土器づくり・勾玉づくりの体験指導を行った。また婦人会や自治会（植谷・枝吉・北別府）などの地域団体が主催する地域の歴史を学ぶ講演会で、各地の歴史や文化財を紹介する講演を4回行い、さらに神戸西警察署の署員研修において、「西区の遺跡」と題して講座を3回行った。

西区地域学

平成18年度に『西区ふるさと自慢百選』に紹介された西区内の史跡や文化財を訪ねる講座として西区の単独事業で始まったが、平成19年度は教育委員会との区局連携事業を行った。平成19年度は、『播磨名所巡覧図会』を題材として、2月15日の卒業と2月22日のバス見学ツアーの2本立てで行った。見学では、押部谷町の性海寺や住吉神社、神出町神出神社や淡山疏水の練部屋分水所などを巡った。参加者は2回で168名であった。

大歳山まつり

文化財保護強調週間の行事として、垂水区や舞子ふれあいまちづくり協議会などと連携し、11月4日に大歳山遺跡公園において開催した。恒例の復元竪穴住居公開と古代衣装試着・製塙土器を用いた塙作りなどの様々な古代体験イベントを行い、地域婦人会の協力を得た古代米のおにぎりを試食し、秋の1日を楽しく過ごしてもらった。参加者は948名を数えた。

また、区局連携事業においては、垂水区内の遺跡説明板を2ヶ所設置した。ひとつは平成19年2月に舞子砲台が史跡に指定され、指定名称が明石藩舞子台場跡となつたため、説明板を新調した。もうひとつは古墳時代後期の横穴式石室が群集する舞子墓園内の舞子古墳群舞子台支群への道順を示すために、山陽バス舞子墓園前バス停から舞子古墳群舞子台支群への案内サイン看板を新設した。

③ ボランティア育成

埋蔵文化財センターを市民に開かれた施設とするため、その運営においてボランティアの参加を呼びかける取り組みを行った。10月に広報紙において募集を行い、13名の応募者をいただいた。平成20年度からの活動に備え、11月から3月まで、計5回ボランティア研修を行った。

④ 文化体験プログラム その道の達人に学ぶ「竪穴住居をつくろう」

実際に竪穴住居作りを体験してもらうプログラムで、29名の参加者を得て、11月25日に開催した。毎年実施している講座で、実際の規模の竪穴住居を資材を用いて完成させることのできるものである。住居建て上げとともに、弥生スープづくりとどんぐりクッキーづくりなどの古代食づくりも体験してもらった。

⑤ 企画展と講演会の開催

4回の企画展を開催した。春季は小学校6年生の歴史の校外学習に応じた「発見！ 弥生人の生活」、夏季は「昔むかしのものづくり」、秋季は有馬温泉や三木合戦で神戸となじみ

の深い秀吉関連の遺跡を紹介した「秀吉と神戸」、冬季は「昭和のくらし・昔のくらし2」を開催した。特に、冬季企画展「昭和のくらし・昔のくらし2」は、小学校3年生の団体見学など、多くの来館者があり、会期中に13,850名を数える入館者があった。

最新の神戸の考古学の調査成果をわかりやすく市民に伝える講演会、「神戸を知る考古学」を5回シリーズ、「神戸の文化遺産に親しむ」を3回シリーズで、計8回開催した。

表4 企画展など入館者数

展示内容	開催期間	開館日数	入館者数
発見！弥生人の生活	4月12日～6月10日	60	13,456
昔むかしのものづくり	7月21日～9月2日	38	3,353
神戸市小学校社会科作品展「埋蔵文化財センター賞受賞作品展」	9月22日～9月30日	8	656
秀吉と神戸	10月13日～12月2日	44	3,675
昭和のくらし・昔のくらし2	1月12日～3月9日	49	13,850

表5 講演会 神戸を知る考古学（5回シリーズ）

	月 日	講 演 名	参 加 者
1	9月15日	神戸の銅鐸の謎をさぐる	44
2	10月20日	秀吉と有馬・湯山御殿	20
3	11月17日	古代の大窯業地 神出	28
4	12月15日	遺跡から探る神戸の古環境	33
5	1月19日	解明進んだ福原京	61

表6 神戸の文化遺産に親しむ（3回シリーズ）

	月 日	講 演 名	参 加 者
1	1月27日	大土木事業 五色塚古墳の造営	47
2	2月17日	幕末の海防 舞子砲台	49
3	3月16日	近代神戸港の発展と臨港鉄道	52



啓明学院土曜講座：現地授業「史跡　旧海軍操練所跡」



出張講座：土器作り



地域連携：西神オリエンタルホテル展示



地域連携：神出町里づくり土器焼きイベント



大歳山まつり



冬季企画展示「昭和のくらし・昔のくらし 2」

表7 平成19年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（1）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	実施担当者	調査面積 延床面積	調査期間	調査内容	調査報告
1	森北川遺跡 第27次調査	東灘区森北町4丁目1-1	神戸市教育委員会	佐佐二郎 4.7m ²	130m ² 4.7m ²	19.03.19～ 19.04.22	4面の遺構面を確認した。第27回調査で発生した複数の円柱状穴柱は柱頭部を残してほか、柱頭時代後期の溝、ビット、中世の溝、ビット、近世の切削などを検出した。	市地政課 「田原の里」
2	木山川遺跡 第8次調査	東灘区木山南町7丁目 3-1	神戸市立教育委員会	須藤忠 高・直人	130-m ² 200m ²	19.2.21～ 20.02.01	3面の遺構面を確認した。古墳時代後期の溝、半円形の溝の底に柱頭部などを検出し、斎居土器（「西」、「木工」）、縄文陶器、瓦などなどが出土している。	市地政課 「田原の里」
3	木山川遺跡 第9次調査	東灘区木山1丁目142 番1	神戸市教育委員会	宋良慶	30m ² 50m ²	19.7.19～ 19.12.20	遺構面が判明せず、測量時に（後幕、古墳時代初期、古墳時代後期の上層）が消してしまった。	個人住宅様 「田原の里」
4	籠本北道路 第6回調査	東灘区西宮町4丁目 37番1号	神戸市教育委員会	浅谷薫子	70m ² 70m ²	19.8.28.18～ 19.12.27	第6回調査で古墳時代後期の溝のみ込み、古墳時代初期の上層などを検出した。	個人住宅設 「田原の里」
5	西宮市遺跡 第6回調査	東灘区西宮町6丁目10-1 6号地の一部	神戸市立教育委員会	藤井大輔	50m ² 265m ²	20.2.21～ 20.03.26	半円形の溝、後期の環濠遺物などを検出し、施設跡、白壁、瓦、瓦張などが出土している。	市地政課 「田原の里」
6	鳥越山遺跡 第6回調査	東灘区魚崎南町4丁目 5番地の一部	神戸市立教育委員会	分野雄	1,200m ² 2,000m ²	19.04.04～ 19.11.09	古墳時代後期の貝貝、近代の酒瓶瓦瓶（入窯《右肩など》、雨樋《足場など》、排水管《排水管など》、廻転道など）などを検出した。	市地政課 「田原の里」
7	阪鶴古墳群 第4次調査	尼崎市北崎町4丁目 4番地の一部	神戸市教育委員会	關野聰	370m ² 370m ²	19.08.20～ 19.09.23	法隆寺式圓窓	「田原の里」
8	新屋敷跡 第1次調査	東灘区御影町13丁目	神戸市立教育委員会	右鍋三郎 阿部龍、 中村仁	490m ² 945m ²	19.04.06～ 19.05.26	2面の遺構面を確認した。古墳時代初期の土坑、古墳時代中期の堅穴吹き、土坑など在原御前山において出土し、伴系土器などが出土した。新屋敷の堅穴吹きなどを検出した。	門真駅
9	西宮遺跡 第4次調査	洲崎西丁字橋ノ堀5-3	芦屋市立教育委員会	川上厚志	135m ² 120m ²	20.01.21～ 20.01.31	土石礫面を検出し、作付の遺物が出土した。	個人住宅設 「田原の里」
10	篠原遺跡 第5回調査	兵庫県尼崎市1丁目 5番地の一部	神戸市教育委員会	須藤宏	15m ² 15m ²	19.05.07～ 19.06.10	青瓦時代～平安時代の溝、土坑、柱穴などを検出した。	尼崎市篠原 「田原の里」
11	芦原山遺跡 第6次調査	尼崎市蛭隈町1丁目 4番、41番、42番	神戸市教育委員会	高山吉人・ 浅谷誠志	750m ² 750m ²	19.07.05～ 19.09.24	古代の酒瓶《大甕、豆甕、筒焼》多段山し、壇場等では壇場が出土している。また、1面はビット跡も検出している。	初開拓 「田原の里」
12	日暮御所跡 第3回調査	中央区日暮2丁目 5番地の一部	神戸市立教育委員会	内藤俊哉	125m ² 270m ²	19.05.14～ 19.06.21	2面の遺構面を確認した。奈良時代～古墳時代の堅穴吹き、土坑、柱穴の上坑、ビットなどを検出した。	西住毛駅 「田原の里」
13	1号墓跡 第3回調査	中央区日暮3丁目 360番・361番	神戸市立教育委員会	内藤俊哉	300m ² 300m ²	19.7.03～ 19.7.29	2面の遺構面を確認した。平安時代～ヒマの堅穴吹き、土坑、柱穴などを検出し、出土からは和歌町門代の土坑と瓦とともに瓦葺冠の石室などが出土している。	西住毛駅 「田原の里」
14	生田山跡 第6回調査	中央区下手筋通5丁目	神戸市教育委員会	草山道人	40m ² 40m ²	19.04.02～ 19.04.06	埴生時代以前の堅穴吹き層を検出した。	典典住宅建設
15	日吉遺跡 第6回調査	中央区山手通3丁目 10番（2番）	神戸市立教育委員会	川上厚志	70m ² 70m ²	19.03.29～ 19.04.29	魂魄時代・古墳時代の遺物を含む洗浄路を検出した。	門真駅
16	中山手遺跡 第4回調査	中央区山手通3丁目 7番22号	神戸市立教育委員会	内藤俊哉	50m ² 50m ²	19.06.18～ 19.06.22	弥生時代～古墳時代の堅穴吹き、土坑、柱穴、中空崩落の箇所、土坑などを検出した。	西住毛駅 「田原の里」
17	下山三遺跡 第6回調査	中央区下手筋通5丁 15番、5、6、7	神戸市立教育委員会	川上厚志	95m ² 95m ²	19.04.25～ 19.05.06	墳丘時代以前の堅穴吹き層を検出した。	典典住宅建設
18	元町遺跡 第5回調査	中央区元町通3丁目 19番1号	神戸市立教育委員会	浅谷誠志	86m ² 86m ²	19.04.06～ 19.04.11	中世御殿の柱穴・小井を検出した。	典典住宅建設
19	箕面御所 跡	箕面区箕面町1丁目 7-26番	神戸市立教育委員会	浅谷誠志	130m ² 130m ²	19.04.34～ 19.05.18	古墳時代後期の堅穴吹き、土坑、柱穴、中空崩落の箇所、土坑などを検出した。	箕面駅 「田原の里」
20	三井山跡 第6回調査	兵庫県尼崎市2丁目 20-19	神戸市立教育委員会	佐藤一郎 川上厚志	200m ² 200m ²	19.05.14～ 19.05.31	古墳時代後期の堅穴吹き、土坑、柱穴、中空崩落の箇所、土坑などを検出している。	ナリタ建設
21	新・尼崎御所 跡	兵庫県尼崎市20番 9-12	神戸市立教育委員会	川上厚志	200m ² 200m ²	19.07.20～ 19.08.21	治水施設を検出し、奈良時代～平安時代末の土器が出土した。	共利住宅建設
22	新・尼崎御所 跡	兵庫区北花園町7丁目-2	神戸市立教育委員会	富山道人	25m ² 70m ²	19.10.10～ 19.10.24	2面の遺構面を確認した。奈良時代～奈良時代のビット、第、第2回時代のビット、溝を検出した。	宝町町営施 設
23	兵庫牛路跡 第45次調査	兵庫区三河町1丁 14番16、4番17	神戸市立教育委員会	佐藤一郎	450m ² 1,450m ²	19.05.17～ 19.08.16	3面の遺構面を確認した。中世後半の井戸、土坑、瓦当などを検出している。	兵向江町営施 設
24	長塚遺跡 第46次調査	兵庫区加納3丁目3	神戸市立教育委員会	川上厚志	9m ² 9m ²	19.05.15～ 19.06.31	瓦の石を確認した。	事務所建設
25	長塚遺跡 第47次調査	兵庫区北花園町1丁目-2	神戸市立教育委員会	高山吉人	45m ² 60m ²	19.05.23～ 19.07.16	2面の遺構面を確認した。第7回時代の井戸、第8回時代の石井、石器などを検出した。	兵門町花江 「田原の里」
26	籠本北道路 第6回調査	兵庫区深谷通6丁目 9番6号	神戸市立教育委員会	内藤俊哉	130m ² 130m ²	19.07.1～ 19.07.25	古墳時代の土坑などを検出し、鎌倉時代の土器が出土した。特に平安時代後期～古墳時代初期の土器が出土した。	兵門町花江 「田原の里」
27	上武夷跡 第56次調査	兵庫区上武夷10番 10番-4	神戸市立教育委員会	森山道人	500m ² 1,500m ²	20.01.07～ 20.03.30	3面の堅穴吹きを確認した。平安時代後期～古墳時代初期の土器が出土した。特に平安時代後期～古墳時代初期の土器が出土した。	典典住宅建設

表8 平成19年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（2）

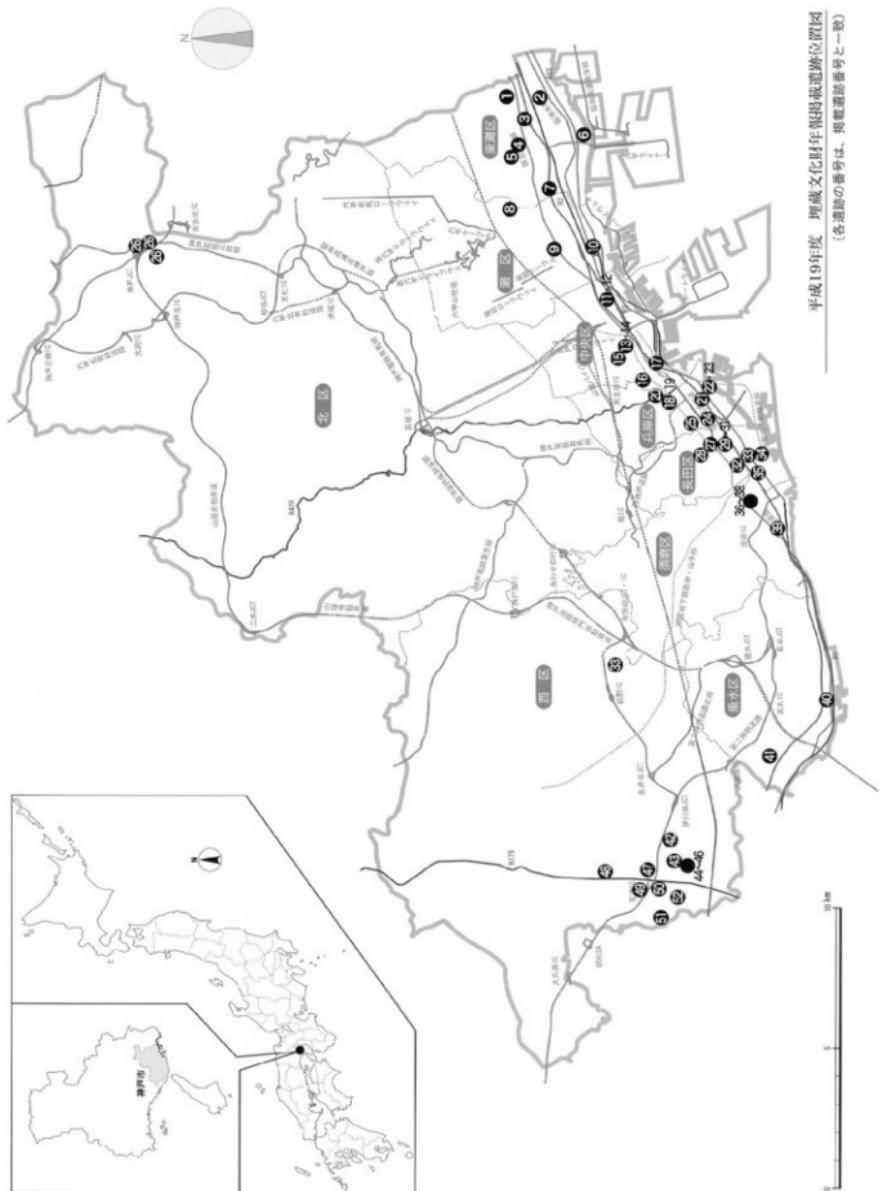
No.	施設名	所在地	調査主体	調査担当者	測量面積 延面積面積	調査期間	調査内容	調査原因
28	日下部・牛込 跡	北区砧町日下部・ 八多町7番	御津市体育協会	藤谷太郎	1,285㎡ 1,285㎡	19.07.10～ 19.09.19	令和時代の落ち込み、瓦、瓦片時代、京町の瓦、土器、水 器の埋藏物等を検出した。	区间整理
29	真田松原跡の 跡地内空き地	桜井町六番町丁目4-4- 6番	神戸市教育委員会	高山麻衣子	75㎡ 73㎡	19.11.29～ 19.12.11	令和時代瓦～古墳時代初期（室内牌行駆）のピット、漢文銘出 した。	個人住宅施設 (既存施設改築)
30	真田神社境内 跡地内空き地	長田区大河原町4丁目 4-3-2	神戸市教育委員会	阿部祐	275㎡ 275㎡	20.01.06～ 20.02.15	2箇の遺構を確認した。当遺構は～縄文時代の遺物を含む複 数の落ち込み、縄文時代の二重瓦なども出土した。また、部分で比較 的豊かにわたると推測する遺物の集中部分を5箇所検出した。	川端牛之助記念 (既存施設改築)
31	御津市跡 跡地内空き地	兵庫県御津市丁目 201-26、201-27	神戸市教育委員会	内藤俊成	56㎡ 56㎡	19.08.08～ 19.08.30	奈良時代～縄文時代の水田跡を検出した。	個人住宅施設 (既存施設改築)
32	御津市跡 跡地内空き地	長田区御津町6丁目 701-24、201-25	神戸市教育委員会	内藤俊成	47㎡ 47㎡	19.08.31～ 19.09.30	亞細亚時代～縄文時代の落ち込み。漢、骨器不明の瓦などを検 出した。	個人住宅施設 (既存施設改築)
33	御津市跡 跡地内空き地	長田区御津町6丁目 210番1、210番2	神戸市教育委員会	内藤俊成、 高山麻衣子	28㎡ 72㎡	19.09.26～ 19.10.10	2箇の遺構を確認した。奈良時代末～古墳時代初期（室内牌行駆）の 落ち込み、瓦、瓦片、古墳時代後期の落ち込み。平安時代 の二重瓦などを出土した。	川端牛之助記念 (既存施設改築)
34	御殿通跡 跡地内空き地	長田区御殿通6丁目 211番1	神戸市教育委員会	藤谷麻衣子	40㎡ 40㎡	19.09.25～ 19.10.10	奈良時代末～古墳時代初期（室内牌行駆）の落ち込みを検出し た。	浜井住吉神社 (既存施設改築)
35	御殿通跡 跡地内空き地	長田区御殿通6丁目 211番1-2	神戸市教育委員会	内藤俊成、 高山麻衣子	80㎡ 80㎡	20.05.11～ 20.05.26	2箇の遺構を確認した。古墳時代前期の瓦。漢、中世の清 水器を検出した。	丁子坂健 (既存施設改築)
36	水元跡 跡地内空き地	長田区水元通2丁目	神戸市小体育協会	森喜代美	700㎡ 700㎡	19.10.03～ 19.11.22	『造時代～初期の窓穴付柱脚、奈良住吉神社、漢、二重、ピッ ト』を検出した。	小畠謙所
37	石塚町御殿通 跡地内空き地	長田区石塚町3丁目	神戸市小体育協会	藤谷太郎	1,566㎡ 1,566㎡	19.10.04～ 20.05.14	難波時代初期の土坑、漢、奈良時代初期の土坑、中型の土坑。 瓦の残骸などを出土した。	御田地区南側
38	二世帯の 跡地内空き地	長田区二世帯町1丁目	神戸市小体育協会	木村代典	1,155㎡ 1,155㎡	19.05.31～ 19.11.26	平安時代～縄文時代のピット、土坑を検出した。	市商地本店
39	香寺町御殿 跡地内空き地	香寺町香寺町5丁目 109-2	神戸市教育委員会	内藤俊成	20㎡ 20㎡	19.12.05～ 19.12.17	縄文時代初期の土坑を検出した。	個人住宅施設 (既存施設改築)
40	吹田跡 跡地内空き地	御津市吹田町3丁目 50-1、1-2、6-1、 5-19	神戸市教育委員会	児谷誠吾	359㎡ 359㎡	20.11.15～ 20.12.14	奈良～平安時代初期の遺物をさむり田跡、室町時代の水田跡の 構造を検出した。	共同住宅建設
41	人見町御殿 跡地内空き地	御津市人見町3丁目111 番号	神戸市小体育協会	川上志弓	197㎡ 182㎡	19.10.26～ 19.11.13	奈良時代初期の瓦、古墳時代～奈良時代の水田、落ち込み （古代墳墓跡）を検出した。	共同住宅建設 (既存施設改築)
42	大前川御津 跡地内空き地	御津市大前町1丁目 48-7	神戸市教育委員会	内藤俊成	190㎡ 190㎡	19.11.25～ 20.01.09	4箇の遺構を確認した。古墳時代の落ち込み。町制初期の磚 瓦埋蔵坑、平安時代の壁立柱跡などが検出した。	共同住宅施設 (既存施設改築)
43	仁平町御殿 跡地内空き地	長田区仁平町4丁目11-1	神戸市教育委員会	仁平洋平	47㎡ 47㎡	19.09.12～ 19.09.14	西宮区内で落ち込んだ小面積を検出した。出土遺物がないが、 発達した土器や瓦などの落ち込みは又定跡で確認されている房塚 時代～難波時代の人の足跡と思われる。	庄屋付住宅建 (既存施設改築)
44	垂水町御殿 跡地内空き地	垂水区垂水町2番16 号	神戸市教育委員会	佐藤二郎	1,000㎡ 1,000㎡	19.02.19～ 19.03.31	5箇の遺構を確認した。平安時代～難波時代の瓦を、落差十 分の土器や瓦などを検出した。	川端家記念 (既存施設改築)
45	福島古跡 跡地内空き地	生糸町福島町4丁目 106-1、106-2番	神戸市教育委員会	高山麻衣子、 浅井謙所	85㎡ 85㎡	19.10.16～ 19.11.15	奈良時代の瓦を確認した。落差十畳（「上」「下」）、平安 時代の瓦などを検出した。	個人住宅建設 (既存施設改築)
46	芦屋市御殿 跡地内空き地	西久戸芦屋市御殿町 55番地	神戸市小体育協会	鈴木一郎、 川上志弓	921.5㎡ 921.5㎡	19.07.13～ 20.03.24	既製瓦在 物の瓦～壁穴空きなどを検出した。	(既存施設改築)
47	高木町御殿 跡地内空き地	西区上池町高木横丁 59番地	神戸市教育委員会	阿部祐	48㎡ 48㎡	19.11.12～ 19.11.15	既製瓦在 物の瓦～壁穴空きなどを検出した。	個人住宅建設 (既存施設改築)
48	深堀町御殿 跡地内空き地	西区玉置町高木横丁 307番地	神戸市教育委員会	阿部祐	97.7㎡ 97.7㎡	19.11.16～ 19.11.22	牛軒の牛軒、ピットを検出した。	個人住宅建設 (既存施設改築)
49	今治町御殿 跡地内空き地	宍道区今治町今治丁 4-61番1	神戸市教育委員会	植野宏	709㎡ 200㎡	19.05.26～ 19.06.28	7箇の遺構を確認した。奈良時代の瓦、ピット、落ち込み、 古墳時代後期の瓦を検出した。奈良時代中期の落からら丸形の落 が出土した。	共同住宅建設 (既存施設改築)
50	今治町御 殿跡地内空 き地	宍道区今治町今治丁 4-61番1-1、106-2、 106-1、106-2	神戸市教育委員会	植野宏	200㎡ 200㎡	19.11.10～ 19.12.19	既製瓦在 物の瓦～壁穴空きを検出した。奈良時代中期の瓦～壁穴空 きは焼成不良で、瓦、瓦片、瓦片などを検出した。奈良時代 の土器からは、赤、青が引つ込まれたような土器が出土した。	工芸館跡 (既存施設改築)
51	今治町御 殿跡地内空 き地	宍道区今治町今治丁 4-61番1	神戸市教育委員会	植野宏	70㎡ 72㎡	20.01.25～ 20.02.12	奈良時代の瓦を検出した。奈良時代の瓦、ピットを検出した。	毛利武完成 (既存施設改築)
52	今治町御 殿跡地内空 き地	西久戸芦屋市八幡町 55番地	神戸市教育委員会	石崎三和	465㎡ 465㎡	19.02.25～ 20.03.31	奈良時代の瓦を検出した。奈良時代中期の瓦～壁穴空 きは焼成不良で、瓦、瓦片、瓦片などを検出した。奈良時代 の土器からは、赤、青が引つ込まれたような土器が出土した。	毛利武完成 (既存施設改築)
53	日向町御 殿跡地内空 き地	芦屋市日向町小山町 6-1-24	神戸市教育委員会	石崎三和	408㎡ 408㎡	19.07.05～ 19.10.31	奈良時代の瓦を検出した。	毛利武完成 (既存施設改築)
54	三輪町御 殿跡地内空 き地	芦屋市三輪町小山町 6-1-25	神戸市教育委員会	石崎三和	254㎡ 254㎡	19.07.05～ 19.07.31	奈良時代の瓦を検出した。	毛利武完成 (既存施設改築)

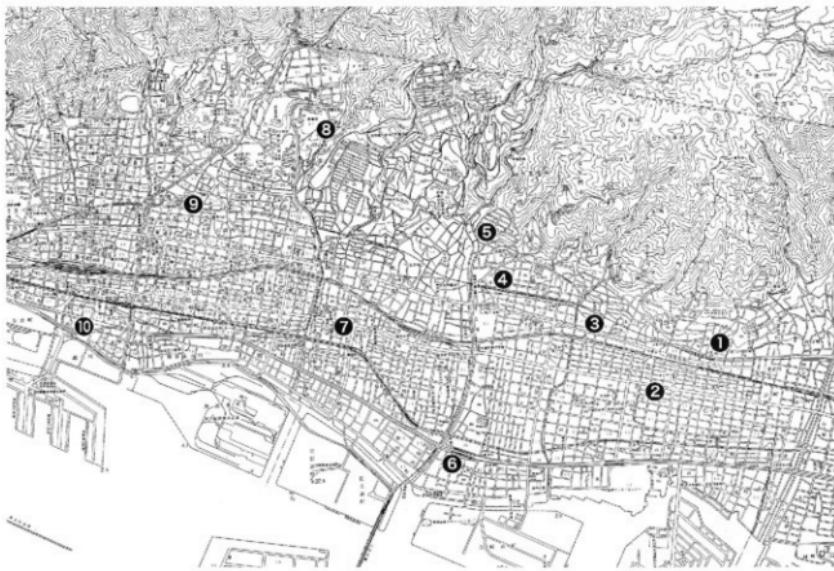
表9 平成19年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表 (3)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 又は面積割合	調査期間	調査内容	調査期間
55	三崎古墳 第4次調査	西区平野町芝崎286-1	神戸市教育委員会	川上厚志・ 阿部祐	250m ² 188m ²	第1回:2001年 4月20日～ 4月21日 第2回:2001年 5月14日	縄文時代～室町時代の古墳、城跡跡物、陶、土瓦、セメントを 複数出土した。井戸には石臼のものと木桶ろし跡の被るものがある。 溝や千枚田から白堀などの遺構が出土している。	歴史的考古学調査
56	毛津山古墳 第3次調査	西区吉尾1丁目25-6	神戸市教育委員会	道山謙人	10m ² 4.6m ²	19.01.09～ 19.05.29	舟形埴輪の頭の西漢墓の馬を発見し、木製容器、伊御上石(走)など などが出土した。また勾玉駆除の溝、落ち込み、セメントも出土して いる。	考古学調査 (明治期鉄道下工跡)
57	御生野跡 第1次調査	西区玉津町小山字志 り山の番1号地	神戸市教育委員会	高山幸人・ 茂谷謙喜	56m ² 56m ²	19.06.1～ 19.06.29	歩のビットを発見した。	佐賀城跡
58	中谷城跡 第3次調査	西区平野町中谷字空 ノ上	神戸市作業協会	若木義	1,106m ² 1,106m ²	19.07.07～ 19.07.09	古墳時代後期の円墳から構成される古墳群(「空ノ上古墳群」) を発見した。古墳時代後期～後漢時代、後漢時代～平安時代、 藤原時代の複数層構造と上工などを検出した。	考古学調査 (藤原時代上工跡)
59	山ノ塚跡 第3次調査	神戸市西区平野町中 山の塚1号地	神戸市教育委員会	森木理	334m ² 334m ²	19.11.16～ 20.01.10	古墳時代後期の円墳の開溝(「空ノ上古墳群1号墳」)を採査した。 また、古墳時代後期の円墳から構成される古墳群(「空ノ上古墳群」)を採査した。(「空ノ上古墳群」 の発見地)	考古学調査 (古墳時代上工跡)
60	山ノ塚跡 第3次調査	西区平野町中津字空 ノ上	神戸市教育委員会	森木理	360m ² 360m ²	19.10.11～ 19.10.21	古墳時代後期の円墳から構成される古墳群(「空ノ上古墳群」)を採査した。 また、古墳時代後期の円墳から構成される古墳群(「空ノ上古墳群」)を採査した。(「空ノ上古墳群」 の発見地)	考古学調査 (古墳時代上工跡)
61	山口道路 第3次調査	西区平野町中字空 ノ上	神戸市教育委員会	森木理	680m ² 680m ²	19.11.16～ 20.01.08	古墳時代後期の円墳から構成される古墳群(「空ノ上古墳群」)を採査した。 また、古墳時代後期の円墳から構成される古墳群(「空ノ上古墳群」)を採査した。(「空ノ上古墳群」 の発見地)	考古学調査 (古墳時代上工跡)
62	山ノ塚跡 第3次調査	西区玉津町山ノ塚字長 野の野2号地	神戸市教育委員会	酒添文・ 佐伯一郎	150m ² 150m ²	19.08.17～ 19.09.11	15～16世紀の下限橿原の二重の壁を発現した。	考古学調査 (昭和初期手植木)
63	山口道路 第3次調査	西区平野町山津字坂 ノノ内口	神戸市作業協会	森木理	376m ² 376m ²	20.01.09～ 20.02.14	平安時代の上り、溝を検出した。	考古学調査
64	山口道路 第3次調査	西区平野町山津字坂 ノノ内口	神戸市教育委員会	森木理	10m ² 10m ²	20.01.22～ 20.02.07	平安時代の樹立柱跡を扶土ビットで検出した。	考古学調査 (昭和初期手植木)
					23,939m ²			
					32,252m ²			

表10 平成19年度 埋蔵文化財出土遺物整理一覧表

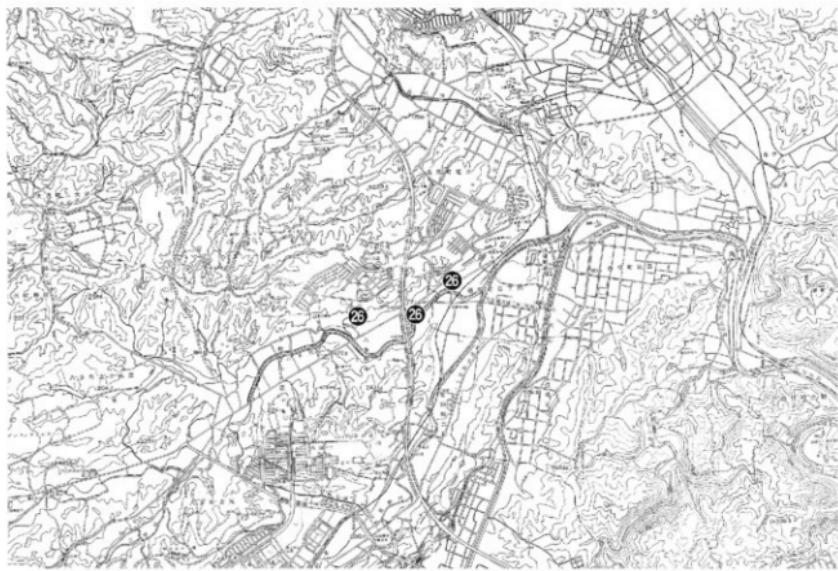
No.	遺跡名	所在地	調査主体	収集担当者	調査面積 又は面積割合	調査期間	調査内容	調査期間
A	御所跡古墳群 第4次調査	神戸市教育委員会	集田哲正	2m ² 2m ²	19.03.21～ 19.12.08		出土遺物整理・報告書作成	民間開発
B	兵庫淨蓮寺 第3次調査	神戸市教育委員会	阿部祐	0m ² 0m ²	19.04.21～ 19.05.21		出土遺物整理・報告書作成	民間開発
C	兵庫街道跡 第3次調査	神戸市教育委員会	石島三知	0m ² 0m ²	19.07.07～ 20.03.01		出土遺物整理・報告書作成	民間開発 (国庫補助事業)
D	大畠里跡 第3次調査	神戸市作業協会	森井太郎	0m ² 0m ²	19.04.02～ 19.1.13		出土遺物整理・報告書作成	市民合同開発
E	山口古墳 第3次調査	神戸市教育委員会	九川深・ 黒田昌志	0m ² 0m ²	19.04.01～ 20.03.31		出土遺物整理・報告書作成	国庫補助事業
F	北浦北山園古 墳	神戸市教育委員会	中村大介	0m ² 0m ²	19.04.01～ 20.03.31		出土遺物整理・報告書作成	
G	白水堀塗岸塙	神戸市教育委員会	安田徹・ 日本浩子・ 中村大介	0m ² 0m ²	19.04.07～ 20.03.25		出土遺物整理・報告書作成	(西山越前事業)
H	瓦斯泄漏跡 保存修理	神戸市教育委員会	中村大介	0m ²	19.04.02～ 20.03.31		瓦斯泄漏跡跡跡(瓦斯管)出土鉄製品保管修理	(瓦斯泄漏事業)
I	八幡神社古墳 第3次調査	神戸市教育委員会	中村大介	0m ² 0m ²	19.04.01～ 20.03.31		櫛山八幡宮古墳出土石刻(櫛山八幡宮)保管修理	(国庫補助事業)
J	箱崎城跡 保存修理	神戸市教育委員会	中村大介	0m ² 0m ²	19.04.01～ 20.03.31		櫛谷城跡跡跡(櫛谷城跡)保管修理	(国庫補助事業)
K	南郷城跡整 理	神戸市教育委員会	黒田昌志・ 4村大介	0m ² 0m ²	19.04.01～ 20.03.31		南郷城跡跡跡(櫛谷城跡)保管修理	(国庫補助事業)





調査地点位置図 (1) 1/50,000

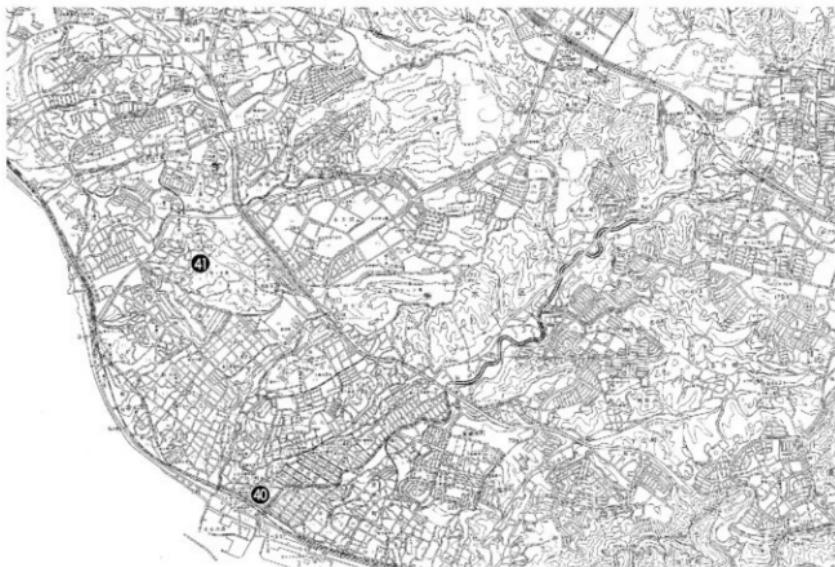




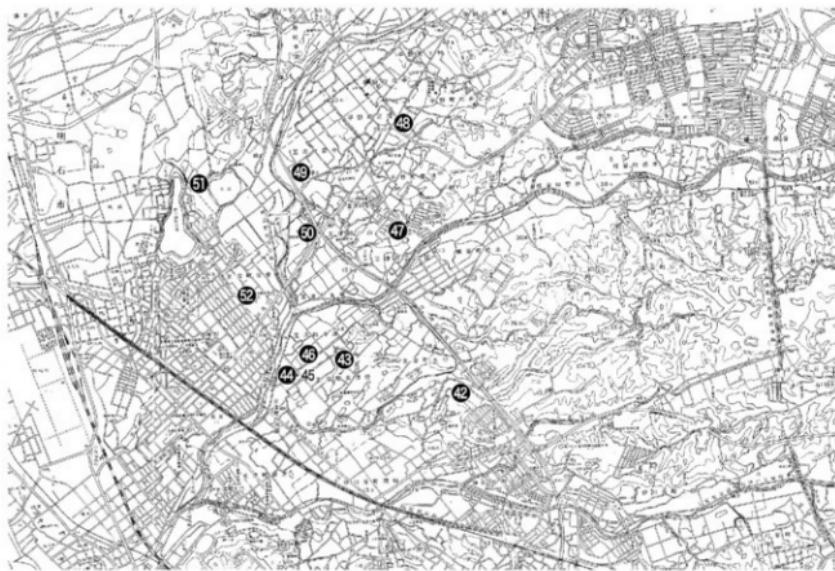
調査地点位置図 (3) 1/50,000



調査地点位置図 (4) 1/50,000



調査地点位置図（5） 1/50,000



調査地点位置図（6） 1/50,000

II. 平成19年度の発掘調査

1. 森北町遺跡 第27次調査

1. はじめに

森北町遺跡は、六甲山南麓の斜面地に立地し、これまでの20次を超える調査の結果、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする時期には、前漢鏡片や韓式系土器、他地域の土器等が出土しており、拠点的集落であったことが窺える。

今回の調査地の周辺では、東方約200mの第1次調査において、弥生時代中期の溝が確認されている。西方約30mの第11次調査では、弥生時代の溝や土坑が、南西約50mの第19次調査では、弥生時代後期の溝や中世のピットが確認されている。



fig. 25
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は宅地造成に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。今回の調査地は、阪急神戸線の北側、稻荷神社の西方で、尾根状地形の西側斜面部に位置する。当遺跡の中では最高所に位置する。

残土置場の確保のため、西半（I区）、東半（II区）に2分割して調査を実施した。調査の結果、4面の遺構面を確認した。なお後述するように第4遺構面で検出した竪穴住居については、一部影響深度以下の調査を実施した。

基本層序

今東壁では、盛上下に旧耕土・旧床上が存在し、以下褐色砂質土、黄褐色砂質土、淡灰色砂質土、黄茶褐色砂質土（マンガン沈着、地山）が堆積している。

また、西壁では、盛土、旧耕土、灰色細砂質土、灰褐色細砂質土、茶灰色砂質土（弥生包含層）、暗褐色砂質土（弥生包含層）、褐色細砂質土と堆積している。

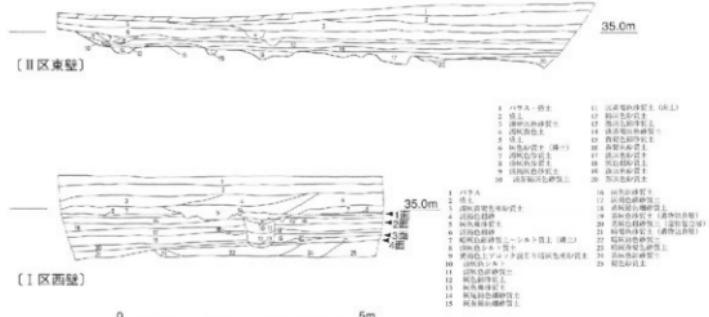


fig. 26
調査区土層断面図

第1遺構面 石組、溝等を検出した。中世～近世の遺構面と考えられる。

石組 I区北東隅からII区北辺を東西方向に走る。幅1m強、深さ30～40cmを測る。北肩にのみ石列があり、西半は径40～50cm大の疊、東半は径5～20cmの小疊を主体とする。裏込めより近世磁器が出土しており、宅地化直前の耕作地造成に伴う盛土石組と思われる。

S D01 I区の北東から南西方向に走る溝である。幅70cm、深さ60cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は淡灰色～灰色細砂質土で、土師器・須恵器・瓦器が出土している。

S D18～20 II区北東で等高線に沿うように検出した。幅30～50cm、深さ10～15cmと浅く、埋土は淡灰色砂質土である。土師器・須恵器・瓦器が出土している。耕作地に伴う溝である可能性が高い。

第2遺構面 I区では耕土上で東西方向あるいは南北方向の鶴溝等、耕作に伴う溝を検出した。II区北東部分は第1遺構面すでに地山が検出され、ほとんど状況は変わらない。第1遺構面で検出した溝と平行にL字形に曲がる溝と、石組盛土下で遺構を検出した。中世の遺構面である。

S D23 幅60～80cm、深さ数cmを測り、平面形がL字形に曲がる溝で、埋土は淡灰色砂質土である。溝はほぼ等高線と平行に走る。遺物は土師器・須恵器・瓦器が出土している。

ピット II区東端でピット群を検出した。径20～30cm、深さ15～30cmで、淡灰色砂質土あるいは灰色細砂質土を埋土とする。第1遺構面検出時に第2遺構面に伴う遺構も検出していたと思われ、両遺構面の遺構を合わせて考えると建物が存在した可能性はあるが、復元には至っていない。

第3遺構面 I区北辺で確認した。溝とピットを検出している。弥生時代後期頃と思われる。遺物包含層掘削時には、サヌカイト製石鎌やサヌカイト片も出土している。

S D15 幅50cm、深さ20cmを測り、長さ2.7m分を検出した。埋土は暗茶灰色砂質土である。弥生土器とサヌカイト片が出土している。

S P01 径40～50cm、深さ25cmを測り、埋土は茶灰色砂質土である。弥生土器が出土している。

S P03 径28cm、深さ25cmを測り、埋土は淡茶灰色砂質土である。弥生土器が出土している。

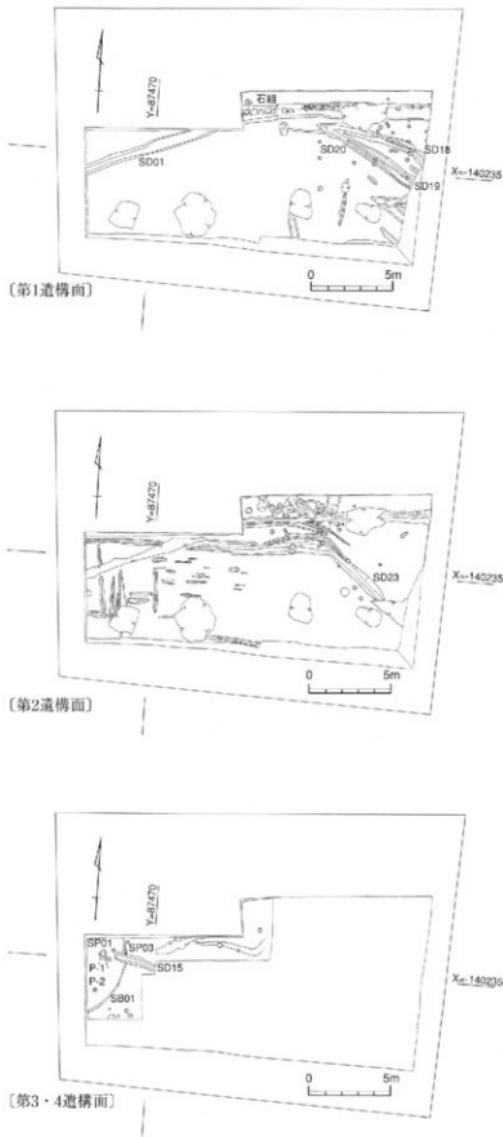


fig. 27 第1～4遺構面平面図

第4遺構面 第3遺構面調査時、西壁沿いにサブトレンチを設定して掘削したところ、堅穴住居状の落ち込みを確認し、弥生土器が出土した。遺構の詳細な調査を行うため、調査範囲内において工事影響深度以下についてもあわせて調査を行った。

S B01 検出した堅穴住居は、南東部分のみで西側および北側が調査区外に延びる全容は不明であるが、推定直径約8mを測る平面形が円形を呈するもので、深さは約25cmである。

サブトレンチでも確認していた炭層の広がりを床面付近で検出した。炭層は全面ではなく厚さも薄いが、住居の中心に向かう軸を有する木材状の炭もあり、垂木の一部と考えられる。この炭層を除去した段階で柱穴を2基検出した。それぞれ規模は約30cm、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で、柱穴の埋土にも炭が含まれる。

遺物は2個体出土した。南側の壁際で高环が出土し、壺は中央部分埋土上層で出土している。時期は弥生時代後期と考えられる。

3.まとめ 今回の調査では、弥生時代後期の堅穴住居を確認した。調査地は当遺跡内でも標高が高く、立地など居住域の広がりを考える上で貴重な資料となった。

その後中世以降は、主に耕作地として利用されていたものと考えられる。



fig. 28
S B01全景

2. 本山中野遺跡 第3次調査

1. はじめに

本山中野遺跡は六甲山系の南面、高橋川左岸の瀬戸内海に面する平野部に立地する。縄文時代の波蝕崖は今回調査地の北約100mにある国道2号線にはほぼ重なり、その南はそれ以後堆積した花崗岩起源の砂層がベースとなる。

これまでに2次にわたる調査が行われており、平成17年に実施された第2次調査では、洪水砂層から奈良時代から平安時代前半の縄袖陶器・瓦・墨書き土器等が多く出土している。

なお当調査については、平成20年度に『本山中野遺跡第三次発掘調査報告』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig. 29
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴って、工事によって影響を受ける部分について実施した。調査の結果、遺構面を3面確認した。

基本層序

当調査の基本層序は以下のとおりである。

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1a : 現表土及び搅乱土 | 2a : 宅地化以前の旧表土=耕土 |
| 2b : 平安時代初めの遺物を多く含む洪水砂 | 3a : 平安時代頃の表土 |
| 3c : 奈良時代? 洪水砂 | 4a : 飛鳥時代～奈良時代? の水田耕土 |
| 4b : 古墳時代後期? の洪水砂 | 5a : 古墳時代後期? の表土、 |

以下同様の湿地状の土壤が厚く堆積している。

第1遺構面

掘立柱建物4棟以上・井戸戸状の水溜め3基、土器溜まり等の遺構を検出した。

S B01 南面に庇が付く2間×5間(約5.2m×約11.0m)の東西に細長い建物である。柱間は7尺程度であり広い。火災に遭い、その後焼け残った柱根が抜かれている。

S B02 S B01の東に隣接するこれも柱間7尺ほどの掘立柱建物である。東西4間分・南北2間分を確認した。その南部および東部は調査地外に広がっている。S B03・04と重なる位置にあり、建物の建て替えが何度か行われたことがわかる。

S B03 S B02・04と重なる位置にある掘立柱建物である。東西4間分・南北1間分を確認した。

S B04 S B02・03と重なる位置にある掘立柱建物である。東西2間・南北1間分を確認した。

S E01 井戸戸状の遺構である。底に曲物を置き、その中に石を敷き詰め、その上に枠を置く。井戸枠は木の幹を削り抜いた円筒形のものを内側に据え、その外側に8枚の縱板を寄せるもので、形状的には井戸であるが、井戸底にあたる部分までに湧水層がないことを確認した。

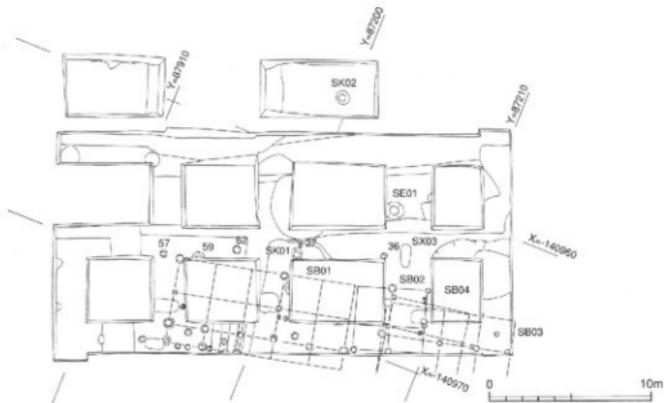


fig. 30
第1遺構面平面図

井戸ではなく水溜めと判断される。底の敷石直上から木製品・土師器壊が、また敷石内から土師器壊などが出土している。この土師器壊には墨書が認められるものが4点あり、「南」3点、「木工」1点などを確認できる。

SK01 • S E01同様、水を通さない黒色粘土中に掘り込まれた土坑で底に曲げ物枠を置き、その中に石を詰め込む遺構である。井戸枠にあたる板材等は確認されなかった。

洪水砂 第1遺構面を覆う洪水砂2b層からは須恵器・土師器のほか、当時の高級食器である綠釉陶器・灰釉陶器が比較的多く出土しており、大半は奈良時代末ないし平安時代初めのものである。以上から、第1遺構面は概ね平安時代前半頃の遺構面であると考えられる。

第2遺構面 洪水砂である2c層に覆われる遺構面である。水田を検出した。水田面を覆う洪水砂から、土器のほか奈良時代のものと推測される瓦が出土した。調査区西端の段付近の耕土から出土する土器には飛鳥時代頃のもののが含まれる。飛鳥時代～奈良時代頃の水田と考えられる。

第3遺構面 洪水砂4b層の下面では溝などを確認した。溝のうち1条の岸には杭で留められた板材を検出しており、付近からは直柄横鋸の泥除が出土している。5a層も水田である可能性が考えられる。さらにその下層でも溝を検出している。湿地状の環境下で土層の形成がなされる間、間隔を置いて砂を多く含む土が複数回堆積したものと推察される。

3.まとめ 今回の調査では古墳時代後期あるいは飛鳥時代から平安時代にかけての遺構面3面を確認した。第2次調査成果により、付近に高級食器を使う階層の居住域や瓦葺建物の存在が予想されたが、今回の調査においてその一部を確認したといえる。

第1遺構面では平安時代（10世紀前半頃）に焼失する大型の掘立柱建物を確認し、高級食器である綠釉陶器・灰釉陶器などが多く出土している。またS E01からは墨書き器やガラス玉も出土しており、当調査地付近がこの地域を統率する階層の居住する地区にあたっていることが推測される。

飛鳥時代以降奈良時代と考えられる第2遺構面で検出した水田を覆う洪水砂から瓦が出土しており、当調査地の山手側にあたる北方に瓦葺建物の存在したことが推測できる。

第3遺構面以下は、長い間湿地状の状態であったことを確認できた。

3. 本山北遺跡 第4次調査

1. はじめに

本山北遺跡は、六甲山南麓の扇状地扇端部付近に立地する遺跡である。当遺跡は平成3年度に実施した試掘調査で発見され、これまでに3次にわたる調査が実施され、古墳時代前期の竪穴住居群と鎌倉時代の木棺墓が確認されている。



fig. 31
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。調査は残土置場の確保のため2回に分けて実施した。

基本層序

上層より、盛土、旧耕土、茶灰色砂質土（遺物包含層）、暗灰褐色縞混じり砂質土（遺構面基盤層）が堆積している。旧耕土は北端部付近では存在していない。

工事影響深度の関係から、遺物包含層である茶灰色砂質土の途中までで調査を止めたため、遺構面の検出まで至らなかった。

遺物包含層からは、弥生時代後期の土器

- ・石器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器・土師器が比較的多く出土している。

3. まとめ

今回の調査では遺構面の検出までは至らなかったが、遺物包含層から出土する遺物の状況から判断すれば、下層に存在する基盤層に遺構が存在する可能性は高いものと考えられる。

また周辺の微地形を考慮すれば、当調査地北側付近が当遺跡内の最高所にあたり、東西に微高地が続く状況である。今回の調査成果から判断すれば、当遺跡の範囲が現在想定されているよりもさらに東側へ拡がる可能性も考えられる。



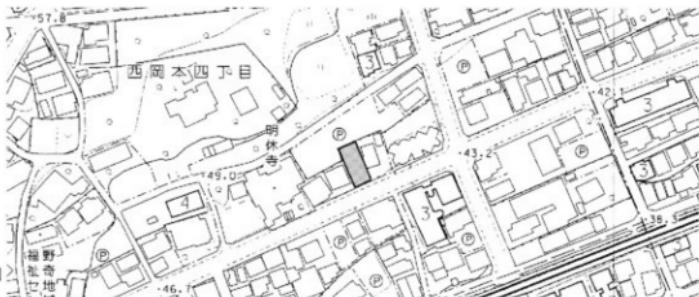
fig. 32 調査区平面図

4. 岡本北遺跡 第9次調査

1. はじめに

岡本北遺跡はこれまでに8次にわたる調査が実施されており、第1・2次調査では弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居等や鎌倉時代の掘立柱建物等が確認され、集落の存在が明らかとなっている。また第8次調査では平安時代の遺構も確認されている。

fig. 33
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

基本層序

上層より、攪乱・盛土、灰褐色砂質土（旧表土）、黄灰褐色砂質土、黒灰色シルト混じり砂質土（調査区の一部分に存在する遺物包含層）、暗黄褐色砂質土（遺構而基盤層、地山）が堆積している。

遺構と遺物

弥生時代後期～古墳時代前期初頭と古墳時代後期のものと考えられる土坑、落ち込み、小溝等を確認した。また遺物が出土していないため、時期が不明の土坑も検出している。

時期の判断できる遺物は、遺物包含層から古墳時代後期の須恵器と土師器が出土し、遺構から古墳時代後期、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器が出土している。

3. まとめ

今回の調査では、土坑、落ち込み、小溝を確認した。時期の判断できる出土遺物を概観すると、古墳時代後期の須恵器や弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器が確認できる。

遺構の時期としては、古墳時代後期と弥生時代後期～古墳時代前期初頭のものが混在しているものと考えられる。

また今回の調査地の東側隣接地で実施した第8次調査では、平安時代の遺構が確認されている。今回の調査では平安時代の遺物は出土していないが、未調査部分も多く、当調査地全体における当該時期の遺構・遺物の存在の有無については即断できない。

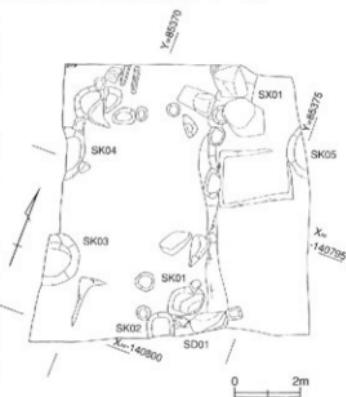


fig. 34 調査区平面図

5. 西岡本遺跡 第6次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は、六甲山頂付近に深く切り込む谷筋が山塊を抜けたあたり、神戸市東灘区西岡本5・6丁目附近に所在し、住吉川により形成された扇状地の左岸高位に立地する。

当遺跡は、昭和63年度に発見され、第1次調査が実施された。この調査では、古墳時代後期の横穴式石室13基をはじめ、旧石器時代の石器、縄文時代早期の竪穴住居、弥生時代後期の竪穴住居、古代～中世の掘立柱建物など様々な時代の遺構や遺物が確認されている。またその後の調査でも古墳時代を中心とする遺構・遺物が検出されている。

今回の調査については、過去の本山浄水場内で実施した調査と合わせて、平成20年度に『西岡本遺跡第4・5・6次发掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については、報告書を参照されたい。



fig. 35
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、本山浄水場において新たな浄水施設の建設されることに伴って実施した。浄水場内では平成13・14年度に第4・5次調査を実施している。

調査地は約3.5mの高低差がある上段と下段からなり、今回の調査対象範囲のうち上段を東西に2分割し、西側を1区、東側を2区とし、法面部分を3区、下段を4区とした。

基本層序

上層より、コンクリートやアスファルトの表層、盛土、現耕土、近代の旧耕土、中世の旧耕土、褐色シルト（遺物包含層・上面土壤化層）、暗褐色粘質土（遺物包含層）が堆積し、暗灰褐色砂質土（一部ベース土）、黄褐色粘質土（地山層）と堆積している。

1区

上段西側の調査区で、既存の送水、電気配線に伴う埋設管が多数存在し、遺構面の調査が可能な範囲である約2.5m×1.5m、底地面積約4m²について調査を実施した。

地山面でピット2基と旧地形に形成された不定形な水みち状の窪みを検出した。

2区

上段の東寄りに設定した調査区で、掘削が可能であった上段部分との法面にかかる調査区である。ピット2基、土坑（状遺構）3基、石列1基を検出した。

3区

上段の東端から下段へかかる法面部分で、繰り返し掘削や盛土による整地が行われ、大きく地形が改変されていた。下段の現地表面とは同一のレベルで地山面となり、この面でピット6基、土坑1基（平安時代中期）を検出した。

4区 現駐車場部分で、第4次調査を実施した部分を除く範囲を全面調査した。

西から東への下がり地形となっており、西側では盛土、現耕土直下で黄褐色粘質土の地山面となる。掘立柱建物6棟、土坑3基、溝2条、落ち込み1基、ピット多数を検出した。

S B01 調査区北西部で検出した南北3間以上×東西3間以上の建物である。柱間約2mである。

S B02 調査区南西隅に位置する。南北1間以上×東西2間以上の建物である。

S B03 S B02に重複するように建てられた建物で、南北1間以上×東西3間以上である。

S B04 調査区南壁際で検出した南北2間×東西1間の建物である。

S B05 調査区北端で検出した。南北1間以上×東西2間の建物である。

S B06 S B05の西側に位置する東西1間×南北2間の建物である。

S X01 第4次調査において苑池と推測されていた遺構である。今回の調査の結果、苑池の端と想定されていた大型の石は地山面に露頭する転石であり、この遺構は水を湛える施設ではなく、谷状地形と判明した。谷状地形に流れ込んだ転石群に混じって平安時代中期～後期の須恵器、土師器、白磁が小片ながら28ℓ入りコンテナ5箱分出土している。

3.まとめ

今回の調査では主に平安時代中期～後期の遺構を確認した。

調査地下段の4区では、掘立柱建物6棟や土坑、溝などを検出し、標高80m附近の扇状地頂部に営まれた集落の存在を確認した。施釉陶器や白磁碗、瓦に加え、銅製品が出土しており、通常の集落と様相を異なる何らかの施設が営まれたことが窺える。

また苑池と考えられていたS X01は谷状地形であることが判明し、多量の遺物が出土した。周辺における古代～中世の集落形成、土地開発の状況を考える上で貴重な資料を得た。

またS X01内の転石の1つに矢穴痕や、幅1cm程度の小型の楔状鉄製品の先が、石の表面部分にわずかに喰い込んでいる状況を確認した。住吉川上流域において平安時代という比較的早い段階と考えられる石の加工業痕が確認できたことは注目される。



fig. 36
4区平面図

6. 魚崎郷古酒蔵群 第3次調査

1. はじめに

西摺武庫川河口から旧生田川近傍の間約24kmの瀬戸内海沿岸部は灘と呼ばれ、酒造に適した宮水の利用、水車を利用した精米の効率化、海岸沿いで製品を直接船積みできるという利便性などにより、江戸時代後期の19世紀初めには日本一の出荷量を誇る酒造地域に発展する。今回調査を行なった魚崎郷は、住吉川河口部の両岸地域にあたり、現在でも旧村域内に多くの酒造会社があり、当地の主要産業のひとつとなっている。

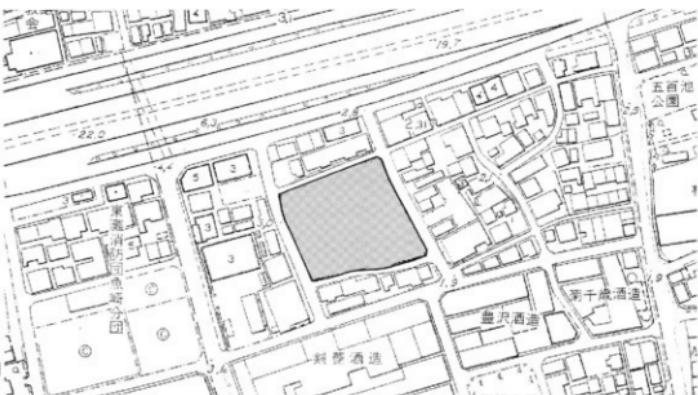


fig. 37
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は社会福祉施設の建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。調査対象地は1区（大蔵）・2区（前蔵）・3区に分かれており、造構面を3面確認した。

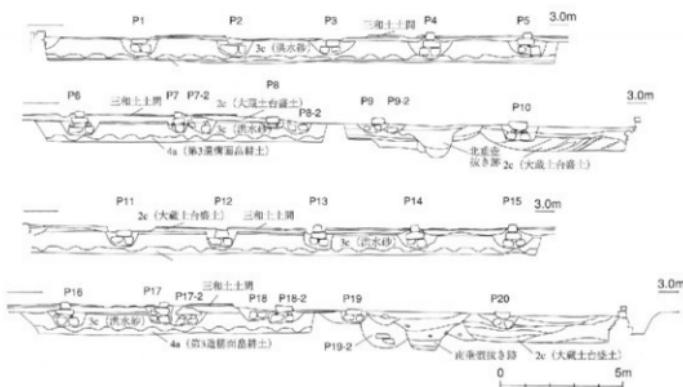


fig. 38 1区（大蔵）土層断面図

基本層序

当調査地の基本層序は以下のとおりである。

- 1a : 貯蔵庫として利用していた段階のコンクリート土間及び搅乱土
- 2a : 貯蔵として利用されていた際の表土 2b-1 : 貯蔵土間三和土 第1造構面
- 2b-2 : 貯蔵建設時盛土 3a : 貯蔵建設時の表土 第2造構面
- 3c : 江戸時代の扇を覆う洪水砂 4a : 江戸時代の耕作土(扇) 第3造構面

第1造構面

1区(大蔵)

現況のコンクリート土間を除去した段階で検出した三和土の土間面である。

石列あるいは石垣で囲まれる東西約47m・南北11mの範囲が大蔵の土台部分である。礎石等は同じものを使用しており、上層のコンクリート土間は第1造構面の改修という位置づけができる。

石垣

石垣の用材は大多数が地元の御影石であるが、西辺の北部・北辺・東辺そして南辺の中央=出入り口部には角柱状の竜山石を最上段に置いている。石垣の段数は東辺および南辺東端で御影石顎石の上に御影石2段さらに竜山石1段で、南辺東部で御影石顎石の上に御影石3段から1段に移行する。幅3m程度の出入り口部は角柱状の竜山石が置かれるが、その下には点的に御影石が置かれるにとどまる。出入り口以西の南辺は御影石顎石の上に1段のみ御影石が置かれる。南辺石垣と前蔵の間は雨落ち溝となっており、さらに後に、煉瓦溝がここに作りつけられる。西辺と北辺は道路に面している。西辺は顎石の上に御影石2~3段、あるいは顎石の上に御影石2段さらに角柱状の竜山石1段。北辺は御影石顎石の上に御影石2段さらに角柱状の竜山石1段という構成になる(西辺・北辺は一部のみを確認している)。なお、西辺の石垣上面ではひとつ置きに墨書きの数字が確認できる。南隅に「四十六」、北に「四十七」「四十八」という順序で「五十三」までを確認している。

大蔵の東5分の2はコンクリート土間工事の際に搅乱を受け、土間の三和土が残らない。

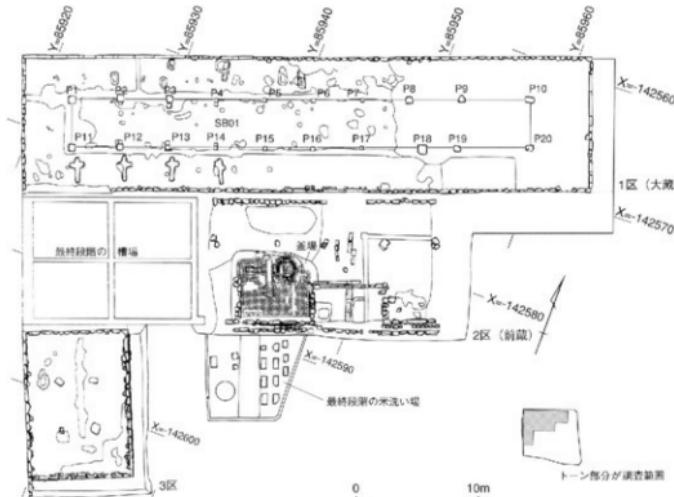


fig. 39
第1造構面平面図

- S B01** 大蔵建物の礎石は東西9間、南北1間で柱間は約4mを測る。石列あるいは石垣上に大蔵の壁がのり、間取りとしては11間×3間となる。
- 礎石は一辺30cm程度の方形である。西寄りのP4・13・14などはこれを2個南北に並べていることを確認した。P2・3・12等も根石の状況から同様な状況をしていたものと推測される。また西部南柱列P11～14の南には十字に組んだ角材を掘えつけたような痕跡が残る。上部の構造物を支えるための施設と考えられ、大蔵の西半に重い構造物があったことを推測させる。また、大蔵西部から中部にかけての北側柱列の北にも60cm×1mから1m×1m程度の方形土坑を7基確認している。
- 土間** 土間は黄色系統の色調だが、その上面に点々と赤黒く焦げている部分を確認している。これらは蔵内の温度調節のために火を焚いた痕跡と考えられる。人蔵の中央部は前蔵からの出入り口に続く部分で、この周辺は土間を補修した痕跡を多く確認している。
- 2区（前蔵）** 前蔵の東部には建物解体以前の建物により大きく破壊され、遺構面が遺存していない。西部もコンクリート基礎の貯蔵庫とした際に大きく搅乱を受けている。
- 遺構面の残る2区中央部はその西半が釜場であり、東半西部が建物中央にあたり出入り口となっている。
- S B02** 南北幅約10mを測る前蔵の奥3分の2の位置で、礎石および根石5基が遺存している。間隔は西から約5m、4m、5m、4mで、大蔵同様、南北3間の東西に長い建物になる。
- 釜場** 貯蔵施設となった際に設置されたと思われるコンクリートブロック積みの施設によってカマドの上部は失われていたが、それ以下の部分は比較的良好な状態で煉瓦積みの釜場が遺存している。前蔵の土間面から1.2m程度の深さに煉瓦の作業面があり、西・南・東辺に高さ約1.2mの石垣が積まれる。一辺約5.4mを測る。北半にカマドが設置される。南半が作業スペースで、西3分の2と比べ、東3分の1が一段高くなる。
- 煉瓦力マド** 西から順に大小のカマド口が並ぶ。釜の羽が据わる部分での径がそれぞれ148cm、118cm、75cmを測る。釜設置部底面のレベルはそれぞれ標高1.90m、2.05m、2.08mを測る。カマド底のレベルは釜の上面の高さを揃えるように調整することから判断すれば、西の釜の高さが15cm程度、中の釜よりも大きいということになる。東の小カマドは酒造用の米を蒸すためのカマドとは考え難く、また手前の作業面の高さが違うため同じ扱いはできない。湯沸し等他の用途に使用した可能性も考えられる。
- 煉瓦積みカマドは少なくとも2度改修されている状況を確認した。残りの良い中カマドで見た場合、最後の段階の釜炊きはバーナー燃焼によっており、元の炊き口が煉瓦で塞がれ、組み合わせて一辺171mm、厚み183mmとなる耐火煉瓦がはめ込まれ、バーナー口としている。この煉瓦には入口径103mm・出口径148mmの円孔が穿たれる。
- その前段階が昭和時代の耐火煉瓦・普通煉瓦を用いてカマド部分を改修したものである。さらにその前段階が最初に煉瓦積みカマドが築かれた段階である。当初の作業場床面あるいはカマドの下部は明治時代の普通煉瓦（岸和田煉瓦株式会社製）のみで構成される。カマドなど高温となる部分の煉瓦積み上げはメジ部分にモルタルのような凝固するものは入れず、粘土混じりの砂を挿むが、その他の部分には昭和の改修部分はモルタル、明治の部分は三和土を入れる。

煙突

西・中カマドの間前面に煙突がある。排出される煙は両カマドの背後から回り込んで合流し、カマドの間の煙道を通り煙突へ導かれる。煙道に用いられる煉瓦は昭和時代の普通煉瓦であるが、煙突自体に使用される煉瓦はすべて明治時代の普通煉瓦（岸和田煉瓦株式会社製）で、最初に設置した煙突を最終段階まで使用している。遺存している部分に限れば、煙突のメジに凝固するような三和土等は用いていない。煙突の大きさは床面で幅95cm、奥行き100cmを測る。内法は幅48cm、奥行き50cmである。四辺に鉄棒をはめる通有の構成である。煙突下には煙突より一回り大きい範囲で石10個と煉瓦4個を掘えて根石をしている。

出入り口

釜場の東、前蔵中央部は蔵建物の出入り口にあたる部分で、前蔵前面の石列がこの部分約5.5m幅で奥へ約3.3m凹み、ここをつなぐように角柱状の竜山石製框石が置かれる。この框石は人の出入りにより上面が摩滅している。さらにその奥には建物の棟方向に直交する方向の石列が2列あるいは3列並べられる。通路としての舗装と考えられる。石列の間隔は1m程度を測る。出入り口部から東側は攪乱のため、土間の残る部分はわずかである。

槽場

前蔵において醸造が行われていた最後の段階には釜場の西に槽場があったという。昭和50年代に貯蔵施設とするためのト基礎工事により深く搅乱を受け、遺構は遺存しないが、土間基礎の搅乱上から大型の垂壺片3個体（備前焼2、九州製1）分が出土している。

3区

前蔵西部の南に接する建物土台を検出した。南北12.3m、東西8.7mを測る。西辺が道路に面し、周囲を御影石の石垣で囲っている。全体を確認し南辺及び東辺は礫石の上に石垣2段を積んでいる。ただし、東辺南部のみやや低い石を用い、その上に角柱状の竜山石が置かれる。その上面は摩滅し、この部分の東に踏み石が遺存する。ここが建物の出入り口と推測される。礫石は4基確認した。南北に長い3間×3間の建物になる。1区同様、石垣を積んだ後、真砂土を充填し表面を黄色系の三和土で覆い土間とする。

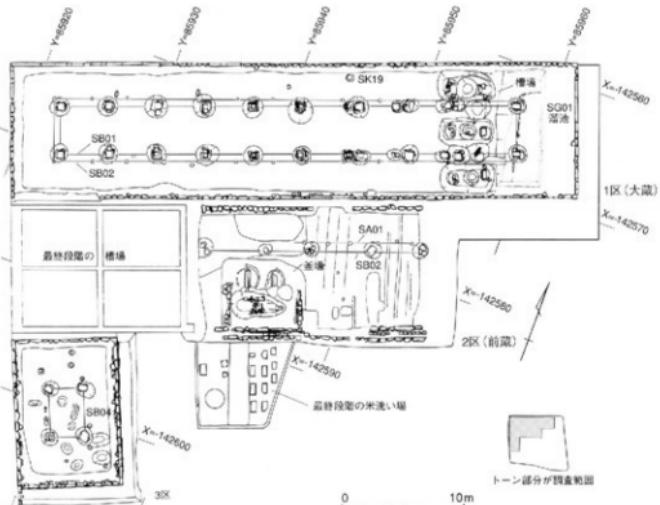


fig. 40
第2遺構面平面図

第2造構面 酒蔵の土間を外した段階で検出される造構、またその下の盛土を外した段階、蔵築造時の造構を検出した。

1区（大蔵） 大蔵築造時の表土である3a層上面で耕作痕を確認した。またSB01の礎石及びこれに関連する足場SB03が3a層上面から掘り込まれることを確認し、大蔵中央北寄りで地鎮造構、東部で槽場および根石6基を検出した。

耕作痕 大蔵の長軸に直交、あるいは極わずかに東に振れる方向、すなわち当地に残る条里方向に合致する耕作痕である。酒蔵建築以前当地は耕作地おそらく畠であったと考えられる。

石垣・礎石 大蔵の石垣内側の土台盛土を除去する段階の土層観察により、石垣・礎石は3a層が地表面であった段階にその上面から掘り込まれて設置されたものであることを確認した。

3a層上面から石垣設置用の溝が掘り込まれ、石垣設置後その背後に3a層の土が寄せ掛けられる。礎石も同様で同じ面から掘り込まれ、設置後、3a層の土が寄せ掛けられる。その後土台の盛土として真砂土が充填され、その表面に三和土が貼られる。

SB01 SB01の礎石および根石は約160cm、深さ約60cmの据え付け穴の底に長さ約80cm、幅40～50cm、厚さ約30cmの御影石2個を並べ、その上に一辺約60cm、厚さ約25cmの基盤石の御影石を置いて根石とし、その上に上辺約30cm、下辺約40cm、厚さ25～30cmの礎石を置く三段組みの構成となっている。中段下段の間には、水平等を補正するため栗石が置かれる。

SB03 SB01の柱列の外側を囲うような位置で径約20cm、深さ50～60cmの柱穴が建物を構成するように並んでいる。SB01の掘形内に位置するものがあり、SB03が礎石の据え付け以降に建てられたものであることを確認できるが、土間を貫通した痕跡は確認できない。

SK19 大蔵中央北寄りで確認した地鎮造構である。3a層上面から掘り込まれる径約70cm、深さ約60cmの土坑内に丹波焼甕が埋納されている。甕の口は口径にあわせた陶板で蓋をされ、さらにこれを土間の三和土と同質の砂混じり粘土で包み込む。埋納前に粘土がひび割れてきたためこの部分を指先で押さえ補修した痕跡が確認できる。SK19直上の土間三和土は補修されているため、SK19が創建当初の土間に埋納されたものか層位的には確認でき

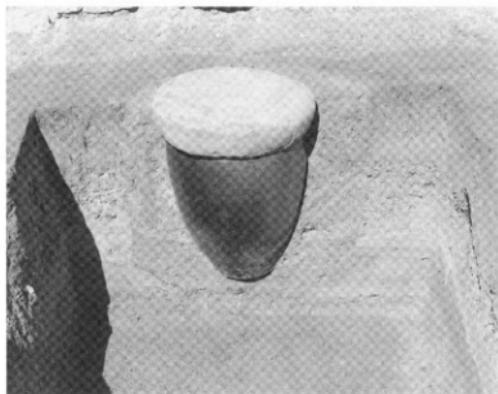


fig. 41 SK19断面状況



fig. 42 SK19内部

ないが、蓋部分を封印する粘土が当初の三和土と同質であること、また、埋め土には土間三和土のブロックが混入していないことから、この甕は大蔵建設の際、三和土を貼る前に埋納された可能性が高い。甕内には大小の鉄製焼印が付け根の部分で折り取られた柄とともに納められていた。印面には「御改魚崎製」・「本蔵別吟造」・「ミツウロコ(記号)出造」・「加茂岩田醸」・「玉光」・「金」・「赤」・「精」他の文字、竹・三升などの図柄・紋が確認できる。竹の図柄のある最も大きい焼印の印面は29.5cm×22.0cmの長方形である。

下層礎石 大蔵東部では、現状の上間の下からS B01の柱通りに合致する位置の礎石の根石6基を検出した。大蔵東半は土間の補修が多く施されおり、また後の搅乱が多いが、少なくともこの礎石根石は三和土土間の最終段階では使用されず、土間の下となっていたことが明らかである。一方、P17・18などは3c層を掘り込んでいるようで、掘り込み面がS B01の他の礎石と異なっている。最東のP10・20を除けば全体の柱間隔は現況のものが同じ間隔となる。これら下層礎石は中途で廃棄され埋め立てられる槽場に係わる構造物に関連する可能性がある。

槽場 大蔵東部で確認した。男性3基、垂壺据え付け穴2基を検出した。第1造構面が搅乱を受けるため、作業面の正確なレベルを確認することはできないが、遺存するレベルからみて、槽場が第1造構面の土間面から階段を下りた半地下の区画にある可能性は想定できない。酒綾りを行う作業スペースも他の部分と同じ高さであり、大蔵全体が石垣上面から一段下がった同一の上間面であったと思われる。

男柱 男柱の据え穴は3基とも2.3m×4.5mの隅円方形で南北に並び、その間の東寄りに2基の垂壺据え付け穴がある。どちらかの垂壺は共有されることになる。垂壺は遺存していない。なお、槽場付近のコンクリート土間の搅乱土層から垂壺の破片1点が出土している。



fig. 43
1区槽場全景



fig. 44 2区釜場昭和時代面



fig. 45 2区釜場明治時代面

男柱および横木は抜かれたため遺存しないが、横木は腐食予防のために表面が焼かれ、その炭が痕跡として残る部分を確認している。横木の下の敷石等はそのまま残されていた。抜き穴を埋め立てる土砂中に含まれている遺物のなかに焼けた煉瓦1点が含まれている。槽場が移され、ここが埋め立てられるのは明治の段階と思われる。この煉瓦の刻印は前蔵の釜場に使用されたものの中に同類がない。

溜池 槽場の東は蔵築造以前、周囲にしがらみをもつ方形の溜池が存在した。溜池には大量の瓦・陶磁器が投棄されている。焼締された広東碗等が含まれており、池の埋め立ては遅っても天明年間であり、おそらくは19世紀前葉かと推測される。今後出土遺物の整理を実施することにより年代を絞り込める可能性がある。この瓦・陶磁器を含む土層の上面は土壤化しており、大蔵土台の埋め立て土がこれを直接覆うものとなってはいない。溜池への瓦・陶磁器の投棄と大蔵の造成工事の間にはある程度の時間差があったことが考えられる。

2区（前蔵） 3a層上面で耕作痕を確認した。またSB02の礎石およびこれに関連する足場SA01を確認した。釜場では当初の釜場施設を確認した。

古カマド 釜場煉瓦の下層でそれ以前の古い釜場面を検出した。施設の配置は煉瓦のそれとほぼ同一である。北半ではカマド構築煉瓦の直下でベースとなる砂層があまり搅乱を受けない状態で確認でき、ここで古いカマドの痕跡、焼成による赤変、また、カマド底の溝などを確認した。南半は煙突の基礎工等により、上位はかなり搅乱を受けていたが、カマド前面の焚口部の作業スペースは階段で降りる掘り込みとなっていたため、搅乱の影響をあまり受けなかったものと考えられる。

作業場の三方を囲う石垣に古カマドに対応する三和土等は確認できず、また、搅乱を受けていない掘り込み式の焚き口前の作業スペースも砂地となっている。カマド前は砂地のままで特に舗装等は行っていないものと考えられる。焚き口前の掘り込み作業スペースは、カマドの前面に接して東から西へ階段状に深くなる。東半で2段の石段を下り東カマドの前面部分がやや平らに、さらに西へ行き踏み石また桟木が設置される3段を下りたところが西カマドの前の作業スペースとなる。幅2m程度の西の深い部分の両側面には角礫を用いた石垣が積まれるがその上位は煙突根石などにより破壊され遺存しない。



fig. 46 2区釜場明治時代面（煙突基礎）



fig. 47 2区釜場江戸時代面

カマド前の作業スペース上面のレベルは明確ではないが、石垣底のレベル付近と考えれば、標高1.1mとなる。西底の深さは標高0.3m、掘り込みは約80cmということになる。

釜場の3辺は石垣で囲われる。搅乱を受けていない南辺・東辺の高さは約1.5mを測る。西辺は上位を搅乱されている。カマド前面の掘り込みの状況からすれば、東辺すなわち戸中央の出入り口に接した部分に出入り口が想定されるが、石垣に出入り口と考えられるような部分は確認できない。梯子を掛けて出入りした可能性も考えられる。

カマド部分はその痕跡を2ヶ所で確認している。西側のものは幅2.0m程度の範囲が一段下がって赤く焼け、その中央部を貫通するように北端近くから南へ幅20cm程度の断面矩形の溝が存在する。溝の中には赤い焼土や炭が落ち込んでおり、溝周辺は披熱による赤変が特に著しい。東カマドも同様で幅1.5m、奥行き2.0m程度の範囲が赤変し、その中央に幅15cm程度の溝が存在する。

3区 碇石1と土坑を複数確認した。礎石は上面の一辺が30cm程度のものだが、根石はない。土坑には竜山石および御影石石材を加工した際に出た石屑を捨てたもの、瓦・陶磁器を捨てたもの等がある。

第3遺構面 洪水砂に覆われる江戸時代後期の畠を検出した。南北方向の畠が良好な状態で遺存している。畠化は行っていないが3区でも同じ方向のものを検出している。上層の第2遺構面で確認したものと方向は同じである。耕土中から陶磁器片が出土している。

3.まとめ 今回の調査では、瀬魚崎郷における一酒蔵の歴史を考える上で貴重な考古学的資料を得ることができたと考えられる。江戸時代後期、酒造業の興隆とともに酒蔵の建設ラッシュが起きるが、それ以前には当調査地には畠の広がっていたことを確認した。一方、溜池から大量の瓦・陶磁器が出たことは生活の場としての瓦葺の建物が付近に存在したことを見ているのかもしれない。

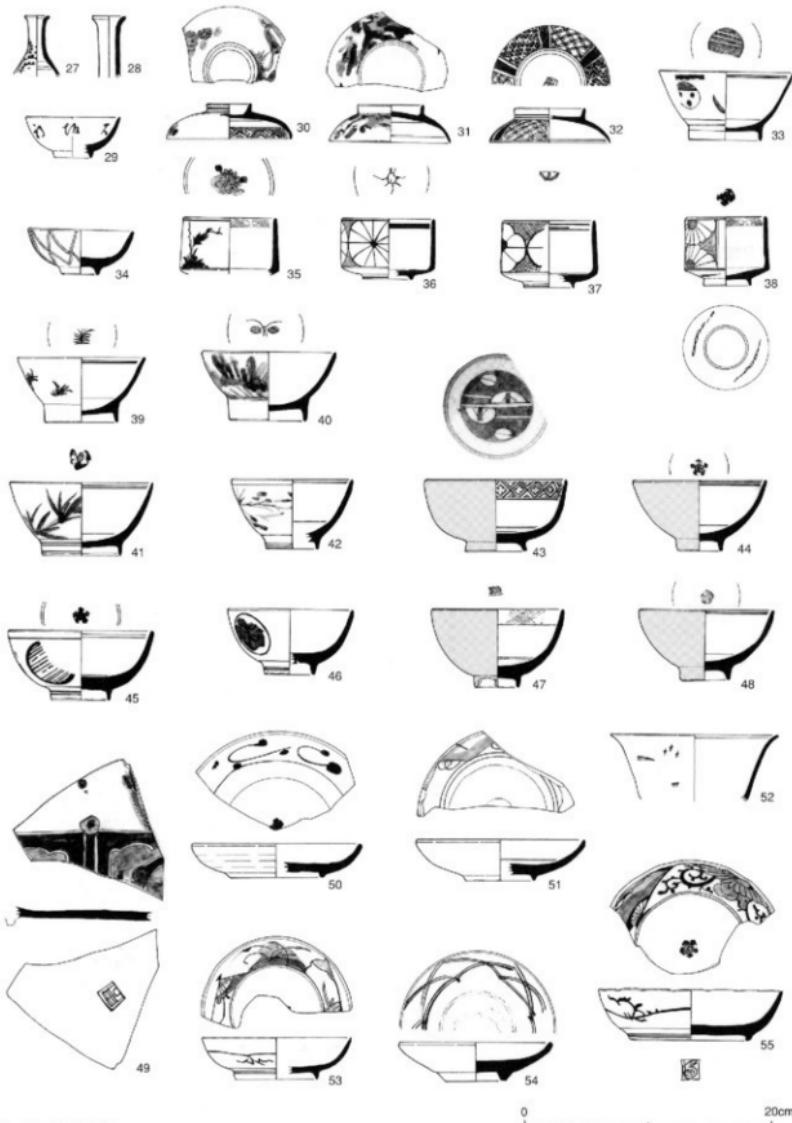
調査の結果、畠の広がる中に瓦葺建物をもつ屋敷が存在するという景観を想定でき、そこに新たな酒蔵が築造されていくという状況を確認できたことになる。溜池の出土遺物から判断すれば、その屋敷の主を富裕層に推定することが可能であろう。また、採取した畠土壤の分析を行うことにより、栽培された作物の種類について確認できる可能性がある。今後の出土遺物の検討により、それぞれの遺構面の年代を絞り込んでいくことが可能となってくるものと考えられる。一般に酒蔵の創建年代については不詳のものが多い中あって、層位的にこの点について限定できる資料を得たことは貴重な成果である。

今後、文書との照合、出土遺物の検討等を行うことにより、酒造りを主幹産業とする地域の歴史の様相を具体的に明らかにする手がかりが得られるだろう。



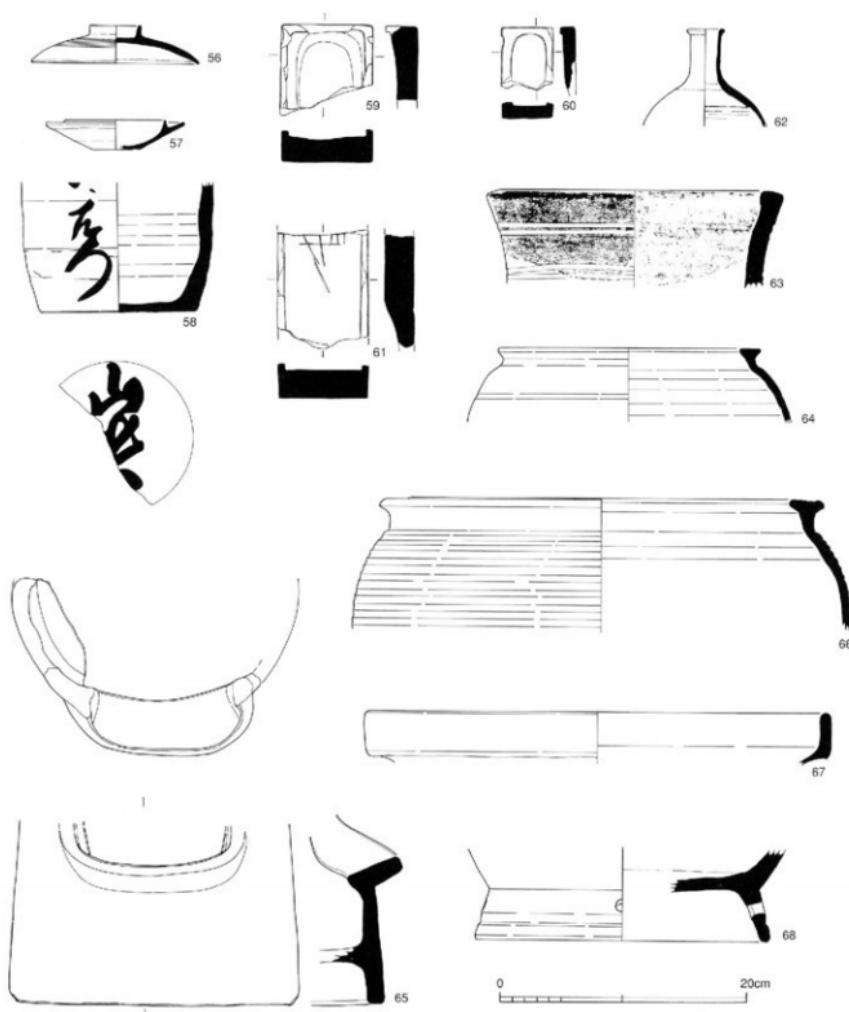
1・2・6:1唇 3~5・8~11・17・18:SD01 7:SX02、12:SD05 13・14:3c唇 15:SX12 16:SW02、19:4a 20:SX19
 21:SX06(1区下層構造埋め立て土) 22~26(最終段階の構造埋乱土)
 (1~5:磁器 6・8・10・11・15~19:陶器 7・9:土師器 20:丹波焼? 20~22・25・26:備前焼 23・24:九州製陶器)

fig. 48 出土遺物実測図 (1)



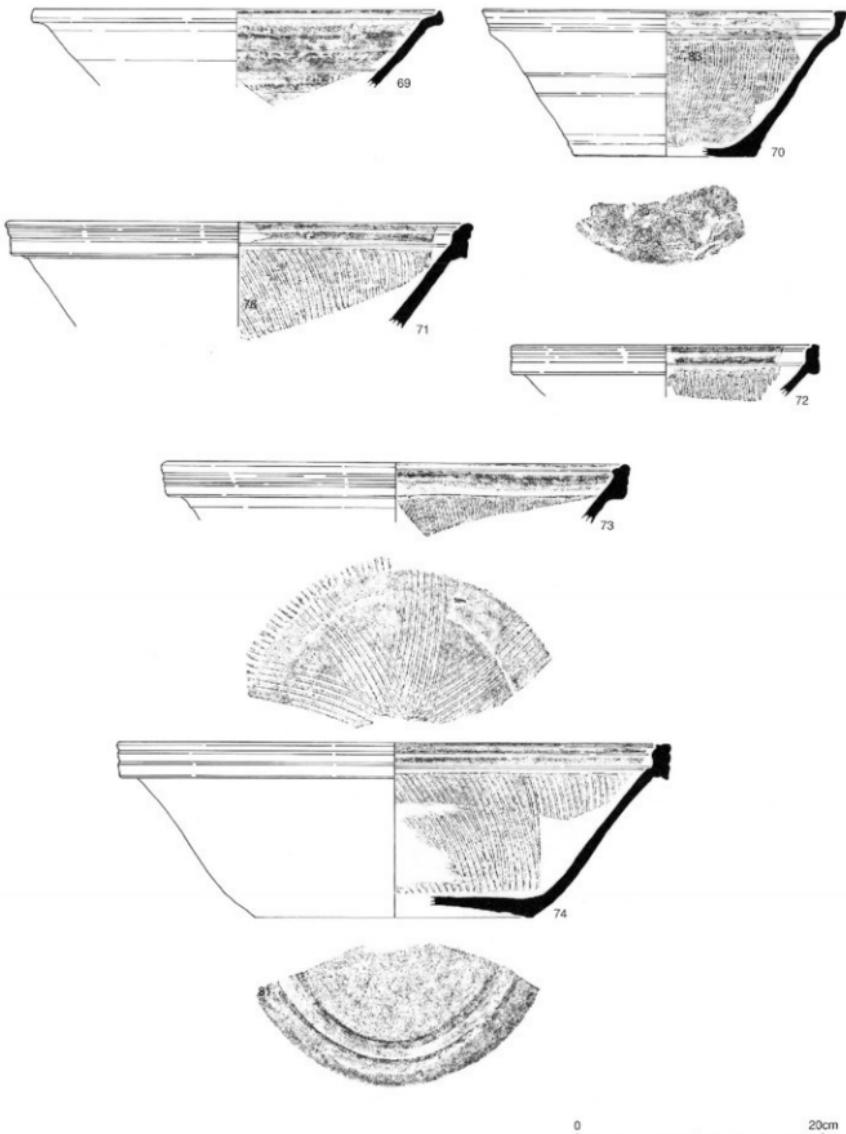
27～55：SG01（磁器）

fig. 49 出土遺物実測図（2）



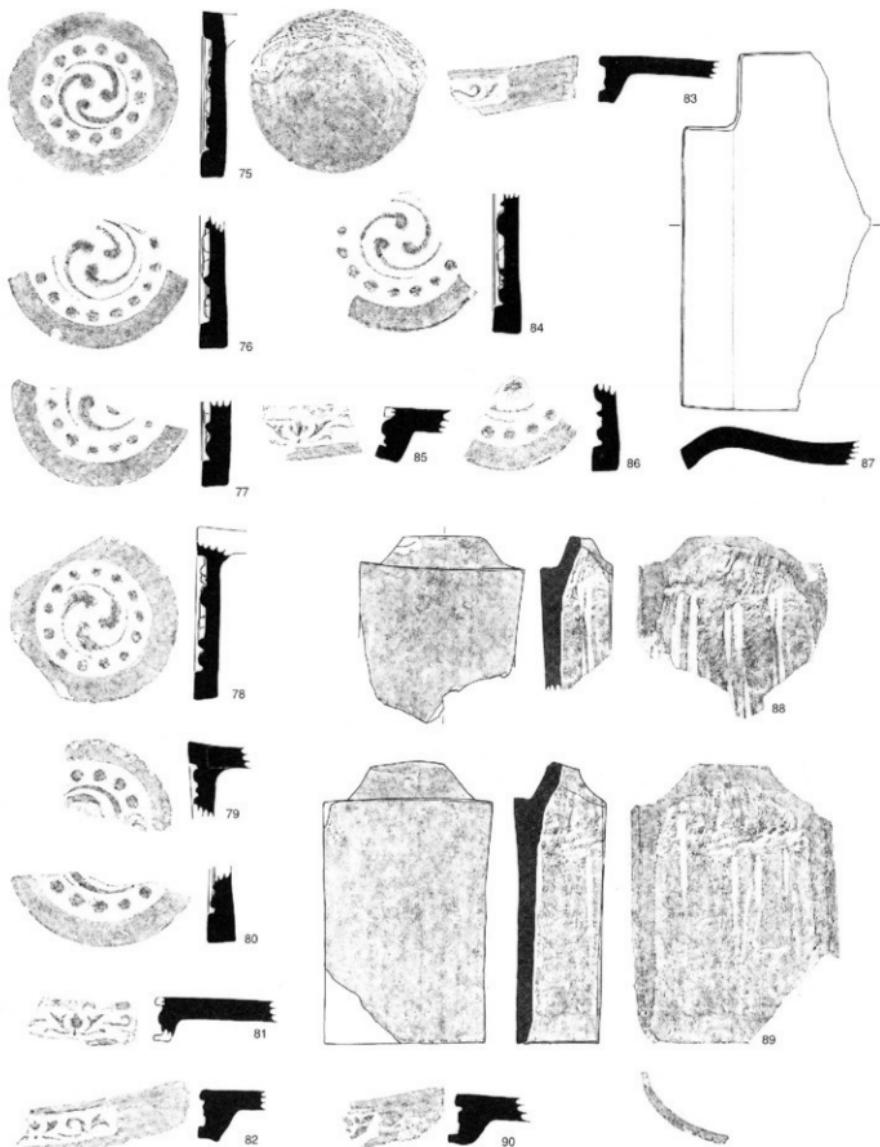
56~68 : SG01
(56・57・62 : 土器 58・63・65・67・68 : 土師器 59~61 : 石製模 64・66 : 丹波焼)

fig. 50 出土遺物実測図 (3)



69~74 : SG01 (陶器)

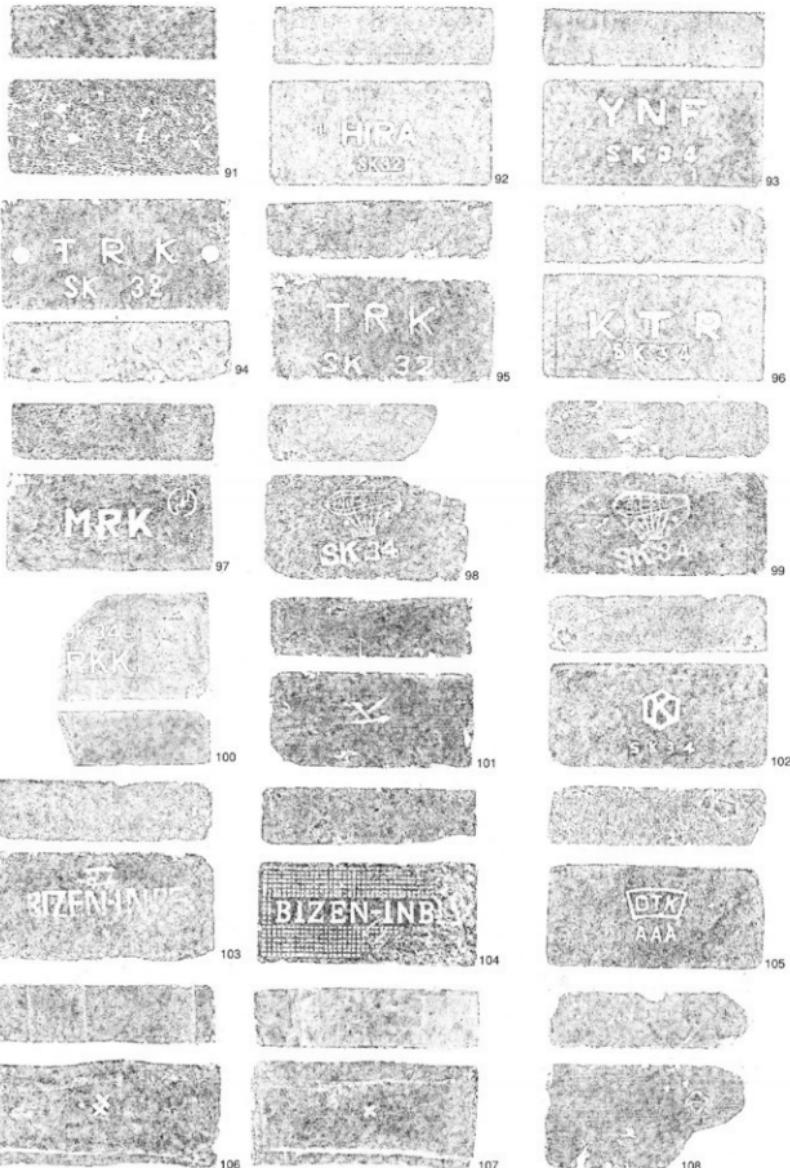
fig. 51 出土遺物実測図 (4)



75~79 : SK11 80~81 : SX07 82 : SD01 83~90 : SG01 (瓦)

fig. 52 出土遺物実測図 (5)

0 20cm



91~105 : 2区改修カマド 106・107 : 2区当初のレンガ積みカマド 108 : SX06 (1区下原猪塚埋立て土)

fig. 53 出土遺物拓本

7. 郡家遺跡 第83次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、六甲山南麓の扁状地上に立地している。

これまでに80次以上の調査が実施され、弥生時代～鎌倉時代の各時代の遺構・遺物が確認されており、特に昭和54年度の大蔵地区で実施された調査において検出された奈良時代の掘立柱建物などの遺構については、郡衙関係の建物の可能性が高く、注目されている。

なお今回の調査については、平成19年度に『郡家遺跡第83次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



2. 調査の概要

今回の調査は商業施設・共同住宅建設伴うもので、調査の便宜上5つの小調査区に分割して調査を実施した。調査の結果、遺構面を2面確認した。

基本層序

盛土の下層には、調査地北側では中世～近世の旧耕土が存在するが、西・南側ではこの旧耕土は存在せず、洪水性堆積層（古墳時代後期）となる。これらの層の下層に古墳時代遺物包含層である黒色粘土が堆積する。この上面が第1遺構面である。北側ではこの基盤層の直下にも別の遺物包含層が堆積し、これら遺物包含層の下層で第2遺構面を検出した。

第1遺構面

古墳時代後期～近世の遺構面である。掘立柱建物1棟、土坑31基、溝状遺構多数、古墳の可能性が考えられる方形区画などを検出した。

第2遺構面

古墳時代前期～中期の遺構面である。水路、水田、建物、土坑、溝などを検出した。

水路

調査地西部を南流する1条と調査区中央付近を西流する1条が、調査区の中央、やや西よりの地区で合流している。この水路を境に、西側に水田、東側に堅穴住居群が展開する。

西流する水路では、北岸付近でいくつかの土器群を検出している。

- 水田** 調査区西部の約700m²のわたる範囲において検出した。当調査地の西側で実施した第27次調査においても同時期の水田を確認しており、同調査地から続くものと判断される。
約30枚の水田区画を検出しており、1区画あたりの面積は15~30m²程度である。
- 建物** 壺穴住居5棟、平地式住居5棟を検出している。壺穴住居1棟のみ水路の南側で確認しているが、それ以外は調査地北東部で検出している。
- 土坑** 壺穴住居からは比較的多くの土器が出土しているが、平地式住居出土土器については残存状況が悪い。また壺穴住居のうち2棟で、かまどあるいはその痕跡を検出している。
- 溝** 26基確認している。多くの土坑でまとまって土器が出土しており、一括投棄されたものと考えられる。いくつかの土坑より、韓式系土器が出土している。
- 3.まとめ** 今回の調査では、2面の遺構面を確認した。

第2遺構面においては古墳時代前期~中期の居住域を表す壺穴住居や生産域を示す水田などの遺構を検出した。水田については、今回の調査地の西側で実施した第27次調査でも検出されており、同調査地から面的な広がりをもって展開している状況を確認した。水田の西側には水路を挟んで、壺穴住居などから構成される居住域を検出し、古墳時代の集落景観の復元における貴重な資料を得ることができた。

また韓式系土器などの特徴的な遺物も出土しており、種々の貴重な資料を得たといえる。

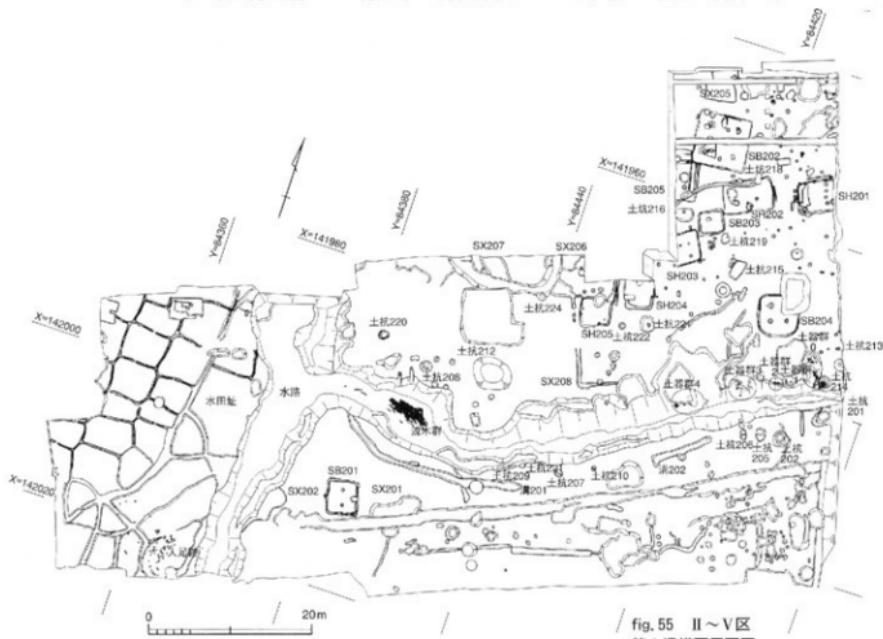


fig. 55 II ~ V区
第2遺構面平面図

8. 滝ノ奥遺跡 第4次調査

1. はじめに

滝ノ奥遺跡は、東西を石屋川に続く深い谷に挟まれた六甲山南麓から伸びる尾根上の、標高130～148mの眺望の良く開けた地区に立地する遺跡である。

この遺跡は、昭和55年に実施された試掘調査において発見され、昭和56年度に第1次調査が実施された。調査の結果、11世紀の経塚をはじめ、10世紀から12世紀の密教寺院に関連する遺構・遺物が検出された。また室町時代には、再度墓地として利用されていたことが判明した。その後第2次調査では、弥生時代中期頃の堅穴住居や平安時代～室町時代の土坑、火葬墓などが、第3次調査では中世の遺物を含む集石遺構や土坑が検出された。



fig. 56

調査位置図

1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成に伴うもので、山林斜面が調査対象地である。今回の調査地の北側に第1次調査地が隣接しており、南側には第3次調査区が接している地区である。

基本層序

表土の腐葉土層の下に流土である黄赤褐色シルト質極細砂、白褐色シルト質細砂（地山面）となっている。調査開始時には造成のため旧地形がとどめられていなかったため、尾根の方向性は推測できなかったが、東側に流土層は厚くなるようである。



(1区)



(2区)

(3区)

fig. 57

調査区北壁

土層断面図

- 1 表土（腐葉土）
- 2 黄赤褐色シルト質極細砂（流土）
- 3 2.5m
- 4 白褐色シルト質細砂（地山）

0 2m

遺構・遺物 東から1～3区の小調査区に分けて調査を実施した。遺物は土石流から出土した。出土点数としては2区が多く、ついで3区となり、1区での出土量は少なかった。

検出したものは、1区で人頭大以上の大きな転石が重なるように検出した。人為的に並べられたものではなく自然に形成されたものであり、土石流に起因するものと考えられる。第3次調査地は造成のため削平されており、削平面の断面で見る限り転石群を確認できることから、当該調査地より東の谷へ流れた土石流と考えられる。3区では人頭大以下の小さめの転石が検出された。2区に地山面から大きな石が露頭していたが、人為的な痕跡は見当たらなかった。遺物は、概ね中世のものである。小片であるが、摩滅はあまり受けておらず、当調査区の北側近くに中世の遺構が存在していたものと考えられる。

3.まとめ

1区で検出した上石流は東側にある深い谷の方向へと流れると見られる。3区で検出した小土石流は西の深い谷に流れしており、尾根の頂部近くで地山に含まれた上石が土石流となる初期の地点に近いものと考えられる。遺物は大半が土石流の上に堆積した土内から出土しているが、1区の上石流の石の間や、3区の小土石流の間からも中世の遺物が出土することから、これらの土石流は中世以降に発生したものと考えられる。第1次調査で得られた室町時代の墓址が廃絶する契機となるような土石流災害が発生したことが想定される資料である。なお、土石流の発生起因が、中世までの無計画な開発によるものか、多量の降雨によるものかは判然としないが、当該地区が土石流による災害に備える必要性を示唆する資料が得られた。

これまでの調査から、当該丘陵が弥生時代から長期間にわたり様々な目的で利用されてきたことが判明してきた。急峻な六甲山南麓地域での不安定な土地条件にもかかわらず、眺望の良さが古代、中世から現代においても人々に土地利用をうながしていることが窺える。



fig. 58 調査区平面図

9. 篠原遺跡 第26次調査

1. はじめに

篠原跡は六甲山南麓、西の袖谷川・東の六甲川が合流して都賀川となる地点付近、両河川にはさまれる範囲および六甲川左岸の傾斜地に立地する遺跡である。

当遺跡出土の繩文土器が繩文時代晩期の「篠原式」として知られているほか、昭和58年以降25回の発掘調査が実施されており、繩文時代、弥生時代、古墳時代から中世に至る各時代の遺構・遺物が確認されている。



fig. 59
調査地位置図
1:2500

2 調査の概要

今回の調査は住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。調査の結果、遺構面を1面確認した。当調査地は北に高くなる傾斜面上にあたるが、遺跡が存在する4a層以上はおむね水平の土層堆積となっている。土地利用するにあたり段造成を行ったものと考えられる。

基本層序

基本的な層序は以下の通りである。

1a：理表十

2-a：字地開発以前の旧表十

3-a：鎌倉時代～江戸時代の遺物を含む旧表土

4-a：弥生時代～平安時代の遺物を含む旧表土 下面が遺構面 5-a以下：無遺物層

清華

4-a層下面で検出された遺構で、溝1条・土坑1基・柱穴2基を検出した。

S D01

幅約70cm・深さ約15cmをはかる溝である。遺物は出土していない。

SK01

東西約1m・南北1m以上・深さ約10cmを測る土壇である。遺物は出土していない。

桂冠

S.P01・02ともに経30一定程度の浅い柱状帶の遺構である。S.P02から瓦器片1点、土器

片2点が出土している

遺構から出土した遺物がほとんどなく時期の判定は困難であるが、これらの遺構に対応する表土層である4a層からは平安時代までの遺物が出土しており、古代の遺構であると判断して大過ないものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、溝・土坑・柱穴などの遺構を検出し、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器のほか、鎌倉時代・室町時代に輸入された中国製磁器が出土している。弥生時代の遺物はほとんどなく、平安時代以降のものが大半を占める。この時期以降、継続的な人々の居住が現在に至るまで続いているものと考えられる。篠原遺跡で顯著な縄文時代・弥生時代の遺物については古代から平安時代の表土に混入した弥生土器が数点出土したにとどまる。しかし下層に土壤化層である5a層が確認でき、遺物は出土していないが、この層の上面が縄文時代・弥生時代の遺構面となる可能性が考えられる。

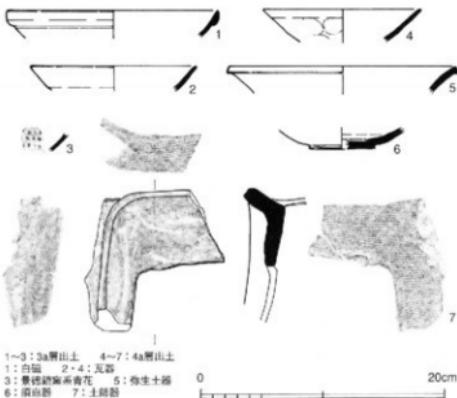
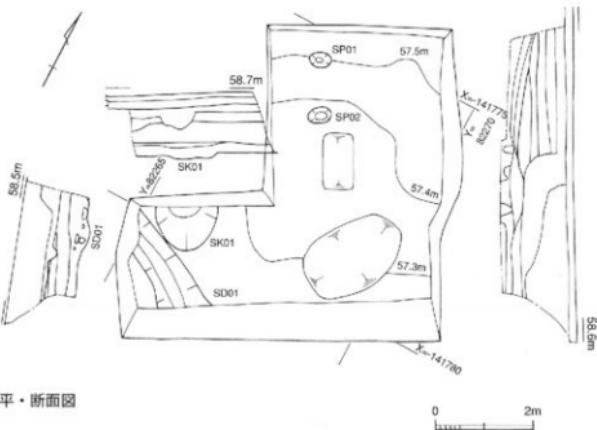


fig. 61 出土遺物実測図

10. 西郷古酒蔵群 第6次調査

1. はじめに

西郷古酒蔵群は、西郷川の扇状地に立地している。神戸において、江戸時代から栄えた酒蔵の近世生産跡である酒蔵が、近年の開発により徐々に共同住宅や商業施設へと変貌していくに従い、調査が増加している。

これまでの調査成果により、江戸時代から、昭和にかけての酒蔵の変遷とともに、酒造技術の進展の状況も徐々に明らかとなりつつある。

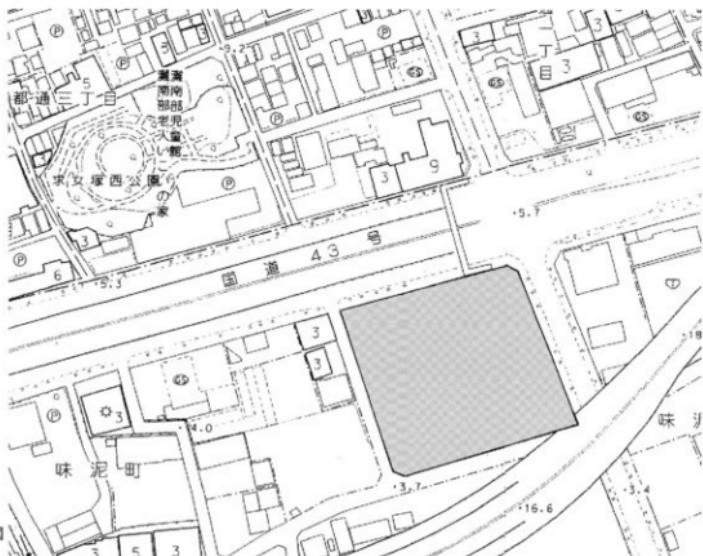


fig. 63
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は店舗建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。

基本層序

上層より、戦時下における焼土層までの盛土が存在し、その下層に、モルタルによる床面が存在している。この床面が昭和20年まで使用されていた酒蔵の遺構面である。その下にこの酒蔵が、築造された時期の遺構面（黄白色シルト上面）が存在している。ただし、今回の調査区では、北半と南半では1m以上の段差が存在する。北半部分にも酒蔵の存在は確認できたが、米洗い場など多くは、戦災による焼土の被覆を伴わない。B区の石組みと污水枠や地下室など明治期に遡るような遺構を同一面で検出している。また、この北半では、40cmの盛土下に6世紀末から7世紀の包含層である暗灰褐色シルト（厚さ10cm）が存在している。この層の下面が、6世紀末から7世紀のピットを中心とした遺構面となる。

大蔵

大蔵は、東西26m、南北12mを測り、基礎となる石垣は高さ1mを超える部分もある規模の大きなものである。大蔵内部には特に施設等は検出できなかった。

前蔵

前蔵は、東西26m、南北12.6mを測り、基礎となる石垣は50cmを越える部分もある。前蔵の西北部分には槽場がある。槽場の規模は、東西10.8m、南北1.6mで、南に階段による出入り口を持つ。槽場の東側には備前焼の甕が据えられており、單発式と考えられる。槽場の北側の石垣は精緻な積み方をしている部分と水車小屋から運び出したような石材で乱雑に積まれている部分があり、後世の拡張等により、積み直しが行われたと考えられる。

石垣

大蔵の北には石垣が存在している。この石垣によって、調査区は北と南に分かれており、おおよそ1mの段差となる。石垣は、東西方向であるが、大蔵に隣接する部分のみや北に膨らんでいる。この石垣と大蔵の前後関係は土層の堆積からは判断できず、現状では、石垣を築いた後に大蔵を築いたか、ほほ同時に築いたかのいづれかと考えられる。

なお、大蔵など建物の基礎の石垣には、方柱状に加工された石材が使用されているのに對して、石垣は、人頭大の割石を中心を使用している。

大蔵・前蔵は、戦災によって焼失した後は、廃絶しており、改修等による使用は認められない。この戦災による焼上焦上層下では、明治30年代から大正期にかけて、改修等に伴って使用された煉瓦が多数確認されており、この時期に酒蔵の改修が隨時行われていたと考えられる。酒蔵の建造自体は、確実に明治30年代より遡ることが、酒蔵の溝を補修した煉瓦が示す時期から確認されているが、江戸末に既に存在していたかどうかは不明である。

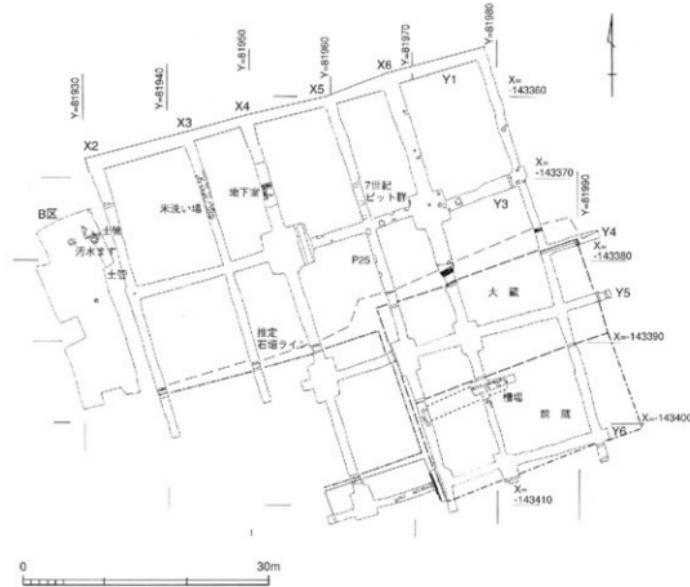


fig. 64 調査区平面図

北半部分の酒蔵 多くは昭和戦後の酒蔵に伴うと考えられるが、B区に残されていた石組み垣や汚水枠は、使用されていた煉瓦が示す時期から、明治期に遡り得ると考えられる。

B区に残していた石組みは、南北1.6m、東西2mを測る。汚水枠は、内法で50cm、深さ70cmを測る。築造後に改修が行われており、その時点での使用された煉瓦が示す時期から、これらの酒蔵関連の遺構の築造時期が明治期に遡り得ると考えられる。また、激しい擾乱によって、その構造等は不明であるが、地下室状に掘り下げられた床面に煉瓦が敷き詰められた構造の遺構が確認されており、この遺構も使用された煉瓦が示す時期から、遺構の築造時期が明治期に遡り得ると考えられる。

B区下層 X 4 トレンチより西では、近世以降の盛土が確認されており、調査によって北東から南西へと緩やかに下がる地形であったことが確認されている。特にB区では、工事影響深度が深いことにより下層遺構として、複数面の遺構面を調査している。酒蔵（第1遺構面）の下層では、1m近い盛土の下面で確認されている。この遺構面は近世（江戸～明治）の耕作面（第2遺構面）であり、鋤溝が複数確認されている。この耕作面の下層が、近世の張り床を伴う遺構面（第3遺構面）であり、床面に水はけを良くするために砂を引き、その上面に黄白色シルトによる貼床をして、その上面で、焼土土坑が複数確認されている。焼土土坑内からは鉄滓等は確認されておらず、内容的には、近世の小規模な製塙遺構である可能性を考えておきたい。なお、この遺構の北側には、水の進入を防ぐために、東西方向に石組みの溝が築かれていた。

この遺構の下層にて、7世紀の遺物を含む遺物包含層が確認されている。この遺物包含層を取り除くと、北東から南西へとさらに下がる地形が確認されており、7世紀の時点では、T.P.+3m前後の低い地形であったと考えられる。

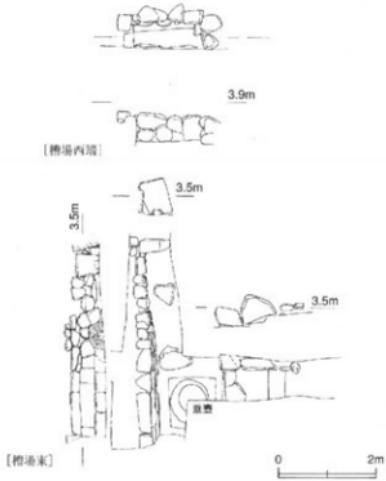


fig. 65 槽場平・立面図



fig. 66 X 4 トレンチ槽場西端全景

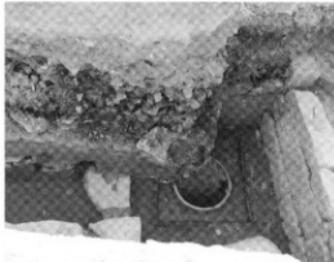


fig. 67 槽場垂壺検出状況

7世紀の遺構 北半では、6世紀末から7世紀にかけてのピットを検出した。ピットは円形のものもあるが、一部には、一辺40~60cmの方形のピットも存在していた。調査範囲の制約もあり、建物としてまとまるものは確認できていない。

なお、西半は、酒蔵の増築の際に、1m近く盛土が行われており、本来の地形としては、大蔵の北側部分のみ、南に張り出すように高い部分が存在して、その部分に6世紀末~7世紀にかけての遺構が存在していたと考えられる。

なお、北西部分は、緩やかに低くなる地形となっており、7世紀の遺物包含層も地形に合わせて深くなっている状況を確認している。従って、この周辺には、6世紀末~8世紀にかけての遺跡が広がっているものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、前蔵・大蔵を検出し、前蔵内にて槽場を確認した。また、槽場内にて垂壙も検出している。ただ、時期が江戸期に遡りえるかどうかは、不明瞭である。

また、今回新たに6世紀末~8世紀にかけての遺跡を確認したことは大きな成果といえよう。特に西求女塚古墳周辺の調査において8世紀を中心とした遺跡が確認されており、旧山陽道との関連も含めて、今回の調査成果についても注目しておく必要がある。



fig. 68 B区全景



fig. 69 X 6 トレンチ大蔵石垣全景



fig. 70 X 6 トレンチ石垣全景

11. 日暮遺跡 第30次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山から流れ出す生田川などの河川の土砂によってつくられた沖積地上に立地している。

現在のように埋め立てが行われていなかった古代には、海岸線まで300mほどの距離で「敏馬の浦」とよばれる良港あったとされ、古代の幹線道路であった山陽道（後の西国街道）も通る交通の要衝であった。

当遺跡は昭和61年に発見され、今まで30回近くの発掘調査が行われている。これまでの調査の結果、弥生時代から中世にかけての広範な時代において造構や遺物の存在が知られている。



fig. 71
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅の建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

なお、残土置場の関係から、調査は東、西に2分割して実施した。

基本層序

調査地は、従前の建物の基礎等によって大きく搅乱を受けている。

上層より、盛土、表土、

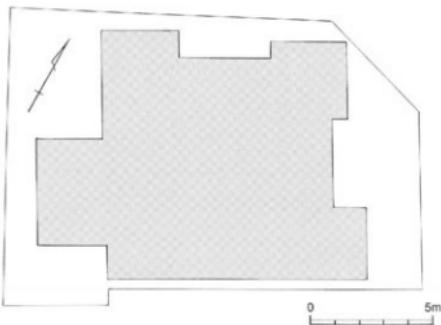


fig. 72 調査範囲位置図

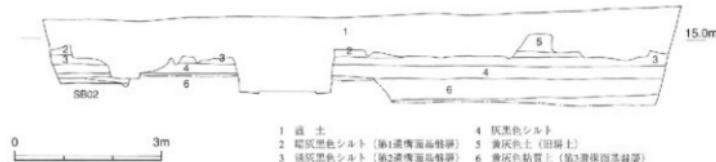


fig. 73 調査区南壁土層断面図

旧耕土が約70cm存在し、この下層に第1遺構面の基盤層である暗黒褐色シルトが層厚10～20cm堆積する。さらに第2遺構面の基盤層となる淡灰黒色シルトが層厚20cm堆積し、層厚20～30cmの灰黒色シルトを挟んで第3遺構面の基盤層である黄灰色粘質土となる。さらに下層についても断ち割り調査をしたが遺構・遺物は確認されていない。

第1遺構面 表土および部分的に残る旧耕土直下の暗黒褐色シルト上面において確認した中世の遺構面である。土坑4基とピット数基を検出した。



fig. 74 第1・2遺構面平面図



fig. 75 西半部第1遺構面全景



fig. 76 S K01断面

- S K01** 調査区中央部において検出した、長径2.0m以上、短径1.8m、深さ55cmを測る平面形が楕円形の土坑である。東側は建物基礎によって失われ、10~20cmの石が投棄されていた。
- S K04** 調査区東端部において検出した、一辺0.8m、深さ70cmの平面形が隅丸方形に近い土坑である。S K01と同様10~20cmの石が投棄されていた。
- ピット** 調査区北端において検出した。いずれも直径10~20cmで浅く、建物等にはまとまらない。
- 第2造構面** 淡灰黒色シルトを基盤層とする造構面である。溝2条及びピット数基を検出した。
- S D01** 調査区の中央部を北西から南西に緩く蛇行して流れる幅70~80cm、深さ20cm前後の溝である。中央部および南東端部を擾乱によって削平される。
- S D02** 調査区の北端に一部がかかる造構でさらに調査区外に延びる。自然流路と考えられる。
- ピット** 調査区の東部を中心に検出されている。いずれも直径20~30cmで浅いものである。
- 第3造構面** 黄灰色粘質土を基盤とする造構面である。堅穴住居2棟と土坑1基、およびそれ以前の流路1条を検出した。

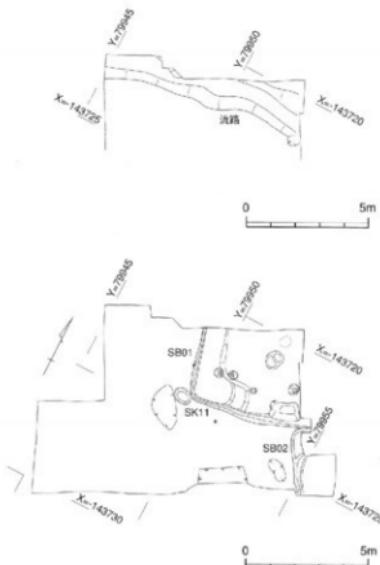


fig. 77 第3造構面平面図

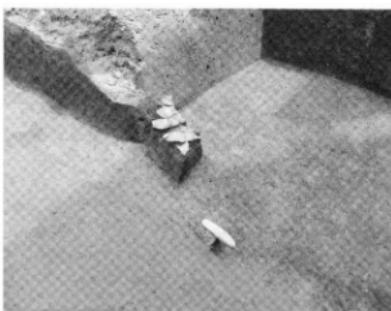


fig. 78 S B02土器出土状況



fig. 79 流路全景

S B01 調査区の北東部分で検出した平面形が方形の竪穴住居である。東辺3.0m、南辺5.2m及び南西のコーナー部分を確認したが、他の部分は調査区外に延びるため規模は不明である。

東辺から南辺の一部にかけて幅0.7~1.0m、残高10cmのベッド状遺構が設けられているが、検出面と同レベルまで削平されている。

壁面には、幅10~30cmの周壁溝が巡る。また南辺部分で1.0×0.7mの隅丸方形の土坑を確認している。床面には、0.8×0.6mの楕円形の土坑1基のほか、被熱によって赤変した部分が認められた。主柱穴は4基と考えられ、うち南東に1基、南西に2基を確認した。

S B02 調査区の南東隅部分において検出した平面形が方形の竪穴住居である。西辺2.7m、北辺0.8m及び北西のコーナー部を確認したが大部分は調査区外に延びる。

西壁には、幅20~30cmの周壁溝が巡るが、北辺の1m程度手前で東に曲がるため、拡張が行われた可能性がある。調査区東辺においてS B01と切り合っておりS B01に先行する。

S K11 調査区中央部において検出した長径0.6m、短径0.5m、深さ40cmの楕円形の上坑である。

流路 調査区北辺で検出したS B01に切られる流路である。北西から南東方向に流れる。弥生土器をわずかに含んでいる。

3.まとめ 今回の調査では、弥生時代末から古墳時代にかけての竪穴住居を検出し、当該時期にも集落が存在することを確認した。これまでの周辺における調査では、古墳時代から中世にかけての掘立柱建物や、古墳時代の竪穴住居をはじめとする多くの遺構や多量の遺物を確認しているが当該時期の資料は少なく、今回の調査成果はその空隙を生める資料となった。



fig. 80 東半部第3遺構面全景

12. 日暮遺跡 第31次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山から流れ出す生田川などの河川の土砂によって、つくられた沖積地に立地している。

この遺跡は、昭和61年に発見され、現在まで30回の発掘調査が行われている。これまでの調査では、弥生時代から中世にかけての広範な時代に遭墳や遺物の存在が知られている。



2. 調査の概要 今回の調査は、共同住宅の建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序

調査地は、従前の建物の基礎等による擾乱を大きく受けていた。

上層より、盛土、表土、旧耕土が約100cm存在し、この下層に平安時代～中世の遺物包含層である褐色土が層厚数～20cm堆積し、第1遺構面の基盤層である暗褐灰色砂質土が層厚10cm程度堆積する。さらに古墳時代の遺物をわずかに含む層厚20～30cmの暗灰褐色シルトを挟んで第2遺構面の基盤層となる灰褐色シルトとなる。

さらに下層についても断ち割り調査を実施したが、遺構・遺物は確認していない。

1 楢土	7 深紅色系(第3透水性差基盤)	13 黑褐色(深色)
2 水永	8 淡紅色系(第3透水性差基盤)	14 黑褐色(深色)
3 深灰黑色糞土(山地林土)	9 黑褐色糞土(土壤含水度高)	15 黑褐色糞土(深色)
4 灰褐色土(平安時代一中世含苔土)	10 黑暗灰土(土壤含水度高)	16 黑褐色糞土(腐殖化度高)
5 黑褐色糞土(第3透水性差基盤)	11 黑暗灰土(鐵氧化物化)	17 黑褐色糞土(SDR1)
6 黑褐色糞土	12 黑角鈣土(鐵化)	18 黑褐色糞土(山地土)

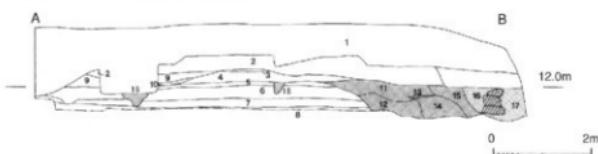


fig. 82

調査区土層断面図

- 第1遺構面** 旧耕土状の遺物包含層である褐灰色土直下の暗褐色砂質土上面において確認した平安時代～中世の遺構面である。掘立柱建物、溝、土坑、ピットおよび流路等を検出した。
- S B01** 調査区の西端において検出した掘立柱建物で、南北5間以上の規模をもつものである。さらに南および西に拡がると考えられる。柱掘形は径45～60cmの平面形が円形に近い隅丸方形で、深さ30～45cmを測る。柱間は南北2.3mである。
- 地鎮遺構** 調査区の2ヶ所において土器を埋納したピットを検出した。地鎮遺構と考えられる。平安時代の建物に伴うものと考えられる。
- S P26** 調査区の中央部において検出した遺構で、直径35cmを測り、土師器甕を埋納している。甕は口縁部を東に向けた横向きの状態であったと考えられる。内部からの出土遺物は確認できなかった。
- S P61** 調査区の西部において検出した遺構で直径30cmを測り、土師器甕を埋納している。甕は正置していたと思われるが、削平のため底部付近のみを残す。甕の下には、拳大の石が2～3段敷かれていた。
- S D01** 中世の流路を利用して造られた石組みの溝である。第1次調査においても検出されており、幅100cm、深さ80cmで、一部加工した石を使用して1～3個の石を積上げている。東側の石列には裏込めに小石が入れられている。近世～明治の初めの遺物が出土している。
- S D02** 調査区の東部を北から南に緩く蛇行して流れる幅70～80cm、深さ20cm前後の溝である。
- 流路** 調査区の西部を北から南に流れる流路で、第1次調査において確認された流路に続くものである。幅4.5～6.0m、深さ80cmを測る。鎌倉時代～室町時代の遺物を多く含むが、平安時代の石帶（丸瓶）なども出土している。

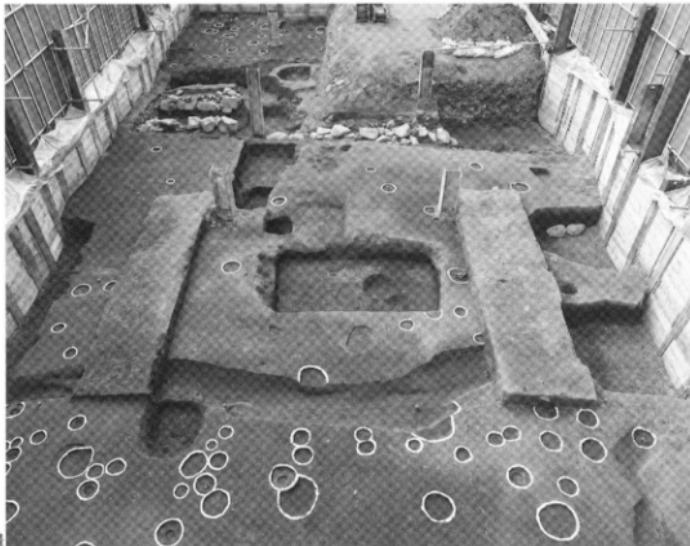


fig. 83
第1遺構面全景

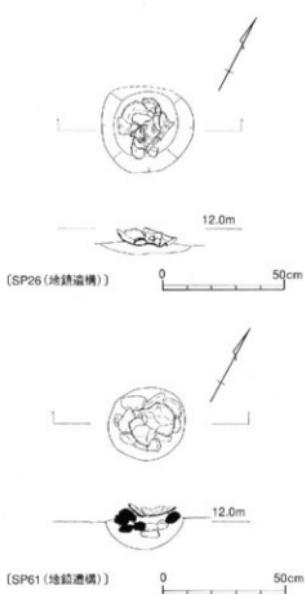
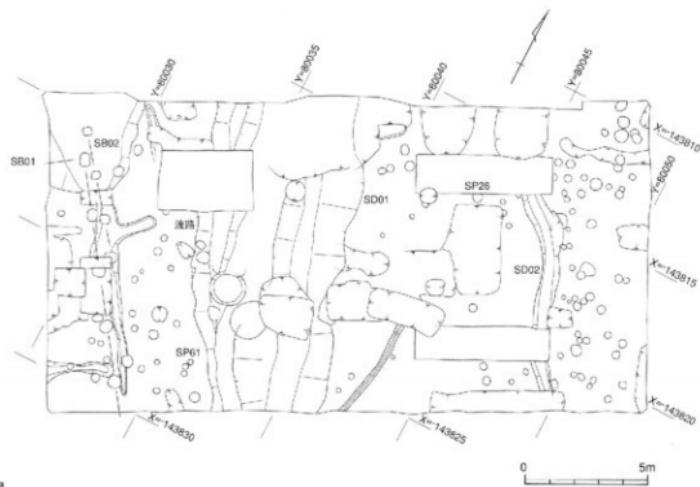
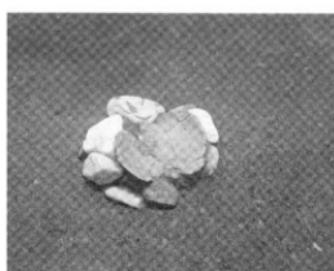


fig. 85 S P 26・61平・断面見通し図



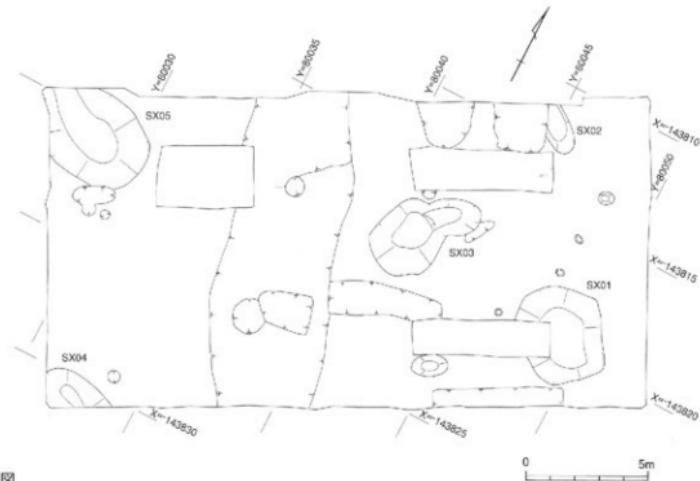


fig. 88
第2遺構面平面図

第2遺構面 灰褐色シルトを基盤とする遺構面である。風倒木痕と思われる遺構5基、およびピット数基を検出した。

SX01~05 調査区の全域において、風によって倒れた木（風倒木）によるものと考えられる痕跡が検出された。1.0m×2.0m程度のものから3.5×5.0m以上のものまで様々な大きさのものである。いずれも周囲に上層の土の巻き込み、土層の逆転現象などが観察される。

時期は不明であるが、直上の暗灰褐色シルトには古墳時代の遺物が含まれるため、古墳時代以前のものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査区周辺における過去の調査では、古墳時代から中世にかけての掘立柱建物や、古墳時代の竪穴住居をはじめとする多くの遺構や多量の遺物が確認されている。

特に北側に隣接する第1次調査地においては9世紀後半から12世紀にかけて、6時期、12棟の掘立柱建物が検出されている。

今回の調査では、調査区の東側で第1遺構面においてピット群を検出しており、現段階では確定に至っていないが、第1次調査地から抜がる建物の柱穴を含むものと考えられる。

また第2遺構面では古墳時代の竪穴住居などは確認できず、風倒木痕を確認するに留まった。この時期の集落は、南には抜がっていないようである。

13. 生田遺跡 第5次調査

1. はじめに

生田遺跡は、鯉川をはじめとする六甲山系から流れ出す中小河川により形成された、狭い扇状地の扇央部分に立地する。

当遺跡は昭和62年度以降これまでに4回の調査が実施されており、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。特に、第1・4次調査では古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物が多く確認されている。



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅の建設に伴うもので、工事の影響を受ける部分について実施した。

基本層序

上層より、第1層は、盛土・整地層で、40~60cmの厚さで広がっている。第2層は、削平を受けてほとんど失われている遺物包含層である。遺物包含層の下面が造構検出面である。造構検出面より下層については、断ち割りを実施したが遺物等は確認していない。

前述のように古墳時代の遺物包含層はほとんど遺存しておらず、盛土直下で造構面を検出した。造構は柱穴を6基程度確認でき、埴物としてのまとまりをもつものを1棟確認し、この建物を建物1と呼称する。その他は小さなピットで、まとまりをみせていない。

建物1

南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物であるが、調査区外に延びており規模は特定できない。遺物包含層の出土遺物から、古墳時代以前と考えられるが、柱掘形からの出土遺物はなく、正確な時期は特定できない。

遺物包含層からは6世紀を中心とする遺物の出土が認められるものの、正確な時期を特定できるほどのものではない。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代以前の掘立柱建物を確認した。しかしながら大半が調査区外に延びており、出土遺物も乏しいため、建物の規模や正確な時期は不明である。

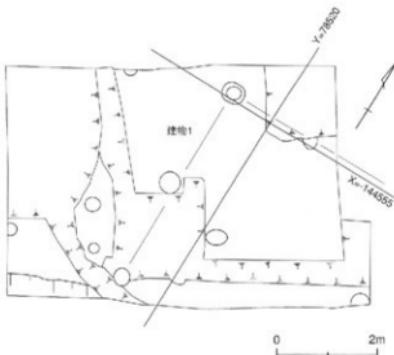


fig. 90 調査区平面図

14. 生田遺跡 第6次調査

1. はじめに

生田遺跡は、神戸市の市街地中心部に位置している。昭和63年に遺跡が発見されて以降、大規模な調査は行われていなかったが、平成14年に実施した試掘調査によって遺跡の範囲が従来よりも西に拡がることが確認され、平成17年に第4次発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代から中世に至るまでの大複合集落といえる様相が明らかとなつた。



15. 中山手遺跡 第4次調査

1. はじめに

中山手遺跡は、六甲山麓を流れる生田川の標高20m前後の扇状地上の扇央部付近に立地している。当遺跡は、東西400m、南北200m程度の範囲と考えられており、昭和61年に発見された。これまでの調査では、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物や中世の集落跡などが確認されている。



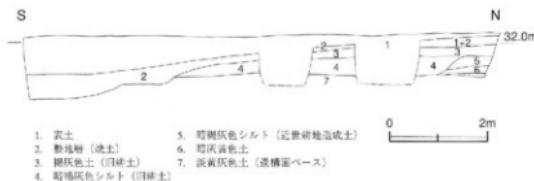


fig. 94
調査区西壁
土層断面図

SK01 調査区の南部で検出された $1.15\text{m} \times 0.7\text{m}$ 、深さ18cmの不定形の土坑である。遺物がほとんど出土しなかったため時期は不明である。

SD01 調査区南北、東西に「コ」字状に区画する幅40~60cm深さ25cmの溝である。近世以降の耕地造成に伴う溝と考えられる。

3.まとめ 中山手遺跡は、現在までに3回の調査しか実施されておらず、遺跡の実態が不明な部分が多い遺跡であった。今回の調査は、遺跡の北東隅にあたる場所で小規模な調査であったにもかかわらず弥生時代末から古墳時代初頭にかけての堅穴住居を確認した。今回の調査成果により当調査地の周辺には、当該時期の集落の存在する可能性が高いことが判明した。

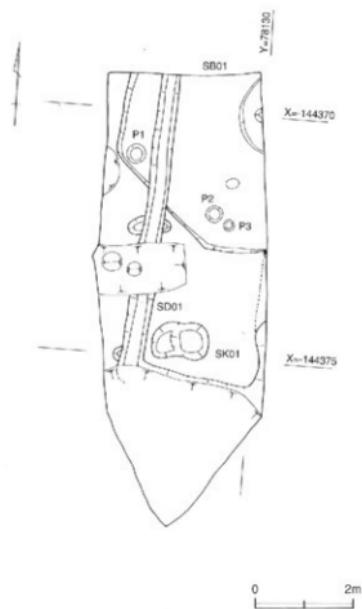


fig. 95 調査区平面図

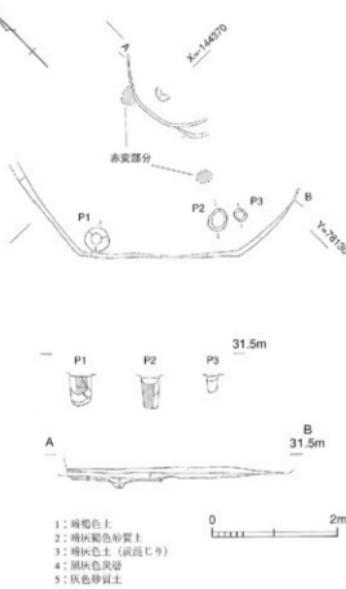


fig. 96 S B01平・断面図

16. 下山手遺跡 第5次調査

1. はじめに

下山手遺跡は、六甲山系から南に派生した尾根の延長にあたる、旧宇治川と旧鯉川に挟まれた段丘上に立地する遺跡である。これまでに4回の発掘調査が実施されており、調査成果により弥生時代から近世に至るまでの複合遺跡として知られている。

今回の調査は、平成3年度に調査が行われた第1次調査と平成12年度に調査が実施された第3次調査地から南西方向に隣接した位置にあたり、当該地において、共同住宅の建設に伴い、基礎埋設工事に影響する範囲のみ調査を実施した。



fig. 97
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅の建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。当調査地は、第1、3次調査地の南西方向に隣接した位置にあたっている。

基本層序

六甲山南麓に当たる傾斜地のため、層序は地区により多少の差異があり、遺構面までの深さにも違いがあるが、基本的に上層より、盛土、旧耕土、暗灰褐色砂質土（遺物包含層）、暗黒褐色バイラン混り砂質土（遺構面基盤層）となっている。

調査の結果、ピット5個、土坑2基を検出した。

S P02~04 調査区中央やや西よりで、一直線に並ぶ状態で検出した。構成されるピットの規模と形状は、一辺が70cmの方形のもの2基（S P02・04）が、直径50cmの円形のもの1基（S P03）を挟むように並んでおり、それぞれの間隔は1.8mである。底に柱の沈み込みと平面、断面とともに柱痕が確認されることから、建物に伴う柱穴と考えられるが、今回の調査区内では対を成す柱穴が検出できなかったため、北西から南東方向に主軸を持つ総柱建物が存在していたと推定される。

- S P01・05** S P01とS P05は、いずれも一辺が80cm以上の平面形が方形のものである。調査区端での検出であるため調査区外に建物が存在する可能性もあるが、前述した建物方向や周辺で検出されている建物方向から考えると、建物を構成する柱穴とは考えにくい。ピットの中から出土する遺物は、12世紀のものが含まれることから、鎌倉時代のものと考えられる。
- SK01** 北半分が調査区の外に延びるため規模や形状は不明であるが、多量の土師器皿が投棄されたような状態で出土した。12世紀に行われた祭祀、もしくはその後に投棄されたものと考えられる。
- SK02** 両側が調査区外に延びるため規模や形は不明であるが、幅1.9m、深さ40cm分を検出した。ほぼ直に抉れた形状である。埋土は細かな砂のみが堆積しており、遺物は出土していない。
- その他、調査区の西側と東側で、ピット状遺構を多数検出した。規模と形状は、直径20～40cm前後の平面形が円形のピットで規則性は認められない。全て断ち割り調査を行ったが、遺物は出土していない。断面観察の結果、先細りに地中深く入るものや、枝分かれして横に広がるものなどが見られることから、樹木や植物の根の痕跡と考えられる。
- 3.まとめ** 東側に隣接する地区における既存の調査では、弥生時代の遺物や、古墳時代の建物跡、平安時代の遺構が検出されているが、今回の調査では、鎌倉時代の遺構のみを検出した。調査区の制約もあり、鎌倉時代の建物の規模については判明しなかった。当該地は、六甲山系から派生した舌状の尾根の稜線から西に傾斜する端部にあたり、鎌倉時代には、樹木や植物が生い茂る中に建物を建てて活用されたようになったものと考えられる。



fig. 98 調査区平・断面図

17. 元町遺跡 第5-B次調査

1. はじめに

元町遺跡は、宇治川により形成された沖積地に立地する遺跡である。

平成2年度に第1次調査が実施され、中世後半の井戸や土坑が確認され、周間に中世の集落が存在していることが判明した。第2次調査と第3次調査では、近世集落を、第4次調査では中世の遺物包含層を確認している。

fig. 99
調査位置図
1:2,500

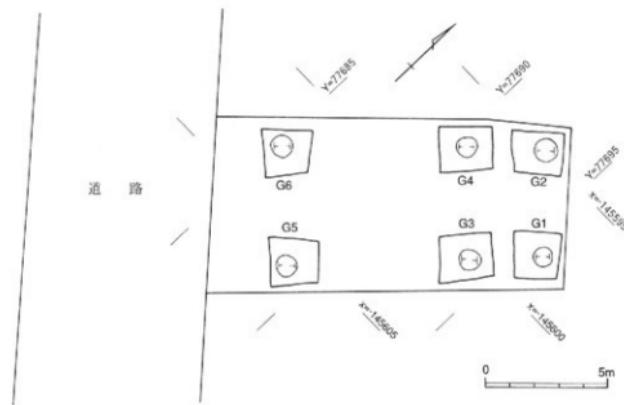


2. 調査の概要

今回の調査地については、平成18年度に共同住宅の建設に伴うシートパイルの設定部分について、第5-A次調査として調査を実施している。その結果、中世遺物包含層とともに、中世のものと考えられる土坑状の落ち込みを確認している。

今回は平成18年度調査に引き続き、共同住宅の基礎部分について、第5-B次調査として調査を実施した。

fig. 100
調査グリッド
配置図



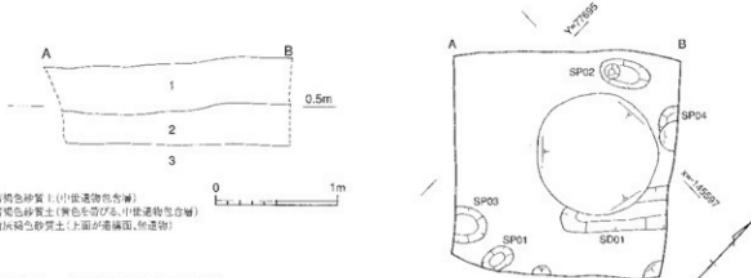


fig. 101 G1 グリッド土層断面図・平面図

基本層序

今回の調査では先行して矢板による土留めを施したため、上層の堆積状況については十分に把握できていないが、中世遺物包含層より下層について、暗褐色砂質土（中世遺物包含層）、暗褐色砂質土（黄色を帯びる、中世遺物包含層）、黄灰褐色砂質土（無遺物、上面が中世造構面）の堆積を確認している。

今回は、建物の基礎部分を対象とした調査であるが、大部分は中世遺物包含層の上面以浅で工事影響深度が及ぶ。中世遺物包含層以深まで工事が及ぶ部分について、G1～G6としてグリッド調査を実施した。このうち造構面まで調査を実施できたのはG1のみであり、G2～G6は中世遺物包含層の途中で工事の影響深度に達した段階で終了している。

各グリッドの暗褐色砂質土（遺物包含層）から、中世後期の須恵器、土師器の他、青磁、白磁も出土している。また、各造構内から土師器の細片が出土している。

G1

調査区の北東端部に設定したグリッドである。柱穴4基と小溝1条を検出した。S P01・02から遺物が出土しているが細片で量も少なく、中世の遺物であることが解る程度である。直上の遺物包含層から中世後期の遺物を多く出土していることや、当該調査地の北側に隣接した第1次調査の調査結果を考え合わせると、今回確認した造構の時期も中世後期の可能性が高いと考えられる。

S P01 径28cmで、深さ24cmを測る柱穴である。中世の土師器細片が出土している。

S P02 東西42cm×南北22cmで、深さ30cmを測る柱穴である。中世の土師器細片が出土している。

S P03 径30cm、深さ16cmを測る柱穴である。

S P04 扱乱による削平を受けるが、径約20cm以上、深さ約10cmを測る柱穴である。

S D01 幅約34cm、深さ約36cmを測る小溝である。

3.まとめ

今回の調査では、中世後期の可能性が高い柱穴と小溝を確認している。小面積の調査であるが、遺物包含層からの出土遺物も比較的多く、造構も密集して確認している。

今回の調査地の北側に接して第1次調査が実施され、中世後期の柱穴、上坑、溝、井戸等が検出されている。今回の調査でも同調査と同様に、中世後期の集落居住域を確認した。

今回検出した造構面の標高はT.P.0.2～0.4mと非常に低く、海岸汀線沿いにまで広がる集落だと考えられる。第1次調査では漁具も出土しており、何らかの形で漁業にも関連を持つ集落であろう。また当遺跡の中央を抜ける形で西国街道が東西に伸びており、西国街道沿線に存在する集落もある。交通の利便性の良さも、集落形成の理由と考えられる。

18. 楠・荒田町遺跡 第39次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川沿いの段丘上に立地している。

当遺跡においてはこれまでに40回近い調査が実施され、縄文時代後期の貯蔵穴等が確認された他、弥生時代前期から弥生時代中期末の西浜平野における拠点集落の一つとなっている。特に弥生時代中期に関しては、集落の居住域とともに方形周溝墓による墓域が確認されている。その後、古墳時代後期にも集落が存在した。また、平安時代末期に成立する中世前期集落も存在し、福原京との関連も注目される遺跡である。



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅の建設に伴い、工事により影響を受ける部分について実施した。

基本層序

上層より、擅亂・盛土、旧耕土、淡黃灰褐色砂質土、灰色砂質土（近世を主とする耕土、中世～近世の遺物を含む）、暗褐色砂質土（弥生時代中期～古墳時代後期と中世前期の遺物を含む遺物包含層）、暗黃灰褐色砂質土（遺構面基盤層、調査区の西端に存在する無遺物層）、淡黃褐色砂質土（遺構面基盤層、地山）となっている。ただし暗褐色砂質土（遺物包含層）は、近世以降の耕土により大きく削平されている。

今回の調査区で、遺構面の標高はT.P. 16.3～16.8mである。

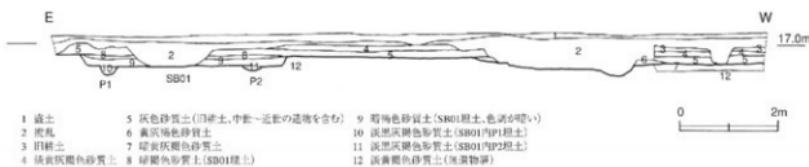


fig. 103 調査区中央土層断面図

遺構と遺物 古墳時代後期では、竪穴住居 2 棟、土坑、柱穴を確認している。また、弥生土器あるいは古墳時代の土師器が出土した、竪穴住居の可能性も考えられる土坑状の落ち込みも 2 基確認している。その他に、中世前期の鶴嘴群や土坑も確認しており、詳細な時期不明の柵列を含む柱穴と土坑を確認している。

遺物は主として遺構から、弥生土器や古墳時代の土師器、須恵器が出土している。また、中世前期の須恵器、土師器、白磁も少量出土している。

S B01 東西約4.3m×南北約3.0m、深さ約25cmを測る、平面形が方形の小型の竪穴住居である。周壁溝が存在し、幅約16cm、深さ約5cmを測る。暗褐色砂質土が堆積している。

主柱穴は、おそらく 2 本柱であると考えられる。うち 1 基は東側の柱穴は P 1 と考えられる。西側の柱穴については P 2 の可能性も否定できないが、位置的な関係から西側の搅乱に削平されている可能性が高いと考えられる。P 1 は径約40cm、深さ約17cmを測り、P 2 は径約35cm、深さ約8cmを測る。

また、西壁付近に上坑（S B01内 S K01）が存在している。東西径63cm、南北径約90cmで、深さ約26cmを測る。上層に焼土が混じる淡黒褐色土が堆積し、下層に黒褐色砂質土が堆積している。屋内がの可能性も考えられる。

量的には弥生土器あるいは古墳時代の土師器と考えられる細片が多く出土しているが、住居下層～床面直上で須恵器が少量出土している。また S B01内 S K01からも、古墳時代後期の土師器の他、須恵器の細片が出土している。以上から、S B01の時期は、古墳時代後期に属するものと考えられる。

S B02 東西約4.3m以上×南北約1.1m以上で、深さ約9cmを測る、平面形が方形の竪穴住居である。周壁溝は、幅約13cm、深さ約12cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。

主柱穴は、位置的な関係から調査区外に存在するものと考えられ、調査区内では確認できていない。

多くの弥生土器と古墳時代の土師器の細片とともに、須恵器が少量出土しており、古墳時代後期の竪穴住居であると考えられる。



fig. 104 調査区北半全景



fig. 105 S B01北半全景

- S X03** ほぼ垂直を呈する壁面際に周壁溝状の小溝が確認でき、堅穴住居の可能性も考えられる浅い土坑状の落ち込みである。ただし遺構の大部分が調査範囲外に延びており、また搅乱による削平も受けているため断定には至っていない。
- 検出長50cm、深さ約10cmを測る。周壁溝状の小溝は幅約25cmで、深さ約7cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で、弥生土器あるいは古墳時代の土師器と考えられる土器細片が少量出土している。
- S X04** ほぼ垂直の壁面と、平面形で直角に曲がるコーナーを持ち、堅穴住居の可能性も考えられる土坑状の落ち込みである。ただし遺構の大部分が調査範囲外に延びており、断定はできない。検出した長さは約1.7m以上、深さ約29cmを測り、埋土は暗褐色砂質土である。
- 弥生土器あるいは古墳時代の土師器と考えられる土器の細片が少量出土している。
- S K01** 東西約50cm、南北約80cmで、深さ約39cmを測る土坑である。埋土は上層が暗灰褐色砂質土、下層が黒灰褐色砂質土である。時期が判明する中で最も新しい遺物として、古墳時代後期の須恵器蓋が出土している。
- S K02** 東西約1.3m以上、南北0.6m以上で、深さ約18cmを測る土坑である。埋土は暗褐色砂質土である。弥生土器あるいは古墳時代の土師器と考えられる土器細片が少量出土している。
- S K03** 東西約35cm以上、南北約155cm以上で、深さ約19cmを測る土坑である。埋土は暗褐色砂質土である。中世前期の須恵器碗が出土している。
- S K04** 東西約40cm×南北約56cmで、深さ約14cmを測る土坑である。埋土は暗褐色砂質土である。須恵器碗の破片や白磁の微細な破片が出土しており、中世前期の遺構と考えられる。
- S K05** 東西約64cm、南北約61cmで、深さ約14cmを測る方形の土坑である。埋土は暗褐色砂質土である。詳細な時期不明の弥生土器か古墳時代の土師器が、細かな破片で出土している。
- 柱穴群** 調査区の全域で確認している。径約16～52cm、主に径約20～40cmを測る柱穴が多い。深さは約5～20cmで、主に約10～20cmである。埋土は暗灰褐色砂質土～暗褐色砂質土である。詳細な時期は不明であるが弥生土器あるいは古墳時代の土師器としか判断できない土器片が多く柱穴から出土した他、古墳時代後期の可能性が高い須恵器の出土した柱穴も確認している。他に中世以前としか判断できない土師器の出土した柱穴も確認している。
- 柱穴の時期が示すものとしては、S P03、25、34から古墳時代後期と考えられる須恵器片が出土している。柵列を1条（S A01）確認した他は、建物等のまわりは確認できていない。
- S A01** 座標北から約27°西へ振る方向に伸びる柵列である。柵列を構成する柱穴は径約16～32cm、深さ約5～20cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土～暗褐色砂質土である。
- S P19・20から弥生土器あるいは土師器の細片が出土しているが、詳細な時期を示すものではなく、柵列の時期については、中世以前という以上に絞り込むことはできない。
- 鋤溝群** 座標北から約41°西へ振る方向と、それに直交する方向に伸びる鋤溝群である。南北方向に伸びる鋤溝は6条確認されており、約3.0m間隔で掘削されている。東西方向に伸びる鋤溝は1条しか確認できず、掘削間隔等の詳細は不明である。
- 以上の鋤溝は幅約25～42cm、深さ約10～16cmを測り、埋土は淡灰色砂質土である。須恵器碗や白磁の細片が出土しており、中世前期の遺構と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では古墳時代前期以前と古墳時代後期、中世前期の遺構・遺物を検出した。

柱穴に関しては、出土遺物が弥生土器あるいは古墳時代の土師器と考えられる土器細片が大半であり、詳細な時期を決定することが困難なものが多い。ただし古墳時代後期の可能性が高い須恵器片が出土している柱穴も少数であるが確認している。

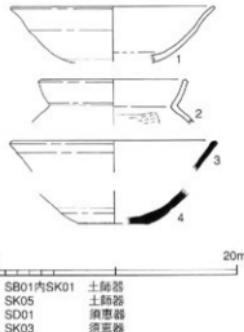
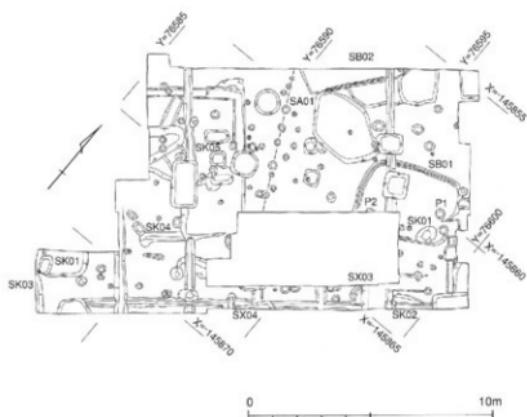
土坑についても、SK02とSK05は弥生土器あるいは古墳時代の土師器としか判断できない細片が出土しただけで、出土量自体も少ないため、詳細な遺構の時期は断定できない。須恵器が出土していないため、古墳時代前期以前の遺構である可能性も考えられる。

古墳時代後期では、方形堅穴住居2棟のほか、土坑も確認している。

他にSX03、04については堅穴住居の可能性が考えられるが、調査範囲外に延びることや搅乱の影響もあり、断定できない。どちらの遺構からも詳細な時期が不明の弥生土器あるいは古墳時代の土師器と考えられる土器細片が出土したのみである。遺構の検出が全体の一部のみに留まっていることや、遺物の出土量自体が少ないと今回の調査範囲の中では須恵器が出土していない可能性も考えられ、古墳時代後期の遺構である可能性も全く否定することができないことなどから、遺構の正確な時期についても断定に至っていない。

中世前期の遺構は基本的に鋤溝群であり、当調査地が、当該時期において生産域として利用されていたことが理解できる。その他SK03、04からは須恵器壺や白磁が出土しており、同じく中世前期の遺構と考えられる。

以上のように、今回の調査では古墳時代前期以前と古墳時代後期の集落居住域、中世前期の集落生産域を確認しており、当遺跡における貴重な調査成果を追加できたものと考えられる。



19. 楠・荒田町遺跡 第40・41次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡の範囲は、現在のところ北限は中央区馬場町、南限は兵庫区西多聞通までの南北約1km、東西約900mの広範な遺跡であることが判明している。当遺跡は、六甲山系から派生する丘陵端部の段丘上に立地し、北限では標高28m、南限では標高7mであり、南北に狭小な神戸市の旧市街地の山手から浜手にかけて傾斜しており、六甲山系から派生した尾根と谷地形が幾筋も刻まれた起伏の多い地形となっている。

なお、今回の調査については平成19年度に『楠・荒田町遺跡第40・41次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig. 108
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

第40次調査

今回は隣接する地区において、ホテル建設に伴って第40次調査を、共同住宅建設に伴って第41次調査を、それぞれ実施した。両調査地は、当遺跡内の西端部付近に位置している。

調査は、工事計画の都合上2回に分けて実施し、それぞれ第40次-1、2調査と呼称する。また調査の便宜上、1～3区の小調査区名を付した。1、2区について第40次-1調査として実施し、3区について第40次-2調査として実施した。

基本層序

当調査地は後世の開発などで全体に搅乱が著しく、上層はほとんどが盛土や搅乱となっている。その下層には暗灰褐色細砂質シルトの遺物包含層、黄褐色極細砂シルトの遺構面基盤層が存在する。土層観察には、比較的土層堆積が良好に観察できる2区南壁を使用したが、1区では流路が大半を占めているために、安定した層序は観察できなかった。



fig. 109 調査区配置図

遺構

北部に安定した遺構面があり、南半は流路及び湿地としての不安定な地勢であった。

検出した遺構は人為的なものは少なく、小さなピットと不定形な土坑を極わずかに検出したのみであった。北部に一段高い遺構面上には幾筋もの蛇行する小さな雨水が流れた溝を検出し、南半分にある流路及び湿地に流れ込んでいる様相が見受けられる。流路（SR01）が座標軸のはば正確に東西方向に調査区を横断しており、この流路が北側の一段上がった安定した遺構面が存在する地点と不安定な地点との境界を画している。

遺物

出土遺物の大半は南側の流路もしくは湿地状になった地点で出土しているが、流路の堆積や湿地堆積が複数あり、時期により判別しながら各流路を調査することができなかった。北半の遺構面上では中世の須恵器椀なども出土しているが、SR01の肩部では古墳時代の小型丸底壺とともに弥生土器も多く出土している。周辺の状況からみて、古墳時代に弥生時代の遺構などを削って流されてきたものと考えられる。

弥生土器は、弥生時代前期末から中期初頭のものが大半を占め、他に同時期の土製円板や緑色片岩製石包丁未成品（1点）、サヌカイト製の石器類や剥片も多数出土している。最も古いものとしては、縄文時代晩期に属する波状口縁の破片が出土している。

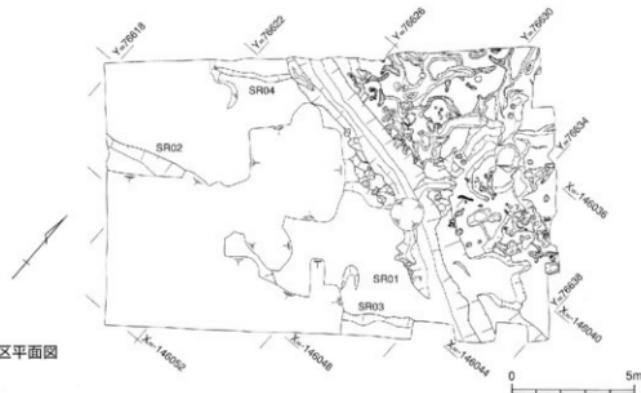


fig. 110 第40次調査区平面図

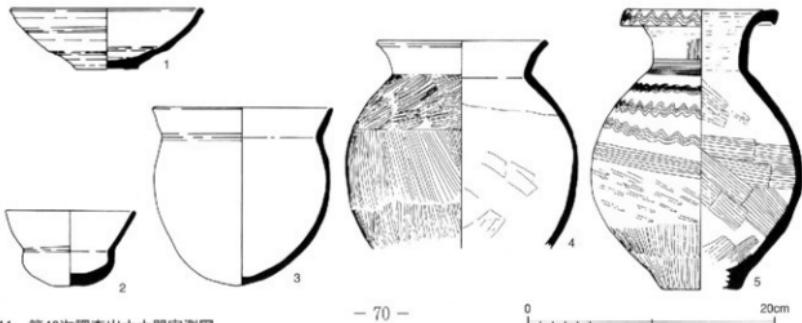


fig. 111 第40次調査出土土器実測図

第41次調査

今回の調査地は、第40次調査地の西隣りにあたる。調査の都合上、2回に分けて調査を実施した。

基本層序

調査区の北側は厚い盛土がされていたが、大半が擾乱である。南側の一段下がった地点は、旧耕土も残存しており、比較的良好な土層観察ができた。

上層より、盛土及び擾乱、旧耕土と堆積しており、その下層は砂質土層と砂層の互層となっており、流路内の堆積層となっている。調査区の南断面は流路のみの堆積であるのに対し、調査区の北壁には、擾乱直下に黄褐色極細砂シルトの造構面がわずかに観察できる。

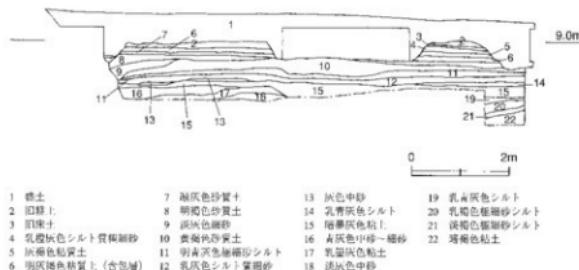


fig. 112

第41次調査区
土層断面図

造構

一段下がる南側の敷地は、黄褐色砂質上で比較的、調査当初は安定した面であったので精査をしたが、人為的な造構は見当たらなかった。その下層は、砂質土と砂層の互層となっており、各層から流れ堆積による遺物が出土した。当調査地の南側は流路及び湿地へと続く不安定な地勢であることが窺がえる。

調査区の北半、座標軸の西端からほぼ東西方向、調査区を斜め方向に横切るように3条の流路を検出した。この流路は第40次調査で検出した流路と同様の堆積をしており、北端の流路 S R01から北は一段高く、安定した造構面が存在している。しかし、從前建物の削平により造構面全体が削られており、造構などは検出していない。

遺物

出土した遺物は、南側の流路もしくは湿地状になった地点で出土している。南半部は前述したとおり、湿地状の堆積になっており、複雑な堆積になっていたため、堆積層を順に掘削しながらの調査ができなかった。しかしながら、湿地状堆積の上層には、古墳時代から平安時代末までの遺物が堆積しており、下層には弥生時代の遺物しか出土しない。北半の安定した造構面と段との境には集中して流路が3条検出されたが、流路内からは少量の弥生土器の小片が出土するのみであった。それらの流路の下層には段まで覆う大きな旧河道があり、その中間層より弥生時代中期初頭の土器が4点出土した。これらは、比較的近い位置で出土しており、小型の土器であることや表面が摩滅していないことから、出土地点近くの段上で水辺の祭祀が行われた可能性が考えられる。そのほかの遺物として、サヌカイト製の石礫、石錐、楔形石器が各1点出土した。また、未成品の石庵丁が2点出土している。

3. まとめ

今回の両調査地は、楠・荒田町遺跡の南西端にあたる地点に位置している。2次にわたる調査の結果、遺跡の周縁部には幾筋もの流路が流れながら、南に広がる湿地帯を徐々に埋めている過程を知る資料が得られた。また、縄文時代から中世に至るまで安定して集落が営まれている土地と、湿地とを隔てる上地の段差を検出した。これは、遺跡の範囲を規定する境ともなりうるもので、今後周辺の調査においては、この段差を境としてどのような集落の様相が展開されるのかという点について注意を要する。

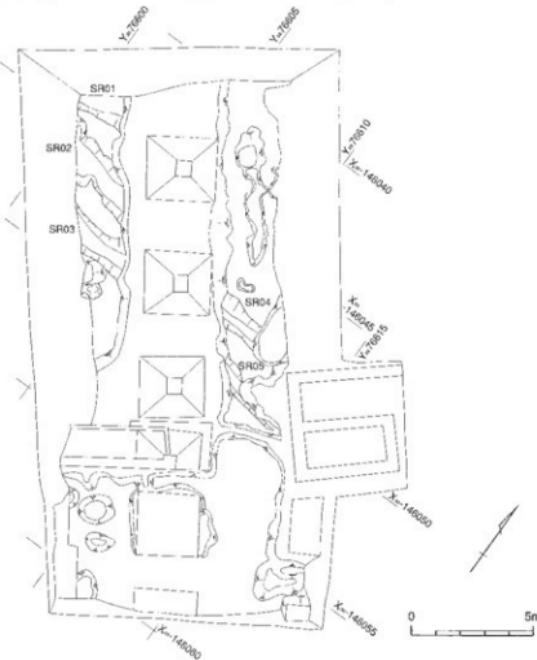


fig. 113
第41次調査区
平面図

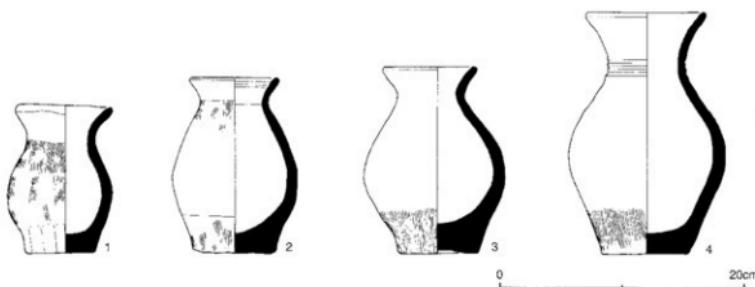


fig. 114 第41次調査出土土器審査図

20. 楠・荒田町遺跡 第42次調査

1.はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧淡川東岸の段丘上に位置する遺跡である。今回の調査地点である神戸大学医学部附属病院内においても、1981・1982年度に神戸大学によって、いわゆる「福原宮」(平氏別邸群)に関連した遺跡がはじめて確認された。その後は、兵庫県教育委員会によって、数次の調査が行なわれており、平安時代末以外にも、鎌倉時代、室町時代、古墳時代の遺構・遺物や、平安時代以降の掘立柱建物・溝・井戸などが確認されている。

fig. 115
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回は保育所建設による水道施設建設に伴い、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。

基本層序

上層より、層厚110cmの盛土の下に淡黄灰色粗砂（層厚15cm）が存在する。以下、淡褐色中～粗砂（層厚25cm）、褐色シルト混中～細砂（層厚20cm）で、いずれの層も平安時代から鎌倉時代の土器が含む遺物包含層となっている。

今回の調査は、以下の層について実施した。暗褐色砂混シルト（層厚10cm、下面が第1遺構面）、灰褐色砂混シルト（層厚20cm、下面が第2遺構面）と堆積している。第1遺構面は、奈良時代から平安時代にかけての時期であり、第2遺構面は古墳時代から奈良時代にかけての時期と考えられる。

第1遺構面

溝、ピットを検出した。

SD 101

幅50cm、深さ10cmで、北東から南西に流れる。この溝の方向は、以前に隣接地における調査で確認されている2重堀と方向が一致しており、平安時代のものと考えられる。ただし11世紀～12世紀にかけての遺物が出土しており、2重堀溝に先行するものと考えられる。

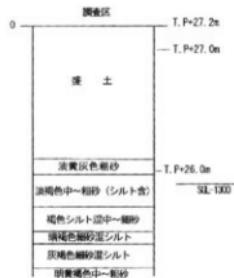


fig. 116
調査区土層断面模式図

ピット 一辺30cm前後の平面形が方形のものが中心であり、ピットの底には礎盤として、石を据えているものを確認している。ピット1の石の底には土器が出土しているが、時期としては7世紀代のもので、下層の遺構である溝の遺物が混入したものか、あるいは7世紀代の遺構なのか判断が困難な状況である。各ピットは建物としてはまとまらない。

第2遺構面 ピットと溝を確認している。

ピット いずれも直径20~30cmの円形で、7世紀から8世紀にかけての時期の遺構と考えられる。

SD201 深さ20cm程度で、幅は調査区外に延びるため不明である。出土遺物から、9世紀の遺構と考えられる。

SD202 幅80cm、深さ10cmを測る。出土遺物から、時期は7世紀の遺構と考えられる。

3.まとめ

第1遺構面で確認した溝並びにピットは平安時代のものである可能性が高いが、兵庫県教育委員会による調査で確認されている2重堀よりはやや先行する時期のものであると考えられ、今回の調査においては、「福原宮」関連の遺構は確認できていない。

第2遺構面では7世紀から9世紀の遺構を確認している。

いずれもこれまでの調査で確認されてはいるものの、その事例自体は少なく、貴重な成果を追加できたものといえよう。

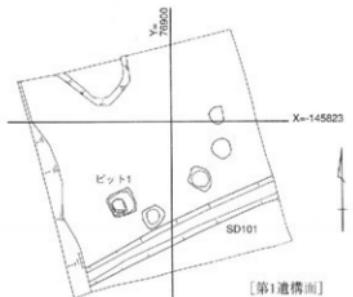


fig. 117 第1・2遺構面平面図



fig. 118 第1遺構面全景



fig. 119 第2遺構面全景

21. 兵庫津遺跡 第45次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区南部の海岸部を中心に広がる奈良時代から江戸時代にかけての遺跡である。昭和60年度以降、40数次にわたる発掘調査が実施され、特に近世町屋が確認されていることが特徴である。

なお、当調査については平成19年度に『兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

fig. 120
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。今回の調査地は、当遺跡北西部の寺院が多く存在する区域に位置しており、「攝州八部郡福原庄兵庫津繪図」(1696年)では龍昌寺あるいは範國寺の寺域に該当している。

調査は工事の都合上、2回に分けて実施した。I～IV区について先行して実施後、V・VI区について実施した。

基本層序

盛土・搅乱の下層、現地表下0.6～1.3mで、淡灰色砂質土～灰黄褐色砂質土を基盤とする第1遺構面を検出した。部分的に土間が見られ、墓壙、溝、ピットなど近世の遺構を検出している。その下層、現地表下約60～80cmで、褐灰色砂質土を基盤とする第2遺構面を検出した。土坑、溝、ピットなど近世の遺構を検出した。さらに現地表下約1～1.5mで、褐色砂を基盤とする第3遺構面を検出した。土坑、井戸、落ち込みなど中世の遺構を検出した。基盤層の砂は、古湊川によって運ばれ堆積した砂層と思われる。

なお、宝永の大火(1708年)による焼土層は調査地内では確認されなかった。

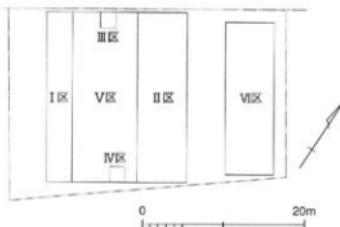


fig. 121 調査区配置図

- I区 第1遺構面で土坑、近世墓壙3基を、第2遺構面ではピット、土坑などを検出した。第3遺構面に相当する褐色砂上面では、遺構は確認していない。
- II区 第1遺構面では遺構は検出していない。第2遺構面で土坑、ピット、溝を検出し、また、第3遺構面では、土坑、ピット、溝などを検出した。
- III区 灰色砂質土や褐灰色砂質土の堆積は確認しているが、遺構は検出していない。
- IV区 土坑の南半分を検出した。さらに下層の現地表下約1.5mからは、土師器や瓦などを含む土層を確認した。これはV区のSK115に対応するものである。
- V区 第1遺構面で近世墓壙を20数基検出した。第2遺構面では南端でSK115を検出したが、上部は搅乱で削平されているため、第1遺構面の遺構である可能性も考えられる。第3遺構面では土坑、井戸などを検出した。時期は中世後半である。
- VI区 第1遺構面で土坑、ピット、溝、井戸などを検出した。ピットは約60基検出したが、建物の復元には至っていない。第2遺構面で建物、土坑、ピット、溝を検出した。第3遺構面では北半で落ち込みと、中央以南で土坑、溝を検出した。

3.まとめ

今回の調査では、近世墓を中心に、土坑や溝のほか、中世後半の井戸や土坑等を検出し、中世瓦や近世瓦・陶器・磁器・土師器・銅錢等のほか、下層では弥生上器も確認している。

当調査地は絵図に見られる龍昌寺の寺域に該当し、近世の町屋に伴う墓壙を30基確認した。墓壙は調査区の北西側に集中しており、ここに墓域が形成されている。墓列が確認でき、血縁関係が強いと思われるブロックも存在する。埋葬施設は、2基の陶器棺と1基の方形木棺以外は、円形木棺である。被葬者の年齢は、棺の規模と人骨の観察から、21基が成人と考えられる。また、性別が判明したのはいずれも成人骨で、男性7基、女性6基である。副葬品は銅錢、数珠玉、煙管、漆器、土製品で、14基から出土した。時期は18世紀から19世紀前半と考えられる。

中世では、石組井戸等から15世紀代と思われる瓦が出土しており、龍昌寺に先行する寺院のものである可能性がある。また、瓦当上面に「兵口〔庫カ〕」の線刻がみられる軒丸瓦が1点出土した。

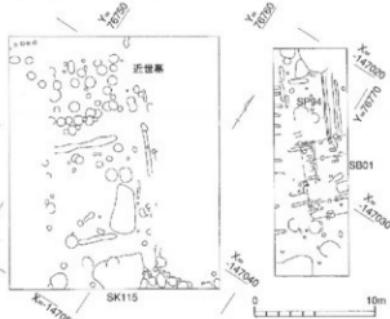


fig. 122 近世遺構配置図

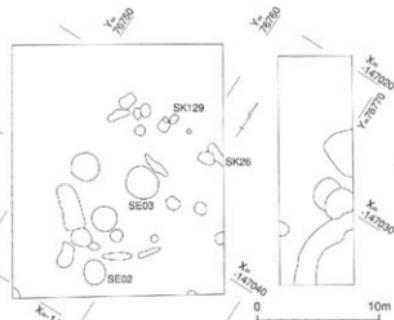


fig. 123 中世遺構配置図

22. 兵庫津遺跡 第46次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の南部、JR兵庫駅以東ほぼ全域を占める広範な遺跡である。瀬戸内海に突き出た和田岬によって波風を避ける天然の良港として古代より栄えた港湾都市遺跡である。近年の発掘調査により奈良時代の遺構や遺物も発見されているが、質量的に大半を占める遺構・遺物は近世以降の「兵庫津」関連のものである。

fig. 124

調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、病院施設のエレベーター設置に伴って実施したものである。通常の基礎よりも深くなるピット部分の狭小な範囲について実施した。

当調査地は、兵庫城が築かれた場所のうちに、尼崎藩兵庫陣屋、兵庫勤番所などに転用されてきた地点に隣接しており、「元禄兵庫津絵図」によると「御屋敷」と書かれた西側の堀または「同心ヤシキ」などの町屋跡に当たる地点である。なお、調査地は兵庫城に関連すると考えられる石垣を検出した第35次調査地の南西に隣接している。

基本層序

擾乱や整地層が多く、工事影響深度の大半は盛土や擾乱による土層である。上層より、盛土及び擾乱、暗黒灰色粘質土、淡黄灰色粘性砂質土、黒灰色粘質土、濁黃灰色粘性砂質土、黄灰色疊混砂質土、灰色粘性砂質土が堆積している。暗黒灰色粘質土に多くの近世の遺物、特に瓦が多く出土している。

遺構

工事影響範囲内では多くの近世遺物が出土している。北東隅において、工事影響深度附近で集石を検出したため、東に残していた掘り控えと法面を一部分拡張し、確認調査を行った。その結果、東側に面をもつ30cm前後の大きな石が2個並んで据えられており、先行して検出した集石は、その大きな石の裏込めの小石であることを確認した。東に並べられた大きな石は、角の取れた自然石であり、裏込めの小石は角のある石が使用されている。大きな石の上部でのレベルは、T.P.50cm程度である。

なお、検出された遺構は今回の工事影響よりも下層に存在するため、損壊保護のために工事影響高まで残土による埋め戻しを行い、現状保存を行っている。

3. まとめ

今回、検出した石列は、上下に組み上げられた石垣としての確認はできなかったが、裏込めが存在することから、石垣として利用されていたものと考えられる。第35次調査で確認された兵庫城の石垣とは石の形状が違うため、積極的に同一のものとはいえないが、第35次調査の石垣が東西方向であるのに対し、今回の石垣は南北方向であった。

各時代の古絵図から検出された石垣の部位を推定するには、古絵図の縮尺やどこを基準に置き換えるかで石垣の部位は変わるもの、元禄9年（1696年）に描かれた『揖州八部郡福原庄兵庫津絵図（元禄兵庫津絵図）』や寛政2年（1790年）の『兵庫津寺社方絵図』、安政4年（1857年）頃の『兵庫津絵図』に照らし合わせると、今回の石垣は南北方向の東に面を持つ石垣であることから、何度か規模を改変しながら兵庫城の跡地を利用した施設（陣屋や勤番所）の西側に巡らせていた堀や水路または、道路に伴う石垣と考えられる。また、多くの瓦や陶磁器を含む暗黒灰色粘質土は、これらの石垣遺構を埋め戻して整地した層に伴うものと考えられる。いずれにしても、今回の調査区は狭小であるため想定の域を出ない。今後の周辺調査の結果により、より詳細が判明するものと考えられる。

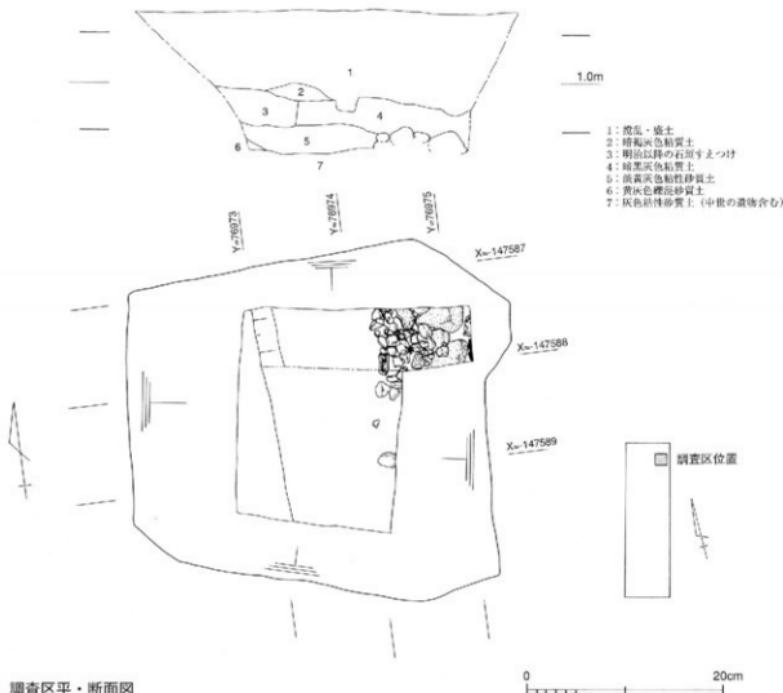


fig. 125 調査区平・断面図

23. 兵庫津遺跡 第47次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の海岸部に立地する古代から近世に及ぶ複合遺跡である。これまでの調査で中世後半から近世にかけての兵庫津の様子が次第に明らかになってきている。



fig. 126
調査地位置図
1: 2,500

2. 調査の概要

基本層序

今回は事務所の建設に伴い、その工事により影響を受ける部分について調査を実施した。上層より、第1層は層厚20~50cmの盛土・整地層で、第2層は昭和20年の空襲による焼土とその整地層である。整地層下に明治~大正の盛土が存在し、その下層に灰褐色~暗褐色砂層が広がり、概ね明治時代の遺物が多く出土している。この層の下面で第1遺構面を、さらに淡褐色砂層の下面で、第2遺構面を確認した。おおよそ江戸時代と考えられる。

今回検出できた中での最下層である黄灰色砂はすぐに湧水層となり、さらに下層についての確認作業は不能であった。この砂層内部には遺物を含まず、上面に部分的に存在する灰色シルト混砂に14世紀から15世紀後半にかけての遺物を含む。土器自体にはあまり摩滅の痕跡が見あたらぬため、近くに当該時期の遺跡が広がっている可能性も考えられる。

第1遺構面

遺物包含層の時期から、幕末~明治期と判断できる遺構面である。溝、石垣、井戸などを検出している。

1~6区

石垣・溝 わずかに基底部が残る石垣で、角張った石材を使用している。比較的新しい時期のものと考えられる。

S D01

幅70cmの南北方向に走る溝である。方向は現状の地割りより4度程度西に振っており、空襲後に地割りの方位が変更されたものと考えられる。またこの石垣と溝の区画は、東に隣接する寺院との隣地境界とも考えられ、明治期には寺域は現状に近い状態であったと考えられる。

道路状遺構

石垣と溝に区画された西側の3区にも溝（S D02）が確認されている。石垣とS D02の間には幅2.2mの空間があり、道路状の遺構と考えられる。なお、元禄時代の絵図と照らし合わせてもほぼこの位置に道路があったとされており、そのまま明治期まで、踏襲されていたと考えられる。また、S D02の西側にもう1条、溝（S D03）が確認されており、道路と屋敷地を区画する築地があった可能性がある。おそらくS D03より西側が屋敷地であったと考えられるがA区では土間を確認したもののほとんどが搅乱により失われていた。

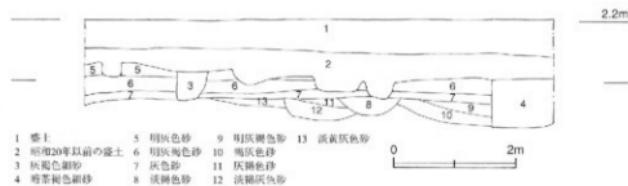


fig. 127
A区北壁
土層断面図

A区

井戸

掘形の直径が2mを測る井戸状遺構である。近代陶磁器が出上しており、明治時代のものと考えられる。

第1遺構面では、遺構との時期としては、おおむね明治から、幕末の時期と考えられるが、地割等はそのまま元禄時代の方位を踏襲していたものと考えられ、昭和20年の空襲のち地割が改変されたと考えられる。

第2遺構面

1区～6区では遺構は検出していない。A区で井戸を検出した。

A区

井戸

直径2mの素堀りの井戸で、湧水のため完掘できていない。出土遺物から、江戸時代のものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査で第1遺構面において幕末から明治にかけての石垣と溝等を検出した。

溝と石垣の検出により、寺域との境界を明らかにできたほか、絵図にみられる道路状遺構を確認したことは大きな成果である。また、築地塀の存在から西側にも幕末には町屋が広がっていたことも明らかとなった。また、15世紀後半以前にさかのぼる遺物も最下層の遺物包含層から出土しており、この辺にその時期の遺構が確認される可能性も十分考えられる。

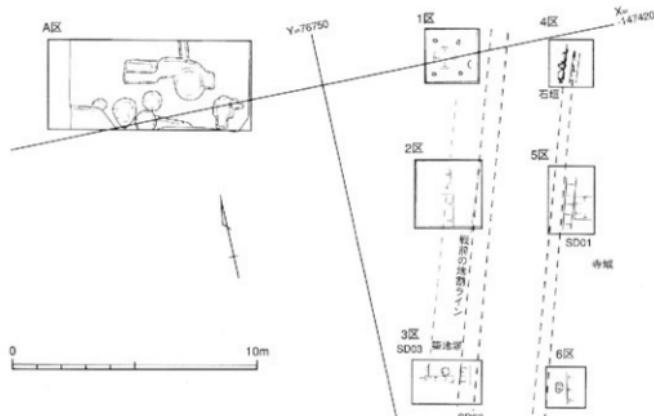


fig. 128
第1遺構面平面図

24. 塚本遺跡 第4次調査

1. はじめに

塚本遺跡は、旧湊川によって形成された沖積地上に立地する。この遺跡の発見は比較的新しく平成4年に共同住宅の建設に伴う試掘調査によって遺構・遺物が確認されたことによる。その後現在までに3次にわたる調査が実施されており、弥生時代前期や中期の土坑や溝等の遺構をはじめとして、中世の馬の埋葬遺構や粘土採掘坑など興味深い遺構が確認されている。

また周辺には、すぐ北東に隣接して弥生時代前期の環濠集落が発見された大開遺跡や、北西には中世の遺跡である水木遺跡などが存在している。



fig. 129

調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査地は、従前の建物により大きく擾乱されている。表層のアスファルトを含め約1mの厚い盛土の下に10cm程度の旧耕土がみられる。これ以下も中世の遺物をわずかに含む旧耕土状の土が4層、数cm~10cmの層厚で水平に堆積し暗灰褐色粘土・灰茶色粘土を基盤とする遺構面となる。

調査区の南部において、土坑2基と落ち込みを検出している。



fig. 130 調査区土層断面図

S K01・02 S K01は75cm×65cm、深さ12cm、S K02は50cm×40cm、深さ10cmの不定形の土坑である。遺物は出土しなかった。

落ち込み 調査区の南端部分で検出された北に向かって砂が堆積する深さ10cmの落ち込みである。

湿地状堆積 さらに、下層についてトレンチ調査を実施した。北西方向に軽く落ちてゆく湿地状の堆積が認められれば完形の瓦器碗2個と半分ほどの須恵器碗が出土した。これらの遺物は、いずれも12世紀末から13世紀前半にかけてのものである。

3.まとめ

塙本遺跡は、今まで調査例が比較的少なく遺跡の実態が不明な部分が多い。今回の調査地のすぐ南に隣接する部分である第1次調査においては、中世と弥生時代の遺構面が確認され、弥生時代の流路状の遺構からは、多くの弥生土器も出土している。

今回の調査においては、明確な遺構は南側3分の1ほどしか確認されず北に向かって湿地状の粘土の堆積がみられる。さらに道路を挟んだ北側の敷地からは遺構・遺物などは確認されておらず、おそらく本調査区は遺跡の縁辺部にあたるものと考えられる。

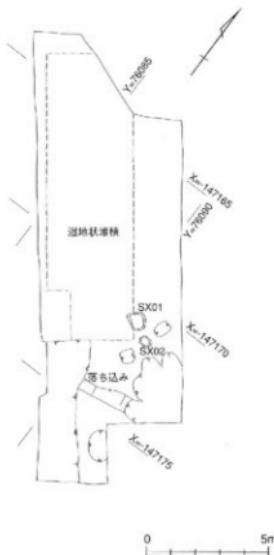


fig. 131 調査区平面図



fig. 132
調査区全景

25. 上沢遺跡 第55次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、会下山による小丘陵の裾部に形成された扇状地に立地している。縄文時代晩期から遺物が出土しており、弥生時代前期～鎌倉時代には集落等も確認されている。また奈良時代には井戸から銅鏡が出土するなど官衙関連施設の存在も想定されている。

なお、今回の調査については平成20年度に『上沢遺跡第55次調査発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig. 133
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回は共同住宅の建設に伴って、工事の影響を受ける部分について調査を実施した。

基本層序

上層より、搅乱、淡黄灰褐色砂質土、淡灰色砂質土、灰色砂質土、(中世の遺物を含む、下面が第1遺構面)、暗灰色疊混じり砂質土(古墳時代中期～平安時代頃の遺物を含む、下面が第2遺構面)、暗灰色砂質土(庄内式終末期～布留式期の遺物を含む、下面が第3遺構面)、淡黄褐色砂質土となる。

第1遺構面

中世の遺構面と考えられる。井戸1基、溝2条、木棺墓1基、流路1条を検出している。直径1.4m、深さ1.6mを測る素掘りの井戸で、14世紀代のものと考えられる。

S E101

調査区の北部で、北東から南西に走り、幅1.3m、深さ40cmを測る溝である。青磁などが出土しており、13世紀代のものと考えられる。坪境溝であった可能性が高い。

S D101

調査区の西半部で、東西方向に走り、幅5.0m、深さ1.2mを測る流路である。流路の護岸状の盛土内からは14世紀代の遺物が出土している。

S R101

長辺1.68m、幅は北側で48cm、南側で42cmを測る。棺の北部にて土師器皿・椀を多数確認した。棺上に置かれていたものが棺の腐食とともに崩落したものと考えられる。棺は、木棺の蓋並びに棺の側板、底板の一部が確認している。底には棺の底板を補強するような算木状の木材が横方向に使用されていた。掘形は長辺2.1m、幅0.71mを測る。棺の形状並びに土器の出土状況から、頭位は北と考えられる。12世紀前半のものと考えられる。

第2遺構面

古墳時代中期～平安時代前半頃と考えられる遺構面で、溝・土坑墓1基、ピット多数を検出している。

- 第3造構面** 弥生時代後期～古墳時代前期の造構面で、溝10条、土坑2基、ピット多数を検出している。
- S D301 北から、南東へ緩やかに弧を描くように走り、幅80cm、深さ40cmを測る溝である。多量の遺物が出土しており、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭のものと考えられる。
- S D302 北から、南西へ緩やかに弧を描くように走り、幅40cm、深さ30cmを測る溝である。
- S D303 北から、東へ緩やかに弧を描くように走り、幅70cm、深さ30cmを測る溝である。
- S D304 西から、南東へ緩やかに弧を描くように走り、幅40cm、深さ30cmを測る溝である。
- S D305 北西から、南東へ走り、幅50cm、深さ20cmを測る溝である。
- S D306 北西から、南西へ走り、幅60cm、深さ40cmを測る溝である。
- S D307 北東から、南西へ緩やかに弧を描くように走り、幅40cm、深さ45cmを測る溝である。
- S K304 調査区東端に位置する幅80cm、深さ40cmを測る土坑である。鉄鎌など出土している
- 3.まとめ**
- 今回の調査では第1造構面（中世）、第2造構面（古墳時代中期～平安時代前半頃）、第3造構面（弥生時代後期～古墳時代前期）、でそれぞれ造構と遺物を確認している。
- 遺物はその大半が弥生時代後期～古墳時代前期の土器である。
- ピットは多数検出しているが、建物としてのまとめは現時点では明確にできていない。
- ただ、少なくとも、古墳時代初頭から平安時代にかけて、この周辺は集落を形成していたと考えられ、木棺墓が築かれる12世紀後半頃には集落から水田域としての利用が多くなるようで集落としては衰退していくものと考えられる。
- 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭にかけての遺物が多量に出土しており、この時期にも集落が存在していた可能性があるが、中世以降の削平によるためか、住居等の建物は確認できていない。

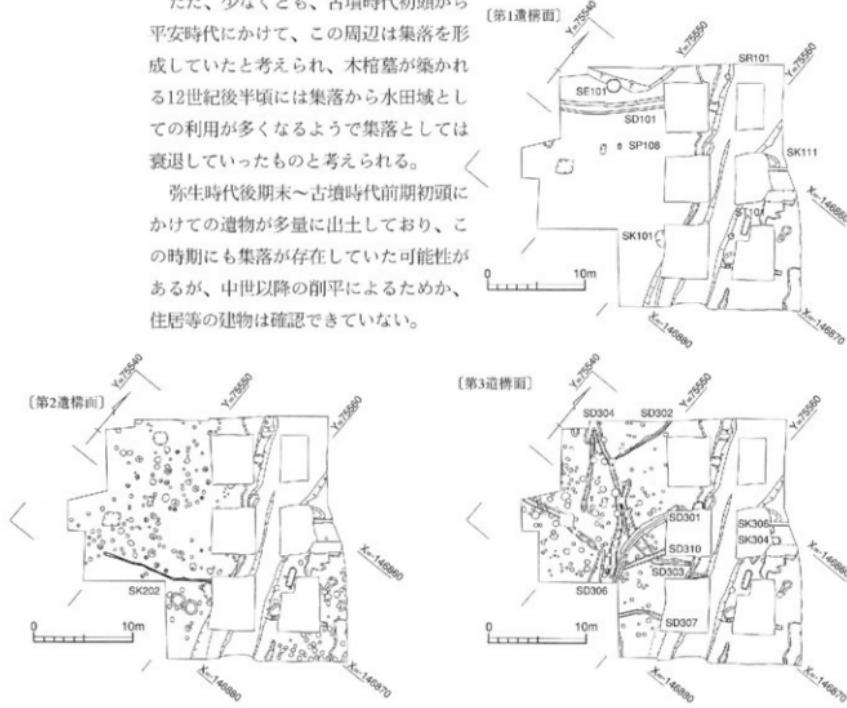


fig. 134 第1～3造構面平面図

26. 日下部遺跡・中遺跡

1. はじめに

日下部遺跡、中遺跡は北区道場町、八多町に所在する遺跡で、有馬川の支流である八多川により形成された河岸段丘及び沖積地上に立地、展開する集落跡である。これまでの調査では、ともに弥生時代～中世の遺構・遺物が確認されている。

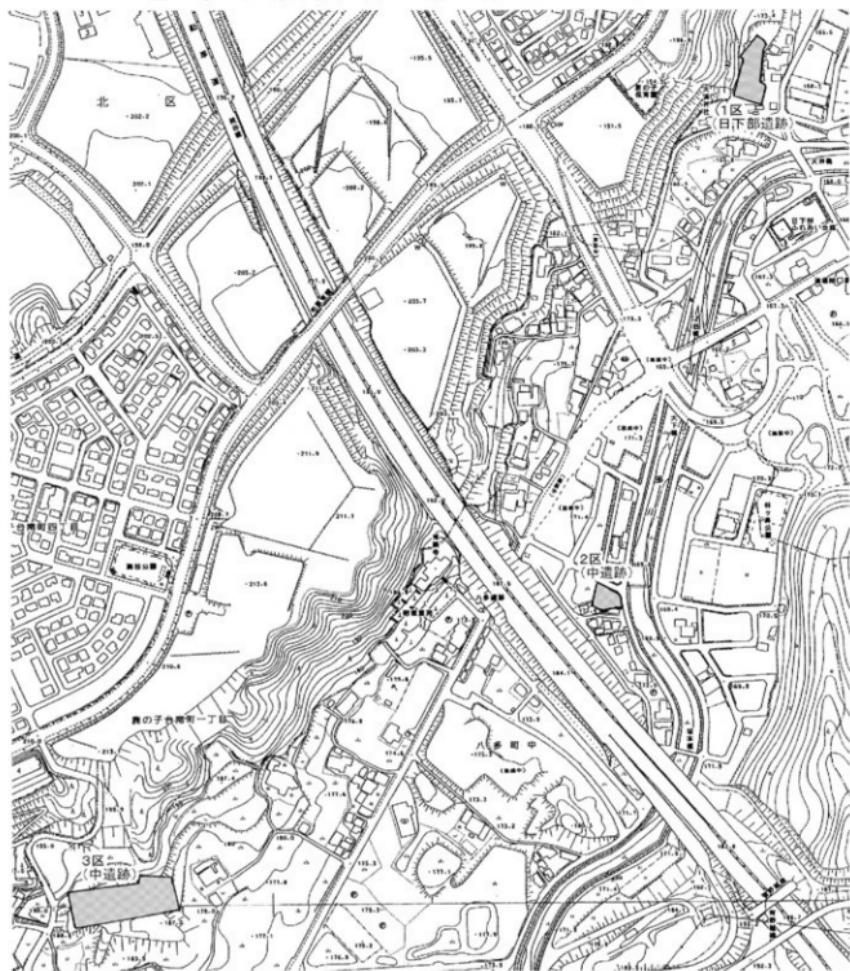


fig. 135 調査地位置図 1:5,000

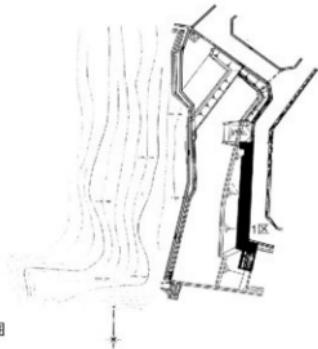


fig. 136
1区調査範囲
位置図

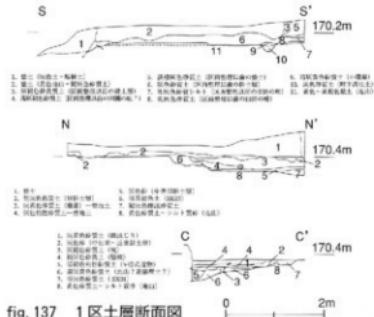


fig. 137 1区土層断面図

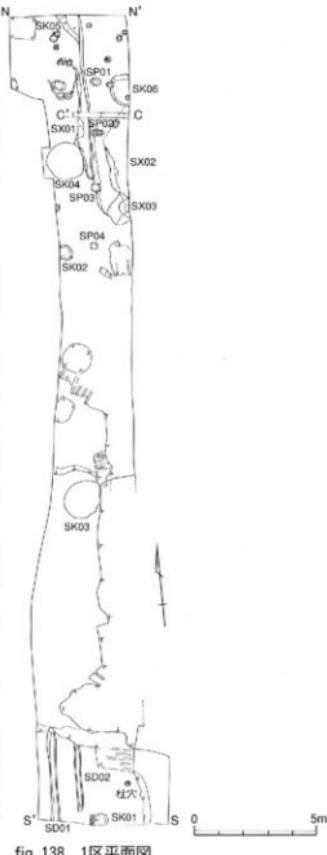


fig. 138 1区平面図

2. 調査の概要 今回の調査は、土地区画整理事業地内における整地工事、街区整備工事に伴うもので、工事によって影響を受ける地区について調査を実施した。調査地は3地点で、日下部遺跡内で1地点（1区）、中遺跡の範囲内で2地点（2、3区）を対象とした。

1区

基本層序

調査地は八多川左岸、北側の現鹿の子台の丘陵に接する段丘上に位置する。大半が表土、盛土直下で地山となり、近世の段階までに激しく削平された状況にあった。調査区の北端に近い部分では東に向かい地山面がやや下がり地形を呈する状況を確認し、地山面の直上に遺物包含層と考えられる土層の堆積も認められたが、近世段階にはこの部分も水田耕作時の地形変更が著しいことが想像される。

調査の結果、近世の溝2条、土坑4基、柱穴1基、北側の地山面で中世の土坑2基、弥生時代末頃と考えられる落ち込み1基と柱穴を検出した。

S D01

幅約40cm、深さ約15cm、調査区内の検出長は約4.8mである。陶磁器や瓦が出土した。

S D02

S D01に並行する溝で、幅約30cm、深さ10cm、検出長約2.5mである。調査区南壁での観察結果より、両溝間に畦で畦下の溝となる可能性が高い。近世の造構である。

- S K01** 平面長方形の土坑で長辺約70cm、短辺約40cm、深さ約20cmで、近世の陶磁器、寛永通宝の他、2ヶ所に径約1.0cmの穿孔をもつ木製品が出土している。
- S K02** 調査区中央西壁沿いで検出した土坑である。一辺が50～60cmの平面形が方形あるいは長方形の土坑かと思われる。深さはわずかに10cmしか遺存しない。拳大より一回り小振りの礫を充填しており、礫の隙間から中世の須恵器と近世の平瓦が出土した。
- S K03** 径約1.5mを測る平面形がやや歪な円形を呈する土坑で、人頭大からさらに大ぶりの石や珪化木を3～5段積み上げて壁とする遺構である。深さは約60cmである。近世の棟瓦、軒丸瓦、平瓦の他、陶磁器が出土しており、近世の水溜め状の遺構と考えられる。
- S K04** 平面形が歪な円形を呈する土坑で、直径は約1.5mを測る。深さは20cmのみ遺存している。S K03同様石積みがあったようだが、今回検出したのは最下段の一段のみである。土坑底には幅10cm、厚さ1cm程度に加工した板材を敷き詰めており、板材の一部は原位置を保つと推定できる石の下にあることから、板材をある程度配した後石を積み上げていったものかと考えられる。陶磁器、瓦片が出土しており、S K03同様近世の水溜め状の遺構と考えられる。
- S K05** 調査区の北端で検出した深さ約15cmの土坑である。調査区外に延び、また近世に水田を造成時の削平を受けているため全体の規模は不明である。中世の須恵器片が出土している。
- S K06** 調査区北半東壁際で検出した土坑である。径1.2m程度の円形を呈するものと考えられる。出土遺物は弥生土器と考えられる破片の割合が多いが、わずかに中世の須恵器が出土しており、中世の遺構である。
- S X01** 近世の耕地造成の際に大部分が削られたと考えられ、詳細は不明である。一辺4m前後の落ち込みになるとされる。弥生土器と考えられる細片が出土した。
- S X02** 調査区内での最大幅約4mの東に下がる落ち込みである。非常に微細な弥生土器が多く含み、非常に固く締まった埋土である。肩部から弥生時代後期の高坏の脚部が出土した。
- S X03** S X02内の調査区東壁際で検出した幅約1mの落ち込みである。弥生時代後期の高坏の脚部が出土したが、埋土には二次堆積的な要素も認められる。

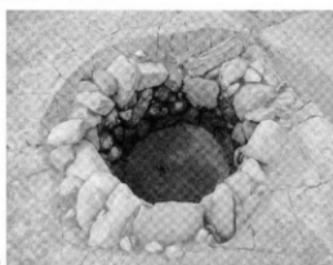
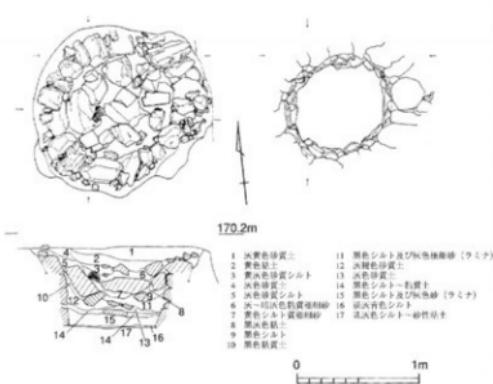


fig. 140 SK03全景

fig. 139
SK03平・断面図

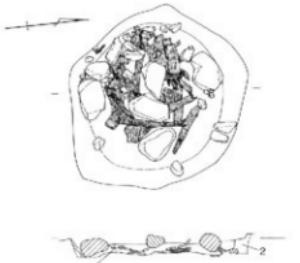


fig. 141
S K04
平・断面図



fig. 142 S K04全景

柱穴

調査区北側を中心に柱穴を十数基検出した。いずれも遺物が少なく時期については不明な点が多いが、中世、古墳時代、弥生時代の各時代のものが存在するものと思われる。

Pit 10は径約25cm、深さ約30cmで、須恵器片が出上り、底部で礎盤を検出した。またS P 01～S P 04は約2m間隔で南北に並ぶ柱列である。S P 02では柱の抜き取りに伴い掘形が崩れ、瓢形になっていた。短径30cm、長径50cmで、深さは最深部で30cmである。兵庫県教育委員会による東側の街路部分での調査において並行する柱列が検出されているが時期は明確でなかった。今回はS P 02より古墳時代後期の須恵器片が出土しているが、柱間の間隔などから直接、建物の時期を決定するものか疑問が残る。

小結

近世以降の耕作に伴う地形変化が著しく、大半が既に地山が削られた状況にあったが、調査区の北側で遺構の集中する部分を確認した。S X02では遺構底の地山面は傾斜地形となってはいるものの、土器が含まれる中間の堆積層は水平で、また固く締まった状態にあったことから住居址などの遺構の一部と考え精査を行ったが、今回の調査では明確な根拠を見出せなかった。結果的には県教委の調査で検出された谷状地形の続きであった可能性が高いものと判断される。



fig. 143
1区全景

2区

八多川左岸、八多川と中国縦貫道とが交差する地点の北側に位置する。擁壁工事とともに切上が発生するため全面調査を実施した。調査区内に旧耕土などは遺存せず、表土の直下が八多川の氾濫原を示す疊層及びその上に堆積した黄色シルトの地山面となり、遺構の検出作業を行った。調査区中央では削平により遺構面が失われていた。

溝3条、柱穴9基を検出した。

S D01 溝としての機能を持つものかどうか判断に苦しむ遺構であるが、調査区中央北よりで長さ約1.5m、幅約0.3mの浅い溝状の遺構を検出した。中央部が円形に一段深くなつており、最深部は深さ約15cmである。埋土は灰色砂で一段深い部分にのみ灰色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

S D02 調査区南端で検出した溝で、幅約0.4m、検出長約1.5m、深さはわずかに5cmが残る状況である。埋土は暗灰色粘質土で土師器と考えられる極小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

S D03 S D02の南で検出した。S D02よりもさらに残りは悪く、長さ約50cmを検出したに過ぎない。埋土はS D02同様に暗灰色粘質土で、遺物は出土していない。

柱穴 径約15~30cm、深さ20cm前後のもので、一部は杭と考えられる。(暗)灰色シルトや同系色の粘質土の單一埋土の遺構が大半であるが、Pit05では柱痕跡と考えられる変色部が認められた。いずれも遺物は出土しておらず、時期については不明である。

小結

調査区の大半が搅乱により失われていたため検出した遺構は少なかったが、中世の遺構を確認していることから当該地周辺では八多川の流れに大きな変化はないことが判明した。



fig. 144 2区平面図

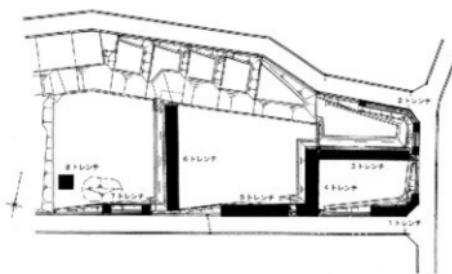


fig. 145
3区トレンチ
配置図

3区 県道三木三田線と山陽道の交差する北側の段丘上に立地する調査地である。擁壁部分と一部の切上部分を対象として調査を実施した。調査地の現状は、大きさは4段のひな壇状の耕作地となっており、計画では北側の上段を除く、下3段の各区画裾部に擁壁が入る。調査範囲を便宜的に1~8トレンチとして調査を実施した。

- 1 トレンチ 調査地の南東隅部にあたるL字形の調査区である。黄色シルトの地山上に灰色粘質土の旧耕土が存在し、中世の遺物のみが出土したが、遺構は半裁した竹を底部や壁に敷き並べた暗渠と考えられる溝と杭1基、鋤溝痕跡のみで、遺構出土のわずかな遺物はいずれも近世以降のものであり、後世の影響が大きい。
- 2 トレンチ 盛土が厚く、今回の調査影響範囲では文化財への影響がないものと判断されたが、状況確認のため3ヶ所にテストピットを設けて状況を確認した。
- T.P.1 2m程度掘削を行ったが依然として盛土が続き、下部の状況は不明である。
- T.P.2 調査区北東隅部に設けた。現況地盤下1.5mで耕土を確認し、その下層で灰色の軟弱なシルトを確認した。現況地盤下1.8mで周辺における遺構検出面と同様の灰黄色シルトとなるが遺構・遺物は確認されず、地盤は安定しない。
- T.P.3 1・2トレンチの交点部に設けた。東への下がり地形が確認したが、安定しない地盤が続き、遺物も出土していない。ここから3トレンチにかけては上がり地形となる。

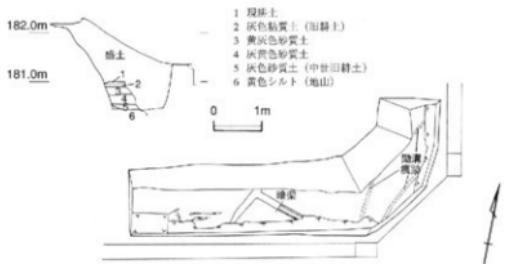


fig. 146
3区1トレンチ
平・断面図

- 3 レンチ** 幅約3m、長さ約26mのレンチで、西側で南側に直交する4レンチと接する。3レンチ部分は北側から南への水田の畦上下の段差部分に相当し、地形の変化が著しい。上方の水田では削平が進み、盛土下で疊層の露呈する地山となり、遺構、遺物は確認されなかった。下段の水田部分では旧耕土から中世の須恵器、土師器の他、青磁・白磁の出土もあったが、遺構は幅40~70cm、深さ約20cm、検出長約2.2mの灰色砂質土の埋土の溝SD01の1条と、深さ約20cm、深さ10cmの杭を確認したに止まった。
- 4 レンチ** 幅約4m、長さ約18mのレンチで、盛上、耕土下に旧耕土が堆積し、中世の須恵器、土師器が出土した。やはり水田造成時に大きく地形が変化されて、南から北への大きな段落ちを形成する。北側上段で溝1条と不定形な筋状の遺構、南側下段で土坑1基と柱穴2基を検出した。
- SD02** 幅0.6~1.0m、検出長約2.5m、深さ10cmの浅い遺構である。埋土は灰色砂質土で、小片の須恵器、土師器片が出土した。
- SK01** 長辺約0.8m、短辺約0.5m、平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。深さは約15cmで、上層に褐色砂、土坑底に灰色砂質土がいずれも薄くレンズ状に堆積する。拳大程度の礫が数個含まれるのみで、遺物は出土していない。
- 柱穴** Pit02、03とも径約20cm、深さは僅かに5~10cmが遺存していたに過ぎない。埋土は（褐）灰色のやや粘性のある砂質土である。Pit02から須恵器片が2点出土した。
- SX01** 幅5~10cm、一部に約15cmの幅広の部分をもつ灰色シルトが筋状に広がる様子が確認された。形状より木の根の痕跡と考えられる。筋の断面はV字形、またはU字形で深さは10cm程度と風倒木検出時に見られるような底部が検出されない状況ではない。埋土中から中世の須恵器、土師器片が数点出土したが、直接的には時期を反映しないものであろう。

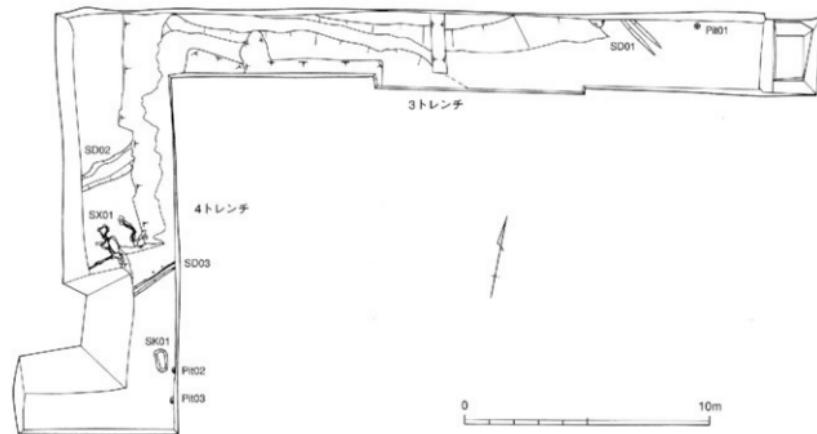


fig. 147 3区3・4レンチ平面図

- 5 トレンチ** 南側街路に接する調査区である。盛土、耕土下に複数の旧耕土が存在し、遺構検出面直上の灰色シルトの旧耕土から中世の須恵器、土師器が出土した。溝2条、土坑1基、柱穴5基を検出した。
- S D01** 西端で検出した溝で、幅40cm、検出長80cmで、深さは10cmが遺存していたに過ぎない。中世の遺物を含む旧耕土の上から切り込んでおり、位置的に近世以降に形成された水田の段下にあたる。中世の須恵器片が2点出土したが、混入の可能性が高い。
- S D02** 調査区中央は凹地となり、埋没谷が存在するものと判断される。S D02は谷の最終埋土が溝状に検出されたものと考えられ、幅80cm、深さは約50cmである。溝の壁面や調査区北壁沿いで一部断ち割りを実施した結果から、西側では黄色シルトの安定した地盤が認められるが、溝の東側では疊層や砂層がさらに下がり地形を形成することが確認された。調査区の東半の遺構面も疊を多く含む層で、中世以前、谷はさらに東に拡がっていたものと推測される。溝とした部分からは中世の須恵器片がわずかに出土したのみである。
- S K01** 調査区東半、南壁際で検出した平面は円形を呈するものと考えられるが、調査区外に延びるため詳細は不明である。径約1.0m、深さ約30cmで、灰色系のシルトや砂層の流入が認められる。底に拳大の礫があるだけで遺物は出土していない。
- 柱穴** S D02の東側で4基、西側で2基検出した。Pit01～03は1m間隔で並ぶように検出したが深さはいずれも10cm前後であり、判然としない。Pit05・06は地山面で確認したもので、他のPitと同様に浅く、遺物も出土していないため、詳細は不明である。

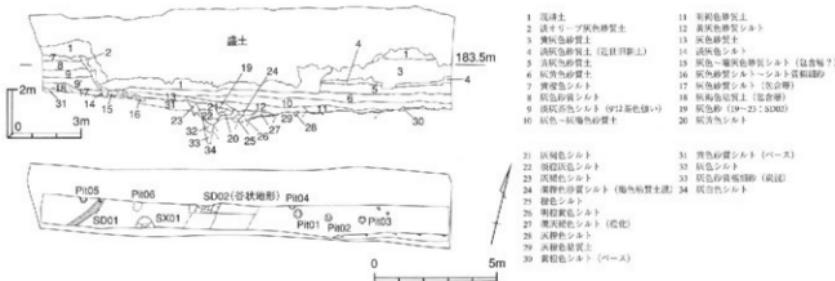


fig. 148 3区5トレンチ平・断面図



fig. 149
3区5トレンチ
全景

6 トレンチ

幅18m、長さ27mの南北トレンチである。区画整理以前には段丘の形状に合わせて3段の圃場となっていたが、今回の調査地最上段の高さに合わせて盛土が施されている。盛土下に旧耕土が存在し、圃場の整形に伴い大きく段が形成される。標高184m付近で中世段階の旧耕土があり、その下層が地山面で造構面が形成される。地山面は基本的にトレンチの中央を境に南北両方向へ下がり地形を呈する。中央地山面で近世の造構を、南側では中世の溝2条、ピット3基を検出した。北側では植物遺体の堆積する湿地状の堆積であるSX01を確認し、その下層は疊層である。疊層の下は常時水を含むような灰青色の砂質シルトと疊層の互層となっており、谷はさらに深く下層に及ぶものと推測される。

SD01

幅約0.5m、検出長約6m、深さ約20cmの南北方向の溝である。北西から南東へ下がり地形となった傾斜変換点の下部に位置する。区画整理以前の現圃場の畦下に位置するが、調査区内の中世旧耕土の堆積状況や溝からの出土遺物、灰色シルトを基調とする造構の埋土の状況から中世の造構と判断される。

SD02

幅約1m、検出長約5m、深さ約20cm、SD01の約4m南東に並行して掘削された溝で傾斜変換点の上部に位置する。この溝から東には厚いシルトの堆積が続き、傾斜が強くなつた南東隅部では疊の堆積が確認された。溝やその東の下がり地形の堆積層中から中世の須恵器、土師器が出土しており、溝内からは13世紀前半の須恵器碗が2個出土した。

SK01

調査区中央で検出した不定形な土坑である。円形部分の直径約1.0m、深さ約0.2mで、灰色系のシルトや砂質土中に褐色の砂礫が混入する。近世の陶磁器が出土した。

周辺には同じく不整形な浅い落ち込みがあり、南北方向に乱杭がある。近世段階の水田の畦下にあたる。

SX01

中央地山面から北側への傾斜地形で、灰色シルト、黒灰色シルト、オリーブ灰色シルトや砂層が堆積する。上層からは中世の遺物が出土し、検出面から約2m下に堆積する植物遺体層の直上付近で平安時代前期頃の土器が比較的まとまって出土した。植物遺体層以下は疊が厚く堆積し、最深部までは約2.5mである。造構の肩部から木の根が立ち枯れた状態のままで検出された。造構の延長には現況でも丘陵方向に切り込む谷状地形が認められる。

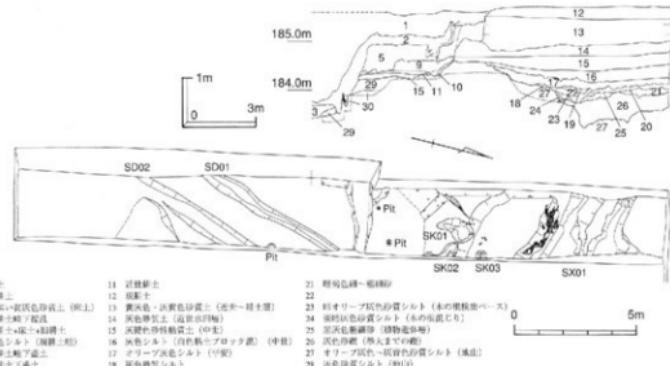


fig. 150
3区6トレンチ
平・断面図

7 レンチ 調査地最高位の圃場面の調査区である。影響範囲について重機により掘削を開始したが影響範囲内では文化財の存在は確認されず、遺構面などはさらに深い位置に存在すると判断されたため、調査区の両端2ヶ所で状況確認のためにテストピットを設けた。

T.P.1 東側のテストピットで現況地盤から2m下がりで区画整理以前の耕土を確認し、その下で灰色シルト、黄灰色シルトを確認したが、遺物・遺構は確認されず、地盤も安定しているとは言い難い状況であった。

T.P.2 西側もT.P.1同様、遺構検出面と考えられる黄灰色シルト上面は安定した地盤ではなく、南側へ大きく落ち込む地形を確認したに過ぎない。

8 レンチ 7 レンチの位置する圃場の切土部分に設定した調査区である。7 レンチの状況から下がり地形が確認されると想定したが、現表土から0.2m下がりでほぼ地山となる状況を確認した。間に炭の混じるにぼい灰色を呈する粘土層があるが、土の状況から比較的新しい耕土と判断される。7 レンチのT.P.2と8 レンチは近接するが状況は全く異なっており、間で大きな段が形成されるものと想像される。

小結 段丘高位にあたり、遺構・遺物が希薄になると思われたが、平安時代～中世の土地利用の痕跡を確認した。中世までに段丘の高位部分、丘陵裾部まで耕地化が進められており、基本的には耕作地として土地は利用されるが、圃場区画などの形状変更に伴い大きく地形が改変されている。今回の谷状地形などのように大きく落ち込んだ遺構や自然地形が付近に存在する可能性があるが、現状ではその判断が困難である。

3.まとめ 日下部遺跡、中遺跡においては、遺構の検出される地区にはらつきがあり、段丘上でもその立地が限定されるようである。今回の3地点の調査地周辺では兵庫県教育委員会による街路部分での調査が実施されており、その結果はいずれも遺物・遺構の検出が希薄となる状況にあった。今回の調査でも集中して遺物・遺構が多量に出土するということはなかったが、少なからず文化財の存在を確認し、遺跡の広がりを把握できた。後世の水田耕作などによる地形改変が大きかったが、日下部遺跡内の1区では、先の兵庫県教育委員会の調査で検出された掘立柱建物に対応する柱列を検出するなど一定の成果があった。中遺跡内の3区では段丘高位に位置する埋没谷から平安時代前期の遺物が比較的まとまって出土しており、段丘高位や奥部への遺跡の拡がりを考える上で興味深い資料が得られた。集落などの広がりは現状で予測しがたいが、付近に何らかの遺構があった可能性が考えられる。



fig. 151 3区6レンチ北半全景



fig. 152 3区6レンチ南半全景

27. 長田神社境内遺跡 第16次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、六甲山系南麓の西端に位置し、茹屋川の形成した標高14m付近の扇状地に立地している。

これまでの調査では、縄文時代晚期から中世にかけての遺構を確認している。特に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居等を多数検出しており、中には大型の住居も含まれていることから当該時期の中核遺跡と考えられる。



2. 調査の概要

基本層序

今回は個人住宅建設に伴い、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。

ほとんど盛土が存在せず、市街地では珍しく近現代の水田層が30cm程度堆積している。その下層に13世紀から15世紀にかけての水田層並びに床上が10cm程度存在しており、その下層に暗灰褐色細砂混シルトの庄内並行期の土器を含む遺物包含層が堆積している。その下面が遺構面基盤層である。

遺構と遺物

ビット、溝等の遺構を検出した。

ビット

調査区全面においてビットを確認した。いずれも上面が削平を受けているためか深さ10cm前後の浅い落ち込み状の中にビット状のくぼみを持つものがほとんどである。P4においては、直径20cm、深さ50cmを測る柱痕跡を確認したが、柱を抜き取るための掘り込みも断面観察によって確認している。このことから、浅いビットの上層の堆積が柱を抜き取るための掘り込み後の堆積である可能性が考えられ、今回の調査区において確認したビット状の遺構については柱を再利用のために抜き取った痕跡である可能性が考えられる。

S D01

調査区中央付近において検出した、北東から南東方向に走る、幅50cm、深さ45cmを測る断面U字形を呈する溝である。溝内からは弥生時代後期の甕4点、小型の台付甕1点、有稜高杯1点、庄内型甕1点を含む7点以上の土器が投棄された状態で出土している。出土土器はほぼ完形に近い状態であり、溝に近い場所から持ち込まれ投棄されたと考えられる。土器の時期は、庄内併行期新段階と考えられ、今回の調査における遺構の時期をおおよそ示していると考えられる。

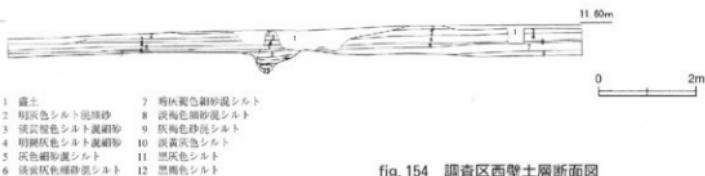


fig. 154 調査区西壁土層断面図

3.まとめ

今回の調査では、庄内併行期新段階と考えられるピット・溝を確認した。特に溝から出土した土器は、当該期における土器編年において基準的な資料のひとつと考えられ、周辺地域における弥生時代から古墳時代へと移行していく流れを考えていく上で、貴重な調査成果を得ることができたといえよう。

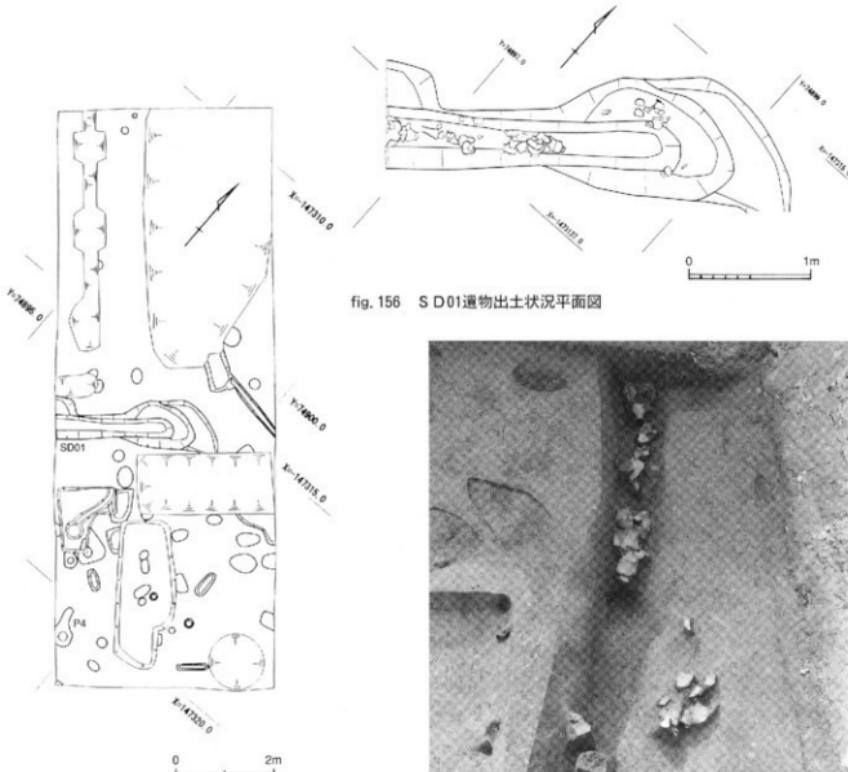
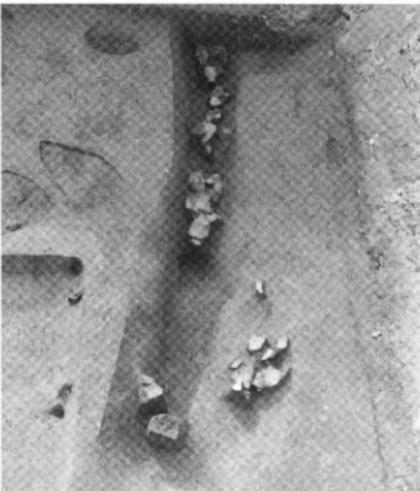


fig. 155 調査区平面図

fig. 156 S D 01遺物出土状況



28. 長田神社境内遺跡 第17次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、六甲山系から流出する茹藻川によって形成された沖積地上に立地する遺跡である。これまでに16次に及ぶ発掘調査が実施され、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

なお、今回の調査については平成20年度に『長田神社境内遺跡第17次調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅の建設に伴って実施した。今回の調査地は、南側が市道を挟み第5次調査地、西側は市道長田線を挟んで、第6・8次調査地と隣接する。

基本層序

調査地は基本的に北から南へと落ちる斜面地で、西側へも高くなる。南側では緩斜面地となっている。上層より、整地層、盛土層下に複数の旧耕土・床土が存在する。この下層で中世の遺物包含層である茶褐灰色シルト、褐灰色シルトを検出したが、調査区の南端部のみ存在する。この遺物包含層の下層の淡黄褐色シルト上面で遺構を検出した。なお、調査区北側では旧耕土の直下に淡黄褐色シルトを検出した。

遺構

調査地の東半部では多くの土坑、落ち込み、ピットを検出した。西半部は北から南へと開く谷状地形で、テラス状部分でピット、土坑を検出した他最深部で2条の谷を検出した。

SK06

東半部で検出した長径1.35m、短径0.75m、検出面からの深さ25cmの上坑である。掘形内から、須恵器、瓦器楕、土師器、瓦器皿多数が出土した。中央部やや南には30cm前後の石が置かれ、楕数点は重ねた状態でこの石へ落として破碎した様な状況で出土している。遺物の出土状況から祭祀に関連するものと考えられる。

SK09

西半部谷状落ち込み内のテラス部分で検出した長径1.07m、短径0.75m、検出面からの深さ24cmの土坑である。土師器の甕が出土した。

谷状地形

調査区西半部で幅9m前後、最深部で検出面からの深さ1m、北東から南西へと開く谷状の落ち込みを検出した。最深部は蛇行する2条の谷で、深く落ち込んでいる。南側は北西から南東へと流れ、中世以降の自然流路により切られている。

- 谷1 西側で検出した谷である。幅1~3m前後で、深さは最深部で、検出面からの深さ1m前後である。埋土内から古墳時代の土師器高环、小型丸底壺などが出土している。
- 谷2 東側で検出した谷である。幅1.0~1.5m前後、深さは最深部で、検出面からの深さ0.85mである。調査区の中央部と、中央部やや南の2ヶ所で中世の遺物がやまとまって出土した。このうち北側からは、完形の須恵器碗1点と土師器皿2点、南側で完形の須恵器碗1点、土師器皿2点、土師器小型壺1点、白磁皿1点が出土した。いずれも谷がある程度埋没した段階で谷内に置かれた状況が推定され、出土状況から祭祀に関連するものと考えられる。この他中世の遺物とともに古墳時代の遺物も出土しており、須恵器短頸壺なども出土している。

3.まとめ

今回の調査では古墳時代及び中世の遺構・遺物を確認した。

調査区の東半部は、北東側からの丘陵端部から下がった緩斜面地であるものと推定され、多くの遺構を検出した。また、調査区の西半部は、北東から南西に開く谷状の落ち込みであり、最深部には2条の谷が検出された、特に谷2では、中世にある程度谷が埋没した段階で、複数の祭祀が行なわれたものと推定される遺物の集中部分が2ヶ所存在する。

SK06の様に丘陵への変換点と推定される場での祭祀も確認された。

また谷の埋土中には、古墳時代前期及び、6世紀後半代の遺物も含まれており、前者はこれまでの調査で市道長田線西側の調査成果、後者はかつて大塚町付近に存在したとされる「大塚群集墳」との関連も示唆するものとも考えられる。この谷は西から東へと流れる自然流路により切られている。この自然流路は第6次調査で確認されていた自然流路に対応するものと考えられ、現在の市道長田線と交差しながら南へと向かうものと考えられる。



fig. 159 調査区平面図



fig. 160 調査区全景

29. 御藏遺跡 第64・65次調査

1. はじめに

御藏遺跡は、六甲山南麓を流れ出る苅灘川の左岸の自然堤防上および後背湿地にまたがって立地しており、北から南にかけて緩やかに傾斜する地形となっている。

当遺跡は平成2年に発見され、第2、3次調査では、奈良時代の掘立柱建物や戸井戸等をはじめとする多くの遺構が確認された。その後60回に及ぶ調査の結果縄文時代晚期から中世に至る遺構や遺物が確認されている。なかでも奈良時代の掘立柱建物群や、綠釉陶器・灰釉陶器はじめ硯や金属製帶金具など官衙的な性格をもつ遺構・遺物が注目されている。

fig. 161
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要 今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、隣接する2件について調査を実施した。いずれも工事等によって影響を受ける部分について、トレンチを設定して調査を実施した。

第64次調査

基本層序

上層より、表土層が約30cm認められ、この下層に10cm程度の旧耕土が存在する。以下、近世～中世の遺物を含む旧耕土・床上状の土が数層、あわせて40～50cmの層厚で堆積し、中世～奈良時代の遺物を含む淡灰色シルトとなる。この層の下（標高5.30m前後）には第1遺構面の基盤層となる淡灰褐色シルトが存在する。また下層には、褐黄色粘土を挟んで水田面と考えられる暗灰色シルトが、さらに灰黄色シルトを挟んで洪水砂である淡灰青色粘砂が堆積し、再び水田面と思われる黄褐色粘土に至る（標高4.90m）。この黄褐色粘土の下には暗灰褐色粘土が堆積する。

第1遺構面

中世～奈良時代の遺物を含む淡灰色シルトの直下で検出された淡灰褐色シルトを基盤とする遺構面である。本調査区においては、明確な遺構は検出されなかった。上層の包含層や周辺の調査結果から奈良時代～中世の遺構面に対応すると考えられる。

水田面

第1遺構面より褐黄色粘土を挟んで存在する暗灰色シルトは、水田面と考えられる。畦畔等は確認されず、時期についても不明である。

洪水砂

厚さ8～15cmの淡灰青色粘砂の堆積である。遺物はほとんど出土しなかったが、周辺の調査において標高5.00m前後で広範囲に確認されている弥生時代末期の洪水砂と思われる。

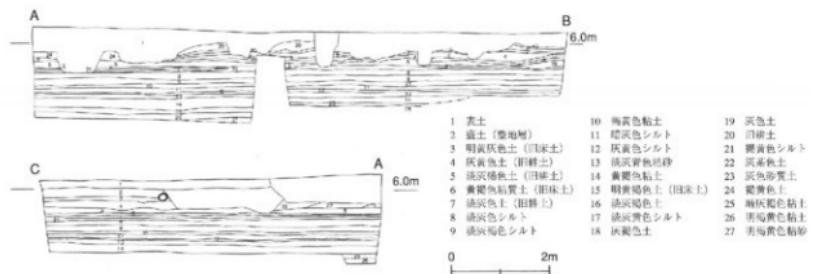


fig. 162 第64次調査区土層断面図

下層水田面 洪水砂直下に堆積する黄褐色粘土についても水田面と考えられるが、畦畔等は確認されなかった。

さらに、下層についてトレンチ調査を実施した。遺構・遺物は確認されず、暗灰褐色粘土の堆積が確認された。

小結

今回の調査では、明確な奈良時代～平安時代の遺構は検出していない。遺物の出土量も比較的少なく、土壤化した粘土やシルトの堆積がみられ水田などの耕作地として利用されていたと考えられる。

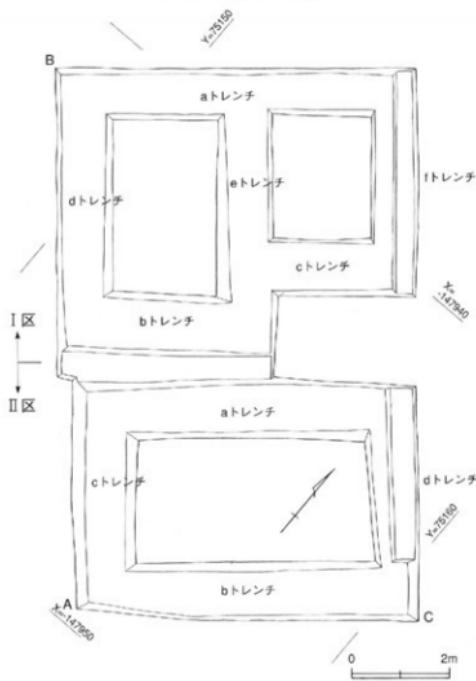


fig. 163 第64次調査区平面図



fig. 164 第64次調査区全景



fig. 165 第64次調査区西壁土層断面

第65次調査

基本層序

上層より、厚さ約30cmの表土の下層に層厚10cm程度の旧耕土が存在する。以下、近世～中世の遺物を含む旧耕土・床土状の土が数層、あわせて40～50cmの層厚で堆積して、中世～奈良時代の遺物を含む淡灰色シルトとなる。この層の下層（標高5.30m前後）には第1造構面の基盤層となる淡灰褐色シルトが存在する。また下層には、褐黄色粘土を挟んで水田面と考えられる暗灰色シルトが、さらに灰黄色シルトを挟んで洪水砂である淡灰青色粘砂が堆積し、再び水田面と思われる黄褐色粘土に至る（標高4.90m）。

第1造構面

aトレーナンチ及びbトレーナンチで、土坑2基と溝1条、ピット、落ち込みを検出している。

SK01

SK01はbトレーナンチの南西隅で一部を確認した土坑である。大半は調査区外に延びたため平面形状は不明で、深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

SK02

SK01の東隣で検出された径80cm、深さ20cm程度の土坑である。遺物は出土していない。

SD01

bトレーナンチの東端部を南北に流れる幅40cm、深さ5cm程度の溝である。

落ち込み

aトレーナンチの東端部分で検出された深さ10cmの落ち込みである。遺物は出土せず、時期は不明である。

水田面

第1造構面より褐黄色粘土を挟んで存在する暗灰色シルトは、水田面と考えられる。畦畔等は確認されず、時期についても不明である。

洪水砂

厚さ8～15cmの淡灰青色粘砂の堆積である。遺物はほとんど出土しなかったが、周辺の調査において標高5.00m前後で広範囲に確認されている弥生時代末期の洪水砂と思われる。

下層水田面

洪水砂直下に堆積する黄褐色粘土についても水田面と考えられる。aトレーナンチ中央部付近の北壁断面において、幅40cm、高さ8cmの畦畔状の隆起が認められるものの、すぐ向かいの南壁断面や平面的には確認できず水田畦畔の確認はない。

小結

今回の調査においても明確な造構は西側部分でわずかに確認した。遺物の出土量も比較的少なく、かわりに土壤化した粘土やシルトの堆積がみられ水田などの耕作地として利用されていたことが窺える。

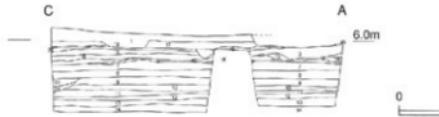
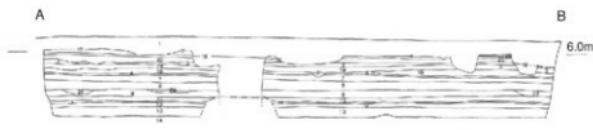


fig. 166
第65次調査区
土層断面図

3. まとめ

今回の2次にわたる調査では明確な遺構は第65次調査地の西側部分で検出したのみで、両調査地の大半は水田面が広がる状況を確認した。当調査地の存在する6丁目南地区については、当遺跡のなかで奈良時代～平安時代の遺物包含層は確認されるものの、遺構については希薄でそれ以前の水田面が検出される状況を複数の地点で確認しているが、今回の調査成果も同様の状況を追認するものとなったといえよう。

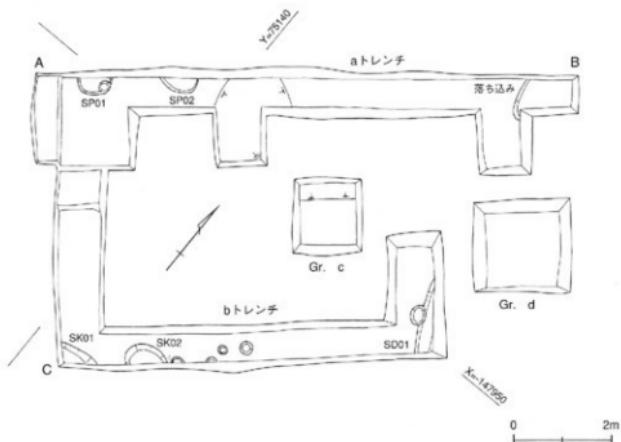


fig. 167
第65次調査区
平面図



fig. 168
第65次調査区
全景

30. 御藏遺跡 第66・67次調査

1. はじめに

御藏遺跡は、六甲山系南麓の沖積地上に立地し、明治時代に付け替えられた新湊川と合流する茹藻川の左岸に位置する。

これまでに市営住宅の建設や区画整理事業に伴い60回以上の調査が実施されており、奈良時代の官衙的な色彩の強い遺構・遺物をはじめとして、弥生時代～中世にわたる各時代の成果が得られている。

fig. 169

調査位置図

1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴って、近接する地区において2件の調査を実施した。いずれも工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。

第66次調査

基本層序

上層より、搅乱と盛土、暗灰色砂質土（旧耕土）、灰色砂質土（時期不明の耕土）、黄灰褐色シルト混じり砂質土（上面が古墳時代後期、奈良時代、平安時代の第1遺構面）、暗黄灰褐色粗砂シルト混じり砂質土か淡緑灰褐色細砂～粗砂（上面が庄内期併行の第2遺構面）、と堆積している。

また、すべてのグリッド（G 1～5）と1トレチ、2トレチの多くの部分で、暗褐色粗砂混じり砂質土と暗灰褐色粗砂混じり砂質土（第2遺構面で検出したS X 02の堆積土）を確認した。

今回の調査区で遺構面の標高は、第1遺構面がT.P. 6.5mで、第2遺構面がT.P. 6.0～6.4mである。

第1遺構面

古墳時代後期の土坑状の落ち込み、平安時代の土坑と柱穴などを、同一遺構面として検出した。

S X 01

G 5で検出した土坑状の落ち込みである。径約110cm以上×20cm以上で深さ約9cmを測る。古墳時代後期の須恵器環が出土している。

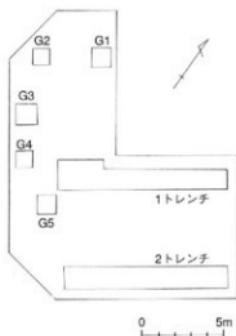


fig. 170 第66次調査区配置図

S K01 G 3で検出した土坑である。幅約63cm以上×54cm以上で深さ約56cmを測る。暗灰色砂質土～砂混じりシルトが堆積し、平安時代の須恵器と土師器が破片で出土している。

あるいは墓壙となる可能性を持つが、調査範囲が狭く判断できない。

S P01 G 2で検出したピットである。径約25cm以上で、深さ約38cmを測る。平安時代頃の須恵器と土師器が出土している。

第2造構面 庄内併行期の造構面である。落ち込み、土坑を検出した。

S X02 調査区の全域で確認した、低湿地状の落ち込みである。1トレントと2トレントで落ち込みの肩部を検出している。幅約5.0m以上で、深さは約50cmを測る。庄内併行期の甕を含む当該時期の上師器片が出土している。

S K02 1トレントで検出した不整円形の土坑である。径約70cmで、深さ約14cmを測る。

小結 今回の調査では、平安時代、古墳時代後期、庄内併行期の3時期の造構面を検出した。

第1造構面で検出した平安時代の土坑については、隣接地区の調査では当該時期の墓壙が検出されており、土壤墓である可能性も考えられるが、調査範囲の関係で不明確である。

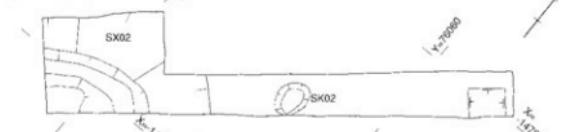
第1造構面では古墳時代後期の土坑状の落ち込みも確認している。御藏遺跡では古墳時代後期の造構は希薄であり、この一例だけでは周囲の状況は不明である。

また第2造構面で庄内併行期の低湿地状の落ち込みを確認した。落ち込みの肩部付近で土坑（SK02）も確認している。この土坑からは遺物が出土していないものの、落ち込みの周囲に当該時期の造構が散在する可能性も考えられる。

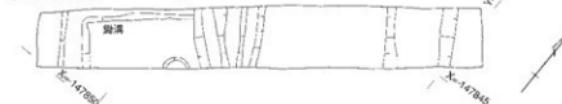
1トレント
〔第1造構面〕



〔第2造構面〕



2トレント
〔第1造構面〕



〔第2造構面〕

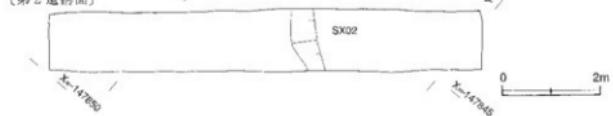


fig. 171
第66次調査
1・2トレント平面図

第67次調査

- 基本層序** 上層より、厚さ20cmの盛土、青灰色シルト混極細砂（厚さ20cm）で、その下層に暗灰色シルト（遺物包含層、厚さ10cm）があり、その下層が遺構面基盤層となる。中世などの遺物は少なく、庄内併行期の遺構面と考えられる。
- A トレンチ** 浅い落ち込みを確認している。深さ10cm程度であり、調査範囲外に延びるため、規模は確定できない。出土遺物から、庄内併行期と考えられる。
- B トレンチ** 遺物包含層は確認できたものの、遺構は確認していない。
- C トレンチ** 東端部において、浅い落ち込みを確認している。深さ10cm程度であり、調査範囲外に延びるため、規模は確定できない。出土遺物から、庄内併行期と考えられる。
- D トレンチ** 西端部において、浅い落ち込みを確認している。深さ10cm程度であり、調査範囲外に延びるため、規模は確定できない。出土遺物から、庄内併行期と考えられる。
- 小結** 今回の調査では、庄内併行期と考えられる浅い落ち込みを確認した。この地区では、当該時に一時的に遺構が希薄となるようであり、これまでの調査成果とも矛盾しない。
- 3.まとめ** 今回実施した2件の調査では、第66次調査では、平安時代、古墳時代後期、庄内併行期の3時期の遺構を、また第67次調査では、庄内併行期と考えられる遺構を確認した。これまでの当遺跡における調査でも同様な成果を得ているが、今回の調査でもこれまでの成果を補強する貴重な成果を得ることができたといえよう。



fig. 172 第67次調査 A トレンチ全景

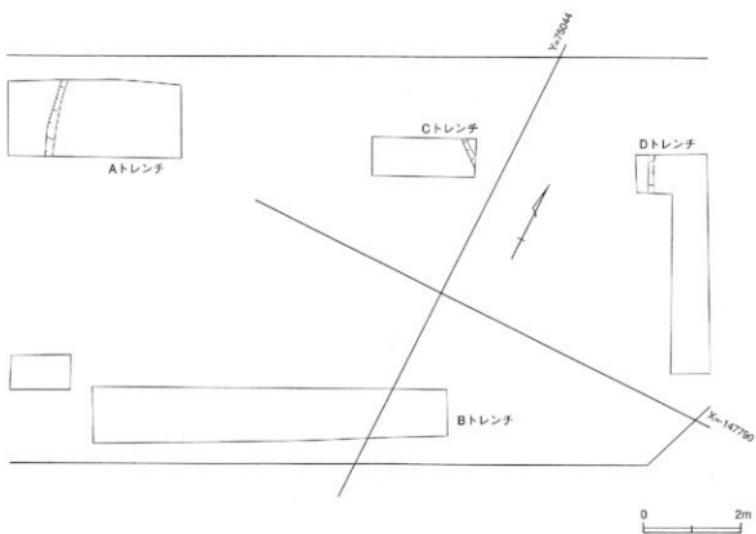


fig. 173 第67次調査区平面図



fig. 174 第67次調査 Bトレンチ全景

31. 御藏遺跡 第68次調査

1. はじめに

御藏遺跡は、六甲山南麓を流れ出る薊藻川の左岸の自然堤防上および後背湿地にまたがって立地しており、北から南にかけて緩やかに傾斜する地形に位置している。

当遺跡はこれまでに60回以上の調査が実施されており、縄文時代晚期から中世に至る遺構や遺物が確認されている。特に奈良時代の掘立柱建物群や縄文陶器や灰釉陶器をはじめ硯や金属製帶金具など官衙的な性格をもつ遺構・遺物が注目されている。



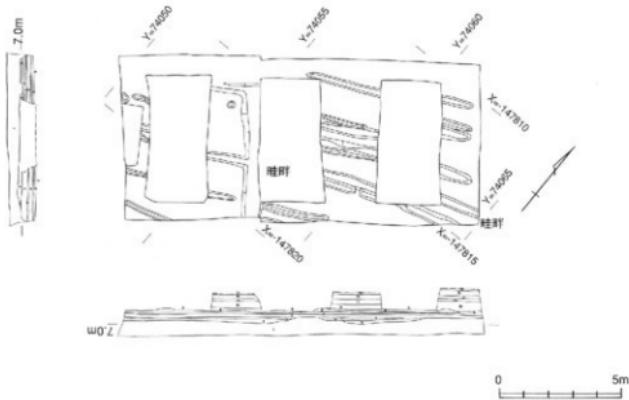


fig. 177
第3造構面
平・断面図

洪水砂 厚さ5～8cmの灰褐色細～中砂の堆積である。遺物はほとんど出土しなかったが、周辺の調査において標高6.50m前後で広範囲に確認されている弥生時代末（庄内併行期）の洪水砂と思われる。

第3造構面 洪水砂直下に堆積する暗灰褐色シルトを基盤とする造構面で水田面と考えられる。畦畔及び溝を確認した。

畦畔 調査区の中央部付近において南北方向に走る幅90cmの大畦畔を検出した。これより東に向かって3本、西に2本の幅40～60cmの小畦畔が延びている。全体に削平を受けているため造構の残りは悪く畦の残高は数cm程度である。水口等は確認できなかった。

水田区画の形状は南北2.0～2.5m、南北5.0m以上で東西に長い長方形である。

溝 耕作に伴うと考えられる溝を10数条検出した。いずれも小畦畔に並行する方向で幅20～50cm、深さ5cm前後である。

さらに、建物の基礎部分については下層について調査を実施した。暗灰色シルト混じり砂質土からは、弥生土器と思われる細片が数点出土した。

3.まとめ 当該地の存在する6丁目南地区については、御藏遺跡のなかでも奈良～平安時代の遺物包含層は確認されるものの、造構については希薄でそれ以前の水田面が検出されていた。

今回の調査においても、比較的遺物は出土したもののが明確な奈良～平安時代の造構は確認しておらず、土壤化した粘土やシルトの堆積がみられ水田などの耕作地として利用されていたことが窺える。特に洪水砂下で確認した水田面については、畦畔を確認しており遺跡内の土地利用の実態や景観復元について一定の成果を得ることができた。



fig. 178 調査区西半第3造構面全景

32. 水笠遺跡 第29次調査

1. はじめに

水笠遺跡は、茹藻川によって形成された沖積地上に立地する集落遺跡で、JR新長田駅の北側、水笠通2・3丁目の範囲に広がっている。

水笠通2丁目地区におけるこれまでの調査では古墳時代後期の掘立柱建物・畝溝・弥生時代の溝・柱穴などを確認している。また、水笠通3丁目地区では、弥生時代～中世の遺構・遺物を確認している。

なお今回の調査については、平成20年度に『水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



2. 調査の概要

基本層序

今回の調査は公園建設に伴って、工事により影響を受ける範囲について調査を実施した。

上層より、整地土、盛土、近世耕土が存在し、その下層に暗灰褐色シルト混じり細砂の中世の耕土が堆積している。この層の下層に黒褐色砂質シルトの古墳時代後期の土器を含む遺物包含層が堆積している。なお、遺物包含層は調査区全域には堆積しておらず、中央部の遺構が集中している範囲に特に顕著に認められる。この下層に暗褐色小礫混じり細砂が堆積しており、この上面が遺構面である。

調査の結果、竪穴住居3棟、掘立柱建物7棟、土坑1基、溝6条、スキ溝約20条、ピット多数を検出した。竪穴住居は調査区中央部に、掘立柱建物は調査区全体に分布している。溝については、調査区南東部に集中している。

S H01

一辺約5.5mの平面形が方形の竪穴住居で、検出面から床面までの深さは約20cmである。中央部が近世～近代の流路により失われており残存状況は良好ではない。6世紀前半～中頃のTK10型式やTK20型式に属する須恵器等が床面より若干浮いた状態で出土している。

S H02

一辺約6mの平面形が方形の竪穴住居で、検出面から床面までの深さは約15～20cmである。中央部が近世～近代の流路により失われている。主柱穴4基と周壁溝を検出した。

S H03

東西5.2m以上、南北6.5m以上の平面形が方形の竪穴住居で、検出面から床面までの深さは約10cmである。残存状況は良くない。主柱穴2基を検出した。

TK43型式に属する須恵器壊身が出土しており、6世紀中頃～後半のものと考えられる。

- S B01** SH01と切り合って検出したもので、東西2間(3.3m)、南北2間(3.85m)の総柱の掘立柱建物である。SH01の廃絶後に建てられたものである。
- S B02** S B01の北側に接してあり、東西3間(4.8m)、南北2間(4.3m)の総柱の掘立柱建物である。主軸方向がS B01と同一方向であるため同時期のものと考えられる。
- S B03** 第28次調査 S B201と同一の建物である。東西4間(4.6m)、南北3間(4.8m)以上の側柱の掘立柱建物に復元できる。TK43型式の須恵器环身が柱穴より出土しており、6世紀中頃～後半頃に築造されたものと考えられる。
- S B04** 東西5間(7.6m)、南北2間(2.9m)以上の側柱の掘立柱建物である。
- S B05** 東西5間(5.7m)以上、南北5間(8.0m)以上の側柱の掘立柱建物である。
- S B06** S B05の南で検出した東西4間(6.4m)、南北3間(4.5m)の側柱の掘立柱建物である。
- S B07** 東西2間(2.8m)、南北2間(4.2m)の側柱の建物である。時期は不明である。
- S K01** 東西1.4m、南北1.8m以上、深さ10cmの土坑で、古墳時代後期の土師器が出土している。
- S D08** 幅0.55m、深さ25～35cmの東西方向に走る溝である。
- S D10** 幅0.7m、深さ10cmの南北方向の溝である。第26次調査区、第28次1区・2区で検出されており、今回の検出部分と合わせて南北100mを越す溝となる。
- ピット** 調査区内で多数検出した。建物としては復元できなかった。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の堅穴住居3棟と掘立柱建物7棟を検出した。第26次調査で検出された1棟を合わせると掘立柱建物は8棟確認している。このうちS B01は、2間×2間と規模は小さいものの、大きな柱穴の掘形をもち高床式倉庫のような建物が想定できる。またS B02も同様に3間×2間の高床式倉庫と考えられる。その他の掘立柱建物については住居であろうと考えられるが、何棟が同時並存していたのかは明らかではない。

また、今回の調査で堅穴住居から掘立柱建物へ建て替えられたことが明らかになり、建物構成を含めた集落形態の復元を考える上で貴重な資料を提供することになった。

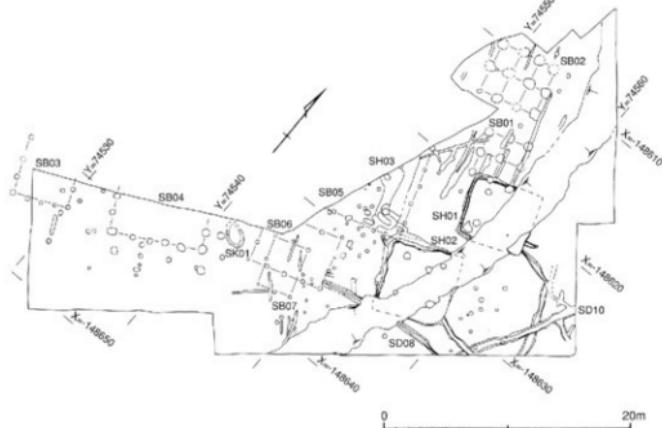


fig. 180
調査区平面図

33. 若松町東遺跡 第1次調査

1. はじめに

若松町東遺跡は、苅藻川や妙法寺川により形成された沖積地上に立地しており、現標高は約6mである。当遺跡は、平成19年度に新たに発見された遺跡で、今回の調査が第1次調査である。



fig. 181
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は再開発ビル建設に伴うもので、調査着手可能な地区から順次実施した。

基本層序

当調査地は、当遺跡の北西端に位置する。上層より、震災後の整地層、近代～戦前までの建物基礎及び整地層の下層に近世～近代の旧耕土、中世の旧耕土が存在し、その下層に弥生時代～中世の遺物包含層である暗灰褐色粘質土が堆積する。その下層の灰黄色あるいは褐黄色砂質土～シルト上面で構造を検出した。

1区

今回の事業地の北西端に位置する調査区である。遺物包含層は遺存していない。ビット数基と溝1条、土坑2基を検出した。

S D101

調査区の西端で検出した南北方向の溝、現在の町割りに沿う。検出した幅は約20cm、深さ約10cmで、西側は調査区外に延びる。中世のものと考えられる須恵器が少量出土した。

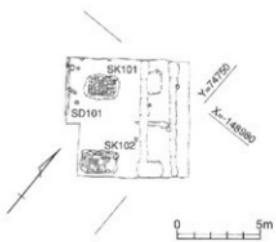


fig. 182 1区平面図

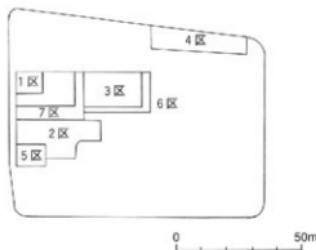


fig. 183 調査区配置図

S K101 長辺約1.5m、短辺約1m、平面形はやや隅丸を呈する長方形である。深さは約20cmで、土坑底に煉瓦が敷き詰めてある。煉瓦は約80個を数え、基本的に平の部分を上に向けて一段で置かれるが、東半では部分的に二段に積まれる。また北東隅に穴が掘られ、小口を上に向けた4個の煉瓦が据え付けられていた。煉瓦にはモルタルなどは付着しておらず、未使用品と考えられるが、土坑内の埋土や煉瓦の上にはモルタル塊も混入している。煉瓦には通常のサイズのものに加え、羊羹や半羊羹と呼ばれるサイズのものや角を丸く削った異形煉瓦が含まれる。平部に打たれた刻印には「ワ」・「+」・「山」・「K 2」・「K 3」など認められる。

S K102 長辺約1.5m、短辺約1m、やや隅丸を呈する長方形で、深さは約20cmである。土坑の規模や埋土の状況、約30数個の煉瓦が出土した点などはSK101と同様であるが、出土煉瓦は大半が割れた状態で、完形品は数点にも満たない状況であった。一度使用された煉瓦のうち、再利用が利くものについて保管したものとも思われるが、モルタルが付着した状態のものが多く、投棄土坑の可能性も多い。

ピット 5基のピットを検出したが、建物などを復元するには至っていない。径約20cm規模のものが大半である。pit101から弥生土器の細片が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

小結 当調査区では旧耕土直下において遺構面となり、遺物包含層は存在しなかった。遺構面には部分的に砂礫の帶が認められ、その層からの湧水が顕著であった。地形的に周辺よりやや高位になることから、後世の削平の影響が大きいと想像されるが、軟弱な地盤のために遺構が希薄な場所であった可能性も多い。

2区 調査地南辺中央に位置するT字形の調査区である。西端は從前建物の基礎により遺構面が大きく失われていた。遺物包含層は、調査区の北側ではわずかに残る程度であるが、南東側には比較的厚く堆積する。大半の遺構は調査区の東半で検出した。土坑2基、溝1条、ピット数十基を検出した。



fig. 184
2 + 5区平面図

S K201 長径約1.2m、短径約0.9mの平面形が楕円形を呈する遺構で、深さは5cmと浅い。小片の土器が出土したが時期は不明である。

S K202 調査区東半で一部が確認できた深さ約10cmの深い落ち込みである。規模は不明で、弥生土器の小片がわずかに出土している。

S D201 調査区南側で検出した幅0.7~1.0m、深さ約10cmの深い溝である。遺構検出時にも比較的まとまって遺物が出土しており本来もう少し深かったものと考えられる。弥生時代前期の遺構と考えられる。

小結 従前建物や後世の耕作痕により西側の高位の部分については、既にかなり削平を受けた状況であったが、調査区の中央から東半にかけてピットを中心とした遺構を検出した。

現段階では掘立柱建物の復元はできおらず、また竪穴住居の痕跡などは明らかでないが、周辺に同様の遺構が拡がる可能性が高い。

3区 今回の事業地の中央に位置する。盛土・搅乱層下の中世旧耕土は調査区全面に残るが、その下層の遺物包含層は調査区の北側には存在せず、反対に南~南東側は厚く堆積する。その下の灰黄色砂質土へシルト上面で遺構を検出した。また調査区内の南東隅では遺構面は灰褐色シルト質細砂により形成される。土坑8基、溝4条、ピット數十基を検出した。

S K301 長径約2m、短辺約1.5m、平面形はやや隅丸となる長方形である。検出した深さは約15cmであるが、本来はもう少し深さが残っていたものと思われる。北東部の床面に近いレベルより壺や甕の破片、ミニチュア壺等が出土しており、弥生時代前期の遺構と考えられる。

S K302 調査区東壁際で検出した土坑で、隣接する6区の調査で検出した部分と合わせると、径約1mに復元される。3区内での出土遺物はいずれも小片であるが、6区では縄文時代晚期の土器片が出土した。

S K303 長径約1.5m、短辺約1.0mの平面形が楕円形を呈する土坑で、深さは約10cmである。弥生土器の小片が出土した。

S K304 直径約1.3mの土坑で、深さは約10cmである。弥生土器の小片がわずかに出土した。

S K305 直径約1.3m、深さ約10cmの平面形が円形を呈する土坑で、規模、埋土の状況等はSK304に似ている。小片の弥生土器とともに砥石の可能性のある扁平な石が出土している。



fig. 185
3区平面図

- S K306** 直径約0.5m、深さ約0.4m、規模的には周辺のピットよりやや大きい程度であるが、椭状となった断面の形状などから土坑と判断した。出土遺物は弥生土器の小片とサヌカイト片が出土したのみであるが、土坑の周辺には比較的多くの土器片の出土する浅いピットの分布が認められる。弥生時代前期の遺構と考えられる。
- S K307** 薫の体部上半が倒立した状態で出土した径約40cmの平面円形の土坑である。薰の検出レベルから底面までの深さは約20cmである。弥生時代中期の遺構と考えられる。
- S X301** 調査区西端で検出した直径約0.6mの土坑である。壺、あるいは大型の鉢の底部が出土しており、埋納された状況に見受けられる。縄文時代晩期の遺構である可能性が高い。
- S D301** 幅約20~30cm、深さ5~10cmの溝である。調査区内での検出長は約4.5mで、北側に延びる可能性がある。SK304を切り込む。弥生土器片が出土している。
- S D302** 幅約60cm、深さ約10cmの溝である。弥生土器が出土したが、いずれも小片である。
- S D303** 幅約60cm、深さ約20cmで、断面の形状はやや緩やかなV字形である。出土した弥生土器は量的には多いものの、いずれも小片である。
- S D304** 幅約50cm、深さ約20cmの溝である。弥生土器の小片がわずかに出土した。
- ピット** 3区でも多くのピットを検出した。大半は径20~30cm、深さ10~30cmのもので、その他比較的遺物を多く含む径40~50cmのやや大きな径のものがあるが、いずれも浅いもので、柱穴であるのか疑問が残る。ピットからは弥生時代前期~中期の土器が出土している。
- 小結** 今回の調査地の中で、特に遺構の分布が密な地区で、多数の柱穴や土坑、溝を検出した。遺構からの出土遺物が少なく、また小片が多いため、個々の詳細な時期については不明であるが、縄文時代晩期~弥生時代前期、中期の遺物が出土している。
- 本来は調査区の北側にも遺構の拡がりがあったものと想像されるが、地形的に高いため、後世の削平により失われたものと考えられる。

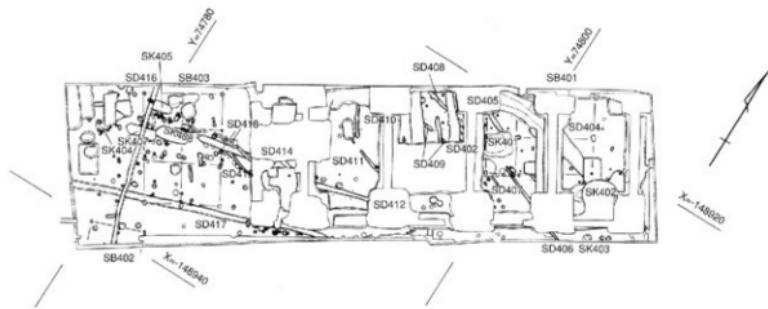


fig. 186 4区平面図

- 4区** 若松3工区の北東端に位置し、同様に現在確認されている若松町東遺跡の北東端に位置する。震災後の整地層、近代～戦前の建物基礎、整地層の下層に近世～近代、中世の旧耕土が堆積し、その下に暗灰褐色粘質土が堆積する。この層には弥生時代～中世の遺物が含まれる。その下の灰黄色～褐黄色砂質土～シルト上面で遺構を検出した。調査地の東半分は從前の建物の基礎が遺構面以下まで達している。
- 掘立柱建物3棟、ピット多數、溝18条、土坑8基を検出した。
- S B401** 調査区の東端で検出した建物で、東西3間、南北2間以上の縦柱の建物と考えられる。柱間は2.0～2.4mとややばらつきがあり、現代の建物基礎により既に失われている部分も多く、建物の構造を把握する上で不明な部分が多い。遺物は小片であるが、須恵器・土師器のほか黒色土器片が出土しており、平安時代の建物と考えられる。
- S B402** 調査区の南西端で検出した建物で、大半が調査区外にあるものと推測される。調査では東西2間分が確認できた。柱間は約1.8mで、柱の径はいずれも約20cm、深さは20～40cmである。黒色土器の小片が出土しており、平安時代の建物である。
- S B403** S B402の北側で検出した東西2間、南北3間以上の建物である。柱間は2.0～2.5mで、柱の規模は径約30cm、深さは20～40cmである。柱痕跡を残すものが4基ある。建物の西側に1間分、径約10cm規模のピットが並行しており、もう1間分東西に拡がる可能性もある。埋土は灰褐色粘質土を基本とし、一部に炭の混入が認められる。須恵器・土師器のほか黒色土器片が出土しており、平安時代の建物である。
- S K401** 長辺約1.8m、短辺約1.3mの平面形はやや隅丸を呈する長方形である、深さは約1.4mである。断面の形状は撤状で、上方の検出面から浅い部分では外側に開き、それ以下の壁面はほぼ垂直である。西側に掘り残された段になった部分があり、底面からの高さは約20cmである。底面からこの段の部分の高さまでは灰色～暗灰色シルトが堆積しており、水が溜まっていた状況が推測される。底面からは茎状の植物遺体が出土している。この段から上層は基盤層である灰黄色砂質土などをブロック状に含む埋土となり、埋め戻されたものと考えられる。遺物はほとんど出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、S B401を構成する柱穴が、S K401を切り込んでおり、平安時代以前の遺構であることは判明している。
- S K402** 撥乱により大半が失われているが、径約1.2m、深さ約50cm、平面形が円形を呈する土坑と考えられる。埋土は暗灰色～灰褐色のシルトを基調とするが、上方埋土は砂質が強く、基盤層の土をブロック状に含む。弥生土器と考えられる遺物が出土したが、いずれも小片であり、詳細な時期は不明である。
- S K403** 南東隅で検出した径約60cm、深さ約10cmの小規模な落ち込みである。遺物は出土していない。
- S K404** 撥乱により一部が失われているが、一辺約70cmの平面正方形の土坑である。断面の形状は浅い皿状を呈し、遺物は出土していない。
- S K405** 長さ約1.5m、幅約0.6m、深さ約20cmで平面形はやや丸みを帯びた長方形を呈する。弥生土器とサヌカイト片が出土した。
- S K406** 長さ約0.8m、幅約0.4m、深さ約15cmの土坑で、平面形はやや丸みを帯びた長方形である。出土遺物は弥生土器の細片が大半を占めるが、床面から古墳時代後期の須恵器杯身が

出土しており、古墳時代後期の遺構と考えられる。

- S K407 長さ約2.1m、幅0.7mの平面形が長方形の土坑である。深さは約30cmで、弥生土器とサヌカイト片が出土した。
- S K408 長辺約2.0m、幅約0.8m、平面形は丸みを帯びた長方形である。遺物は出土していない。
- S D401 幅約0.9m、深さ約15cmの溝である。小片の須恵器・土師器・弥生土器とサヌカイト片が出土した。
- S D402 幅約0.7m、深さ約10cmで、中世の須恵器・土師器、黒色土器・弥生土器・サヌカイト片が出土した。S D401に並行する溝であるが、埋土の状況は異なる。
- S D403 幅20cm、深さは約10cmである。S D401・402に並行する。遺物は出土していない。
- S D404 調査区の東端で検出した幅約1.3mの東西方向の溝でわずかに弧を描く。調査区内での検出長は約12mである。深さは15~20cmで、極微細な弥生土器と思われる破片が出土した。
- S D405~415 (412を除く) いずれも幅15~20cm、深さ約10cmの溝である。東西方向で並行する。出土遺物の大半は微細な弥生土器であるが、S D413から古墳時代末の須恵器が出土しており、周辺の遺跡で検出される同様の溝の状況も考え合わせると、古墳時代末の鋤溝と判断される。
- S D412 幅約30cm、深さ約15cm、わずかにサヌカイト片が出土したのみである。
- S D416 調査区西側で検出した南北方向の溝で、幅約30cm、深さ約10cmである。埋土は灰褐色粘質土である。弥生土器のほか、土師器と考えられる破片が出土した。
- S D417 調査区西側で検出した東西方向の溝で、40~50cm、深さ約15cmである。弥生土器・サヌカイト片が出土した。
- S D418 幅40~50cm、深さ約20cmの溝である。断ち割り調査の結果、一度深さ20cm程度掘削を行った後、基盤層に近い灰黄色を呈する砂質の土を底面に貼り付けたような痕跡が確認された。この貼土の下からはサヌカイト片が比較的多く出土したが、それらに混じり、古墳時代後期の須恵器片が出土した。溝の底部両端には窪みがあり暗灰色シルトが堆積する。窪みの性格などを含めた溝の性格は不明である。また溝の下層に堆積する砂はSK408の下部にも続いていること、SK408は溝の上部にできた溜まり痕跡であった可能性が高い。

小結 今回の調査では平安時代の掘立柱建物3棟の検出をはじめ、古墳時代の鋤溝、弥生時代と考えられる溝や土坑が検出され、新たな集落域や生業域の存在が明らかになった。

5区 2区の南西に隣接する調査区である。中世の旧耕土下に堆積する遺物包含層は北側には認められず、南半にのみ堆積する。多数のビットと土坑2基、溝1条を検出した。

- S K501 長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約40cmの土坑で、中世の須恵器、土師器片が出土した。
- S K502 長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約50cm、SK501と同規模の土坑である。中世の須恵器、土師器片の他、土坑底部から扁平な石の出土があった。
- S D501 幅約0.1m、調査区内での検出長は約2mである。底部に鋤先が入ったような痕跡がわずかに認められる。鋤溝と考えられるが、並行する同様の溝は確認できなかった。

小結 調査区西半の遺構面は砂礫と軟弱なシルトが基盤層となっており、安定した地盤とはいせず、検出遺構の大半が東半に集中している。建物としてまとまるビットは確認できていないが、いくつかの南北方向の並びがあるように見受けられる。

6区

3区の南側と東側に位置する調査区で、遺物包含層は2層に分かれ、上層が淡黒色、下層が暗茶褐色のシルト質極細砂からなる。遺物包含層からは縄文時代晚期、弥生時代、古墳時代、平安時代後期の土器や弥生時代の石斧片やサスカイト片が出土している。土坑7基、溝3条、ピット数十基を検出した。

- S K601** 調査区の北端で検出した、長径1.05m、短径0.6m、深さ21cmの平面形が楕円形の土坑である。縄文時代晚期の突堤文土器が出土している。
- S K602** 一部を搅乱されているが、直径1.1m、深さ6cmの平面形が円形の浅い土坑である。遺物の出土はない。
- S K603** 搅乱のため、全体形は不明確であるが、長径0.7m以上、短径0.7m、深さ8cmの平面形が楕円形の土坑と考えられる。埋土は暗茶褐色シルト質極細砂である。
- S K604** 調査区の東壁際で検出した、長径2.1m、短径1.8m、深さ11cmの平面形が楕円形の浅い土坑である。
- S K605** 調査区の南壁際で検出した、長径0.5m以上、短径0.55m、深さ5cmの平面形が楕円形の浅い土坑である。遺物の出土はない。
- S K606** 長径1.2m、短径0.8m、深さ10cmの平面形が楕円形の土坑である。遺物の出土はない。
- S K607** 調査区西端で検出した、直径60cm、深さ6cmの平面形が円形の土坑である。土坑の底面は凹凸がある。遺物の出土はない。
- S D601** 3区から続く溝で、西方向から若干北に曲がりながら東方向に向けて流れている。幅は2mで、肩部から緩やかに下がり、中央部がさらに一段落ちている。溝の深さは35cmで、縄文時代の突堤文土器、弥生土器やサスカイト片、片岩が出土している。
- S D602** S D601同様3区から続く溝で、西方向から南方向に弧状に流れる溝である。幅は70~90cm、深さ20cmを測る。断面形は緩やかな椀状である。
- S D603** 調査区の中央部で検出した溝で、北から東に方向を変えながら流れている。幅は50~60cm、深さ30cmを測る。逆三角形状の断面形をしている。遺物は出土していない。

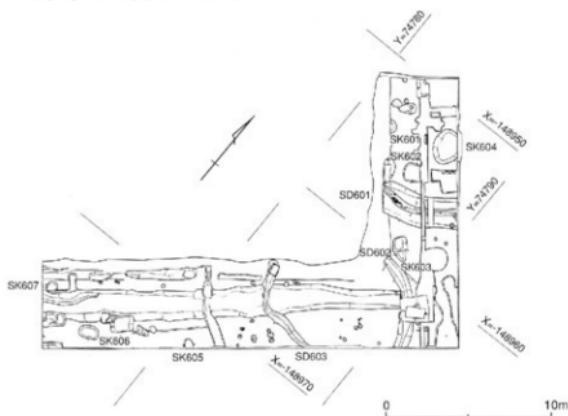


fig. 187
6区平面図

- 7区** 3区・6区の西側、2区の北側に位置する調査区である。調査区の西北部については、建物基礎の搅乱が著しく、造構面は既に削平され存在していなかった。調査区の東部に位置する南北トレンチでのみ遺物包含層を確認した。土坑4基とピット10数基を検出した。
- SK701** 調査区の南端部で検出した、長径1.2m、短径1.0m、深さ6cmの平面形が梢円形の浅い土坑である。遺物は出土していない。
- SK702** 調査区の西端部で検出した、長径1.9m以上、短径2.0m、深さ10cmの平面形が梢円形の土坑で、一部が搅乱を受けている。
- SK703** SK702の北側で検出した平面形が円形の土坑である。直径は1.4m、深さは14cmである。縄文時代晚期の突帯文土器が出土している。
- SK704** SK703の北側で検出した長径1.2m以上、短径0.7m、深さ20cmの平面形が梢円形の土坑である。
- 小結** 調査地は後世の搅乱が多く、6区・7区の南北方向のトレンチでのみ遺物包含層が確認された。地形は西に向かって高くなっている。本来は存在したであろう造構面も、6区と7区の境界付近から西にかけては削平されているものと考えられる。検出された造構の中に縄文時代晚期の長原式と考えられる遺物が出土したものがあることから、検出した造構の時期は縄文時代晚期と考えられる。

3.まとめ 再開発事業に伴って新たに発見された若松町東遺跡における第1次調査を実施し、多くの造構を検出した。全般に遺物の出土量に乏しく、それぞれの造構の正確な時期については不明瞭な点が多いものの、縄文時代晚期～弥生時代前期・中期にかけての集落の一端がこの地に存在したことが考えられる。若松町3丁目の街区の中心をほぼ南北に貫く微高地の存在が予想され、縄文・弥生時代～中世にかけての各時代の居住域、生業域が形成されていたものと推測される。西浜平野における集落形成を考える上で貴重な成果といえよう。

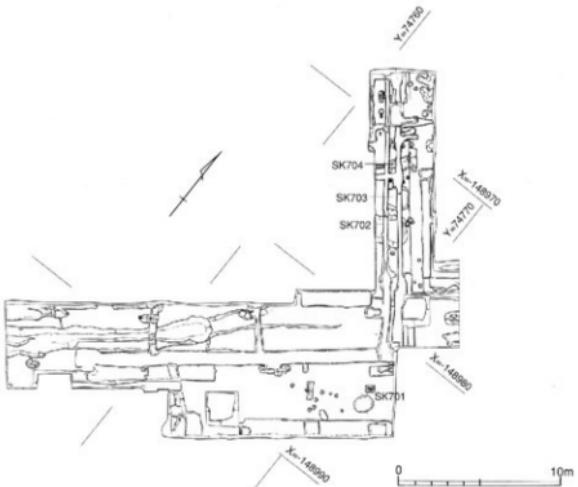


fig. 188
7区平面図

34. 二葉町遺跡 第21-1・2次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は、六甲山系から流れ出る妙法寺川と茹藻川によって形成された沖積地の自然堤防上に立地する集落遺跡で、これまで20次に及ぶ発掘調査が実施されている。これまでの調査では縄文時代晩期の自然流路、弥生時代前期の溝、奈良時代の掘立柱建物・井戸、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・木棺墓などが検出されている。特に11世紀末から12世紀前半に廃棄され、井戸枠として転用された「複材構造船」は貴重な資料である。

なお当調査については、平成19年度に『二葉町遺跡発掘調査報告書 第14~21次調査』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。

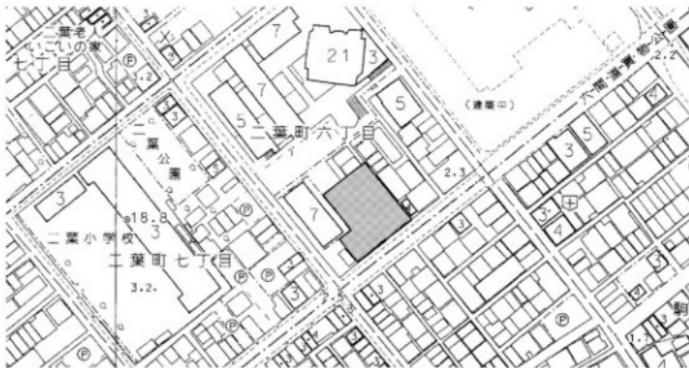


fig. 189
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回市街地再開発事業に伴って、調査を実施した。調査対象地を2回に分けて調査を実施し、それぞれ第21-1次調査、第21-2次調査と呼称する。

第21-1次調査

基本層序

調査区は、第20-1次調査の南側、第20-5次調査の東側に隣接する地区に位置している。従前建物の搅乱が著しく、上層より、約50cmの盛土直下が遺構面になってしまっており、部分的に暗茶褐色砂質土の平安時代～中世の遺物包含層が堆積している。なお遺構面は、淡黄灰褐色砂質土、南側では暗褐色中砂上面である。調査区の南側は近世以降の耕作に伴う造成により遺構面が削られており、遺構は確認できなかった。

溝多数、土坑6基、ピット8基を検出した。ピットと土坑は調査区北西部に集中し、溝は、調査区北半の全体に散在している。

溝

幅20~40cm、深さ5~10cmの耕作痕と思われる溝を多數検出した。

これらの溝とは別に幅約40cm、深さ約35cmの用水路と考えられる溝を1条(SD20)検出した。この溝は耕作痕の溝に切られており、耕作痕の溝より古い時期のものである。

S K01

平面形が橢円形の土坑である。長径1.5m、短径1.2m、深さ50cmを測り、遺存状況は良くない。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

S K02

平面形が橢円形の土坑である。長径1.0m、短径0.7m、深さ35cmを測り、耕作痕の溝に切られている。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

- SK03** 平面形が梢円形の土坑である。長径1.1m、短径0.8m、深さ55cmを測る。
- SK04** 平面形が梢円形の土坑である。長径1.4m、短径0.5m、深さ30cmを測る。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。
- SK05** 梢円形の土坑である。長径1.0m、短径0.6m、深さ0.35mを測る。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。
- SK06** 平面形が隅丸方形の土坑である。東西1.7m以上、南北1.6m、深さ30cmを測る。遺存状況は良くない。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。
- ピット** 8基検出した。径20~30cm、深さ10~30cmを測るもので、柱痕が残り、掘立柱建物の柱穴と判断できるものが数基含まれるが、建物としてのまとまりは確認できなかった。
- 第21-2次調査** 第21-1次調査の南に隣接する調査区で、全面にわたって近世以降の耕作に伴う造成による削平を受けており、遺構面は残存していない。盛土を除去すると暗灰茶色細砂の旧耕土があり、その下層に造構面を形成する層の1層下の黄灰色シルトが現れる。
- 黄灰色シルト層上面では、自然流路2条を検出したのみである。遺物が出土していないため時期は不明である。

3.まとめ

今回の調査では南半部が大きく削平されており、遺構は検出していない。北半部においては土坑や溝、ピットなどの遺構を検出したが、分布密度は希薄である。今回調査を実施した二葉町6丁目の街区の中では、当調査地の北・東側に掘立柱建物群が確認されており、当調査地は集落の居住域の縁辺部における耕作地に位置している可能性が考えられる。



fig. 190 調査区平面図



fig. 191 第21-1次調査区全景



fig. 192 第21-2次調査区全景

35. 若松町遺跡 第6次調査

1. はじめに

若松町遺跡は、六甲山系から流出する妙法寺川や茹藪川などによって形成された、複合扇状地上に立地する遺跡である。

当遺跡は平成9年度に初めて発見された遺跡で、これまでに5回の調査が実施されている。第1次調査では、弥生時代後期の溝、掘立柱建物、壇、古墳時代後期の壇、ピット、奈良時代の溝、平安時代の土坑、溝などが検出され、第2次調査では、弥生時代後期の溝、古墳時代初頭の堅穴住居、古墳時代前期の堅穴住居、鎌倉時代の掘立柱建物、木棺墓、溝状造構、井戸状造構などが検出されている。



- 1区 調査区の大半が搅乱の影響を大きく受けている。わずかに遺存する遺構面でピット1基を検出した。
- S P01 長径50cm以上、短径30cm、検出面からの深さ8cmである。東側は搅乱によって失われている。遺物は出土していない。
- 2区 溝1条、土坑1基、ピット3基を検出した。
- S D01 調査区の西半部で検出した、長さ60cm、幅20cm前後、検出面からの深さ3cmを測る北西から南東方向に走る溝である。遺物は出土していない。
- S K01 調査区の東半部で検出した、直径75cm前後、検出面からの深さ8cmの土坑で、北側は搅乱によって失われている。遺物は出土していない。
- ピット ピットは直径25~30cm、検出面からの深さ10cm前後である。遺物は出土していない。
- 3区 調査区の北西隅付近や部分的に遺構面が確認されたのみで、大半が既存建物基礎による搅乱の影響を大きく受けている。遺構面はわずかに遺存するが、遺構は検出していない。
- 3.まとめ 今回の調査では、全体が大きく搅乱の影響を受けていたが、わずかに遺存する遺構面において遺構を検出している。しかし遺構からの出土遺物がなく、遺構面上からわずかに微細な土器片が出土したのみであるため、遺構の時期については不明である。上層の旧耕土からは中世の遺物が出土していることから、現状では中世以前であると考えられる。



fig. 195
調査区平面図



fig. 196 1区全景



fig. 197 2区全景

36. 戎町遺跡 第66次調査

1. はじめに

戎町遺跡は、妙法寺川に形成された扇状地の末端部に立地している。

これまでに60回以上の発掘調査を実施してきており、戎町遺跡は縄文時代晚期～中世までの幅広い時期に生活が営まれた遺跡だと判明している。特に第1次調査では、弥生前期の水田が発見されており、注目されている。



fig. 198
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅の建設に伴って、実施した。

基本層序

上層より、搅乱と盛土、淡灰褐色砂質土、灰褐色砂質土（第1遺構面基盤層）、黄褐色中砂～粗砂（旧河道最上層、第2遺構面基盤層）と堆積している。より下層は旧河道の堆積土層で、淡茶灰褐色系統の中砂～粗砂（旧河道上層）、茶灰褐色系統の砂疊層（旧河道中層）と続き、T.P.約11.8m以下の深度は未調査である。

今回の調査区で第1遺構面（室町時代遺構面）の標高がT.P.約13.3mであり、第2遺構面（旧河道上面）の標高は、T.P.約13.1mとなっている。

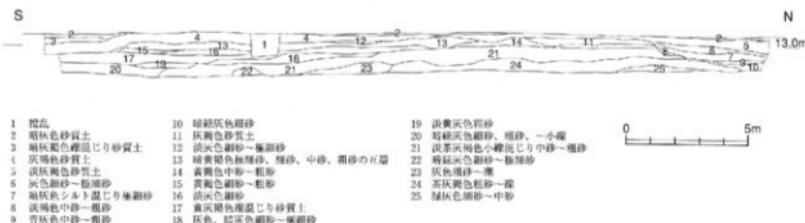
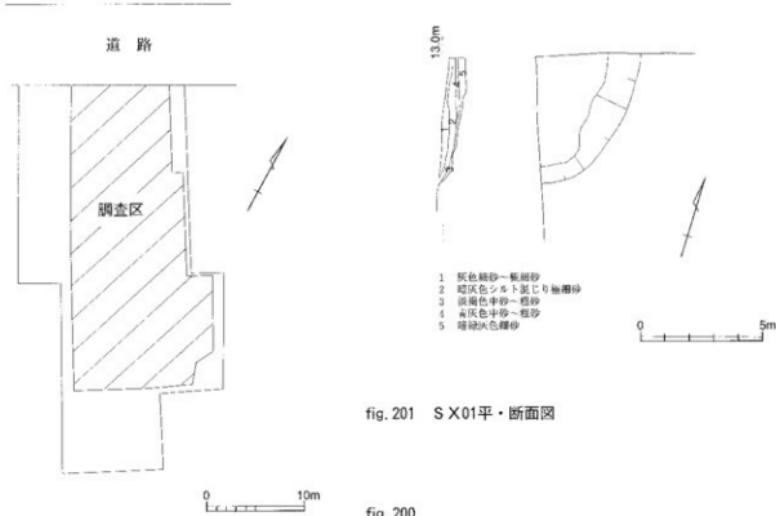


fig. 199 調査区西壁土層断面図

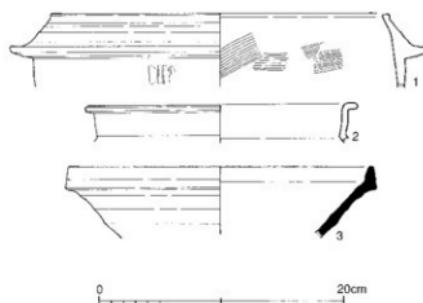


遺構と遺物 遺構は、第1遺構面で室町時代の水溜め遺構を検出し、第2遺構面で弥生時代後期～庄内併行期の旧河道を検出した。

遺物は、水溜め遺構から室町時代の須恵器と十師器が出土し、旧河道から弥生前期～庄内併行期の上器が出土した。

第1遺構面 室町時代の遺構面であり、水溜め遺構を確認した。

S X01 調査区の北西角で検出した、室町時代の水溜め遺構である。幅東西約1.7m以上、南北約2.1m以上、深さ約1.1mを測る。室町時代の羽釜を含む当該時期の須恵器と土師器、青磁が出土している。



第2 遺構面 弥生時代後期～庄内併行期の遺構面であり、旧河道を確認した。

旧河道 調査区の全面で確認した。今回の調査では、旧河道の肩は検出できなかった。旧河道の本流中央付近を調査したと考えられる。

旧河道上面から約1.3mの深度まで掘削したが、底部は検出できていない。より下層については未調査となっている。

遺物は弥生前期～庄内併行期までの土器が、混在して出土している。旧河道の時期としては、弥生時代後期～庄内併行期であると考えられる。

3. まとめ 今回の調査では、2面の遺構面を検出し、室町時代の水溜め遺構と弥生時代後期～庄内併行期の旧河道を検出した。

室町時代の水溜め遺構は、当該調査区の西側に近接した地区で実施した第65次調査でも、旧河道の上面で確認されている。埋没した旧河道に沿って、その上面の湧水しやすい部分を掘削している可能性も考えられる。

弥生時代後期～庄内併行期では、調査区内は全域が旧河道の内部であった。旧河道の肩が調査区内に存在しないため、その中央部付近を掘削したものと考えられる。前述の当該調査区に近接した第65次調査でも、調査区全域が弥生時代後期～庄内併行期頃の旧河道にあたっていた。遺跡に沿った西側に妙法寺川が流下しており、直ちにその本流の旧流路と断定できないが、あるいはそれは支流が存在した可能性が考えられる。



fig. 203 S X01全景

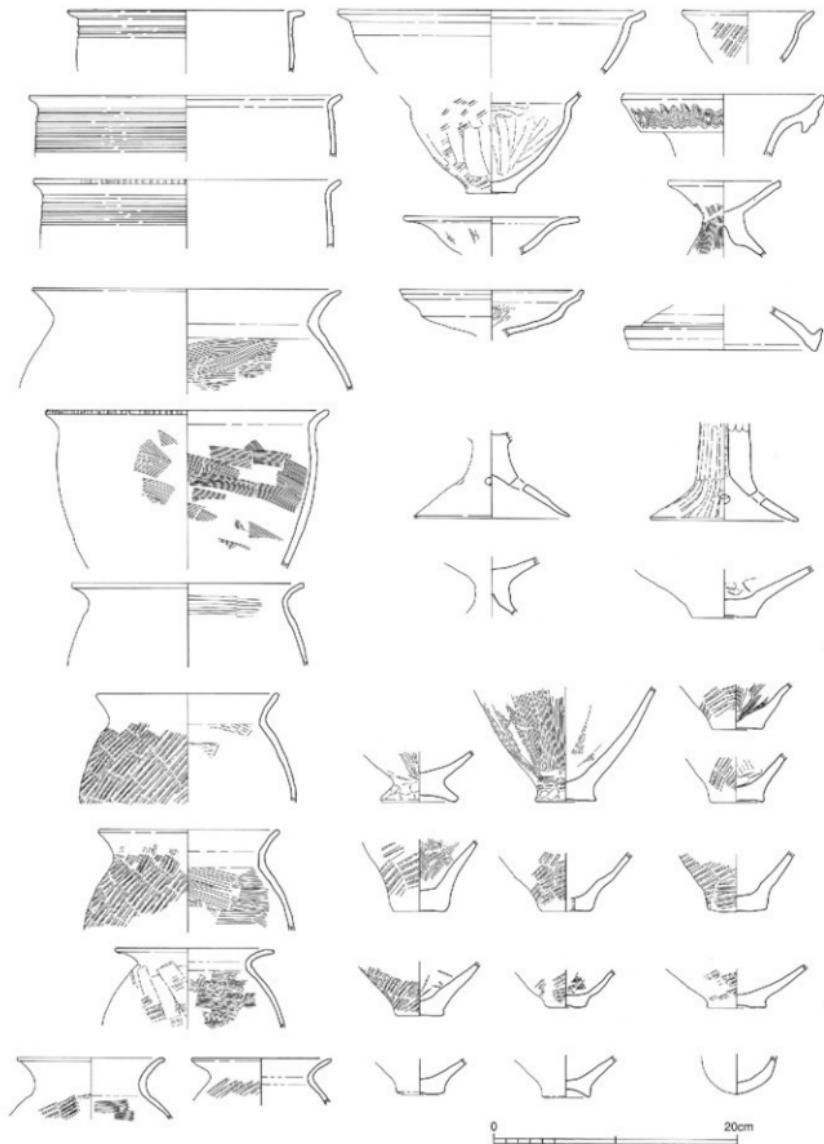


fig. 204 旧河道出土遺物実測図

37. 大田町遺跡 第14次調査

1. はじめに

大田町遺跡は、現在の妙法寺川の左岸に位置する遺跡である。当該地付近は古代より山陽道、近世には西国街道として流通の大動脈を担っていた。

この遺跡の平成2年に発見され、これまでに13次にわたる調査が実施されている。これまでの調査では、奈良時代～平安時代の掘立柱建物が20棟以上確認されている。特に第2次調査では、掘立柱建物群が規則的に配置され、土師器、須恵器、黒色土器、綠釉陶器や灰釉陶器などの都との関連を想起させる遺物が多く出土しており、古代山陽道に面することが考えられることから「須磨駅」の推定地とされている。また、第3次調査では出土した円面鏡に「荒田郡」の線刻された文字資料が確認され、古代の未知の郡名を示す一級資料が発見されている。



2. 調査の概要

今回の調査は社屋付住宅に伴う調査であり、建物の独立基礎部分を最終面まで調査し、地中梁埋設部分に関しては奈良時代～平安時代の造構面までの調査を実施した。

調査区は、東から第1トレンチから第5トレンチまで設定し、調査を実施した。調査地の地盤は軟弱で、安全確保のため詳細な調査は実施できない地区がある。

基本層序

旧地形の高低差により東西で土層堆積の違いがあり、東に比べ西のはうが面構成としては良好な状態である。全体に搅乱が著しく、上層は大半が盛土や擾乱である。その下層には青灰色を基本とする複数の旧耕土が連なっており、茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、橙褐色シルト質細砂（鋤溝面）、暗黒褐色粘質土（第1造構面、水田面）、褐色シルト質細砂、灰褐色シルト、明灰色砂質シルト、乳青灰色砂質シルト、乳灰色シルト、黒灰色粘土となっている。北から南へ下がり、東から西へも下がる緩やかに傾斜する地形である。

遺構・遺物

全てのトレンチにおいて、旧耕土が何層も確認され、近世に至るまで連續と水田經營がなされていた様子が窺える。茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土の平安時代の遺物を多く含む層の下面で、調査地の南側を東西方向に走る県道神戸明石線と平行方向の鋤溝を検出した。現道の神戸明石線は、古代山陽道の推定ラインであり、鋤溝の方向もその影響を受けているものと考えられる。

第1トレンチ・ 鋤溝面下層においては遺構等は検出していない、下層の灰褐色シルト、明灰色砂質シルト、乳青灰色砂質シルト、乳灰色シルトの各層において弥生土器片が少量出土している。

第2トレンチ 各層の面ごとに精査を行ったが、遺構等は検出していない。

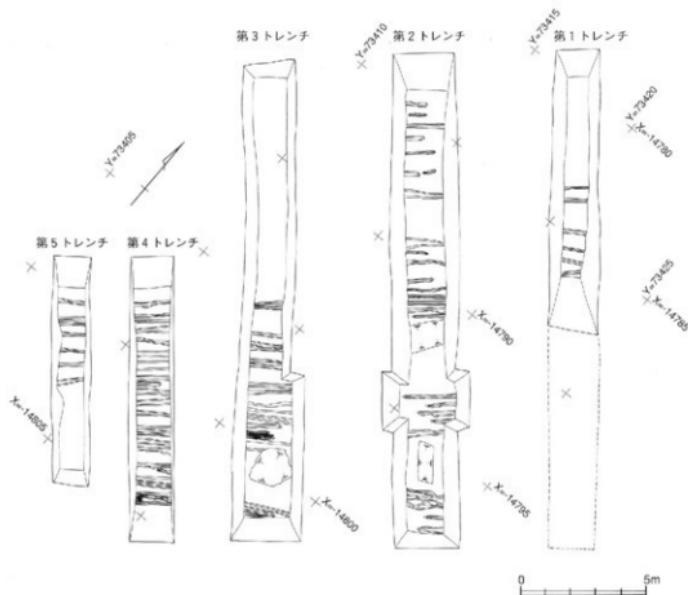


fig. 207
調査区平面図

第3 レンチ 南端で乳黄褐色粘質土の落ち込みを検出した。現歩道と調査地が接する地点であるため、崩壊を回避するために緩斜面の法面を設けており、更に南の状況は不明であるが、落ち込みの傾斜は、傾斜角が約10度（1mにつき20cm落ちる）の緩やかな落ちである。埋土である乳黄褐色粘質土からは、土師器片が数点出土するのみである。遺構面検出時には古墳時代から奈良時代、平安時代に至るまでの遺物が出土していることから、遺構面とこの落ち込みの時期は奈良時代～平安時代と考えることが妥当であろう。

さらに下層調査を行った第4ピットでは、乳褐色粘質土において、弥生時代中期の大型壺の口縁部が出土している。大型の破片であるため、周辺を詳細に精査したが、掘り込まれた遺構等は検出していない。しかし、断面観察では、乳褐色粘質土が落ち込む部分があり、大きな溝もしくは流路状の内部を掘削した可能性が考えられる。

第4 レンチ 第3レンチ同様の落ち込みが南端において検出された。落ち込み内の埋土は、2層に分けられるが遺物は極少量出土したのみである。

第5 レンチ 鋤溝面の下層において水田の畦畔を検出した。レンチの方向からは圃場を斜めに検出した形となり、畦畔がL字に検出された。おそらく長方形の圃場と考えられるが、北側については削平されており、畦畔は検出していない。圃場を構成する暗黒褐色粘質土は、第3・4レンチにおいても検出しているが、畦畔などは確認していない。



fig. 208 第3 レンチ南端落ち込み

3.まとめ

南端で検出した落ち込みは、古代山陽道が推定される現道である神戸明石線に向かって落ち込んでおり、出土する遺物は奈良時代から平安時代にかけてのものであることから古代山陽道の何らかの影響を受けた落ち込みと考えられる。第3トレンチでの落ち込みは、第5トレンチで検出した水田層の上層の鋤溝面から切り込んでいることから、水田層よりも新しい時期のものである。

水田面からは、古墳時代から奈良時代にかけての遺物が出土しており、今回の調査地の西側と北側で行われた第5次調査の折に確認された第3遺構面として報告されている水田面とも出土遺物の時期が重なることから、同一面と考えられる。周辺の状況から考えると、律令期に官衙的な施設の周辺にも圃場が広がっていたことが窺える。

当地区の律令期の風景として、官衙的な施設が存在したであろう地区から距離的には離れた地点ではないが、水田などの生産域が広がっていたことから、官衙的な施設を中心に取り巻くように集落が形成されていたわけではなく、周辺には水田などの生産域が營まれたいたことが窺える。古代山陽道の難所である須磨の入り口である官衙のあり方を知る上では貴重な成果といえる。

律令期より下層の調査は、調査区が狭小な上、現地表面から深度の深い調査であり、且つ湧水の伴う調査であったことから十分に調査を実施できていながら、各層に遺物が混入していることから周辺に弥生時代の遺構が確認できる地区が存在するものと考えられる。

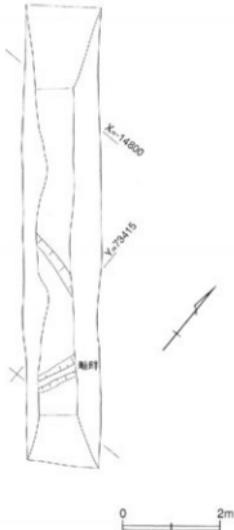


fig. 209 第5トレンチ水田平面図



fig. 210 第5トレンチ水田全景

38. 大田町遺跡 第15次調査

1. はじめに

大田町遺跡は、妙法寺川の左岸に形成された沖積地の自然堤防上に立地する。

当遺跡は平成2年に発見され、これまでに10回以上の調査が実施されている。これまでの調査では、弥生時代から中世にかけての遺物・遺構が確認されている。特に、奈良時代～平安時代にかけての時期には、掘立柱建物が多数検出され、縁釉陶器や灰釉陶器が出土し、また「荒田群」銘の陶硯片なども含まれていることから、官衙施設の存在が考えられ『須磨駅家』の比定地とされている。



fig. 211
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査地は北から南にかけて緩く傾斜する地形に位置している。調査の便宜上、2分割して実施した。

基本層序

上層より、厚さ50～30cmの盛土下に耕土・旧耕土が約30cm堆積し、南側ではわずかに遺物包含層が認められるものの、北側ではすぐに第1遺構面の基盤層となる淡灰褐色シルトとなる。この淡灰褐色シルトは層厚20cm程度で、直下に第2遺構面の基盤層である淡灰白色粘質土が20cm堆積し、さらに暗灰色シルト10cmを挟んで第3遺構面の基盤層黄褐色粘質土となる。黄褐色粘質土は10～20cmの層厚で、この下層には暗灰色粘質土が8～12cm程度であり、第4遺構面の基盤層である暗黄褐色粘質土になる。なお、暗黄褐色粘質土以下にも遺物が確認されているが工事影響深度を超えるため、以下の調査は実施していない。

調査の結果、4面の遺構面を確認し、とくに第1・2遺構面において掘立柱建物をはじめ土坑、溝、ピット等を検出した。

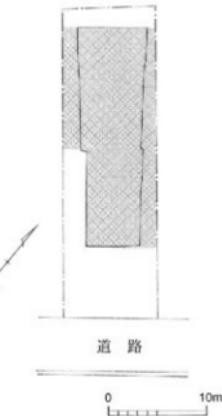


fig. 212 調査範囲位置図

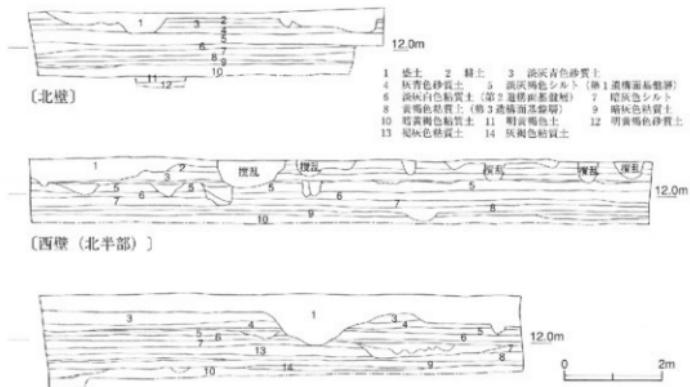


fig. 213
調査区土層断面図

第1遺構面 掘立柱建物2棟および土坑、ピット、耕作痕などを検出した。

S B01 調査区の北側で検出した2×3間以上の掘立柱建物である。柱掘形は径25~30cmの平面形が円形に近い隅丸方形で深さ20~35cmを測る。柱間は東西2.0~2.2m、南北1.5~1.8mである。調査区外の西方向へさらに拡がる可能性がある。

柱掘形から遺物は少量出土したが、いずれも細片で時期は特定できない。

S B02 S B01のすぐ南側で検出した1×3間以上の掘立柱建物である。柱掘形は径25cm前後の平面形が円形で、深さ15~35cmを測る。柱間は東西1.8~2.0m、南北1.8mである。調査区外の東および西方向へさらに拡がる可能性がある。

柱掘形から遺物は少量出土したが、いずれも細片で時期は特定できない。

ピット この他に約50基検出しているが、建物としてのまとまりは見出せていない。多くは調査区の南半分で検出している。柱痕跡の認められるものも含まれており、今後の検討によって新たな建物を確定・抽出できる可能性もある。

耕作痕 調査区のほぼ全域において東西・南北方向の耕作に伴う細い溝を検出した。いずれも幅10~20cm、深さ数cmを測るものである。切り合ひ関係から掘立柱建物やピット等の遺構に先行する。

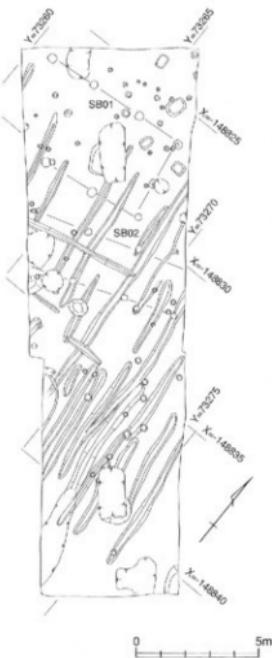


fig. 214 第1遺構面平面図



fig. 215 (左)
第1造構面全景

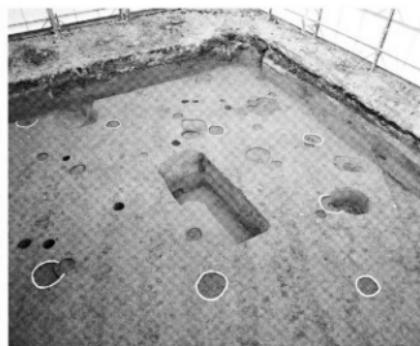


fig. 216 (右)
SB01全景

第2造構面

S B11

掘立柱建物 1 棟および溝を検出した。

調査区の南側で検出した 2×3 間の掘立柱建物である。柱掘形は概ね 40×90 cm を測る平面形が隅丸方形のもので、深さ $15 \sim 35$ cm を測る。柱間は東西 1.3 m、南北 1.7 m である。

柱掘形からは遺物が出土していないため、時期は不明である。



fig. 217 S B11全景

第3造構面 土坑および落ち込みを検出した。

土坑 調査区の南部を中心に不定形の土坑を 13 基検出した。遺物はほとんど出土していない。

落ち込み 調査区の中央部と南端において落ち込みを検出した。古墳時代のものと考えられる土器が少量出土した。

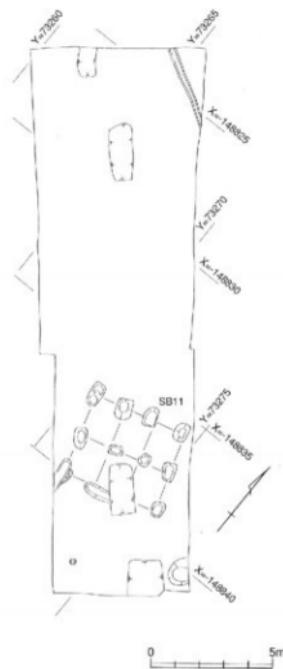


fig. 218 第2造構面平面図

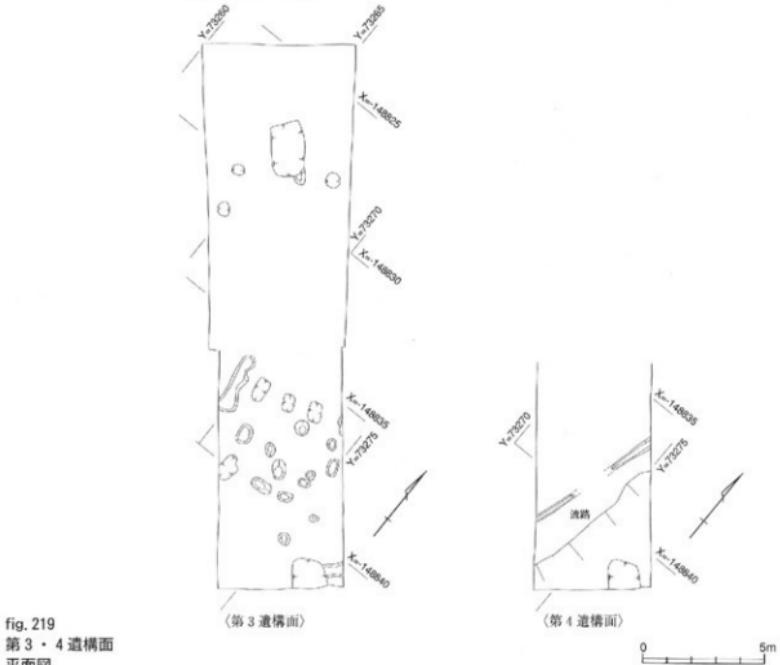
第4遺構面 調査区の南側で溝及び流路状の遺構を検出した。調査区の北半分では工事影響深度より低くなるため面的な調査は実施せずトレチによる確認のみを実施した。

溝 調査区の南部を南北に走る、幅20~40cm、深さ10cm前後の溝である。後述の流路と平行しており、流路の最終堆積に伴い形成された可能性も考えられる。

流路 調査区の南端において肩部を検出した、幅3.5m以上の流路である。緩く南方向に粘土・砂が互層に堆積している。遺物が出土していないため、時期については不明である。

3.まとめ 調査地周辺では、これまでの調査によって奈良時代～平安時代の掘立柱建物をはじめとして弥生時代～古墳時代の竪穴住居、弥生時代の水田跡などが確認されている。今回の調査においても、第1・2遺構面において掘立柱建物を検出した。検出した建物については、出土遺物が乏しく時期の決定は難しいが、うちSB01・02については、第1遺構面上から奈良時代から中世にかけての遺物が比較的多く出土しており、他の遺構から出土する遺物も同時期のものであること、柱掘形の形状などから平安時代のものと考えられる。

また第2遺構面以下の層において土壤化した土層は数層確認できたものの明確な水路、畦畔など水田跡に伴う遺構は確認できなかった。さらに断面調査の結果、第4遺構面以下についても弥生時代の遺物が含まれることを確認している。時期不明の遺構面などの解明とともに今後の調査に期待したい。

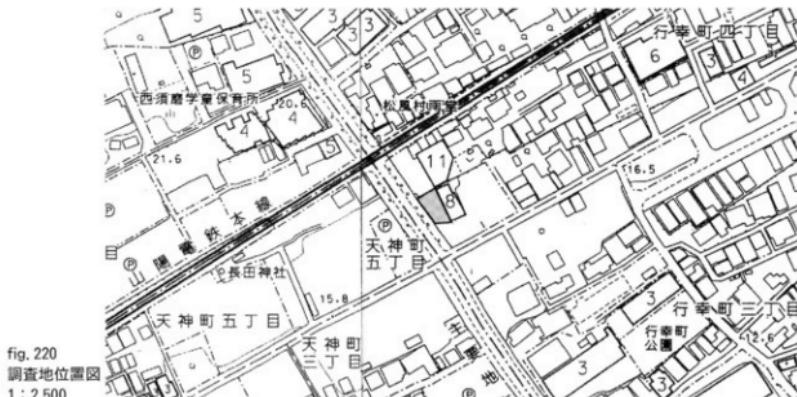


39. 行幸町遺跡 第8次調査

1. はじめに

行幸町遺跡は、風光明媚な須磨の地に立地しており、武庫離宮（現在の須磨離宮公園）の南に位置する遺跡である。当該地付近は古代より山陽道、近世には西国街道として流通の大動脈を担っていた。

当遺跡ではこれまでに7次にわたる調査が実施されており、飛鳥時代から奈良時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されている。特に、複数の調査地に連続して検出された大溝は、古代から中世にかけて埋没していることから、古代山陽道との関連を想起させる遺構である。



2. 調査の概要

今回の調査は店舗付住宅建設に伴うもので、調査地は須磨離宮線と須磨中央幹線が交差する北東角に位置している。南側には須磨中央幹線に伴う調査である第5-3・5次調査に隣接している。

今回の調査は、地中梁や独立基礎が密に設置されることから、当初は敷地全体を発掘調査の対象とした。しかし調査の進展とともに以前当地に存在していた建物の影響と考えられる搅乱が著しいことが判明した。以上の状況を考慮し、まず既存の調査成果から大溝の動向について把握が容易と考えられる南側について全面調査を実施した。調査の結果、南側の面的な調査では、遺構面の残存が少なく、わずかに南端部で大溝の一部と考えられる落ち込み等を検出したに止まった。北側については、トレンチを設定して確認調査を行い、損壊程度を確認したが遺構面が存在する層まで搅乱が達しており、遺跡が遺存していないためトレンチ調査のみで調査を終了した。

基本層序

搅乱が著しく、上層はほとんどが盛土や搅乱による層である。調査区の壁面では確認できないが、保存状態の良い上層では、乳茶褐色シルト質細砂（遺物包含層）、明黄褐色シルト質極細砂（遺構面）となっている。南北に傾斜する地形であるため、北側については削平により、層序の確認はほとんどできなかった。

遺構・遺物 南端において、東西方向の粗砂の落ち込みとそれに直行する粗砂が埋土の小流路を検出した。南端で検出した落ち込みは、検出面から25cm落ち込んでおり、南肩は調査区外となるため幅は不明である。埋土からは遺物は出土していない。直行する小流路は、検出面から25cm落ち込んでおり、幅は最も保存状態の良いところで98cmを測る。埋土からは、上部器片が少量出土したが、小片であり時期の特定はできない。

3.まとめ

南端で検出した落ち込みは、出土遺物がなく不明な点も多いが、検出状況から判断すれば第5-3・5次調査で検出された大溝の北側の肩部である可能性が考えられる。また、直行する小流路は、大溝が埋没していく過程において大溝に取り付く小流路と考えられる。大溝の方向は、第5-3・5次調査から北に方向を変えており、現在の南北方向の道路である須磨離宮線とほぼ平行する可能性が考えられる。

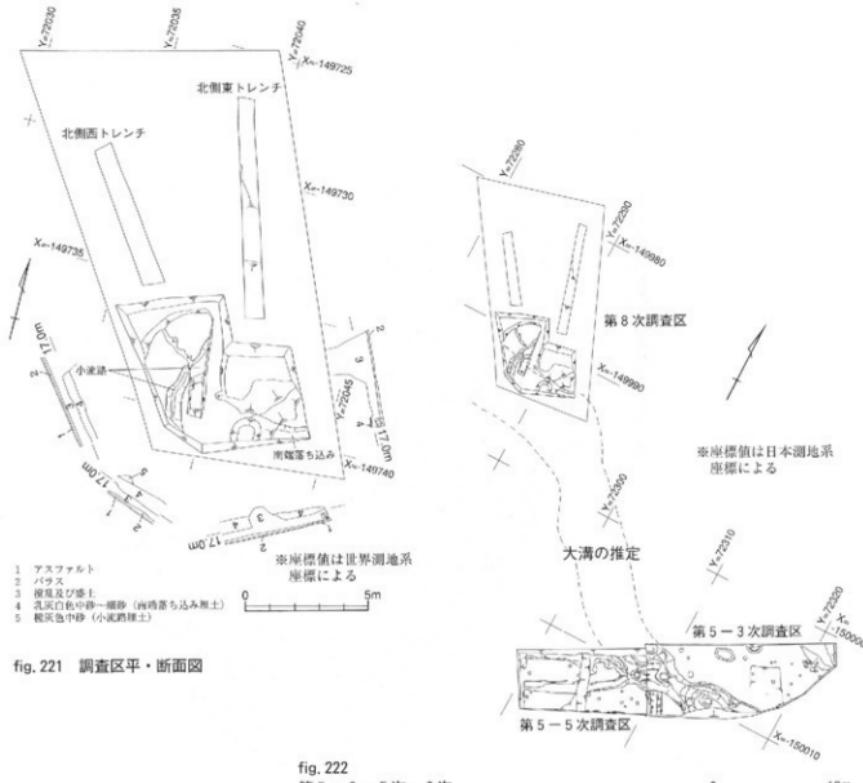


fig. 221 調査区平・断面図

fig. 222
第5-3・5次・8次
調査区平面図

40. 垂水・日向遺跡 第34次調査

1. はじめに

垂水・日向遺跡は、福田川が形成した右岸の平野に立地し、北側は低丘陵裾まで、南側はJR線まで、西方は天神川までの広がりをもつ。

当遺跡は、昭和62年度に初めて発見された遺跡で、これまでに30次を超える調査が行われてきており、縄文時代早期から中世にいたる複合遺跡として知られる。特に縄文時代の流木や木の葉、海浜に残された縄文人の足跡、古墳時代の竪穴住居、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物などが確認されている。



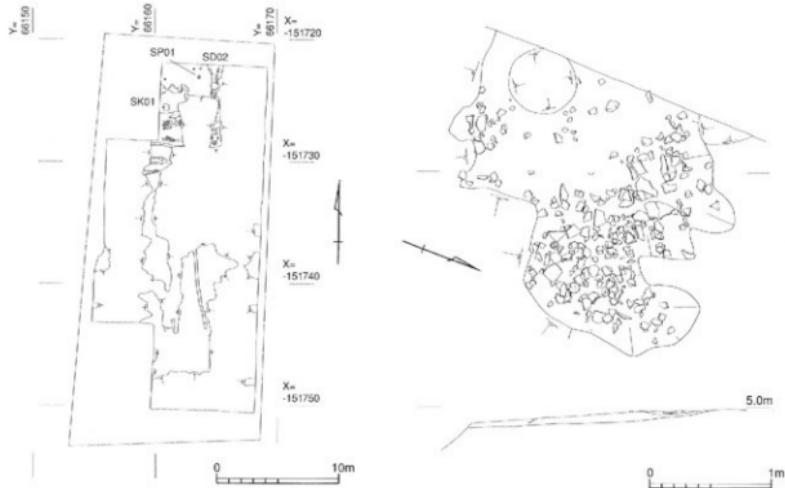


fig. 225 第1遺構面平面図

fig. 226 S X01平・断面図

第1遺構面 搾乱が著しいが、N区では遺構を検出した。土坑、溝、ピットがあり、平安時代から鎌倉時代にかけての時期のものと考えられる。

S K01 N区西北部で検出した不定形土坑である。東西約2m、南北約2m分を検出したが、西側は調査区外に延び、南側は近世溝S D01により削平されているため、本来の規模は不明である。深さは10cm弱と非常に浅く、茶褐色シルト質土ブロック混じりの黒灰色シルト質土を埋土とし、炭を多く含む。底面は北から南へ緩く傾斜する。遺物は須恵器甕を主体に、須恵器楕、須恵器鉢、土師器小皿、白磁などが出土した。

S P01 N区北端部で検出したピットである。直径約25cm、深さ約50cmで、埋土は灰色粘性シルトである。柱痕が遺存する。遺物は、土師器・須恵器・瓦器が出土している。

S D02 N区北端部で検出した溝である。幅30~70cm、深さ5cmで、埋土は暗灰色砂質土である。須恵器楕や瓦器楕等のほか土師器、陶器も出土している。



fig. 227 調査区北半第1遺構面全景



fig. 228 S X01遺物出土状況

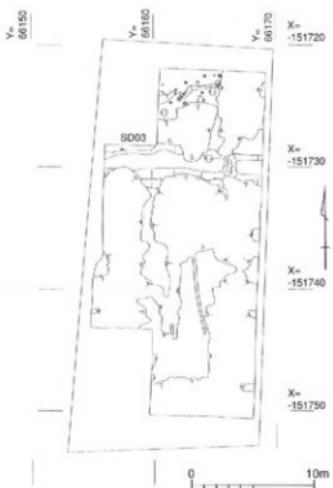


fig. 230 S D 03全景

fig. 229 第2遺構面平面図

第2遺構面 この遺構面も搅乱が著しいが、N区で溝、ピットなどを検出した。時期は平安時代末と考えられる。なお、S区では第1遺構面と第2遺構面が同一面での検出となる。

S D 03 N区で検出した東西方向の溝である。上部は搅乱で削平されており、本来の遺構の肩部はほとんど残存しない。幅約2.5m、深さ約80cmで、埋土は上層が灰色シルト、下層が暗灰色～黒褐色シルトである。東半に陸橋状に地山を削り出した土手が存在する。上端の幅は約40cmで、この土手を挟んだ溝底の高低差は、土手の東側が20cm程度低くなる。

完形品を含む須恵器椀・瓦器椀・白磁碗や土師器皿などが出土している。多くは北側から投棄されたか、あるいは流れ込んだ状態で出土した。下層からは木製品も出土している。また特徴ある遺物として、須恵器椀体部外面に「上」、白磁碗底に「十」の墨書きを確認した。

ピット群 N区北端で検出した。直径15～20cm程度、深さ10～40cmで灰色シルト質土を埋土とする。

暗褐色土上面 暗褐色土上面では遺構は確認していないが、偶蹄目足跡や人と思われる足跡を検出した。おそらくは耕作地として利用されていたものと思われる。

第3遺構面 暗褐色土を除去後に検出した。灰黄色粘土上面、あるいは褐灰色土の自然地形最終堆積土上面が遺構面となる。土坑、溝、ピット等を検出した。時期は、平安時代と考えられる。

S K 07 N区南で検出した土坑である。東側は搅乱で滅失しているが直径約45cmと推定され、深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色シルト質土である。遺物は出土していない。

S K 08 S区中央で検出した土坑である。長径80cm、短径65cm、深さ約20cmで、暗褐色～淡黒褐色シルト質土を埋土とする。遺物は、土師器が出土している。

S K 09 S区中央で検出した土坑である。直径70cm、深さ35cmで、暗褐色シルト質土を埋土とする。底はほぼ平らである。遺物は出土していない。

S K 11 S区北端で検出した2.5m前後の不整形土坑で、深さ約60cm。埋土は暗褐色～黒褐色シルト質土である。遺物は、須恵器、土師器が出土している。

- S D04 N区北端で検出した溝である。幅約60cm、深さ約5cmで、埋土は淡黒褐色細砂質シルトである。遺物は出土していない。
- S D05 S区中央東から南西方向の溝である。幅70~100cm程度、深さ10~30cmである。遺物は、土師器・須恵器が出土している。
- S P13 N区北端で検出したピットである。直径20cm弱、深さ12cmで、埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

下層確認トレンチ

第3遺構面の調査以後、基盤層である褐灰色土を掘削し、灰色粗砂上面において精査を実施したが、遺物は出土せず、調査区を「く」の字状に曲がる自然流路を検出したのみであった。ただし、これまでの発掘調査では、縄文時代中期や後期の土器、さらに下層で縄文時代の足跡や漣痕、アカホヤ火山灰などが確認されている。今回の調査地においても、それらが存在する可能性が高いため、基礎フーチングの底までを基準に下層を確認するためのトレンチ調査を行った。その結果、G L-2.5mまでは若干の植物遺体やシルト等の堆積はみられたものの遺物の出土はなく、足跡等も確認していない。

3.まとめ

今回の調査では、古代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。縄文時代の遺構・遺物に関しては、今回の調査範囲内では検出していない。東側の第27次調査では、縄文時代の巨木を含む流路の西端が確認されており、縄文時代の洪水砂は当調査地までは及ばない可能性が高い。また、弥生時代、古墳時代の遺構も確認していない。

平安時代の第3遺構面では、調査地全体に遺構が検出されたが、その後耕作地に変わり、第2遺構面の時期に東西の溝で区画される集落となる。このS D03は、東半に土手が存在することと堆積状況から流路としての役割ではなく、区画溝として機能していたものと考えられる。遺構は、溝より北側のみに存在し、南側では検出できなかった。遺物には墨書き器も出土しており、集落の性格については今後検討をする。第1遺構面の状況も同様であり、遺構は北半のみ検出している。

これまで、垂水・日向遺跡は主に再開発事業に伴って日向町および天ノ下町において発掘調査が実施されてきており、神田町では調査例が少ない。今回の調査はその間を埋めるものであり、貴重な資料となった。

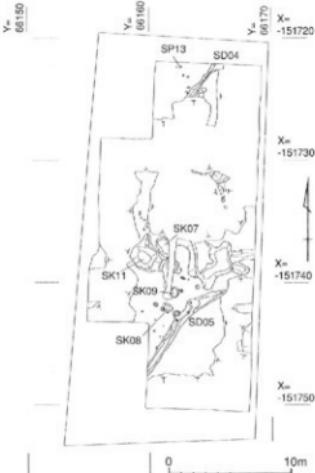


fig. 231 第3遺構面平面図



fig. 232 調査区南半第3遺構面全景

41. 舞子古墳群 第21次調査（東石ヶ谷2号墳）

1. はじめに

舞子古墳群は明石海峡北岸の通称舞子丘陵上に所在する古墳群である。古墳は丘陵頂部やそこから派生する小尾根上に分布し、それぞれ数基から10基で支群を形成している。舞子丘陵は六甲山系の稜線沿からは少し外れるが、構成される岩石は六甲山花崗岩で横穴式石室の構築に必要な石材の分布域に当る。

舞子古墳群は江戸時代中期以降現在まで比較的古くから周知されていたが、昭和50年代以降、丘陵西半は宅地化、東半は墓園の造成で周囲は急激な開発を受けるようになっていった。昭和52年以降には、古墳の事前調査を実施し、現在に至るまで、徐々にではあるが、舞子古墳群の実態を明らかにする資料の蓄積が行なわれている。



fig. 233
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴って実施した。今回の調査地は、舞子古墳群の中の東石ヶ谷支群内に位置している。

基本層序

現地表面下で墳丘盛土が確認でき、古墳の周溝には、自然堆積の後に墳丘盛土の崩壊による堆積が認められた。

遺構と遺物

今回の調査では、後円部とそれに伴う周溝を検出した。周溝は、広いところで、幅3.6mを測るが、後円部から前方部にかけて、南西方向を中心に部分的に巡らされていたと考えられる。これにより、平成13年度に実施した第18次調査成果とあわせて、ほぼ墳丘規模を確定することが可能となった。墳丘は、全長30.0m、後円部東西幅26.0mを測る。

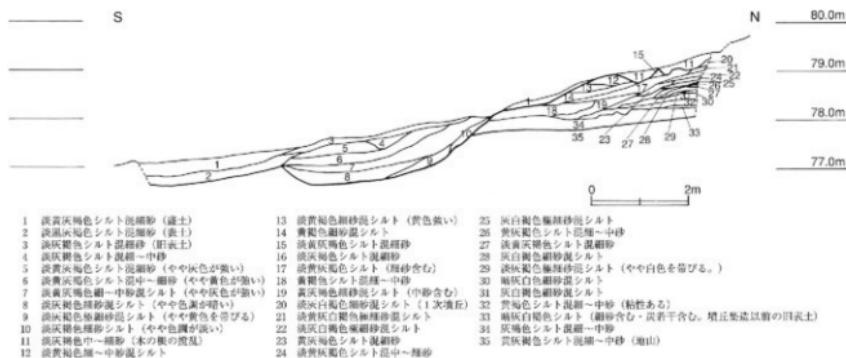


fig. 234 南側填丘断面及び周溝断面図

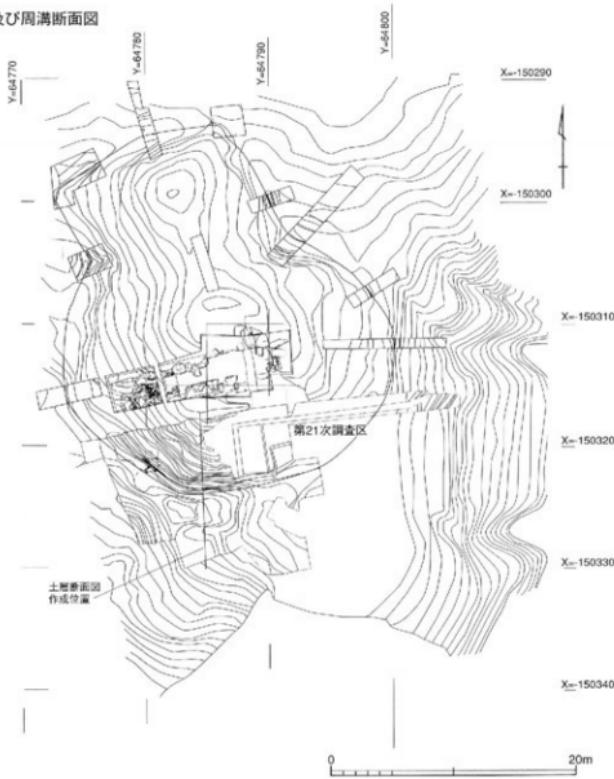


fig. 235
東石ヶ谷2号填
填丘測量図・調
査区地形測量図

今回の調査では、工事によって影響を受ける部分の墳丘については断ち割り調査を実施し古墳の墳丘の断面観察を行っている。その結果、墳丘は、まずその範囲を決めてから周溝を掘削し、基礎となる盛土を行っている。その後、石室を築くために地山の掘削を行い、石室を築きながら、まず1次墳丘として、石室を中心とした盛土を行う。この時の盛土は、淡黄橙色系と灰白色系の互層となっており、版築状にきつく突き固められている。1次墳丘が築かれた後に最終的な墳丘の盛土を行うが、それらの盛土は、1次墳丘の盛土に比べ、一度に盛る層の単位が大きく、明らかに1次墳丘とは作業の工程に違いが認められる。

なお、墳丘の西側には部分的に調査区内のセンターにおいて、T.P.27.7m付近で幅50cm程度の平坦面が認められる。テラスである可能性が考えられ、2段築成の墳丘であったと考えられる。また、石室の開口は西方向であるが、墓道は、南に折れ曲がっており、今回の調査において、その墓道の先端を確認している。その先端部分の床面が、テラスと考えられる淡面の平坦面の高さに一致することから、墓道は、後円部西南部分のテラスに開いており、石室の玄室床面もほぼテラスの高さに一致していると考えられる。よって、石室床面と墳丘テラスが一体として構築していたと考えられ、これらのことから考えてもこの古墳は2段築成であったと考えたほうが妥当といえよう。ただし、周溝ならびにテラスのいずれも墳丘東側では確認できていない。このことは、旧地形が北東から南西へと傾斜する地形を利用して構築している関係から、墳丘基底面が、北東から南西へと墳頂部より低くなっていることに起因していると考えられ、できる限り労力を減らしつつも墳丘を大きく見せるための工夫が感じられる。

出土遺物

今回の調査では、器台や子持台付壺、环蓋、高环等の須恵器や、極少量の土師器が出土している。第18次調査出土遺物と合わせて20点の図化を行った。(fig.239・240)

器台では、fig.239-5(以下単に遺物番号のみ示す)が前庭部～墓道埋土から多くの破片が出土し、3・12も石室開口部～墓道付近の攪乱から多くの破片が出土している。石室開口部～石室内での祭祀に使用された可能性が考えられる。

その他も、石室開口部に近い南西側墳丘端部から多くの破片が出土した場合、子持台付壺がほとんどであり、石室内～石室開口部付近で祭祀に使用された上器が、盗掘等により掻きだされたものとも考えられる。

子持台付壺は第18次調査出土分と合わせ3個体を図化した。原位置の推定できる遺物では、8が石室開口部～前庭部から出土している。石室内～石室開口部での祭祀に伴うものと考えられる。7は南西側墳丘端部や南東側周溝から破片が出土し、石室開口部～石室内に据えられた土器が破片で散乱している可能性が考えられる。9は周溝南東部から出土している。部分的な破片での出土であり、原位置は推定できない。

他に台付壺の11も前庭部～墓道での多くの破片が出土し、石室開口部～石室内と原位置が推定できる。

出土遺物については多くが後円部側の周溝から、墳丘側から崩れ落ちた状態で出土している。明らかに周溝周囲での祭祀に伴うと判明した出土遺物はない。

古墳の築造時期については、今回の出土遺物からTK10型式期(6世紀)と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、後円部の墳丘と周溝を確認した。また、平成13年度の調査では確認できていなかったテラスの存在を今回の調査によって確認できたことはひとつの成果であろう。さらに墳丘の断ち割り調査によって、この古墳の墳丘築造過程も明らかにすることができた。以上に加え、出土遺物からこの古墳がこの地域における最後の前方後円墳であることがほぼ確定的となったことも、この地域における古墳時代後期を考える上での貴重な資料の提供となった。

なお、平成11年度以前には今回の調査地及び北側隣接地には2基の円墳が所在するものと考えられており、それらの円墳はそれぞれ、東石ヶ谷2、3号墳と呼ばれていたが、第17次調査及び第18次調査の結果、2基の円墳が存在するのではなく、1基の前方後円墳が所在することが確認された。今回の調査成果を受けて、墳形や後円部周溝などの資料を追加することができたため、今後はこの1基の前方後円墳について東石ヶ谷2号墳と呼称することとする。



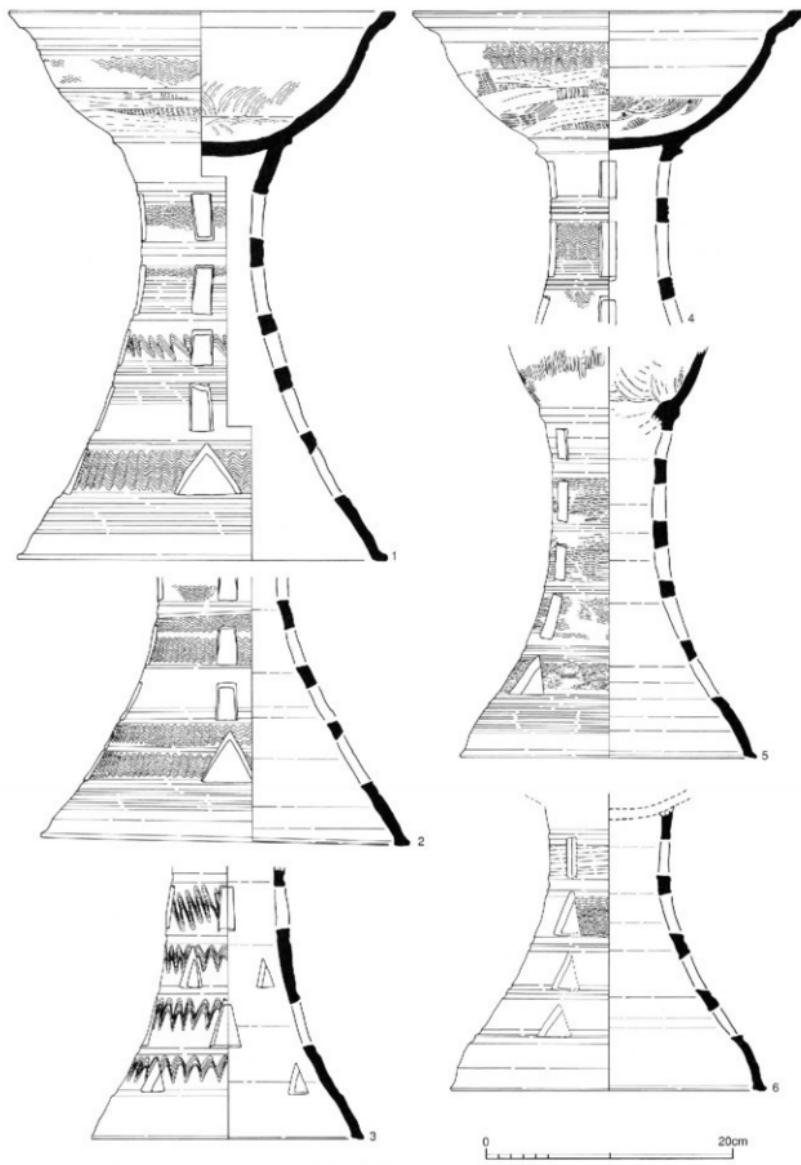
fig. 236 遺物出土状況



fig. 237 墳丘土層断面

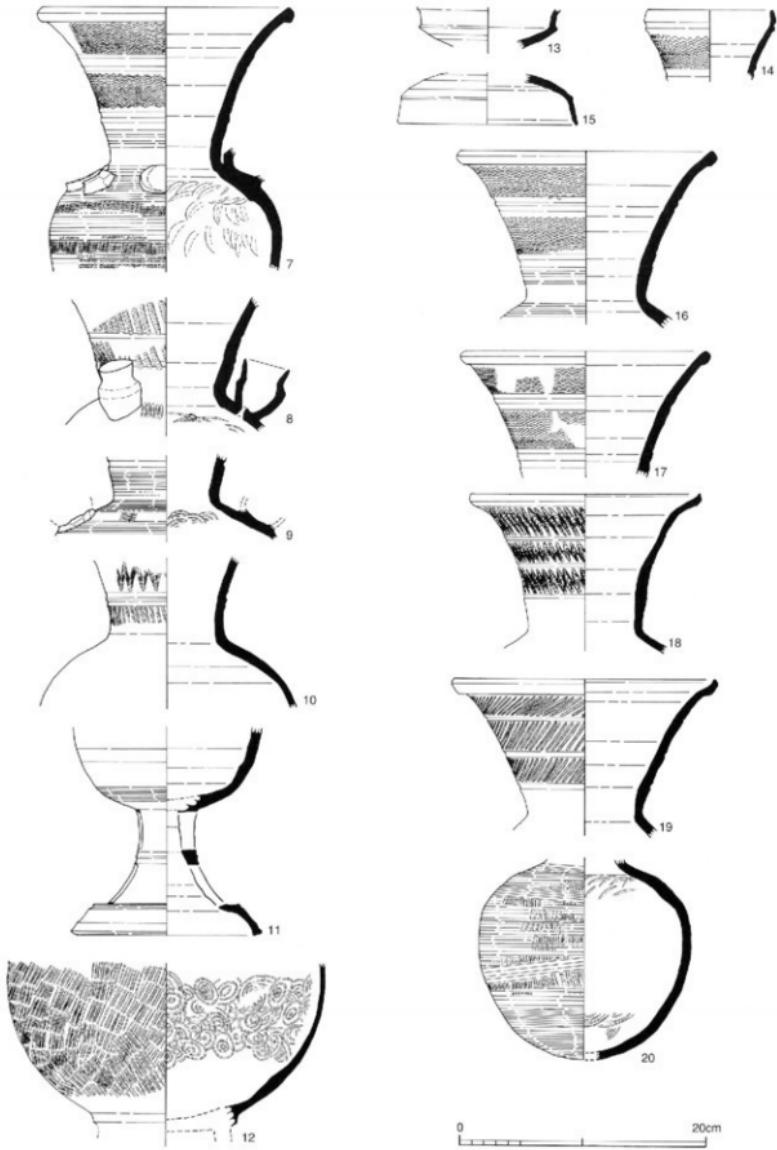


fig. 238
調査区全景



1・2・6：填丘出土 3：填丘と石室間口部～墓道付近の複雑出土
4：周溝出土 5：前底部～墓道出土

fig. 239 出土遺物実測図（1）



7・13・14・18・19：墳丘出土 9・10・16・17・20：岡漢出土 8：石室開口部～前庭部出土
11：前庭部～墓道出土 12：石室開口部～墓道付近の擾乱出土 15：表土出土

fig. 240 出土遺物実測図（2）

42. 伊川谷町潤和 所在確認調査

1. はじめに

調査地は、第二神明道路の南側に位置する東から西へ延びる尾根を中心とする山林部分及び畠地部分である。

平成18年度に、土地区画整理事業計画に伴い埋蔵文化財の所在を確認するため、山林部分において試掘調査を実施したところ、弥生土器と考えられる土器片や溝、落ち込みなどの遺構が確認され、周知の埋蔵文化財包蔵地として平成19年3月に神戸市埋蔵文化財分布図に潤和横尾遺跡として登録された。

平成18年度の試掘調査は事業地内のごく一部にすぎず、他の部分での遺跡の存在の有無、遺跡の広がりについては不明であったため、平成19年度も引き続き同事業計画地内において試掘調査を実施した。



fig. 241
調査地位置図
1:5,000

2. 調査の概要

今回は対象地内において地形が良好に残っていると考えられる地点、及び前回の調査で確認された埋蔵文化財の広がりを把握するため、先年度調査地の西側の尾根上と北・南側の斜面地等に幅1.5mのトレンチを設定して実施した。

なおトレンチ番号は平成18年度調査分に継続して設定し、調査着手順に6トレンチから付した。

6トレンチ

西へ延びる平坦な尾根上に東西方向に設定したトレンチである。

西端で落ち込みを検出した。深さ約50cmを測る。底部を含む弥生土器が出土している。

中央部付近では長径1.15m、短径0.8mを測る土坑を検出した。半掘したが遺物の出土はない。

東部で土坑を検出した。大半が調査区外であるが、径3m以上を測る。精査・検出時に弥生土器と思われる土器片が出土している。また、東端近くで直径40~50cmのピットを検出した。半掘したが遺物は出土していない。



fig. 242
6・7トレンチ
平面図

7トレンチ 6トレンチに直交する南北方向のトレンチである。北端の丘陵頂部の平坦面から北側へ落ちる斜面部流土中から、弥生土器の壺の縁部が出土した。摩滅が著しいものである。

北半では溝を検出した。幅約5m、深さ約55cmで、埋土下層に弥生土器を含む。

また、中央の6トレンチとの交点で、径8m程度の落ち込み状となる範囲に遺物包含層状の堆積を確認した。北側と東側は約30cmの段差を有する。この落ち込み南端の地山面上では直径約20cmと約40cmのビットを検出した。弥生土器と思われる土器が出土している他に、6・7トレンチ交差点付近で須恵器が出土している。

8トレンチ 小さく北へ張り出す尾根上に設定したトレンチである。等高線には表れない造成面が存在しており、3段に分かれ。削平を顯著に受けており遺構・遺物は検出していない。

9トレンチ 北側へ張り出す尾根上に設定したトレンチである。先年度の調査では明瞭な遺構を検出していないが、地形的にも遺跡が存在する可能性が特に高いと想定された地区である。

南端で土坑を検出した。直径約70cmで、検出時に遺物が1点出土している。中央寄りでビットを2基検出した。直徑約25~30cm、深さ約6~10cmで、遺物は出土していない。

10トレンチ 9トレンチに直交するトレンチである。東側南壁際で直徑30cmのビットを検出した。遺物は出土していない。

11トレンチ 東西尾根から北側への斜面地に位置するトレンチで、遺構・遺物は確認していない。

12トレンチ 3トレンチの南方に設定した。東西の主尾根から南へのびる尾根に位置する。標高60~61m付近で等高線を斜めに切る方向の溝を検出した。幅30cm、深さは数cmと非常に浅い。

13トレンチ 南西側から谷が食い込む沢頭に位置するトレンチである。両側は竹林で大きく造成されているが、道の部分は比較的旧地形を留めているものと推定された。南半で磁器、柿釉皿等が出土し、近世以降に改変を受けているものと思われる。

南端では地山が急激に落ち込み、土坑と落ち込みを検出した。いずれも弥生土器と思われる土器片が出土している。落ち込みは地形変更（造成）の痕跡の可能性もある。

- 14トレンチ** 12トレンチの南西側に設定したトレンチである。南へ延びる尾根の西側斜面にあたる。ほぼ腐葉土直下で地山となる。トレンチ中央で現在も目視できる縦みにつながる落ち込みを検出した。
- 15トレンチ** 南斜面に設定したトレンチである。遺構・遺物は確認していない。
- 16トレンチ** 南斜面の畑内に設定したトレンチである。上下2段に分かれる。北半南端では盛土を確認し、下段の南半はほぼ水平堆積である。北半南端の盛土下でピットを確認した。直径約14cmで、遺物は出土していない。
- 17トレンチ** 16トレンチ、18トレンチ間の谷地形に向かう斜面地に設定したトレンチである。腐葉土直下で地山となり、遺構・遺物は確認していない。
- 18トレンチ** 事業地南端の南および南東方向の平坦な尾根に設置したトレンチである。現状でも畠が存在しており耕作地としての利用が窺え、地山上でその畠と平行する溝状痕跡を確認した。近世以降に削平されている可能性も危惧されたが、中央部でピットや土坑を検出し、弥生土器と思われる土器や須恵器等が出土した。南側では21トレンチとの交点で土坑を検出したが、検出状況や染付等の出土から近世以降の畠耕作に伴うものと判断される。
- 19トレンチ** 18トレンチ北に直交するトレンチである。遺構・遺物は確認していない。
- 20トレンチ** 西側のトレンチで十坑、ピットを検出した。土坑は直径約35cmで、弥生土器の壺と思われる底部片が出土している。ピットは直径20cm前後を測る。
- 21トレンチ** 18トレンチ南で直交するトレンチである。交点近く北壁際で土坑を検出した。遺物は出土していないが、隣接する18トレンチの上坑と同様な形態をもつことから、近世以降の所産と思われる。なお、東側の中間層より弥生土器と思われる底部片が出土している。
- 22トレンチ** 南側に開ける谷地形に位置するトレンチである。中央部で土坑状のものを検出したが、かつて存在した住宅の基礎底の埋土と同様の埋土であり、新しい時期ものと考えられる。南東端の盛土直下で瓦片等が出土した。
- 23トレンチ** 東西尾根の西端に位置する平坦面に設定したトレンチである。表土の下層はやや土壤化した上が存在するが、即地山となる。表土からは須恵器片が出土している。西半で長径50～120cm程度の十坑を数基検出したが、遺構から遺物は出土していない。
- 24トレンチ** 23トレンチに直交して北側へ伸びたトレンチである。表土直下で地山となる。南端で直径約20cmのピットを検出した。
- 25トレンチ** 東西尾根の西端に位置する平坦面に設定したトレンチである。北半は砂礫土、中央部で西側からの谷地形の入り込みを確認した。南半は、23・24トレンチと同様な地山となる。南端の耕土直下で暗茶褐色砂質土を埋土とする、平面形が円形状の遺構の一部を検出した。竪穴住居の可能性が想定されたため、東側にその規模を確認するサブトレンチを設定し、掘削した。その結果、この遺構の東端部を検出した。検出状況から、この遺構は直径約8.5mの円形のプランを呈するものと想定され、竪穴住居である可能性が高いと考えられる。炭や焼土を含む部分もあり、弥生時代後期と思われる土器が出土している。その西側でピットを、北側でピット、溝を検出した。溝からは弥生土器が出土している。

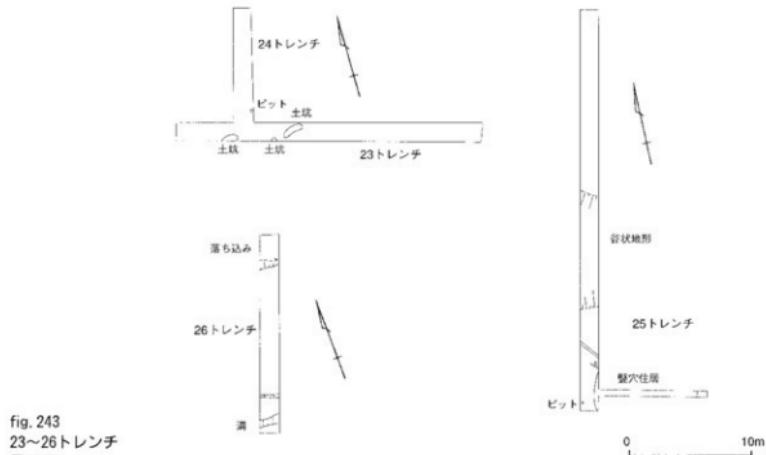


fig. 243
23~26トレンチ
平面図

26トレンチ 25トレンチの北側に設定したトレンチである。北端で弥生土器が出土する落ち込みが存在する。弥生土器は縁口縁（中期？）と高環脚部が出土した。南端では溝を検出した。

T.P. 1 南側に舌状に張り出す尾根上に設定した。地元等の話によると以前斜面部にガラ・残土等を相当量撒入して盛土しているとのことであった。坪掘りにより堆積状況を確認した結果、現表上下約2.2mまではアスファルトガラ等が混じる盛土で旧地表面にも到達せず、以下は掘削不能のため確認できていない。ただし、大きく削平を受けていないのであれば、逆に旧地形が保たれていると推定できる。

27トレンチ 26トレンチから北に設定したトレンチである。26トレンチの平坦面から降りる傾斜面であり、現在は竹藪となっている。薄い表土層として腐植土があり、流土である淡黄褐色疊混土が20~50cm堆積しており、その下層で地山を検出した。流土の中から土器片が2点出土したが、遺構は確認していない。

28・29トレンチ 25トレンチの東側、斜面の竹藪に設定したトレンチである。両トレンチとも遺構、遺物は確認していない。

30~33T.P. 都市計画道路出合新方線沿いにある畑地に設定したテストピットである。耕土直下で地山を検出した。遺構、遺物は確認していない。

3.まとめ 近世期に耕作等のため大きく地形の改変・造成を受けている部分があるものの、弥生時代の遺構・遺物を確認し、比較的良好に遺跡が残存することが判明した。特に25トレンチでは大型の竪穴居を確認し、集落の広がりを考える上で重要な資料となる。

また、須恵器の存在は、弥生時代以外の時代にも遺跡が営まれていたことを示しており、これまでに確認されていた弥生時代の遺跡という情報以上の成果を得た。

事業地の西端に接して弥生時代後期後半から末期に相当する馬掛原遺跡が存在する。さらに南側には臼杵遺跡など存在しており、これら周辺の遺跡と今回の調査地で確認された遺跡との関連を考えていく必要がある。

43. 高津橋岡遺跡 第9・10次調査

1. はじめに

高津橋岡遺跡は、明石川と櫛谷川の合流地点付近東側の、北から南へ延びる丘陵上に位置する。これまでに8次にわたる調査が行なわれ、弥生時代～中世の遺構、遺物が確認されている。今回の調査地付近における調査では、第5次調査において、13世紀頃の掘立柱建物、14世紀末～15世紀初頭の掘立柱建物、埋甕遺構、土坑墓等が検出された。また第7次調査では、弥生時代後期～中世の遺構、遺物が確認され、6世紀中頃の古墳の周溝の一部と考えられる溝が検出された。また、中世の溝、土塁状遺構の検出から、中世の居館の存在が推定されている。



fig. 244
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、第7次調査地に隣接する地区において2件実施した。いずれも工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。

第9次調査

1～4区の小調査区名を付して調査を設定した。

調査区内の基本層序は、宅地造成時に伴うものと考えられる盛土の下層に、部分的に旧耕土である灰色細砂が堆積し、その下層の黄灰色粘質土の上面で遺構面を検出した。

1区

直径20～90cm、深さ10～20cmを測るピット9基を検出した。遺物は出土していない。

2区

溝1条、ピット1基を検出した。

S D01

幅1.0m前後、深さ20cmを測る、やや西へ振る南北方向の溝と考えられる。遺物は出土していない。

S P10

S D01の上から切り込むピットで、直径15cm前後、深さ12cm、底部に礎石状に石を1個据えている。陶器片が出土している。近世以後のものである可能性がある。

3・4区

搅乱の影響により、遺構面は遺存していない。

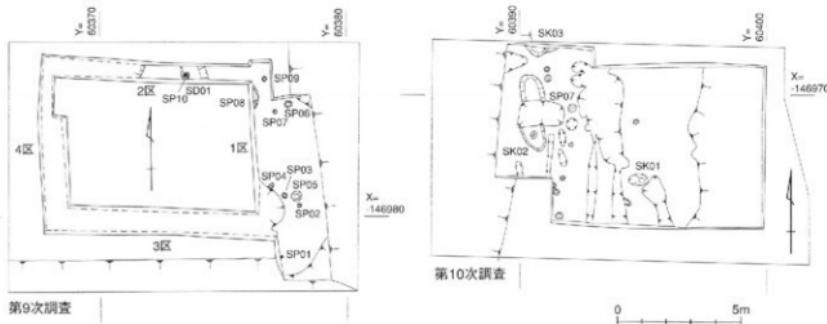


fig. 245 第9・10次調査区平面図

小結

今回の調査では、南西側が大きく搅乱の影響を受けており、遺構面を検出したのは1区と2区東半のみであった。検出したピットについては、いずれも建物等を構成するものかどうかを確認することができない。またSP10以外は出土遺物もなく、時期についても不明であるが、遺構面上層の旧耕土からは飛鳥時代頃の須恵器、中世の須恵器等が出土している。第8次調査の成果と合わせて考えると、大半が中世の遺構である可能性が高い。

第10次調査

基本層序

数枚の旧耕土の下層に存在する黄褐色粘質土上面で遺構面を検出した。なお、調査区の中央部と東側約1/3は、搅乱による影響を大きく受けしており、遺構面は遺存していない。

検出遺構

SK01

調査区中央部やや南寄りで検出した長径0.82m、短径0.4m、深さ7cmを測る土坑である。中世後半頃のものと考えられる土師器の他、土師器、須恵器の細片が出土した。

SK02

調査区西半部で検出した長さ3.2m、幅1.0m、深さ8cmの土坑である。中央部が搅乱により失われている。土師器、須恵器、陶器、白磁、火鉢と考えられる瓦質土器が出土した。中世後半頃のものと考えられる。

SK03

調査区西半部で検出した直径1.4m前後、深さ6cmの土坑で、調査区外へと延びるため、全体の規模は不明である。土師器、須恵器が出土している。

ピット

検出したピットは直径15~30cm、深さ10~25cmを測る。一部のピットから土師器、須恵器が出土している。建物等を構成するものであるかについては、確認できなかった。

小結

今回の調査では、調査区の東半部が大きく搅乱の影響を受けていたが、西半部では比較的多くの遺構を確認することができた。これらの遺構の時期については、出土遺物の大半が微細な細片であるため困難を伴うが、これまでの調査成果及びSK01・02の出土遺物から、中世後半を中心とするものと考えられる。

3.まとめ

今回の2件の調査では、搅乱の影響が大きいことなどから遺構面の残存状況が悪く、検出できた遺構は限定されたものであった。遺構からの出土遺物が小片であるためその所属時期についてはやや不明な点が多いものの、概ね中世後半を中心とする時期のものと考えられ、調査例があまり多くない当遺跡の状況を考える上で貴重な資料を得ることができた。

44. 今津遺跡 第19次調査

1. はじめに

今津遺跡は明石川東岸、条里が良好な状態で残される沖積地に立地する遺跡で、1980年以降これまでに18次にわたる発掘調査が行われている。明石川流域は弥生時代の集落が濃密に分布しているが、当遺跡においてもこれまでに、弥生時代前期～後期、古墳時代、平安時代、室町時代等の遺構・遺物が確認されている。特に今回の調査地の北200mの地点で行われた第1・2次調査で得られた弥生時代中期の遺構・遺物には顕著なものがある。



- S D04** 幅約80cm、深さ40cm程度を測る溝である。弥生土器が出土している。また、この溝の肩部で完形の弥生時代中期の壺が横転した状態で出土している。
- S K01** 2.0m以上×1.5m、深さ約40cmを測る、平面形が橢円形の土坑である。遺物は出土していない。
- S K02** 径約70cm、深さ約25cmを測る、平面形が円形の土坑である。弥生時代中期の土器が出土している。
- S X02** ごく一部を検出したに止まる。埋土は暗灰色粘土であり、溝の一部と考えられる。弥生土器と考えられる土器小片が出土している。
- S X03** 1～5区は西側の明石川に向かって緩く傾斜するが、ここに堆積する6a層中に完形に近い弥生土器等が点々と埋没している。川に近い湿地に土器を置く、あるいは捨てるという行為が行われたものと考えられる。
- S X04～06** 1・2区で検出した広くて浅い土坑である。各遺構から弥生土器が少量出土している。

3.まとめ 今回の調査で検出した遺構・遺物については量的には多いとはいえないが、完形となる弥生土器が複数出土するなど近くに遺構集中地点の存在を予期させるものといえる。調査地の東端は段丘の安定した基盤層であるが、以西はそこから明石川に向かって低く傾斜していく沖積地となっている。調査地の東側に遺構集中部の存在が推定できるかもしれない。

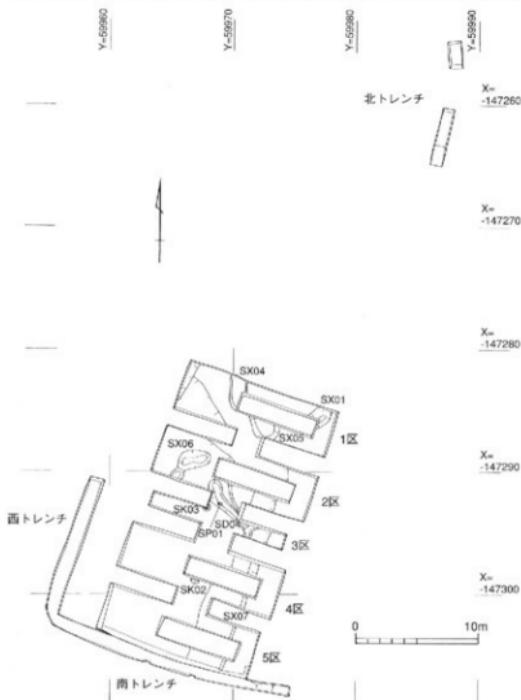


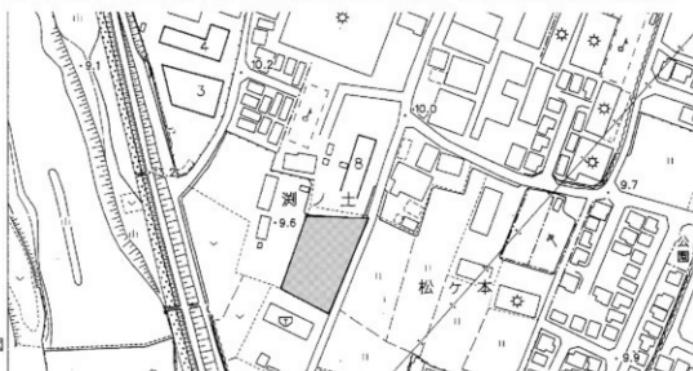
fig. 247
第2遺構面平面図

45. 今津遺跡 第20次調査

1. はじめに

今津遺跡は明石川東岸、条里が良好な状態で残される冲積地に立地する遺跡である。当遺跡ではこれまでに20回近い調査が実施され、弥生時代前期～後期・古墳時代・平安時代・室町時代等の遺構・遺物が確認されている。特に今回の調査地の北200mの地点で行われた第1次調査・第2次調査で得られた弥生時代中期の遺構・遺物には顕著なものがある。

fig. 248
調査地位置図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は工場建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。

調査の結果、遺構面を2面確認した。弥生時代中期を主体とする第2遺構面で、堅穴住居、掘立柱建物(?)、土坑、溝、土器溜り等の遺構を検出した。

基本層序

上層より、現表土の下層に4~5枚程度の水田土壤および表土層(2a~6a層)が存在する。6a層からは須恵器が出土し、その下面で牛の蹄跡を確認した(第1遺構面)。その下層7a層が弥生時代中期の表土となる。7a層下面で弥生時代中期を主体とする遺構が検出できるが、堅穴住居の壁立ち上がりなどはほとんどない状態であった。7a層の土壤化の進行によりその上位での遺構は検出していないが、遺物の出土状況などからも本来の遺構掘り込み面は遺構確認面よりも上位であると考えられる。



fig. 249 第2遺構面平面図

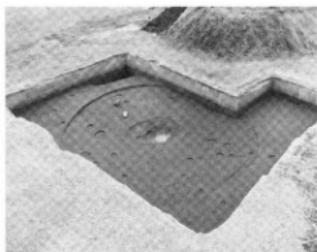


fig. 250 S B02全景

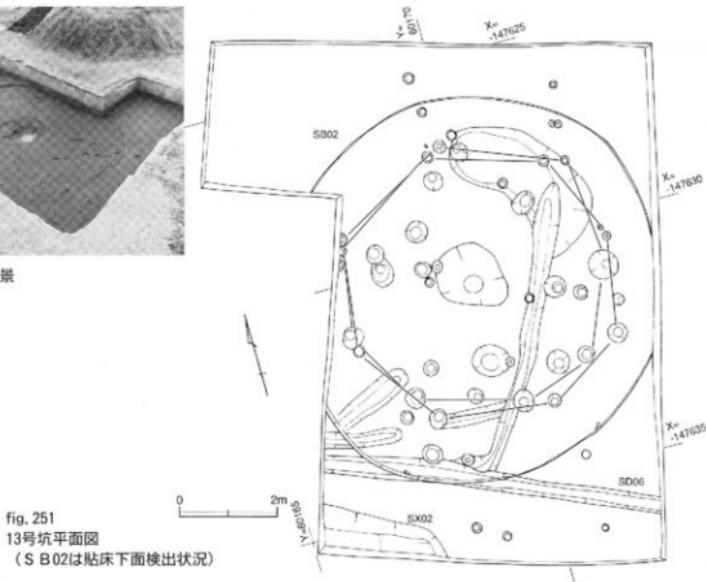


fig. 251
13号坑平面図
(S B02は貼床下面検出状況)

第2遺構面

S B01 9号坑・10号坑で検出した竪穴住居である。壁の立ち上がりは確認できず、床面の周壁溝・柱穴および貼床を確認した。平面形は円形で、復元径は8m程度である。

S B02 13号坑で検出した焼失住居である。焼け落ちた炭化材等が確認されるレベルで平面プランを検出した。壁の立ち上がりは数cmである。直径約8mを測る平面形が円形の竪穴住居で、床面から炭化材の他土器・石器・台石等が出土している。中央に直径1.3m程度、床面からの深さ45cmを測る炉が存在する。柱穴は8基検出し、直径は20~40cmを測る。貼床を除去した段階で新たに弧状に巡る柱穴等を検出した。建替えが行われたものと考えられる。

S P33・34 4号坑で検出した柱穴である。掘形の直径が40~50cmと大型で、両者の間隔は約2m弱を測る。掘立柱建物あるいは竪穴住居の柱穴の一部である可能性が高い。

S X01 12号坑で、第2遺構面検査面の上部、7a層で検出した弥生時代中期の土器溜りである。

S K04 12号坑で検出した、約110cm×約60cmを測る平面形が隅丸方形の土坑である。深さ約25cmを測る。弥生時代中期の壺、甕などが押しつぶされたような状態で複数個体出土している。

S K05 12号坑で検出した、約100cm×約80cmを測る平面形が隅丸方形の土坑である。深さは約30cmを測る。弥生時代中期の土器が出土している。

3.まとめ

今回の調査では竪穴住居2棟をはじめとする遺構を多く確認し、当調査区が今津遺跡の中で遺構の集中する部分であることが判明した。

既存の調査成果を考え合わせると、明石川左岸につづく土手状の微高地上に集落が営まれ、その東側の後背湿地部分は遺構密度が低くなっているものと判断される。

1. はじめに

今津遺跡は、明石川と櫛谷川との合流部付近の東側に位置し、その沖積地上に広がる遺跡である。

これまでの調査結果では、弥生時代中期の集落に伴う竪穴住居や木棺墓、土坑墓、漆棺墓等の他、弥生時代後期～庄内併行期の溝、布留式期の完形の土器を出土した落ち込み、古墳時代後期の大溝、水田、鎌倉時代の集落に伴う掘立柱建物、井戸等も確認している。



fig. 252
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序 上層より、表土、淡灰褐色砂質土（近世以降の耕作土）、黄褐色シルト混じり砂質土（近世以降の耕作土）、暗茶褐色砂質土（土壤化層、上面で近世以降のピットを確認した）、黄灰褐色シルト混じり砂質土（安定した地盤だが上面で遺構は確認していない）、淡黄灰色シルト（遺構面基盤層であり、弥生中期後半の落ち込みを確認した）、淡灰色シルト、淡灰色極細砂～細砂（洪水砂）と堆積している。

今回の調査区で、黄灰褐色シルト混じり砂質土（安定した地盤）の上面の標高がT.P.約9.7mで、遺構面（弥生時代中期後半）の標高はT.P.約9.6mとなっている。



fig. 253
調査区南壁
土層断面図

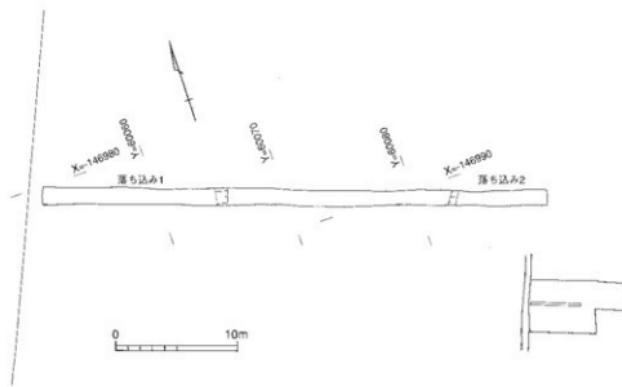


fig. 254
調査区平面図

遺構と遺物 遺構は、弥生時代中期後半の大きな落ち込みを確認している。

遺物は、主として落ち込み内から弥生時代中期後半の土器が出土した。

落ち込み 1 トレンチの西側で確認した、幅約22m以上を測る落ち込みである。落ち込み 1 の占める範囲は、トレンチ全体の約 $1 / 3$ より広い範囲となっている。深さは、工事の影響深度の関係で検出面から最大約60cmまでの掘削で止め、底部は検出していない。

堆積土層は、灰色砂混じりシルト、暗灰色シルト、灰色シルトの順に堆積している。この堆積土層の状況から、おそらく滯水していたものと考えられる。低湿地状の地形であったのだろう。

遺物は弥生時代中期後半の土器が、多く出土している。

落ち込み 2 トレンチの東側で確認した、幅約 8 m 以上で深さ約40cmを測る落ち込みである。黄灰色砂混じりシルトが堆積し、弥生時代中期後半の上器が比較的多く出土している。

自然地形の落ち込みである可能性が高い。

3.まとめ 今回の調査成果から調査地の歴史環境を復元すると、調査を行った中で最も古い時代では、調査地の近隣を流下する明石川と櫛谷川の氾濫原であった可能性が高い。その後地盤が比較的安定し、弥生時代中期後半には低湿地状の落ち込みが確認できる。この落ち込みからは遺物も多く出土している。周囲のより地盤の安定した地域では、集落が存在していた事実が理解できる。

より上層の黄灰褐色シルト混じり砂質土では、完全に明石川の影響から脱却した安定した地盤となり、上面に土壤化層も確認している。ただし今回の調査では遺構は確認していない。この安定した面の時期が判断できる遺物も出土していない。

この土壤化層の上面では近世以降のピットが確認でき、より上層は近世以降で近現代まで至る水田耕作土層が堆積している。周囲が宅地化する直前まで、耕作地として利用されていたことと考えられる。

47. 日輪寺遺跡 第10~12次調査

1. はじめに

日輪寺遺跡は、神戸市の西端近くを流れる明石川流域に所在する、中世および弥生時代末の複合遺跡である。当遺跡は、西神丘陵の段丘上に立地し、明石川と榎谷川の合流地点に近い丘陵先端部に位置している。

なお、今回の調査について平成20年度に『日輪寺遺跡第10・11・12次発掘調査報告書』を刊行しており、調査の詳細については報告書を参照されたい。



fig. 255
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は宅地造成に伴って、隣接する3地区について実施した。

今回の調査地は第4~7次調査地の西側隣接地に位置している。

基本層序

基本層序は3地区とも同様であるため、ここで一括して述べる。今回の調査地の現況地盤から遺構面までの間の堆積はわずかで、現地表下50cm前後で遺構面である地山層を形成する明褐色砂礫に達し、中世と弥生時代末の2時期の遺構を同時に確認した。

地山層より上位には旧耕土あるいは現況地盤を形成する土壤が2~3層認められるが、基本的には遺物包含層は存在しない。

第10次調査

中世の溝1条、土坑1基、落ち込み状遺構1ヶ所、ピット多数、弥生時代末の竪穴住居2棟、土坑1基、時期不明の浅い溝状遺構1条等を確認した。

中世遺構については、溝と落ち込みは16世紀頃埋没したものであることが出土遺物から判明している。土坑は12世紀初頭に人為的に埋められた可能性が高い。弥生時代の遺構については、出土遺物から弥生VI様式の時期のものであると考えられる。

S D06

調査区の南端で確認した幅約1m、深さ約5cm程度の浅い溝状の遺構である。調査区外に延びるため正確な形状・規模は不明である。出土遺物が少なく時期を確定することが難しいが、弥生時代の竪穴住居上に切り合っている。



fig. 256 調査範囲位置図

- S D07** 調査区の東端で確認した幅約1m、深さ50cm程度を測る、南北に走る中世の溝である。16世紀のものと思われる鍋を中心とした土師器が多量に出土している。その他12世紀初頭の時期を示す神出窯系の瓦当を含む瓦も多く出土している。調査区外に延びるため全長等は不明であるが、東隣で実施した第7次調査でも同一の溝（約半分程度）を確認している。
- S K08** 後述する弥生時代の堅穴住居のはば中央に穿たれた集石土坑である。弥生時代住居と切り合い関係にあるが、平面での確認は困難であり、断面でのみ確認した。断面から予測される規模は径2m程度の楕円形ないし円形で、深さは50cm程度である。内部に拳大の石を多数投棄している。石の間から12世紀初頭を示す須恵器およびS D07から出土したものと同じ神出窯系の軒丸瓦・軒平瓦の瓦当がそれぞれ1点出土している。
- S X01** 調査区北端で確認した、地山を不定形に掘り下げた落ち込みである。多くの16世紀頃の上器が出土したが、形状は不明瞭である。長辺約8.4m、深さ約1.0m程度を測り、南片は垂直に近い形で掘り下げているものの、それ以外の部分は不定形で外形の確認も難しい。出土土器は比較的大きな破片で、一括して投棄した廃棄土坑である可能性が考えられる。
- S B04** 調査区中央付近で確認した、直徑約11m程度、深さ約70cmを測る大型の円形堅穴住居である。砂礫層上に営まれていたため残存状態が著しく悪いが、ベッド状遺構を有する。床面、中央土坑等からも比較的まとまった量の土器が出土した。住居南側と東側でベッド状遺構が途切れて床面と同じ高さまで方形に掘られており一見床面の張り出し部のような形状を呈する。東側張り出し部の底面で土坑を確認しており、住居内の貯蔵等に伴う設備の痕跡の可能性が考えられるが、鉢鉢状の断面系を呈し、ベッド状遺構上で複数柱穴を確認しているため柱穴とも考えられる。
- S B05** S B04の南東方向で確認した堅穴住居で、S D06によって一部欠損しており、また南半分は調査区外に延びる。残存状況が悪く、床面、周壁溝、中央土坑を一部確認しただけである。全体的な平面形や大きさなどは不明である。出土遺物は細片で、中央土坑内には炭化物の堆積が認められた。

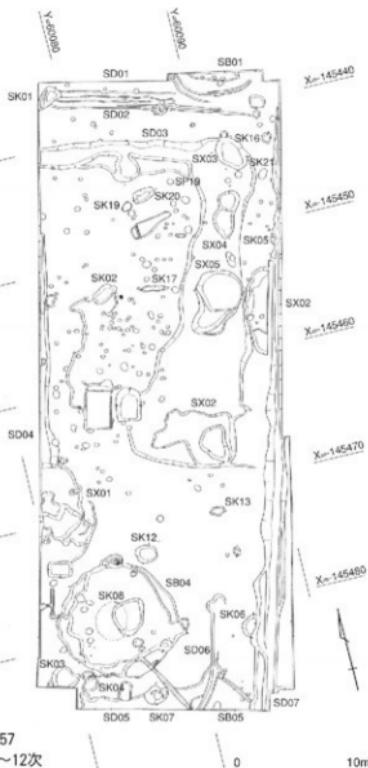


fig. 257
第10～12次
調査区平面図

第11次調査

調査の結果、中世の溝状遺構3条、ピット多数を中心には弥生時代末の土坑1基、弥生時代末の竪穴住居と土坑が切り合ったものである可能性が高い落ち込みを1基確認した。

中世遺構については、出土した土器が細片のため明確な時期を確定することが困難で、弥生時代の遺構については、出土遺物から弥生VI様式の時期のものであると考えられる。

S D01 調査区の最北端で確認したのは幅50cm、深さ10cm程度の浅く細い溝状の遺構である。細片だが中世のものと思われる土師器が出土している。調査区外に延びているため全長などは不明である。

S D02 S D01南隣でS D01と並走し、規模もほぼS D01同様の溝状の遺構で、遺物の出土状況もよく似ている。調査区外に延びているため全長などは不明である。

S D03 S D02より1m程度はなれて、ほぼS D01、02と並行に走る溝である。中世の土器片が出土しており、おそらく16世紀頃埋没したものと思われる。

S X01 調査区中央付近で確認した弥生時代末の土器を出土する落ち込みである。平面検出時円形に確認したことや、比較的まとまった量の土器が出土したため竪穴住居の可能性も考えられたが、掘り下げた結果中心部が1m近く不定形に下がるなど、竪穴住居として明確なプランを確認することが困難であった。また遺構のほぼ中央が現代に搅乱されており、ますます適切な平面形の確認を困難にさせたものである。断面による埋土堆積状況の観察の結果、おそらく竪穴住居の上に後世の搅乱坑がうがたれたため今回のような検出結果になった可能性が高いと思われるが、搅乱された時期も最初の遺構の時期と大差ないのでないかと考えられる。弥生時代末の竪穴住居が廃絶後ほどなく何らかの理由で掘削され搅乱された可能性を考えている。



fig. 258
第10~12次調査区
全景

第12次調査

調査の結果、中世の溝4条、落ち込み状遺構2ヶ所、井戸状遺構1ヶ所、ピット多数、弥生時代末の竪穴住居2棟、土坑1基などを確認した。中世遺構については、井戸と落ち込みは16世紀ごろ埋没したものであることが出土遺物から判明している。弥生時代の遺構については、山上遺物から弥生VI様式の時期のものであると考えられる。

S D01 調査区の最北端で確認したのは幅50cm、深さ10cm程度の浅く細い溝状の遺構である。細破片だが中世のものと思われる土師器を出土している。調査区外に延びているため全長等は不明である。

S D02 S D01南隣でS D01と並走し、規模もほぼS D01同様の溝状の遺構である。遺物の出土状況もよく似ている。調査区外に延びているため全長等は不明である。

S D03 S D02より1m程度離れて、ほぼS D01、02と並行に走る溝だが、東側で不定形に広がり平面形が崩れている。平面形が不明瞭な箇所は部分的に深く落ち込み、埋土からは16世紀の土師器を中心とした器片が多く出土している（S X02、03、04）。

あるいは16世紀頃埋没した不定形な廃棄土坑上に後世構が掘り込まれたもの可能性も高いが、溝は東隣の第7次調査では検出されていないことから、今回検出した範囲がこの遺構の東の先端であることは間違いない。西側は調査区外に延びているため全長等は不明である。

S D07 調査区の東端で確認したのは幅約1m、深さ50cm程度の南北に走る中世の溝である。16世紀のものと思われる鍋を中心とした土師器を多量に出土している。その他12世紀初頭の時期を示す神出窯系の瓦当を含む瓦も多く出土している。

調査区外に延びているため全長などは不明であるが、東隣の第7次調査において今回検出した溝と同一の溝を検出している。

S X02~04 S D03検出中に、その一部が深く不定形な落ち込み状を呈したため、これを区別して不定形遺構とした。S D03からの遺物の出土量がごくわずかであるのに比べ、これらの落ち込みからは多量の16世紀の土師器や瓦などが出土した。破片も大きく、一括で廃棄するための上坑である可能性が考えられる。

S X05 S D07の西側に位置する直徑3.2m程度の平面形が円形の遺構である。深さは約2.5mまで掘削したところで湧水層に達したためさらに下層についての掘削は行っていない。

16世紀の鍋を中心とした土師器などが多量に出土し、それらに混じって強く2次焼成を受けた12世紀初頭の神出窯系の軒丸瓦や20cm四方程度の石材の一部等が出土した。

S B01 調査区北端で確認した、直徑約6.4m程度、深さ約40cmの平面形が円形の竪穴住居である。円形の平面に高床部を有するタイプである。北側が調査区外に延びるため全体の規模等は不明である。

S B02 S D07に切られて一部欠損しているが、第7次調査において東半分が確認されていたものである。南側に高床部が明瞭に認められるが、北側は不明瞭である。南北約9.5m、深さ約30cmを測る。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代末の竪穴住居、中世の寺域の区画と考えられる溝や井戸等の遺構を検出した。11世紀末～12世紀初頭の瓦が多数出土しており、これまで不明であった口輪寺の創建年代等を考える上で貴重な成果を得たものといえよう。

48. 芝崎遺跡 第4次調査

1. はじめに

芝崎遺跡は、明石川東岸の洪積段丘上に立地する遺跡である。

昭和58年度の国道175号線拡幅による個人住宅建替工事に伴う調査が実施されて以降、これまでに実施された国道175号線拡幅に伴う調査などにおいて、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代、中世の遺構、遺物が検出されている。

また、当遺跡の北側には、中世～近世初頭の福中城跡が所在する。

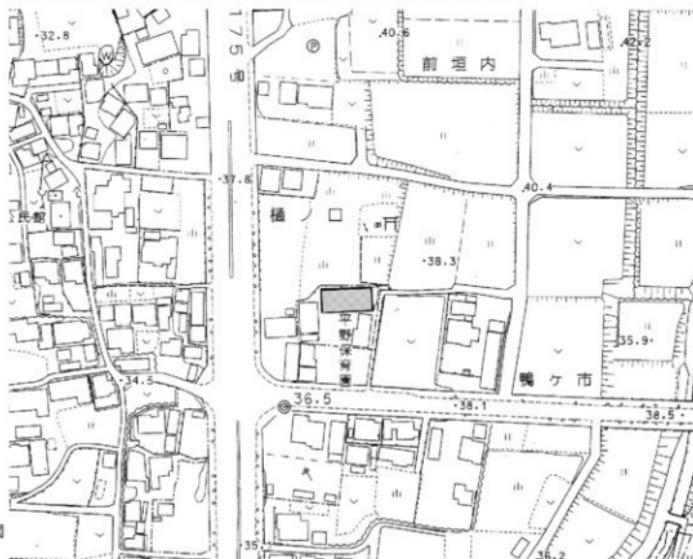


fig. 259
調査地位置図
1:2,500

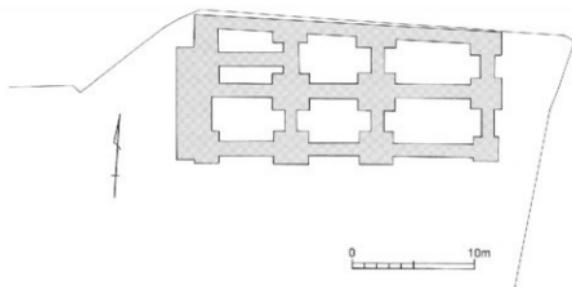


fig. 260
調査範囲位置図

2. 調査の概要	今回の調査は保育園園舎建替工事に伴うもので、工事による掘削が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。調査地は昭和58年度調査地の東側に近接している。
	調査地は現地表から比較的浅い深度で遺構面が検出されることが、試掘調査により判明したため、建物工事範囲を全面掘削し、遺構検出を行った後、基礎部分のみ遺構の掘削作業を実施した。尚、基礎形状から1～10区を設定して、記録作業、遺物の取り上げを行なった。
基本層序	整地層・盛土層下に旧耕土の灰色砂質シルト、旧床土の暗黄褐色砂質シルトが存在する。この下層に中世の遺物包含層である灰褐色砂質シルトが堆積し、その下層の黄褐色シルト上面で遺構面を検出した。
検出遺構	井戸、溝、土坑、ピットを調査区全体において濃密な分布状況で検出した。
溝	14条の溝を検出した。
S D01	調査区の東端で検出した幅2.3～3.3m、検出面からの深さ55cm前後を測る南北方向の溝である。埋土は下層に灰色粘質土が堆積し、その上層に地山層である黄褐色シルトを含む灰褐色シルトが堆積していることから、溝として機能している時期は水が滞水している状況であったと考えられ、その後短期間に埋められたものと推定される。14世紀後半～15世紀にかけての時期を中心とする、土師器皿、煮炊具、須恵器碗、鉢、甕、陶器、白磁、瓦、瓦質土器火合等が出土している。その大半は上層の灰褐色シルトからの出土であり、下層の灰色粘質土からの遺物の出土はごくわずかである。区画溝などの性格が考えられる。
	この他、検出した溝は、東西及び南北方向のものが主体であるが、S D07の様にL型の形状を呈するものがある。雨落ち溝とするには深さが深いことから、建物に伴う区画溝等の性格を持つ可能性も考えられる。S D07からは、土師器、須恵器などが出上している。出土遺物は14世紀代の時期が考えられる。
井戸	2基の井戸を検出した。共に狭小な調査範囲や、壁面の崩落の危険性から、底部までの完掘作業は実施できなかった。
S E01	調査区南西角で検出した井戸である。掘形は直径2.2m以上で、調査区外の西側及び南側へと続く、掘形内に人頭大から一抱えほどの石材を用いて、内法直径1m前後の石積みの井戸側を設けている。土師器、須恵器、陶器などが出土している。
S E02	調査区北西部で検出した井戸である。掘形は東西3.5m、南北2.6m以上で、堀形内に方形の木組み井戸側を設けている。南半は調査範囲外となるため、完掘は実施していない。井戸側は縦板組隅柱横桟型に分類されるもので、2段の井戸側を確認したが、上段は検出作業中に上部により崩落し、下段以下は激しい湧水と、壁面の崩落の危険性から完掘作業が実施できなかった。上段は北辺の状況から5～6枚の縦板を組み、角は内法角に支柱を設けて横桟で補強している。下段との間は横桟を井桁状に組み合わせて2段組みとし、下段の横桟の外側に下段井戸側縦板を確認した。北辺の検出状況から一辺5枚程度の縦板を用いているものと考えられる。
	井戸内及び掘形内から多くの遺物が出土し、土師器、須恵器碗、甕、丹波焼などの陶器、木製品などが出土している。概ね15世紀後半まで機能した井戸と考えられる。
土坑	調査区西半部、北側で大型土坑6基を検出した他、20基を検出した。

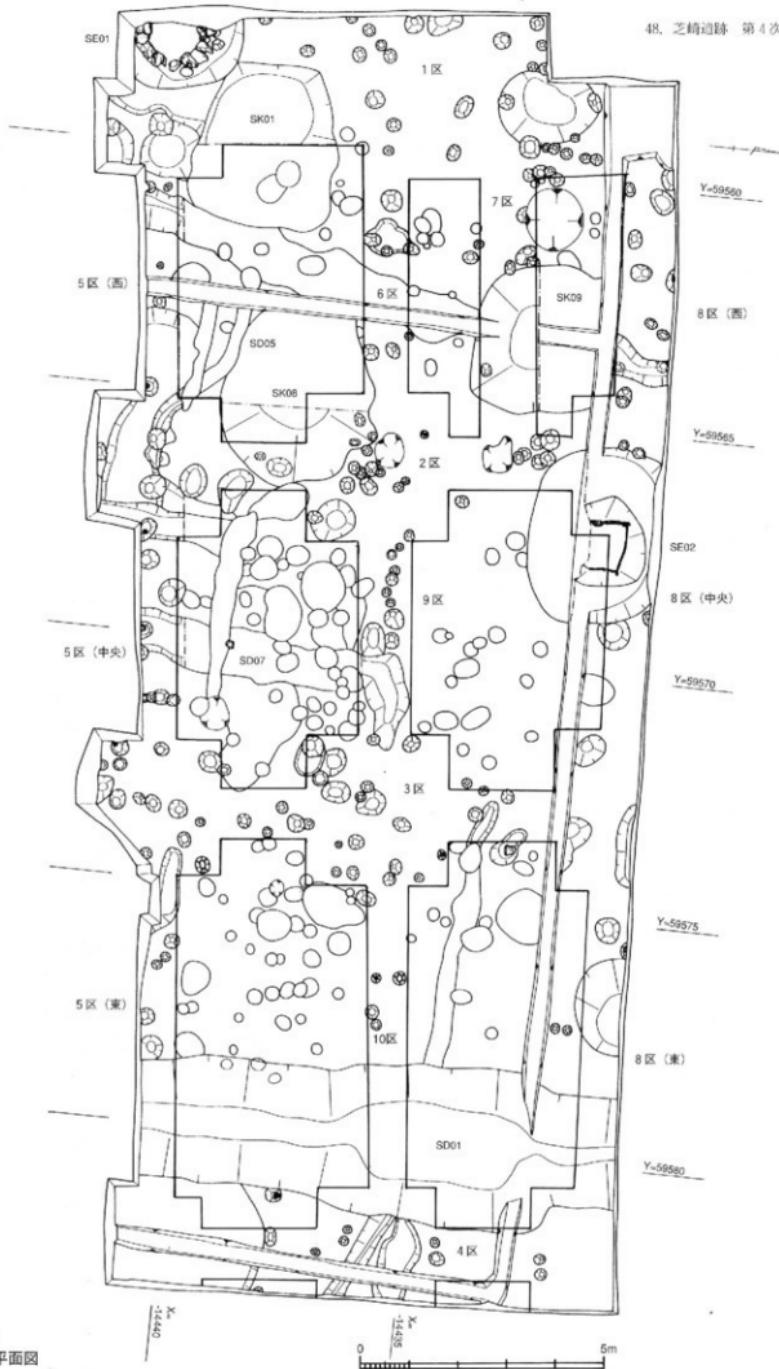
fig. 261
調査区平面図



fig. 262 S E 01全景



fig. 263 S E 02全景

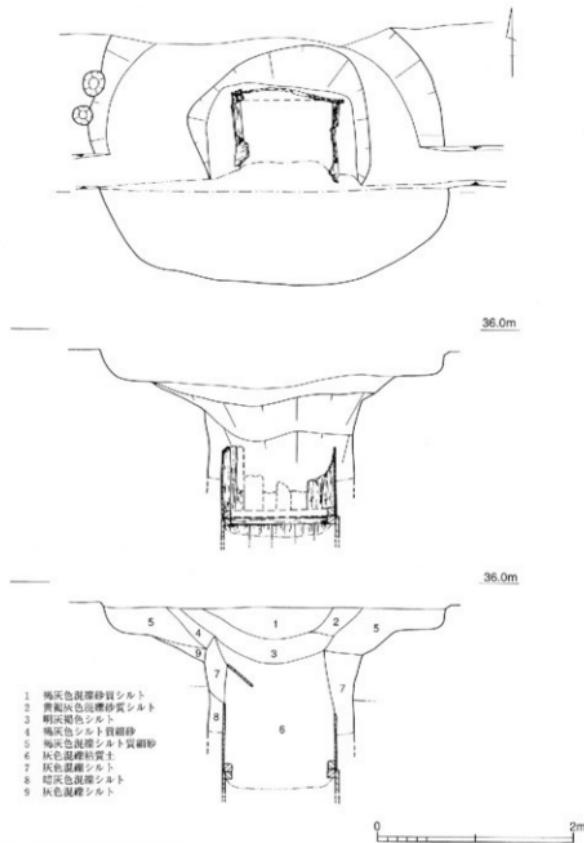


fig. 264 S E 02平・立・断面図

- S K01** 調査区南西角付近で検出した、東西3.3m、南北2.9m前後、検出面からの深さ70cm前後の大型土坑である。南西側をS E01に切られている。東半は調査範囲外となるため、完掘は実施していない。土師器、須恵器、陶器、青磁などが出土している。
- S K08** 調査区西半部南側で検出した、東西3.5m以上、南北3m前後、検出面からの深さ55cm前後の大型土坑である。西側は暗渠により切られている。西半部は調査範囲外となるため、全体の完掘は実施していない。西半部ではほぼ1個体とみられる須恵器甕が出土した他、土師器、須恵器、瓦器、青磁などが出土している。出土遺物は概ね14世紀後半代を中心とするものと考えられる。
- S K09** 調査区西半部北側で検出した、東西3m、南北2.5m以上、検出面からの深さ55cm前後の大型土坑である。中央部及び北側を暗渠により切られている。北半は調査範囲外となるため完掘は実施していない。土師器皿、須恵器甕、壺、瓦器、白磁合子身などが出土している。14世紀代の時期が考えられる。
- S K01、08、09の埋土は、上層が地山層である黄褐色シルトを含む灰褐色シルトで、下層は灰色粘質土であるなどの共通要素が多い。下層の灰色粘質土の堆積から、これら大型土坑が機能していた時期には、常に滞水していた状況であったと推定される。調査地は地下水位が比較的高いことから水溜のような用途が考えられる。
- ピット** 調査区中央南側を中心に濃密な分布状況で検出された。直径15~70cm、検出面からの深さ10~60cmである。30cmを超える比較的の深いものが多い。3~4棟以上の掘立柱建物の復元が可能であると考えられるが、ピットからの出土遺物の詳細な年代の検討は、遺物整理作業が完了していないため、今後の整理作業を待って行いたい。



fig. 265
調査区全景

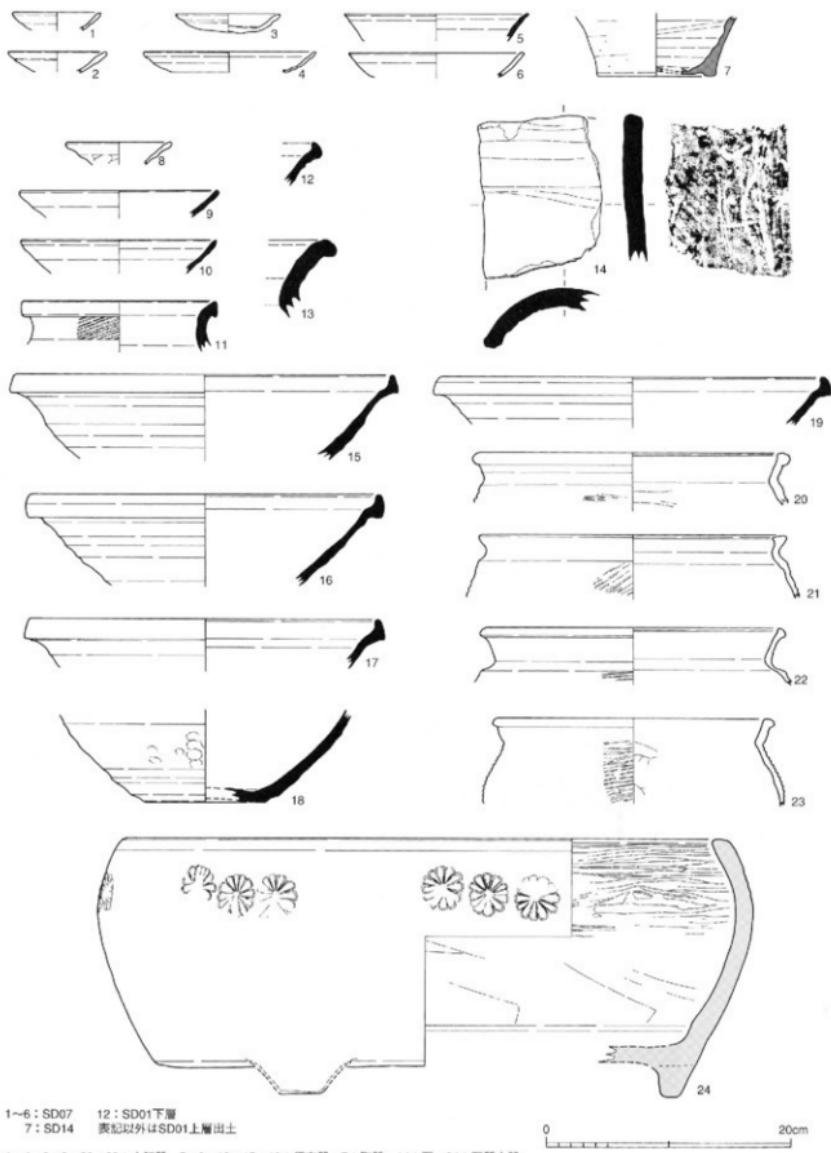
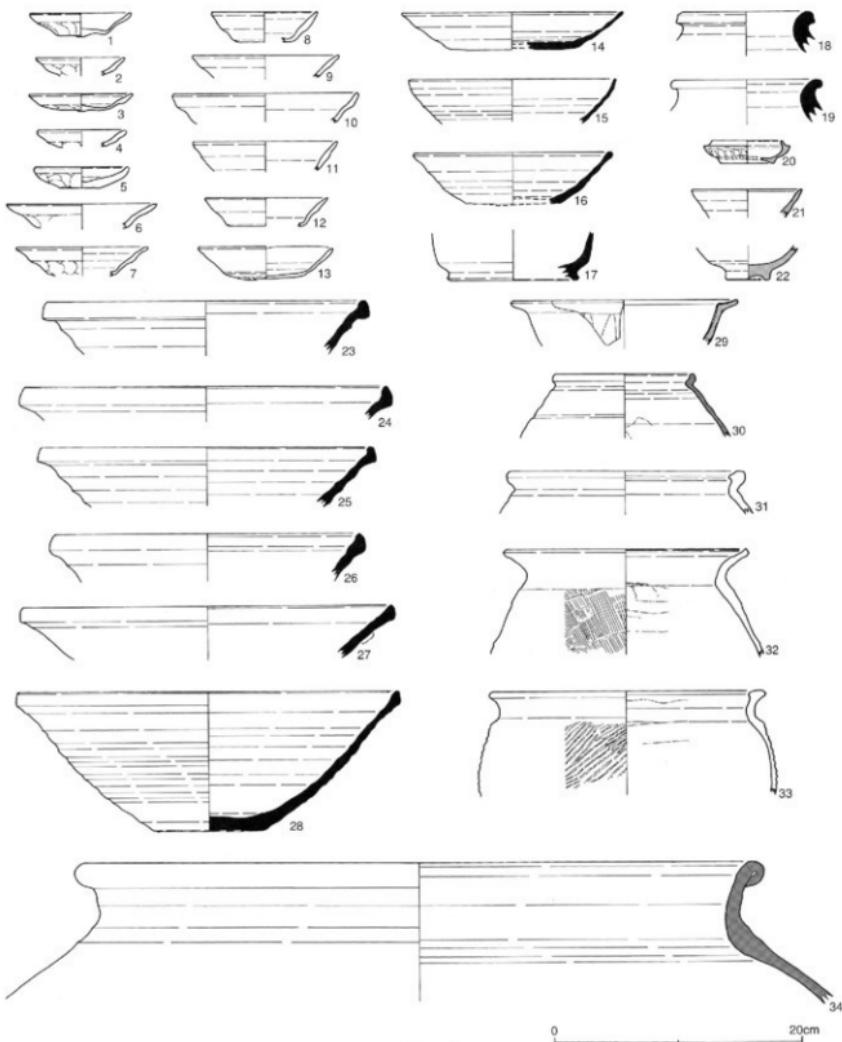


fig. 266 出土遺物実測図 (1)

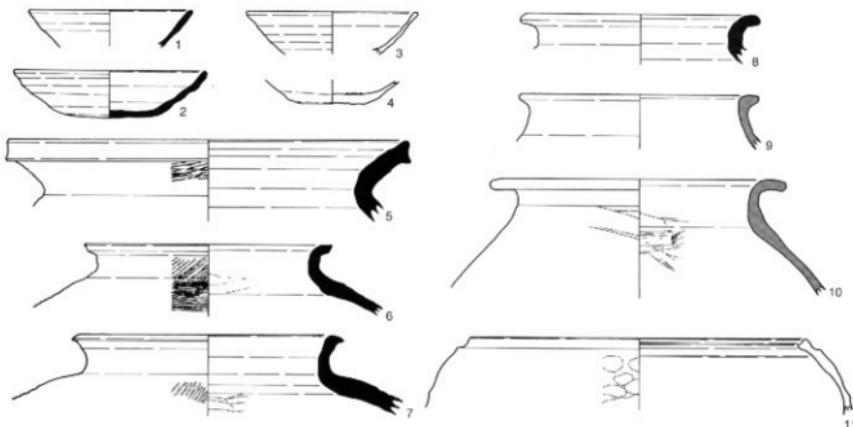


1・6・23・25・27・29・31・33: SK01 14・18・19・26・34: SK08 13・17・20: SK09
22・30: SK11 2・9・15: SK15 3: SP74 5: SP82 28: SP87 24: SP191

4・8・10~12・16・32: SX01

1~13・31・32・33: 土師器 14~19・23~28: 須恵器 30~34: 陶器 20・21: 白磁 22・29: 青磁

fig. 267 出土遺物実測図 (2)



1~11: SE02
1・2・5~8: 須恵器 3・4・11: 土師器 9・10: 銅器

fig. 268 出土遺物実測図（3）

3.まとめ

今回の調査では、一部が後世の耕作、從前建物基礎等による搅乱の影響を受けていたが、良好な状況で遺構面が遺存しており、濃密な遺構の分布を検出することができた。

調査地の西側に近接する、兵庫県教育委員会による国道175号線拡幅工事に伴う調査地（昭和60年度）では弥生時代後期の堅穴住居が確認されているが、今回の調査では弥生時代の遺構、遺物は共に検出されなかった。

調査区の西半部では、古墳時代後期の遺物が出土している。これまでの調査成果においても、国道175号線付近では古墳時代後期の堅穴住居が確認されており、古墳時代後期の集落域は国道175号線付近から西側へと拡がる可能性が考えられる。

今回、濃密な分布状況で検出した遺構、遺物の多くは、ほぼ14~15世紀代を主体とするものと考えられる。

中世における遺構の広がりの中心は、調査地内の遺構の分布状況が東側及び北側ではやや希薄となる点や、西側近接地の昭和58年度調査の調査成果と、調査地の北東側は近年までため池で、東側隣接地は圃場整備以前は胸までかかる深田であったという地元の方の証言から、本調査地の南側へと拡がるものと推定される。また、複数の建物の存在や、SD01の様な区画溝と推定される規模の大きな溝の存在は、中世における芝崎遺跡の土地利用を考える上で重要である。また、昭和60年度に兵庫県教育委員会による調査でも、14~15世紀代の堀状遺構が検出されており、ブロック型屋敷地割若しくは居館的な構造をもつ遺構の存在が指摘されている。今回の調査で確認された遺構群とも時期は重なっており注目される。今後、近隣地の調査の進展に伴い、芝崎遺跡における本調査地周辺の性格が明らかとなろう。

芝崎遺跡出土木製品の樹種同定

小林克也 (株)バレオ・ラボ)

1. はじめに

芝崎遺跡は、明石川東岸の洪積段丘上に立地する遺跡である。時期は、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代、中世～近世の遺構や遺物が確認されている。今回の調査では、古墳時代後期からは遺物が、鎌倉時代～室町時代では溝跡や土坑、ピット、井戸跡などの遺構と、土器や木製品などの遺物が検出された。

同定を行う試料は、4区のSP210出土の礎板と8区のSE02出土井戸材、SE02内に廃棄されていた井戸枠転用材で、いずれも室町時代前期のものとされている。SE02の井側は縦板組隅柱横桟型に分類され、2段の井側が確認されている。組み方は、上段は5～6枚の縦板を組み、角は内法角に支柱を設けて横桟で補強しているのが確認されている。下段以下は発掘中の激しい湧水と壁面崩落の危険性から、確認が行われていない。ここではそれら木製品の樹種同定を行い、建築材の樹種を検討した。

2. 試料と方法

試料は、8区SE02の井戸材20点、SE02内の井戸枠転用材12点、4区SP210出土礎板が3点の、計35点である。

樹種同定は、神戸市教育委員会が採取した木材ブロックより切片を切り出し、プレパラートを作製した。切片は片刃剃刀を用いて、横断面(木口)、縦断面(径口)、放射断面(板口)の3断面を採取し、ガムクローラルで永久封入した。同定はこれらのプレパラートを光学顕微鏡下で40～400倍で検鏡し、現世標本と対照して同定を行った。なお、プレパラートは神戸市教育委員会で保管している。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のカヤ、ツガ属、コウヤマキの3分類群、広葉樹のツブラジイ、スダジイの2分類群の、計5分類群を産出した。ツガ属が最も多く18点で、カヤ属が7点、ツブラジイが5点、スダジイが4点、コウヤマキが1点産出した。表11に樹種同定結果を、表12に樹種同定結果の一覧を記す。

表11 芝崎遺跡樹種同定結果一覧

樹種/器種	角材		割材		礎板	合計
	井戸枠横桟	井戸枠縦板	井戸枠縦板	井戸枠転用桶板		
カヤ				5	2	7
ツガ属	1		12	5		18
コウヤマキ					1	1
ツブラジイ	5					5
スダジイ		1	1	2		4
合計	6	1	13	12	3	35

以下に同定された材の特徴を記載し、1分類群1点の光学顕微鏡写真を示す。

- (1)カヤ *Torreya nucifera* (L) Sieb. et Zucc. イチイ科 fig.269 1a-1c(R-09-11)

仮道管および放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。放射組織は1～20細胞高になり、すべて放射柔細胞によって構成される。分野壁孔は小型のヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管にはらせん肥厚が認められ、2本の対になる傾向がある。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で水湿によく耐える。

- (2)ツガ属 *Tsuga* マツ科 fig.269 2a-2c(R-05)

仮道管および放射柔細胞、放射仮道管によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は放射柔細胞によって構成され2～15細胞高になり、放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁となる。放射柔細胞の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個存在し、放射柔細胞の縁辺には放射仮道管が存在する。

ツガ属は、温帯に分布するツガと亜高山帯に生えるコメツガがある。材の性質は似ており、比較的重硬で、早材部から晩材部への移行が急であるため、切削はあまり容易ではないが、水湿に耐える。

- (3)コウヤマキ *Sciadopii vsueriicillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 fig.269 3a-3c(R-02)

仮道管と放射柔細胞によって構成される針葉樹である。早材から晩材の移行は比較的緩やかで、晩材の幅は狭い。分野壁孔は窓状で、1分野に1～2個存在する。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で水湿に耐朽性がある。

- (4)ツブラジイ *Castanopsis cuspidate* Schottky ブナ科 fig.269 4a-4c(R-09)

年輪始めに大きな道管が接線方向に不連続に並び、晩材部にかけて漸次径を減じながら火炎状に配列する環孔材である。道管は単穿孔を有し、放射組織は単列同性のものと集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材の重さ、強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

- (5)スダジイ *Castanopsis sieboldii* Blattus, T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 fig.269 5a-5c(R-09)

年輪始めに大きな道管が接線方向に不連続に並び、晩材部にかけて漸次径を減じながら火炎状に配列する環孔材である。道管は単穿孔を有し、放射組織は単列同性のものだけがみられる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材の性質はツブラジイとほぼ同じで、重さ、強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

4. 結果

同定の結果、ツガ属などの針葉樹が最も多く産出した。S E02は、井戸枠転用桶板も含めた板状の井戸枠継板では、主にカヤやツガ属などの針葉樹が、角材の井戸枠横桟では、ツブラジイやスダジイなどの広葉樹が利用されていた。また、板状に加工される檻板でも、針葉樹の利用が確認された。

針葉樹は割裂性が良く、板状に加工するのに向いている。またツブラジイやスダジイは、広葉樹の中でもやや重硬で強靭な部類に分けられ、加工は比較的容易である。そのため角材状に加工され、継板の補強を行う横桟に利用された事が考えられる。

当遺跡でSE02が利用されていた室町時代前期に近い時代の井戸材の樹種同定例には、神戸市内の松野遺跡や二葉町遺跡に例がある。松野遺跡では、12世紀前半から13世紀前半頃の井戸柱1点、井戸枠5点の同定が行われている。その結果、井戸柱にはマツ属1点、井戸枠にはヒノキ1点、クスノキ4点が産出されている（松葉，2001a）。二葉町遺跡では、側板139点、その他12点の樹種同定が行われている。その結果、側板ではヒノキが35点と最も多く産出され、スギ24点、ツガ属19点、コウヤマキ16点と続き、8割以上が針葉樹で構成されていた。また、その他でもコウヤマキ5点、モミ属4点と続き、針葉樹が8割以上を占めた（松葉，2001b）。

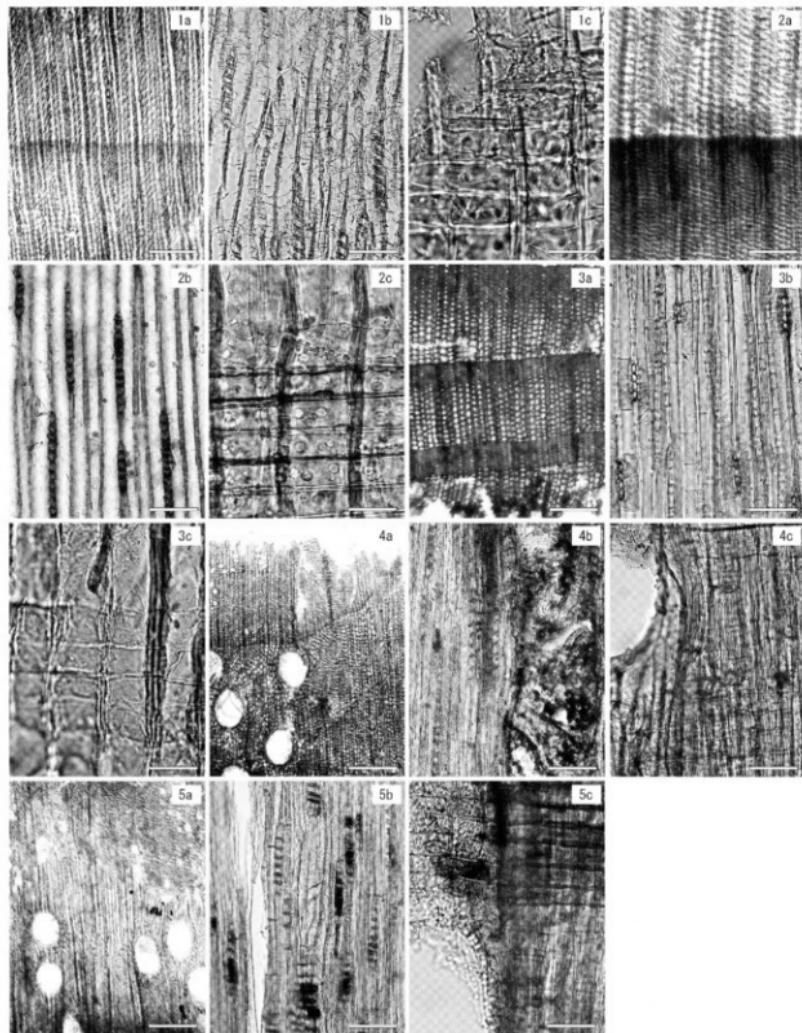
全国の井戸材も含めた建築材の、中世から近世にかけての用材利用の傾向では、針葉樹材を利用する傾向が強い（山H，1993）。芝崎遺跡のSE02でも針葉樹を利用する傾向がみられた。しかし井戸枠縦板と井戸枠横板で性質が異なる樹種を使用しており、用途に応じた用材選択を行っている事が確認された。

引用文献

- 松葉礼子(2001a)松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定 神戸市教育委員会編「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」：175-186. 神戸市教育委員会。
- 松葉礼子(2001b)二葉町遺跡出土木製品の樹種同定 神戸市教育委員会編「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査」：141-166. 神戸市教育委員会。
- 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史 緒論史研究 特別第1号. 242p.

表12 芝崎遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

No.	山土地区	出土位置	遺物名	樹種	時期
R-001	8区	SE02(北西隅柱)	角材(井戸枠横棟)	ツブラジイ	室町時代前期
R-002	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-003	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-004	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-005	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-006	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-007	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-008	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-009	8区	SE02(北辺)	側材(井戸枠縦板)	ツブラジイ	室町時代前期
R-011	8区	SE02(北西角付近)	角材(井戸枠横棟)	ツブラジイ	室町時代前期
R-012	8区	SE02(東辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-013	8区	SE02(東辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-014	8区	SE02(東辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-015	8区	SE02(東辺)	角材(井戸枠横棟)	スタジイ	室町時代前期
R-016	8区	SE02(東辺)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-017	8区	SE02(底部上)	側材(井戸枠縦板)	ツガ属	室町時代前期
R-018	8区	SE02(井戸内)	角材(井戸枠横棟)	ツブラジイ	室町時代前期
R-019-1	8区	SE02(井戸内)	角材(井戸枠横棟)	ツブラジイ	室町時代前期
R-019-2	8区	SE02(井戸内)	角材(井戸枠横棟)	ツガ属	室町時代前期
R-019-3	8区	SE02(井戸内)	角材(井戸枠横棟)	ツブラジイ	室町時代前期
R-019-4	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	スタジイ	室町時代前期
R-019-5	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	スタジイ	室町時代前期
R-019-6	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	ツガ属	室町時代前期
R-019-7	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	カヤ	室町時代前期
R-019-8	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	ツガ属	室町時代前期
R-019-9	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	カヤ	室町時代前期
R-019-10	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	カヤ	室町時代前期
R-019-11	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	ツガ属	室町時代前期
R-019-12	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	ツガ属	室町時代前期
R-019-13	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	ツガ属	室町時代前期
R-019-14	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	カヤ	室町時代前期
R-019-15	8区	SE02(井戸内)	側材(井戸枠縫合用横板)	カヤ	室町時代前期
R-020	4区	SP210	縦板	カヤ	室町時代前期
R-021	4区	SP210	縦板	カヤ	室町時代前期
R-022	4区	SP210	縦板	コウヤマキ	室町時代前期



1a-1c. カヤ(R-019-14) 2a-2c. ツガ属(R-005) 3a-3c. コウヤマキ(R-022) 4a-4c. ツブラジイ(R-009) 5a-5c. スダジイ(R-019-5)

a: 横断面(スケール=250 μm) b: 接線断面(スケール=100 μm) c: 放射断面(スケール=1-3:25 μm • 4-5:50 μm)

fig. 269 芝崎遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

49. 玉津田中遺跡 第36次調査

1. はじめに

玉津田中遺跡は、明石川中流域右岸に位置する、南北約2km、東西0.8kmの縄文時代から中世に至る複合遺跡である。

特に弥生時代前期から中期にかけての集落や周溝墓群を中心とした遺跡群は、玉津田中遺跡における中心ともいえ、今回の調査地は、その弥生時代中期の遺構や遺物が確認されている中心地に当たる。



fig. 270
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回は住宅建設に伴い、工事によって影響を受ける部分について調査を実施した。今回の調査地の北側の現況道路部分は、区画整理事業に伴って調査が実施され、方形周溝墓が検出されるなど、弥生時代中期の遺構・遺物が集中する地区に位置している。

調査区は、4ヶ所の小地区に分かれており、A～D区と呼称する。

基本層序

上層より、1層は区画整理工事に伴う盛土・整地層で、2.0～2.4mの厚さで広がっている。2層は耕作に伴う土層（耕土・床土）で、厚さ5～30cmを測る。3層は、灰～黄色系のシルト～砂層で、中世の遺物を含む。4層は10～20cmの厚みをもつ暗褐色シルトで弥生土器を含む。この層の下面が、弥生時代第1遺構面となる。

5～6層は遺構の埋土と考えられるが、一部には暗灰褐色シルトが確認でき、この層の下面が弥生時代の第2遺構面となる。

各トレンチによって、遺構の中心部分に当たっている場合もあり、層位は、全体を通して、均一に存在するわけではない。

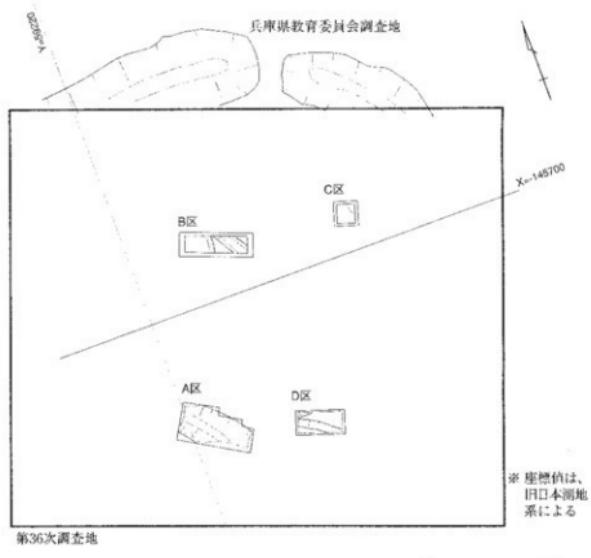


fig. 271
調査区平面図

0 5m

A区

第1遺構面では偶蹄類の足跡を検出した。中世の水田面と考えられる。

第2遺構面は不明瞭であったが、下層の第3遺構面（弥生時代第1遺構面）では、落込みとともに多量の弥生土器の出土が認められた。土器の時期は概ねIV様式と考えられる。第4遺構面（弥生時代第2遺構面）では、幅約1.5m、深さ1.0mの溝を確認した。この溝からは、多量の土器と共に木製品も出土している。また、溝の底には木製器台とその上に載せられた弥生土器の壺も出土している。この出土状況については、安全確保のため、簡単な略測を行うだけで、取り上げを行った。その後調査区を拡張し、周辺の状況を確認する段階で、改めて略測図に基づいて出土状況図並びに出土状況復元写真を撮り直している。

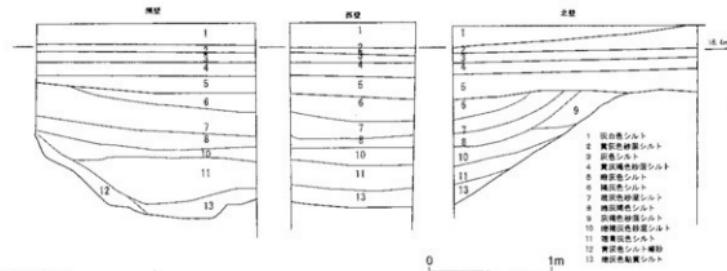


fig. 272 A区土層断面図



fig. 273 A区第3遺構面遺物出土状況



fig. 274 A区第4遺構面遺物出土状況

この溝に関しては、断面V字状の形状から環濠の可能性も考えられるが、器台を伴う土器が出土しており、共窓遺物と考えられることから、周溝墓の可能性を考えておきたい。この北側で兵庫県教育委員会実施の調査の際に、溝が確認されており、周溝墓の周溝と考えられている。以上の調査成果もあわせれば、今回おそらくこの周溝墓の続きの一部を検出したと考えられるが、周溝墓の全体形状を確定するまでには至っていない。

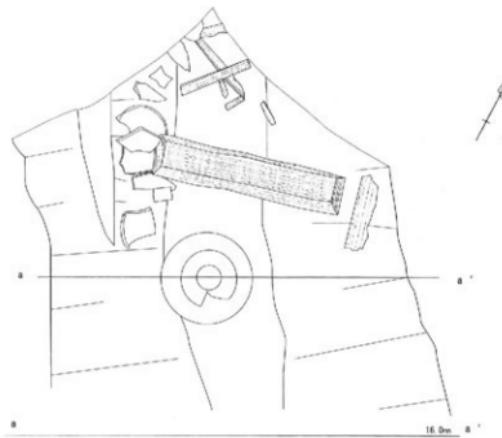


fig. 275
A区第4遺構面
遺物出土状況
平・断面見通し図

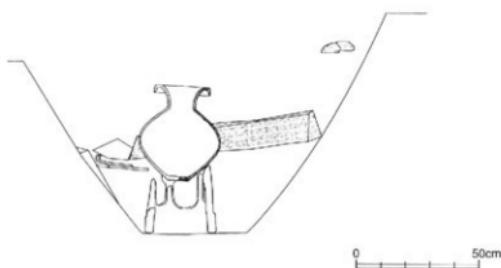




fig. 276 B区第4遺構面遺物出土状況



fig. 277 D区第3遺構面遺物出土状況

B区

第1遺構面では、偶蹄類の足跡が検出され、中世の水田面と考えられた。

第2遺構面は不明瞭であったが、下層の第3遺構面（弥生時代第1遺構面）では、直径約40cm、深さ50cmのピットを3基確認した。ただし調査面積の関係から、建物については不明である。

第4遺構面（弥生時代第2遺構面）では、溝と落ち込みを確認した。溝は、幅60cm、深さ25cmを測る。落ち込みは、壁がほぼ垂直で有り、やや円形であることから、住居跡である可能性がある。溝・落ち込み共に内部からの出土遺物は弥生土器であり、時期としては、IV様式と考えられる。

C区

第1遺構面では、偶蹄類の足跡が検出され、中世の水田面と考えられた。

第2遺構面は不明瞭であったが、下層の第3遺構面（弥生時代第1遺構面）では、直径約40cm、深さ50cmのピットを4基確認した。第4遺構面（弥生時代第2遺構面）では、何らかの遺構の中に当たっていると考えられるが、その性格は不明といわざるを得ない。遺構内からは、弥生土器が出土しており、遺構の時期は、IV様式と考えられる。

D区

第1遺構面では、偶蹄類の足跡が検出され、中世の水田面と考えられた。

第2遺構面は不明瞭であったが、下層の第3遺構面（弥生時代第1遺構面）では、土器が多く出土した溝を確認した。溝内出土の土器はIV様式と考えられる。溝は南に広がっており、幅等は不明である。

第4遺構面（弥生時代第2遺構面）では、上層の溝に切られている溝を確認している。この溝からは遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の調査地では、周溝墓の溝の一部を確認した。また、供獻土器とそれをのせる木製器台がセットで出土したことは、成果といえよう。木製の器台の出土例は近畿では、確認されておらず、事例としては少ない。弥生時代中期後半以降に土器の器種として器台が出現し、定着するようであるが、その数や種類は他の土器に比べて少ないので現状である。おそらく、土器と同様に、木製の高杯などに比べ、その量は、明らかに少なかったと考えられる。これに関しては、今後の類例調査の結果をもって結論を出したい。

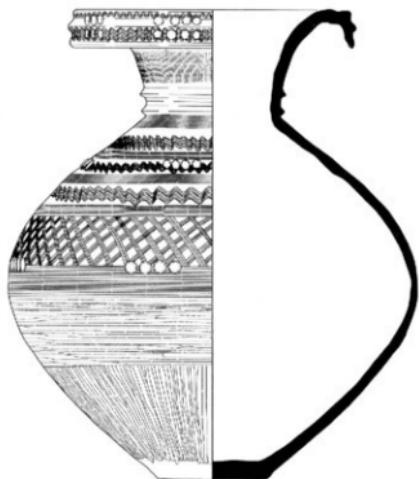


fig. 279 A区出土遺物写真（1）〔苏生土器壺〕

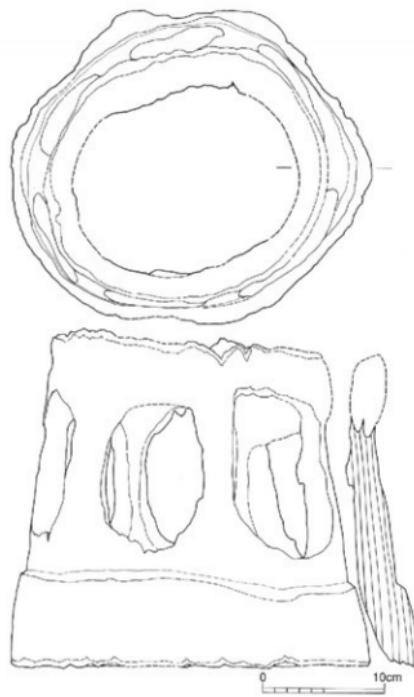


fig. 278
A区出土遺物実測図



fig. 280 A区出土遺物写真（2）〔木製器台〕

玉津田中遺跡第36次調査出土木製品の樹種同定

小林克也 (株)パレオ・ラボ

1.はじめに

玉津田中遺跡は、明石川中流域の右岸に位置する、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。その主体となるのは弥生前期から中期にかけての集落や埋葬墓群を中心とした遺跡群である。第36次調査では、調査区をA・B・C・Dの4つの区に分けてトレンチ調査が行われ、中世の水田跡、弥生時代以前のビットや觸角物が出土された。

またA区では、幅約1.5m、深さ約1mの大型の溝が検出され、溝の底からは弥生土器の壺と木製器台のセットや多量の弥生上器、木製品が出土した。遺構の性格としては、器台を伴う弥生土器が供養遺物と考えられ、大型の溝は周溝墓である事が想定されている。ここでは大型の溝から出土した木製品の樹種同定を行い、木製品の樹種を検討した。

2.試料と方法

試料はA区のS-D01から出土した木製品21点である。岩層別では、木製器台1点、人形陶材1点、板材11点、丸材2点、角棒2点、木っ端4点である。

樹種同定は、神戸市教育委員会が採取した木材ブロックより切片を切り出し、プレパラートを作製した。切片は竹刀刃刀を用いて、横断面(木口)、縦断面(茎目)、放射面(板目)の3断面を採取し、ガムクローラーで永久封入した。同定はこれらのプレパラートを光学顕微鏡下で40~400倍で検査し、現世標本と対照して同定を行った。なお、プレパラートは神戸市教育委員会で保管している。

3.結果

同定の結果、針葉樹のカヤとコウヤマキ2分類群が、広葉樹のクスノキ属が検出された。コウヤマキが最も多く19点で、カヤとクスノキ属は各1点の検出であった。表13に岩層別樹種同定結果を、表14に检测同定結果一覧を記す。

樹種/器種	木製器台	大型角材	板材	丸材	角棒	木っ端	合計
カヤ				1			1
コウヤマキ		1	11	1	2	4	19
クスノキ属	1						1
合計	1	1	11	2	2	4	21

表13 玉津田中遺跡第36次調査
出土木製品の樹種同定結果

以下に同定された材の特徴を記載し、1分類群1点の光学顕微鏡写真を示す。

(1)カヤ *Torrceya nucifera* (L) Sieb. et Zucc. イチイ科 fig.281 1a-1c(R36-19)

仮道管および放射系細胞によって構成される針葉樹材である。放射系細胞は1~20細胞層になり、すべて放射系細胞によって構成される。分野壁孔は小形のヒノキ型で1分野に1~4個存在する。仮道管にはらせん状壁孔認められ、2本の対になる傾向がある。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的硬で彈性に富み、切削時の加工は容易で水温によく耐える。

(2)コウヤマキ *Sciadopanax vsuericillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 fig.281 2a-2c(R36-11)

仮道管と放射系細胞によって構成される針葉樹である。早材から晚材の移行は比較的緩やかで、晚材の幅は狭く、分野壁孔は球状で、1分野に1~2個存在する。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて胸壁分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の特有種である。材はやや軽く、切削などは容易で水温によく耐える。

(3)クスノキ属 *Cinnamomum* クスノキ科 fig.281 3a-3c(R-5)

比較的大きな道管が1又は2~4個不規則に複合して全体に分布する散孔材である。道管は單孔孔を有する。放射系細胞は異性で、一部が油細胞となり大きくなれる。

クスノキ属にはクスノキやヤブニッケイなどがあり、暖帯から亜熱帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なクスノキの材は、やや軽軟なものから中庸程度のものまであるが、竹刀刃刀等は容易である。

4. 考察

同定の結果、コウヤマキが最も多く産出した。カヤは丸材で1点のみ確認され、木製器台はクスノキ属だった。そのため、器台以外の木製品は針葉樹で構成されている事が確認できる。

玉津田中遺跡では、第15次調査では花粉分析と出土木製品の樹種同定が行われている。花粉分析の結果、弥生時代中期の遺跡周辺の森林では、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林地と温帯性針葉樹林地が形成されていたことが確認された(新山・鈴木・吉川, 2000)。また、コウヤマキの花粉も微量ながら確認されており、弥生時代中期には遺跡周辺にコウヤマキが生育していたことが確認できる。

木製品の樹種同定では、A・B地区の弥生時代や中後期に相当する水田耕跡から出土した彫刻木製品1点、木包丁1点、丸丸22点、欠板状10点、漆塗材(自然木)10点、自然木1点の計45点の樹種同定が行われている。その結果、コナラ属クヌキ節やコナラ属コナラ節、ヤナギ属といった広葉樹が多く産出された(松尾, 2000)。

第15次調査の木製品では針葉樹は産出されず、第36次調査のSD01出土の木製品の樹種同定とは、様相が異なっていた。コウヤマキは弥生時代から平安時代にかけて近畿地方で木材などに多く利用されており、その用材選択には限定的な人間・植物関係が認められるとしている(山田, 1993)。

第36次調査のSD01出土木製品でコウヤマキが多く産出されたのは、試料が馬溝墓に供えられた供物遺物であることが想定していると考えられる。

引用文献

新山雅広・鈴木茂・吉川昌伸(2000)水田址、遺構、流路堆積物の花粉化石分析、神戸市教育委員会編「玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・13・15次調査」: 128-142。神戸市教育委員会。

松尾礼子(2000)水田跡出土木材の樹種同定、神戸市教育委員会編「玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・13・15次調査」: 148-155。神戸市教育委員会。

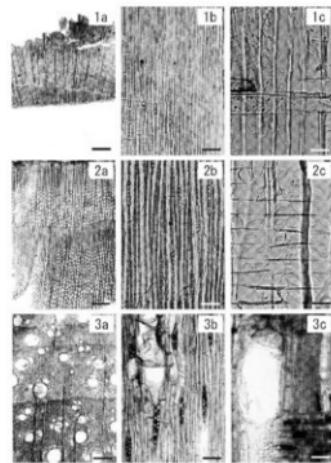
山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土論文文献集成・用材から見た人間・植物関係史、植生史研究 特別第1号、242p。

表K14 玉津田中遺跡第36次調査出土木製品の樹種同定結果一覧

No.	出土地区	出土遺構	遺物名	樹種	時期
R-06	A区	SD01最下層	木製器台	クスノキ属	弥生時代中期
R-36-1	A区	SD01最下層	丸材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-2	A区	SD01最下層	角棒	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-3	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-4	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-5	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-6	A区	SD01最下層	角棒	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-7	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-8	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-9	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-10	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-11	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-12	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-13	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-14	A区	SD01最下層	板材	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-15	A区	SD01最下層	木っ端	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-16	A区	SD01最下層	木っ端	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-17	A区	SD01最下層	木っ端	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-18	A区	SD01最下層	木っ端	コウヤマキ	弥生時代中期
R-36-19	A区	SD01最下層	丸材	カヤ	弥生時代中期
R-37	A区	SD01最下層	大型角材	コウヤマキ	弥生時代中期

fig. 281

玉津田中遺跡第36次調査出土木製品の光学顕微鏡写真



1a-1c. カヤ(R-36-19) 2a-2c. コウヤマキ(R-36-11)

3a-3c. クスノキ(R-36-11)

a:横断面(スケール=250 μm) b:縦断面(スケール=100 μm)

c:放射断面(スケール=1:2:25 μm × 3:50 μm)

50. 居住遺跡 第11次調査

1. はじめに

居住遺跡は、明石川により堆積した沖積平野に立地している。

当遺跡におけるこれまでの調査では、今回の調査地の南側隣接地での調査において、弥生中期の土坑群が確認されている。また、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物等も確認され、中世前期集落の存在も明らかとなった。さらにその南側で実施した調査では、古墳時代前期（布留併行期）で讀岐型の壺や炭化米の塊を内部に含む壺等の一括資料を出土した小溝が確認されて、近隣に当該時期の集落が存在するものと考えられている。

fig. 282
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要 今回の調査は商業ビルの建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分についてのみ、グリッド36ヶ所（G1～G36）による調査を実施した。

基本層序 上層より、盛土、暗灰色砂質土（旧耕土）、淡灰色砂質土（中世以降の耕土層）、黄褐色砂質土（床土）、灰褐色砂混じりシルト（中世の遺物が極めて少量混じる）、黄灰褐色砂混じりシルトが堆積している。

遺構と遺物 遺構は中世以降の鋤溝を検出している。遺物は中世の須恵器と土師器が出土している。

調査範囲が限定されていたこともあり、ピット等は検出していない。

なお、G18とG25は、調査グリッドが旧河道内に位置しているものと考えられ、湧水が激しかった。遺物も確認していない。安全確保のため現地表下深さ3mの深さまでの掘削に止め、記録写真の撮影を行った。

3.まとめ

今回の調査成果から判断すれば、当調査地は、北へ下がる谷地形にあたり、全域が湿地帯の中に位置しているものと考えられる。

今回G16において鋤溝を検出していることから、中世に入ると当地域も開発が進み、水田を伴う集落が形成されるようになったものと考えられ、今回の調査地は、その一部分に位置しているものと考えられる。

51. 出合遺跡 第37・39次調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域右岸の沖積地と洪積段丘上に立地する、旧石器時代～鎌倉時代の集落遺跡である。昭和52年の第1次調査以来、これまでに36回にわたる調査が実施されている。

これまでの調査では、第1次調査で奈良時代の掘立柱建物などとともに、古墳時代中期後半の前方後円墳である出合亀塚古墳・円墳3基と方墳1基の古墳が見つかっている。また、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代の韓式系土器の出土など、さまざまな時期の遺構や遺物が見つかっており、出合遺跡の状況について多くの成果が蓄積されつつある。

今回の調査は、上津橋地区集落基盤整備事業に伴う発掘調査の3年次目に当たる。



fig. 283 トレチ配置図 1:5,000

2. 調査の概要

今回の調査は、上津橋地区集落基盤整備事業によって新設される水路・パイプラインの工事で、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について実施した。今回の調査は2度に分けて実施しており、第37、39次調査と呼称する。各調査区のトレチ番号は当該事業に伴って実施してきている第34次調査以降通し番号を付しており、今回の調査では20トレチから32トレチまでのトレチ番号を付した。

第37次調査

20トレンチ 南北方向に長い調査区で、幅1.5m、長さ65mのトレンチである。現耕土の直下が遺構面となり、遺物包含層は削平により失われている。遺構面は北から南に向けて傾斜している。ピット5基を検出した。

ピット 径25~30cm、深さ5~20cmと遺存状態は良くない。S P02からは古墳時代後期の須恵器の壺片が出土している。調査区内では、建物としてのまとまりは認められない。

21トレンチ 南東から北西方向に延びる調査区で、全長230mに及ぶ。便宜的に、1~5区に分割して調査を行った。

1区 トレンチの南東端部に位置する、幅4.2m、長さ19mの調査区である。現耕土下に黄灰褐色極細砂が厚く堆積している、遺構面は北から南に傾斜しており、南端部で傾斜が強くなる。土坑1基、溝1条、ピット数基を検出した。出土遺物は細片で時期の特定は困難であるが、平安時代後期～鎌倉時代のものであると考えられる。

2区 1区の西北方向に続く調査区で、幅1.6m、長さ61mである。土坑2基、溝3条、ピット数基を検出した。遺構面は東から西方向に傾斜している。

S K02 調査区外に延びるため、全体の規模は不明であるが、検出した規模は、一辺2m以上、深さ1mの平面形が方形の土坑であると推測される。土坑の壁面は垂直に近く掘り込まれている。土坑の南側に当たるコーナー部には溝が取り付いている。比較的多くの土器が出土しており、古墳時代末～奈良時代頃のものと考えられる。

S D02 調査区の中央部で検出した、幅2.5m、深さ10cmの南北方向の溝である。古墳時代後期の須恵器が数点出土している。

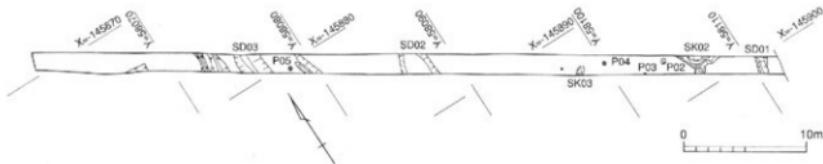


fig. 284 21トレンチ2区平面図

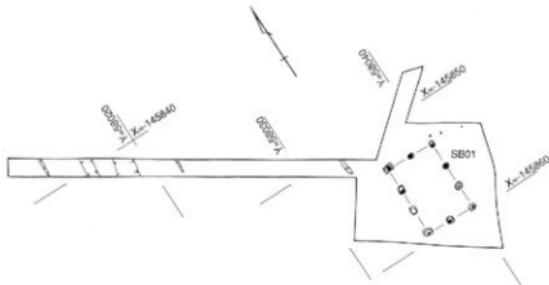


fig. 285 21トレンチ3区平面図

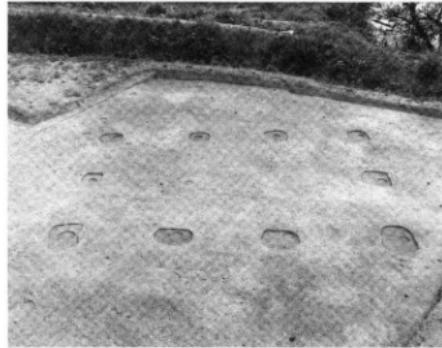
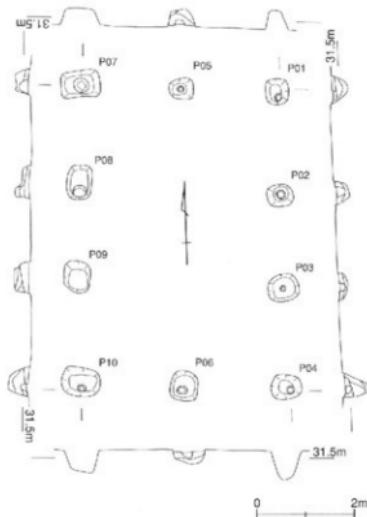


fig. 287 21トレンチ3区S B01全景

fig. 286
21トレンチ3区
S B01平・断面図

3区

2区と溜池を挟んで西側の調査区で、幅1.5m、長さ40mの調査区である。現耕土を除去した段階で黄褐色砂質シルトの地山面となる。ピットを検出したため、一部調査区を拡張して遺構を精査したところ、掘立柱建物としてのまとまりを1棟分確認した。

S B01

南北3間、東西2間の側柱のみの掘立柱建物である。建物の規模は南北6.3m、東西4.3mを測る。柱間は南北が1.9~2.2m、東西が1.9~2.2mである。柱掘形には、平面形が円形のものと隅丸方形に近いものが存在し、円形の掘形の大きさは直径50~60cm、隅丸方形の掘形の大きさは長径80cm、短径50~60cmである。深さは20~60cmを測る。建物主軸の方向は北から東へ2°振っており、P02、06、10からは炭化物と焼土が出土している。柱穴からの出土遺物は細片で時期の特定ができるが、遺構面直上の出土遺物から奈良時代後期頃のものと考えられる。

4区

現耕土直下が遺構面となり遺物包含層は遺存していない。調査区の東半部については後世の削平後の盛土内に若干の古代・中世の遺物が混入していた。

溝

調査区の中央部で確認した溝で、埋土は暗茶褐色極細砂で上面には近世以降の鋤溝痕跡が残っていた。溝は調査区外に延びるため一部拡張して調査を行った。検出した幅は2.2m、深さは18cmである。須恵器がまとまって出土している。土師器は数片のみであった。出土須恵器の器種は壺・壺・甕・器台である。出土土器から、6世紀前半のものと考えられる。

トレンチの北側の耕作土を除去する時点で、検出した溝が北側に弧状に延びることが判明していたため、この溝が古墳の周溝であると判断し、古墳及び周溝の規模を確認するためトレンチ北側の部分をさらに拡げ、現耕土を除去し調査を行った。調査区外側の周溝については未掘削のまま、その平面形を確認するのに止めている。溝は円形に巡り、23トレンチ南端部で検出した溝の方向に延びることが確認できた。

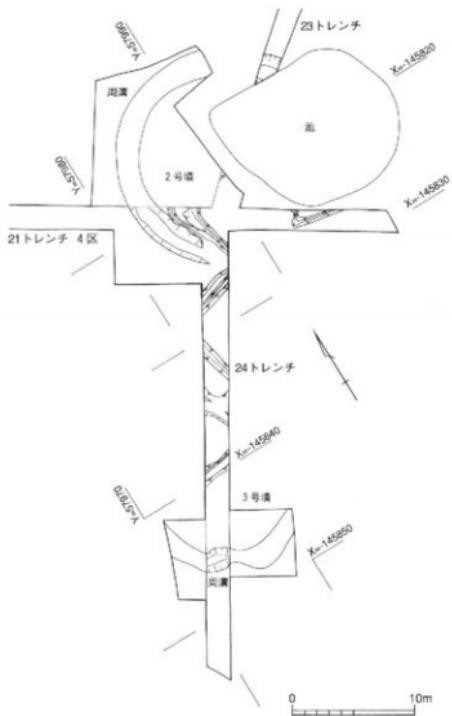


fig. 289 2号墳全景

fig. 288
21トレンチ 4区・
24トレンチ平面図

2号墳 この溝の巡る円墳を、26トレンチで確認された堂ノ上古墳群1号墳に次いで2号墳とした。2号墳の規模はその東側が池や後世の開墾によって削平されており全体の形状は不明であるが、復元直径13m、周溝外側の直径18mであることがわかる。埋葬施設に係わる遺構・遺物は検出していない。

5区 21トレンチの最西端部で幅2m、長さ45mの調査区である。東端部で土坑を1基検出した。5区で検出された遺構はこのSK04のみである。

SK04 調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、短径70cm、長径85cm以上、深さ5cmを測る、平面形が橢円形を呈する土坑である。現水田区画の畦畔や溝で削平されており、遺存状況は悪い。須恵器の壺片が出土している。古墳時代後期のものである。

22トレンチ 北東から南西方向に現水田面の段差が残る、幅1.6m、長さ42mの調査区である。西端部で土坑を1基検出した。全体的に後世の水田造成により大きく削平されているものと考えられる。

SK01 調査区外に延びる土坑で一辺3mの平面形が方形と考えられる土坑である。深さは26cmである。土坑壁面はほぼ垂直に落ち、底部は水平である。鎌倉時代の須恵器・土師器が出土している。

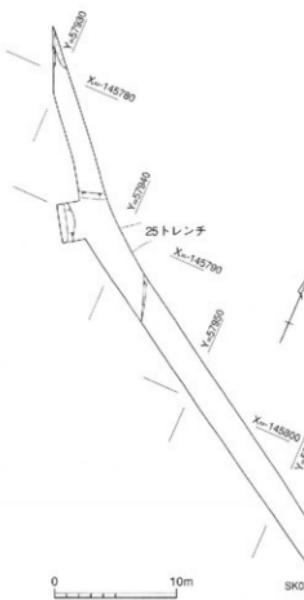


fig. 290 21トレンチ5区平面図

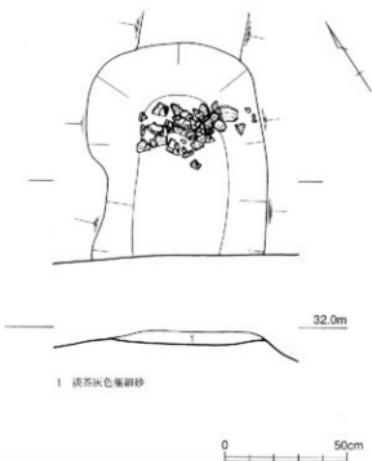


fig. 291 21トレンチ5区SK04平面図

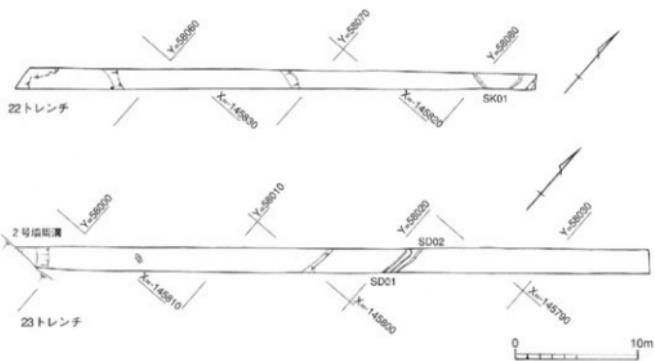


fig. 292
22・23トレンチ
平面図

23トレンチ 輝度2m、長さ52mの北東から南西方向のトレンチである。トレンチの中央部から東側については耕作土を除去した段階で黄褐色砂質シルトの地山面となる。中央部より西側の低く傾斜する部分については黄灰褐色極細砂が、遺構面が低くなるに従い厚くなっている。土坑1基、溝3条を検出した。

S K01 トレンチの西端部で検出した、長径70cm、短径35cm、深さ20cmの楕円形の土坑である。埋土は淡黄褐色細砂で炭化物を含んでいる。出土遺物はなく、時期は不明である。

- S D01** 検出した2条の溝はわずかの時期差をもって存在したと考えられるが、S D01はS D02の埋没後あるいは掘りなおしたものであると考えられる。S D01は南北方向の溝で、北端部で西方向に屈曲している。溝の幅は40cm、深さは3cm。埋土は淡黄褐色極細砂である。
- S D02** 東西方向の溝で、溝の幅は70cm、深さは5cmである。埋土は灰褐色極細砂でマンガンを含んでいる。
- 2号墳** S D01からは布目のある半瓦片が出土し、S D02からは須恵器の壺片が出土している。これらの遺物から、溝の時期は平安時代末～鎌倉時代頃のものであると考えられる。
- 24トレンチ** トレンチ南西端で溝を検出した。この溝は21トレンチ4区で検出した2号墳の周溝の一部である。検出した周溝は、溜池によって削平されているが、幅は2.6m以上、深さ22cmである。2号墳の時期は6世紀前葉である。
- 溝** 溝を2条検出した。調査区の南半部で検出した溝は幅1.9m、深さ8cmを測る。埋土は淡茶褐色極細砂で、焼土がわずかに確認された。2号墳の調査時にも確認できたように、ここでもトレンチ調査前の耕土の除去段階で、調査区外に溝の続きを不明確ながら確認することができたため、調査範囲を一部拡張して、溝の規模を確認する調査を行った。その結果、溝は弧状に巡ることが判明し、円墳の周溝であると確認することができた。この円墳を3号墳とした。調査区中央部で検出した溝が古墳の北側を巡る周溝であると考えられるが、古墳周溝は削平により遺存状況が悪く、平面形がややいびつなものとなっている。
- 3号墳** 3号墳の埋葬施設は検出していない。推定直径は11m、周溝外側の直径16mを測る。出土遺物は細片であり、古墳の時期を決定するものは出土していない。
- 25トレンチ** 幅1.5m、長さ42mのトレンチである。地形は北東から南西方向に向けて傾斜している。検出した遺構は上坑が2基、溝が4条、ピット数基である。
- S D01** 調査区の西端部で検出した溝で、幅0.8m、深さ7cmである。
- S D02** 調査区の中央部で検出した、幅1.4m、深さ8cmの溝である。
- S D03** 調査区の中央部で検出した溝で、当初は溝状の遺構か上坑状の遺構か不明であったため、遺構の性格を明らかにするため、直交するトレンチを設定して調査を行った。その結果、幅4m、深さ0.7m、断面逆台形状の溝であることが判明した。溝は弧状に検出されたため、古墳の周溝である可能性が考えられ、遺構の性格や規模等を確認するための範囲確認調査を実施した。確認調査は調査区を東側に拡張して実施した。
- 範囲確認調査 調査の結果、S D03は円形に巡ることが判明し、S D01・02もS D03の外側を0.6～1.6mの間隔を空けて円形に巡る溝であることを確認した。以上の検出状況から判断して、S D01～03は2重に巡る古墳の周溝であることが確定し、古墳は円墳であることが判明した。周辺の他の調査区でも同様に古墳がまとまって確認されたため、ひとつの古墳群の存在が明らかとなり、この古墳群の名称を字名から「堂ノ上古墳群」と呼称することとした。

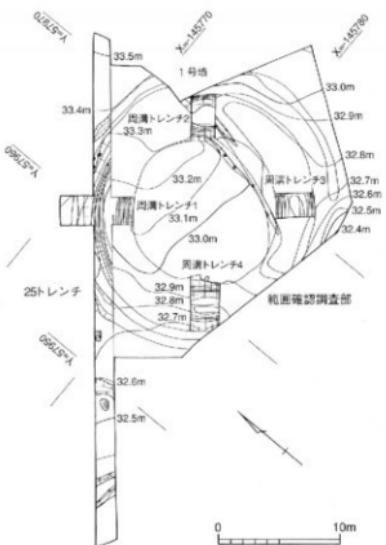


fig. 293 25トレンチ・範囲確認拡張部平面図



fig. 294 1号墳全景

1号墳 25トレンチにおいて、同古墳群の中で最初に確認されたこの円墳を1号墳とした。1号墳の時期は出土遺物から6世紀中葉と考えられる。

1号墳の直徑は12m、周溝の外側の直径は19mであった。周溝の幅は3.3~4.4m、深さは55~80cmである。

周溝の埋土は黒色シルト質極細砂が下層に堆積しており、須恵器の环身が1点出土している。中層は淡茶褐色シルト質極細砂～中砂、周溝の肩部付近は暗黄灰褐色砂質シルト・淡茶褐色シルト質極細砂である。溝の上層は、後世の盛土と考えられる白色砂質シルト～中砂の固い土壤で埋没している。盛土によって埋められた時期は不明であるが、堆積状況等から判断して、近世以降と考えられる。このことは、近世まで古墳の周溝がある程度の窪みを持って存在していたことを推測させる。

外側の周溝については幅が1m前後で、深さは9cmであった。内側周溝と外側周溝の間隔は狭いところで20cmしかなく、この溝の機能は不明であるが、古墳構築に係わるものであることが考えられる。

周溝の平面形から古墳の規模を確認した後に、十字の方向にのみトレンチを設定して周溝を一部掘削した。25トレンチを最初に拡張した部分を周溝トレンチ1として、時計周りに周溝トレンチ2・3・4とした。いずれのトレンチからも遺物はわずかしか出土していない。周溝底の標高は周溝トレンチ1から順に32.4m、32.5m、32.2m、32.0mとなり、地形に即して南側に位置する周溝がより低くなっている。

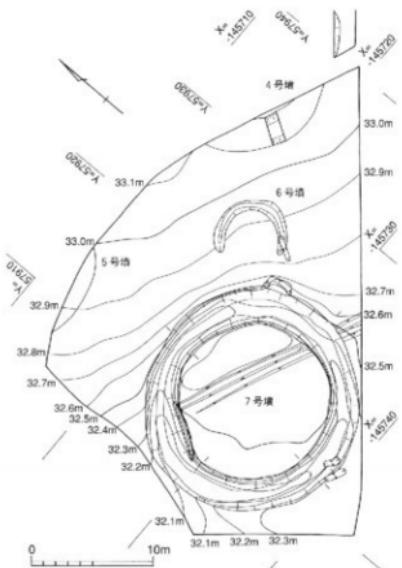


fig. 295 26トレンチ2区・範囲確認拡張部平面図



fig. 296 7号墳全景

周溝トレンチ4では、古墳の墳丘側で焼土塊や炭化物の混入する焼土層が周溝肩部に広がっていた。焼土は周溝トレンチ4の東側や西側でも確認した。焼土は肩部の落ち際で凹凸の著しい箇所に堆積していた。この凹凸は無造作なもので意味を持つものとは考えられないが、「焼く」という行為は人為的なものと考えられる。

墳丘盛土は既に削平されているものと考えられ、埋葬施設等は検出していない。

26トレンチ

1区

S D01

北側の高い部分を1区、南側の低い部分を2区として調査を実施した。

幅1.6m、長さ31mの調査区で北東から南西側に傾斜している。溝を2条検出した。

調査区の南半部で検出した幅6m、深さ8cmの南北方向の大溝である。出土遺物から12世紀頃のものと考えられる。この大溝が埋没した後に、大溝のほぼ中央部に方向を同じくする暗渠を検出したが、暗渠には12世紀の瓦片が詰められていた。S D01が埋没して間もなく暗渠が掘削されたものと考えられる。

4号墳

調査区の南端部の西壁際で検出した溝は、西方向に落ち込む溝の一部であるが、2区の拡張範囲で検出した4号墳の周溝の一部であると考えられる。埋土は茶褐色極細砂である。

2区

範囲確認調査

幅1.6m、長さ38mの調査区で古墳の周溝と考えられる溝を確認した。溝からは円筒埴輪や須恵器が多く出土した。そのため古墳の規模を確認する範囲確認調査として、調査区を西側に拡張して調査を実施した。

北側の地形の高い部分については、重機で耕作土を除去した段階で地山面が検出され、古墳周溝を確認した。調査区の南半は造構面が南に向けて緩やかに傾斜しており、流土の堆積が厚くなっていた。この流土を掘削しながら周溝の検出作業を実施した。

確認調査では、合わせて4基の古墳の周溝を確認し、北側から順に、4号・5号・6号・7号墳とした。

7号墳 26トレンチで検出していた溝については、確認調査の結果古墳の周溝であることを確認した。周溝の幅は2.5m、深さは16~30cmを測り、直径13mの円墳の存在が判明した。周溝外側の直径は18.5mである。周溝の埋土は茶褐色砂質シルトが主体となる。周溝は地形に即して古墳の南側が低くなっている、北側の周溝との比高は約30cmである。

周溝からは全域で遺物が出土している。遺物は埴輪、須恵器の壺、壺、甕、器台、土師器の甕が出土している。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。本来墳丘上に立てられていたものが周溝側に倒れこんだものである。埴輪以外の遺物は古墳の北側と東側の周溝から集中して出土している。この部分で何らかの葬送儀礼が行われたと考えられる。古墳の時期は、これらの遺物から6世紀前葉と考えられる。

墳丘は既に削平され残存していない。埋葬施設等も検出されなかった。7号墳とした。

4号墳 調査区の北端で検出した古墳で、周溝の一部のみを検出しているが、推定復元すると直径7.5m、周溝の外側の直径は10mの円墳である。26トレンチ1区でも4号墳の周溝の一部を確認している。周溝は一部のみを掘削して調査を行った。周溝の幅は2.5m、深さは20cmで、周溝の埋土は暗茶褐色の砂質シルトである。須恵器片が数点出土した。6世紀前半の古墳と考えられる。

5号墳 北西端で周溝の一部を検出した古墳で、推定復元すると周溝の外側の直径が12mを測る円墳と考えられる。周溝は未掘削である。周溝上面より埴輪が出土している。

周溝の埋土は4号墳と同じく暗茶褐色砂質シルトであった。

6号墳 4号墳と後述する7号墳との間の狭い範囲に存在する小規模の古墳である。周溝は南側でその一部が切れているが、削平によるもので本来は完周していたと考えられる。完掘してその規模の調査を行った。直径は4.5m、周溝外側の直径は6.0mである。周溝の幅は0.8~1.2mで深さは3~9cmである。周溝の埋土は茶褐色砂質シルトでマンガンを含んでいる。遺物は出土しておらず、埋葬施設等は遺存していない。時期は不明であるが、7号墳に続く時期の6世紀中頃のものと考えられる。

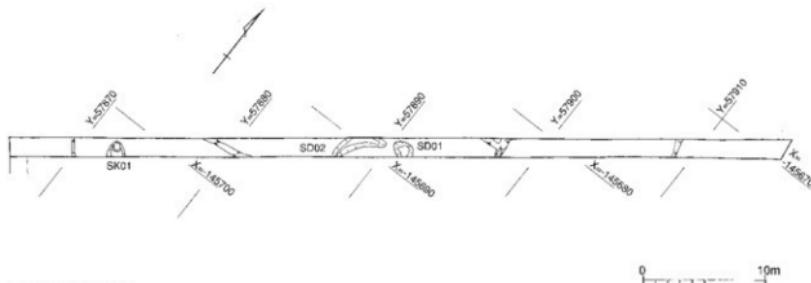


fig. 297 27トレンチ平面図

- 27トレント** 幅1.5m、長さ63mのトレントで、検出した遺構は土坑が1基、溝が2条である。トレントは現水田造成時に削平されたと考えられ、階段状に北東から南西方向に低くなっている。
- S K01** 調査区外に延びるため、全体形は不明であるが、長径1.3m以上、短径1.4m、深さ14cmを測る、平面形が楕円形を呈する土坑である。埋土は灰褐色極細砂である。時期については不明である。
- S D01** レント中央部で検出した幅1.4m、検出した長さ1.8m、深さ8cmを測る溝である。埋土は灰褐色極細砂である。
- S D02** S D01の西側で検出した幅1.1m、検出した長さ4.5m、深さ13cmを測る溝である。埋土は灰褐色極細砂である。
- 本米はS D01とS D02は同一の溝で、円弧状であった可能性もある。遺物の出土ではなく、時期の特定はできない。
- 28トレント** 27トレントの南端で東方向に屈曲する、幅1.6m、長さ27mの調査区である。現耕土を除去した段階で黄褐色砂質シルトの地山面となる。遺構は検出していない。
- 29トレント** 調査地の最西端に位置する、幅1.8m、長さ47mの調査区である。トレントの東端部で土坑を1基検出した。
- S K01** 調査区外に延びるため全体規模は不明であるが、長径1m以上、短径0.6m、深さ6cmを測る、平面形が楕円形を呈する土坑である。埋土は淡灰褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。
- 小結** 今回の調査では、古墳時代後期、古墳時代末～奈良時代、奈良時代～平安時代、鎌倉時代の遺構を確認することができた。中でも古墳時代後期の古墳群が新発見されたことは特筆すべきことである。
- 今回「堂ノ上古墳群」と命名した新たに確認した古墳群は、今回の第37次調査で7基、古墳群の試掘調査によってさらに4基の古墳が確認され、合計11基に及ぶ。調査地は北東方向から張り出す丘陵の裾部に当たり、西南方向に傾斜する緩やかな台地上に古墳が造営されている。地形から類推すると、この堂ノ上古墳群を営んだ人々の集落は、古墳から西南方向に視界が広がる段丘上に存在すると考えられる。集落址はまだ見つかっていないが、今後、周辺の調査で明らかになるであろう。
- また、第1次調査時に確認されている出合龜塚古墳を始めとする5基の古墳群との係わりや、さらに南側の台地上に存在する古墳時代中期前半の吉田王塚古墳との関係を考えていく上でも、今回の古墳群の発見は貴重な成果であったと考えられる。また、出合龜塚古墳を始めとする出合古墳群と、堂ノ上古墳群との間の空白地で古墳が発見されれば、より一層当地域の古墳のあり方が明確になるとと考えられる。
- 21トレントで、奈良時代後期頃の掘立柱建物が1棟検出されたが、同時期の掘立柱建物は第1次調査でも見つかっており、現状では江戸時代に掘削された林崎の掘削で丘陵が分断されているような印象を持つが、本米は今回の調査地から南東方向に抜がる段丘上に当該期の集落が展開するものと考えられる。

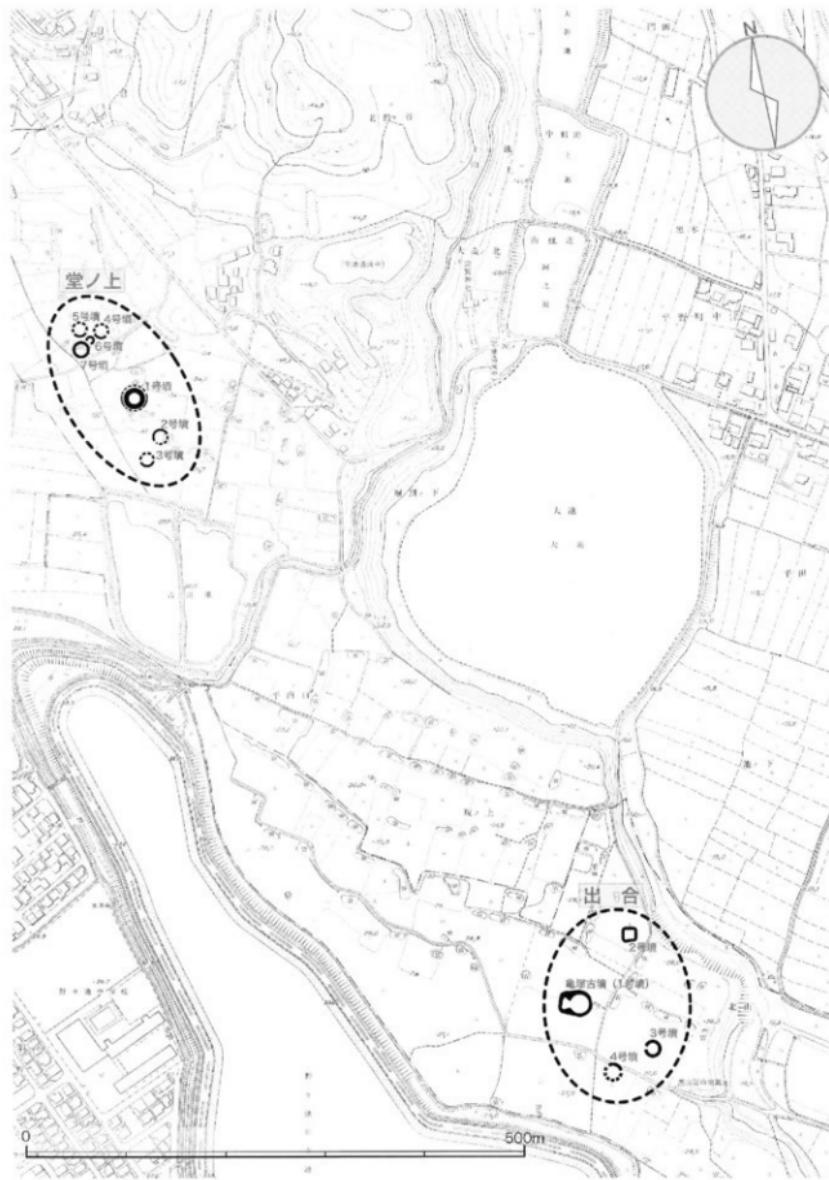


fig. 298 出合遺跡で発見された古墳の位置

第39次調査

30トレンチ

現在の上津橋の集落から大池の東側を堤沿いに台地に上がった所に位置する調査区で、東西方向に約50mの調査区である。調査区の東半部は面的な広がりをもち、西半部は幅1.2mの調査区である。現耕土を除去した段階で地山面を検出し、遺構面となる。土坑8基を検出した。

- S K01** 長径1.3m、短径0.7m、深さ10cmの平面形が椭円形の土坑である。12世紀頃の須恵器が出土している。
- S K02** 調査区外に延びる遺構で、直径0.9m、深さ30cmを測る平面形が円形の土坑と考えられる。
- S K03** 調査区外に延びる遺構で、直径0.7m、深さ25cmを測る平面形が円形の土坑と考えられる。
- S K04** 調査区外に延びる遺構で、直径1.1m、深さ32cmを測る平面形が円形の土坑と考えられる。
- S K05** 調査区外に延びる遺構で、長径2.3m以上、短径1.5m以上、深さ43cmを測る、平面形が隅丸方形の土坑と考えられる。12世紀頃の須恵器・土師器が出土している。
- S K06** 調査区外に延びる遺構で、直径1.4m、深さ80cmを測る平面形が円形の土坑で、底部は壇状である。
- S K07** 調査区外に延びる遺構で、直径1.5m、深さ65cmを測る平面形が円形の土坑で、底部は壇状である。
- S K08** 調査区外に延びる遺構で、長径2m以上、短径1.3m以上、深さ40cmを測る平面形が隅丸方形の土坑と考えられる。12世紀頃の須恵器・土師器が出土している。

上記の土坑は近接して検出されたが、土坑の用途等については不明である。SK05とSK08、SK06とSK07が規模と形状が類似している。SK05～08の埋土はシルト質極細砂である。全ての土坑から遺物が出土していないが、同時期のものであると考えられる。

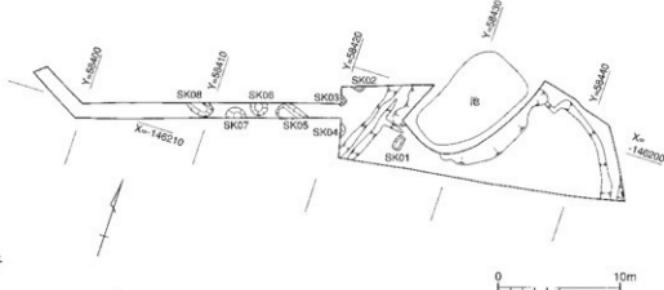


fig. 299
30トレンチ
平面図

31トレンチ

総延長90mの調査区であるが、途中の屈曲する所から北側を1区、南側を2区として調査を実施した。

- 1区** 幅1.8m、長さ35mの南北方向の調査区である。耕土を除去した段階で地山の遺構面となる。北端で溝を1条検出した。

- S D05** 長さ3m以上、幅1.2m、深さ17cmの東西方向の溝で、埋土は上下2層に分かれる。須恵器の楕と瓦が出土している。溝の時期は12世紀前半と考えられる。

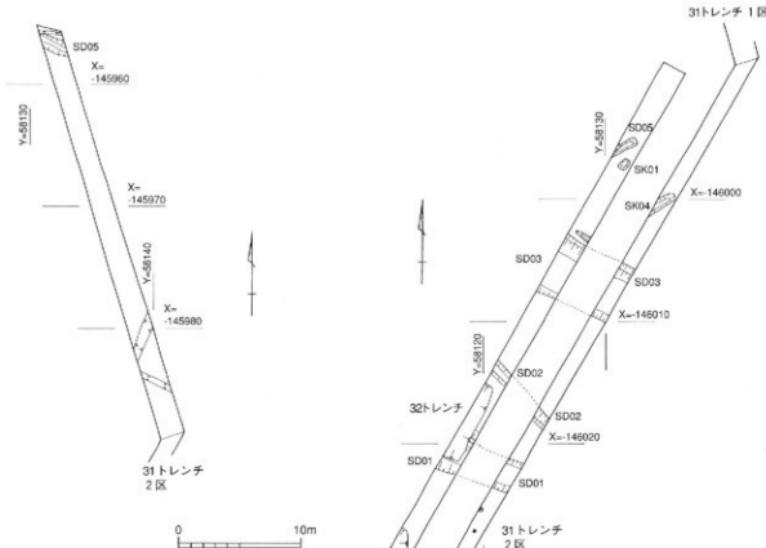


fig. 300 31トレンチ 1区平面図

fig. 301 31トレンチ 2区・
32トレンチ平面図



- 2区** 1区から屈曲して南西方向に延びる調査区で、幅1.2m、長さ54mである。溝4条とピット2基を検出した。
- S D01** レンチの南端で検出した、幅2.8m、深さ70cmのはば東西方向の溝で、後述するS D02を切っている。埋土は極細砂から粗砂が中心を成している。この埋土と同一の砂層は南側の遺構面上にも薄く堆積している。出土遺物は12世紀頃のもので瓦や捏鉢等の須恵器である。いずれも摩滅している。
- S D02** S D01の北側で検出した溝でS D01に切られている。幅は4.6m以上、深さ45cmである。溝の肩は一段落ちてから、さらに落ちて底になる。埋土は砂質シルトとシルト質極細砂が主体となる。11世紀頃の須恵器が出土している。
- S D03** レンチの中央部で検出した幅5m、深さ30cmの溝である。埋土はシルト質極細砂が中心となる。上層、中層で炭化物を含んでいる。肩部から緩やかに落ちこみ、溝底は平坦である。出土遺物は須恵器や土師器の細片で、11世紀頃のものと考えられる。
- 32レンチ** 幅1.6m、長さ43mの調査区で、31レンチ2区の西側に並列している。土坑1基、溝5条を検出した。
- S D01** 振乱によってそのほとんどが削平されているが、幅3m、深さ70cmの溝である。溝の方向と埋土の状況から、31レンチで検出したS D01と同一の溝であると考えられる。
- S D02** S D01の北側で検出した幅6m、深さ40cmの溝である。溝の肩は一段落ちて、わずかに平坦部を残して、さらに落ちこみ、底となる。底は平坦である。溝の方向と埋土から、31レンチのS D02と同一の溝であると考えられる。
- S D03** 調査区中央部で検出した、幅5.2m、深さ30cmの溝である。肩部は緩やかに落ち、底面は平坦部を成している。溝の方向や埋土から31レンチのS D03と同一の溝であると考えられる。



fig. 303
33レンチ
全景

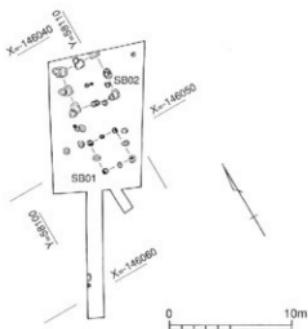


fig. 304 33トレンチ平面図

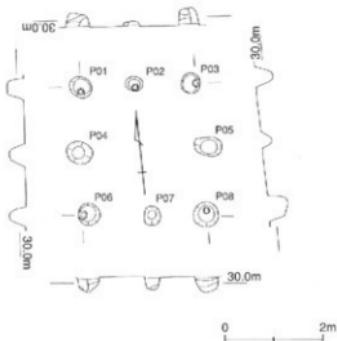


fig. 305 33トレンチSB01平・断面図

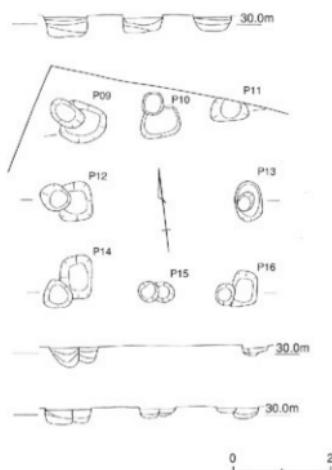


fig. 306 33トレンチSB02平・断面図

33トレンチ 調査区の北端では耕土直下で造構面となる。掘立柱建物2棟と十数基のピットを検出した。掘立柱建物の柱穴を数基確認した段階で、建物全体の規模を確認するため、調査区を拡張して調査を行った。

S B01 調査区の中央部で検出した、東西2間、南北2間の側柱のみの掘立柱建物である。建物の規模は東西2.5m、南北2.5mを測る。柱間は東西が1.1~1.4m、南北が1.3mである。柱掘形の大きさは直径40~55cm、深さ10~38cmの円形である。埋土は淡茶褐色の砂質シルトでマンガンを含んでいる。建物主軸の方向は北から東へ6°振っている。

S B02 調査区の北端で検出した、東西2間、南北2間の側柱のみの掘立柱建物である。建物の規模は東西3.5m、南北3.8mを測る。柱間は東西が1.6m、南北が1.6~2.0mである。柱掘形の大きさは長径70~90cm、短径50~70cmの楕円形や方形に近い形状をしている。深さは20~45cmである。埋土は淡黄褐色の砂質シルトで、マンガンを含んでいる。建物主軸の方向は北から東へ7°振っている。

小結

31・32トレングで検出したS D02・03は両方とも規模や埋土が類似しているが、その形状や埋土から、自然の溝ではなく建物群の境界を示すようなものであると考えられる。今回の調査では溝と同時期の建物等を確認することは出来なかったが、今後の調査の進展によっては明らかとなるであろう。

33トレングのS B01から出土した遺物は須恵器片1点と上師器片が1点のみである。時期を決定する材料は乏しいが、少量の遺物から判断すれば、奈良時代後期と考えられる。S B02については、S B02を切っているピットとS B01の柱穴の規模とか類似していることから、S B02はS B01に先行するものの、建物方向が一致することから、S B01とほぼ同時期のものと考えられる。これらの掘立柱建物は正方形に近く、居住空間としての建物というよりはむしろ、居住以外の用途を持った建物であった可能性が考えられる。

調査地には、豊臣秀吉が三木城を攻める際に焼き払ったという「日甫山蓮花寺」が存在していたという伝承があり、今後、寺院の関連遺構が発見されることも予想されるが、同寺の縁起などについては不明な点が多く、現在のところ検出された遺構との関連を結ぶ接点は見出せてはいない。

3.まとめ

今回の2次にわたる調査では、6世紀前葉頃を中心とする時期の古墳群「堂ノ上古墳群」において11基の円墳を確認した。今後の周辺地での調査の進展に伴い、同古墳群中に存在する古墳の数はさらに増えるものと予想されるが、今回の調査成果から考えれば、現耕土直下で検出され、激しく削平をうけており、埋葬施設が遺存している可能性は低いと考えられる。ただし、今回未発見の古墳群を確認したことは先述のとおり大きな成果であることは間違いない。今回検出した古墳の中には、土器や埴輪が周溝内より出土しているものがあり、6世紀段階の古墳の状況の一端をあらわしており、これまでに確認されていた出合亀塚古墳を中心とする「出合古墳群」との関連など新たな課題が見つかったものといえよう。

また、第37、39次調査においてともに奈良時代の掘立柱建物を検出した。建物を検出した地区の周囲にも同様に掘立柱建物が展開していることが十分予想され、奈良時代に掘立柱建物を中心とする集落が展開していた可能性が高いものといえる。奈良時代における出合遺跡の様相についても今後さらに注意を払っていかねばならないものといえよう。

52. 出合遺跡 第38次調査（下津橋城）

1. はじめに

出合遺跡は明石川下流右岸に位置し、沖積地から段丘上までの広い範囲に立地する遺跡である。

当遺跡における調査は、これまで40回近く実施されている。遺跡が広範囲に広がることからもわかるように、これまでに沖積地の弥生集落、段丘上の古墳群をはじめ古代・中世そして近世に至るまでの様々な時代の遺構・遺物が検出されている。



fig. 307
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要 今回の調査は宅地造成に伴うもので、工事によって影響を受ける部分について実施した。今回の調査地は、室町時代ないし戦国時代のものと考えられてきた下津橋城の城内に推定される地点である。調査の結果、遺構面を1面確認し、下津橋城の堀等を検出した。

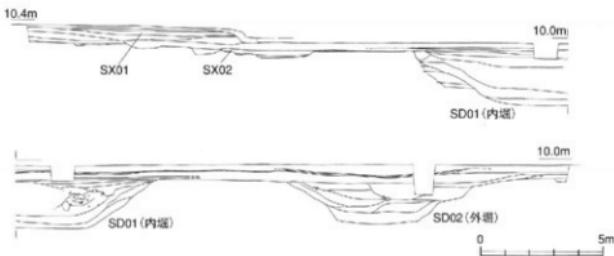


fig. 308
2 トレンチ東壁
土壌断面図

基本層序

上層より、現表土（水田耕土）の下に 3 枚程度の水田土壤及び表土層（2a～5a層）が存在する。その下層、現地表下約40cmで検出した5a層が戦国時代の地表上となり、5a層の下面が遺構面となる。なお調査地の南端では厚さ10cm程度の5a層の下層でもう1枚下の表土6a層を確認しており、当調査地の南側にはもう1面遺構面が存在する可能性がある。

S D01

内堀と考えられる溝状遺構である。断面逆台形で幅12～14m程度を測る。3トレンチ・2トレンチ部分では西北西から東南東方向に直線的にのび、1トレンチ付近で北へ屈曲する。底面の幅は約6mを測る。下位は自然堆積により埋没しているが、中位～上位はブロックが多く人為的に埋め戻したものであることが明らかである。2トレンチでは柱材や樹木なども埋め込まれていることを確認している。落城後の状況を示すものと考えられる。埋上下位からは土器・板・貝等が出土している。

S D02

S D01の南側で、約5.5mの間隔を空けて並走する、幅約8mを測る外堀と考えられる溝状遺構である。断面形は逆台形で、2トレンチでの底面の幅約3.5mを測る。1トレンチにおいては南岸は不明瞭である。1トレンチ部分で北へ屈曲するが、この東堀部分では内堀との間隔が1.2m程度となり、狭くなる。

S D01同様、下位は自然堆積、中位～上位は人為的に埋め戻されている。また、2トレンチでは外堀の埋め戻し後、幅2.5m以上、深さ70cmの土坑状の遺構が掘り込まれ、この底面から擂鉢や躰が出土している。1トレンチにおいては板等が出土している。

土坑群

2トレンチ北部で検出された。径1m程度の土坑が群在する。遺物等ほとんどなく時期は不詳である。土取り跡かとも考えられる。

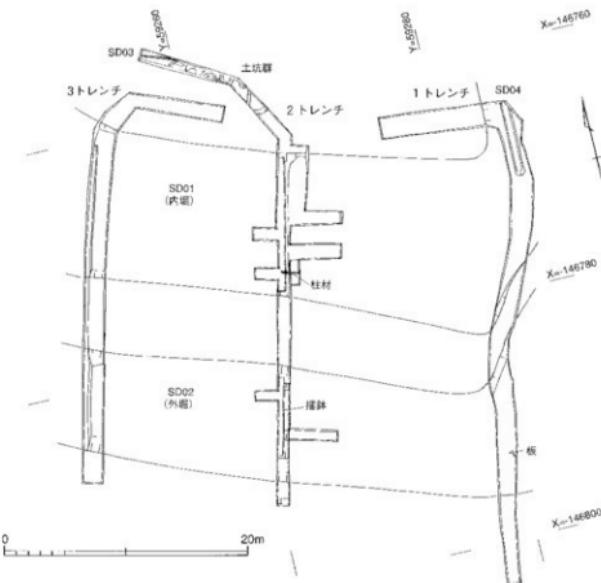


fig. 309
調査区平面図

3. まとめ

今回の調査地は、出合遺跡の範囲の中でも特に「下津橋城」の城内と推定される地区に位置している。今回の調査地の北側に所在する宗賛神社・西光寺付近が主郭と推定され、現在でも宗賛神社の北側及び東側には幅約10m、高さ約6m程度の土居が残り、以前は現在在グラウンドとなっている神社の南東方にこの土居は続いている。

下津橋城については『播磨鑑』に明石某の城と伝えるのみで、戦国時代以前におけるこの城に関する記録類はこれまでのところ確認されておらず、城主あるいは詳しい築造時期・廃絶時期等も明らかでない。また、これまで発掘調査等により考古学的に城の実態に迫るような資料はほとんど確認されていなかった。

以上のような状況で、今まで下津橋城については不明な点が多く、その構造については、近年まで残されていた地形から推定が行われているのみであった。

こうした中実施した今回の調査では、現況地形からは想定されていなかった位置で二重に巡る堀を確認した。2004年調査の際に確認された溝の立ち上がりについても、今回の調査成果と考え合わせると、内堀の北岸に対応しているものと推測される。今回の調査成果を得たことで過去の成果の再検討にもつながることとなり、「下津橋城」の構造を考える上での貴重なデータを得ることができたといえる。

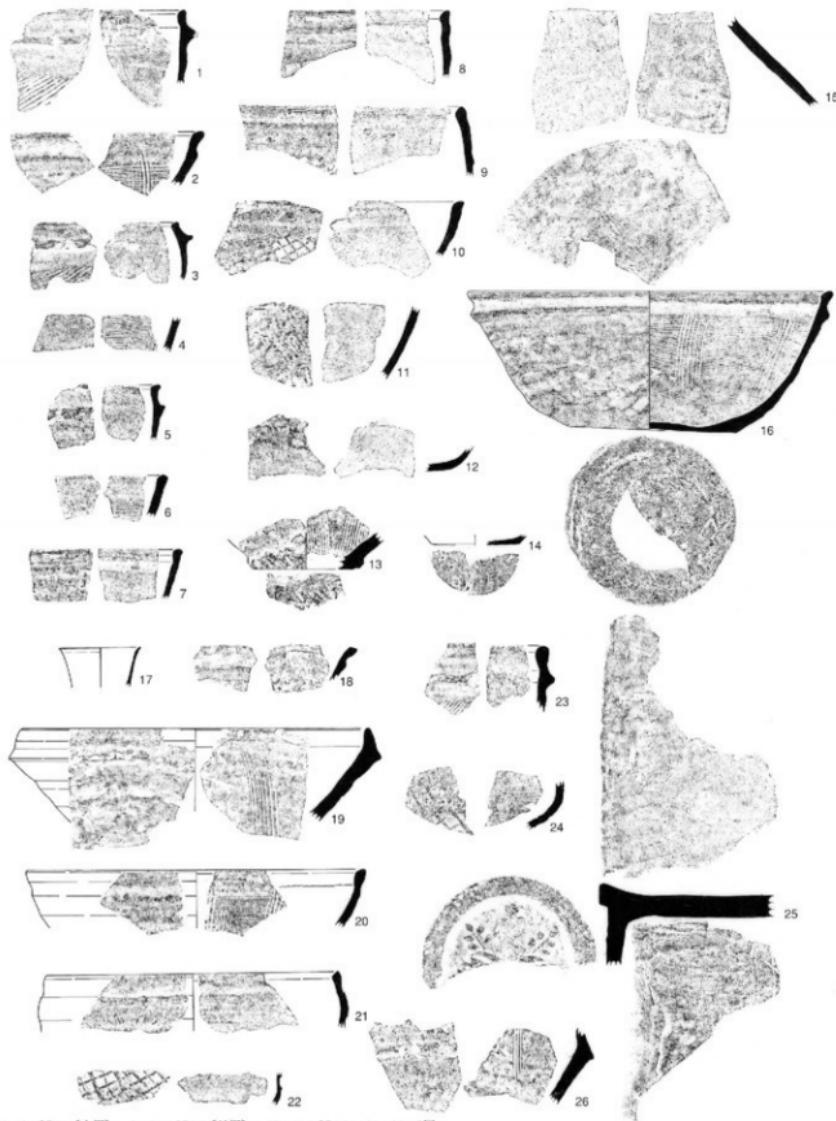
今回の調査から復元される城の規模は、一辺約90mの方形で、その外側に堀が巡らされるものになると考えられ、1980年に落合重信氏によって示された復元案にはほぼ合致するものといえる。今回確認した堀以北が城の主郭ということになるだろう。構造についての判断は周辺部の調査データの蓄積を待たねばならない。

また、堀の堆積土や埋め立て時の土砂に包含される遺物により、これまで判然としなかった下津橋城の活動あるいは廃絶の時期等を推定する手がかりを得た。

堀からの出土遺物は量的には多くなく、この居館あるいは城の築造時期については今回の調査のみで確定することはできないが、下位からは15世紀代に遡る遺物が出土しており、15世紀段階にはこの堀が存在していた可能性が高いものといえよう。廃絶時期については、埋め立て土の中から時期を判断しうる土師器鉢・焰格等が一定量出土しており、安土桃山時代、16世紀にはほぼ確定することができる。また埋め立ての土砂からは、建築部材なども出土しており、城割りの具体的な状況を確認することができた。下位出土の木製品や貝などは、この居館における生活の具体的な状況を示す資料になるだろう。



fig. 310 2 トレンチ S D02全景



1~4: SD01〔内面〕、5~16: SD02〔外振〕、17~19: SD04、20~26: 5層
 (13・19・26: 備前焼、15: 常滑焼、17: 白磁、25: 瓦、その他: 土師器)

fig. 311 出土遺物実測図

0 20cm

III. 平成19年度の保存科学調査・作業の概要

平成19年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺構の保存科学

遺構の切り取りり

兵庫津遺跡

兵庫区三川口町の兵庫津遺跡第45次調査では、江戸時代後期から幕末にかけて営まれた合計30基の墓を検出しており、その殆どに人骨が遺存していた。人骨は現地で写真測量データ、通常の写真撮影などの記録を取りながら取り上げることとした。しかし中には遺存状態が良好で、出土状態のまま保存すべきもの、または逆に遺存状態が悪いため現地での調査・取り上げが困難であり、室内における精査が必要なものが存在した。これらについては、出土状態のまま周囲土壤ごと取り上げることとした。

取り上げ工程は大まかに、①周囲土壤の掘削、②骨表面の養生、③梱包・取り上げとなる。まず出土状態の記録を取り、取り上げ可能な部分の骨は前もって取り上げておく。さらに切り取る範囲を設定し、周囲に溝を掘削する。その後、骨自体に取り上げ用樹脂が付着しないように紙ワイパーやアルミ箔で養生する。梱包には木材で補強した上に硬質発泡ウレタンフォームを使用し、遺構物全体を包み込んだ上で取り上げとなる。

取り上げ後は埋蔵文化財センターに搬入し、室内での詳細調査、保存科学的な処置を実施し、保存管理を行っている。



fig. 312 人骨（S T01）出土状況



fig. 313 梱包作業



fig. 314 吊り上げ作業



fig. 315 保存処理完了状況

遺物の保存科学

金属製品

北区道場町塩田に所在する八幡神社古墳群では、平成17～18年にかけて八幡神社8号墳および同じ地区の前期古墳、塩田北山東古墳の2基について発掘調査が行われ、各種副葬品が出土した。このうち平成19年度の処理対象となったのは塩田北山東古墳出土の金属製品2点（青銅鏡：三角縁一仏三神四獸鏡1点・鉄剣1点）である。

保存科学的処置に際しては、顕微鏡による詳細な表面観察、X線透過観察等の事前調査を行い、付着物の確認や技法の推定、劣化構造の調査を実施した。また、表面に残存する付着物などについてはサンプリングの上で保存科学的調査も実施した。詳細な成果については発掘調査報告書に譲り、ここでは概要のみを記す。

青銅鏡の表面観察では、主に土砂の付着状態、サビの析出状況を観察し、保存処理の方針立てを検討した。鏡面を上にして出土していたことから、鏡面側には土砂が付着していたが、鏡背側には土砂の付着は少ないものの棺身と鏡背の間に空洞が生じ、その空洞を埋めるようにボーラスな銅サビが析出していた。また器面には緻密な銅サビが面的に密着している状況が観察できた。この情報を元にクリーニング作業を実施した。

X線透過観察では、破断面に劣化が集中している状況、鋸切時に生じたスの分布状況などを観察した。特にスの分布からは湯口の推定に役立つ情報を得ることができた。

鉄剣には把装具と鞘の有機質部材が付着残存していることが観察できた。結果、把は木製一本作りで材にはニレ科を用い、仕上げには黒漆が施されていたことが判明した。また握り部については絹糸の糸巻きと、表面仕上げに鉄粉が撒かれていたことも確認されている。また鞘には針葉樹の板目板を用い、鞘口と鞘尻のみに黒漆を施していたことが確認できた。

青銅鏡についてはその製作技法の復元に迫る意味でも、使用された素材の分析調査を実施した。方法は非破壊・非接触の蛍光X線分析装置を用い、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所のご指導・ご協力を得て行った。結果、素材は銅-スズ-鉛であり、古墳時代銅鏡に通有の青銅であること、また腐食による脱銅化が表層でおこり、スズの比率が表層付近で高くなっている現象が捉えられた。

また、鏡面には織物の断片が付着していることが確認された。小片でもあり（4.2mm×3.8mm）、表面観察のみではあるが、平絹の断片である可能性が高いことがわかった。

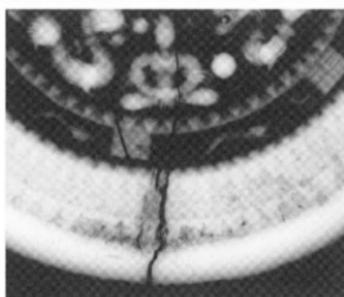


fig. 316 青銅鏡X線透過画像（部分）



fig. 317 鉄剣把糸巻き残存状況

事前調査に必要な作業を終え、またこれらの調査結果を元に保存のための処置を実施した。主な工程は、①クリーニング作業、②脱塩・防錆作業、③樹脂含浸強化となる。

クリーニングには表面に付着した土砂やサビについて、筆や精密グラインダー等を用い、物理的に除去した。クリーニング後は劣化防止措置として脱塩・防錆処置を行なった。鉄剣については、水酸化リチウム0.07%アルコール溶液中に常圧で約3か月間浸漬して脱塩処置とし、青銅鏡はベンゾトリアゾール2%アルコール溶液に常圧で浸漬して防錆処置とした。その後、構造強化のために、鉄剣はアクリルエマルジョン樹脂（パラロイド：NA D-10）、青銅鏡はパラロイドB-72をそれぞれ減圧または常圧で含浸した。樹脂含浸強化後は、恒温恒湿の収蔵庫にて保管している。



fig. 318 青銅鏡保存処理前



fig. 319 同左保存処理完了後

兵庫津遺跡

平成18年度に実施した兵庫区七宮町の兵庫津遺跡第44次調査では、江戸時代中期から幕末にかけての町屋遺構が検出された。また、その下層には町屋成立以前の湿地状地形があり、埋土中より遺物が出土している。その中に、龍をモティーフに七宝細工を施した銅製飾りが1点ある（fig.11）。詳細な時期は検討中であるが、概ね17～19世紀を出ないものと考えられる。

形状は細長い円筒形で、全長4.3cm、直径1.4cm、10.66gを測る。中空であり、両小口は中心に直径3.9mmの孔の開いた円形板で閉塞する。

意匠はメインとなる龍像を側面いっぱいに表現しており、空隙を埋めるように雲文を散らしている。これらは太さ0.13～0.15mmの金属線によって縁取りされ、白・黄・緑・紺・赤の5色に彩色されていることが現状で視認できるが、アルコールでの洗浄をした際、風化層に洗浄液が浸透したことにより乱反射が抑えられ、本来の色彩が透過し、観察できた。すなわち地色と雲文の「黄」、龍胴体と胸鱗の「紺」、背鱗と舌・鼻・角の「赤」、たてがみの「緑」、足と眼球、髭の「青」、瞳の「濃紺」の計6色が確認された。なお、彩色部はガラス質であり、七宝技法で表現されていることがわかる。形態・技法の観点においてこれに類する製品としては、大阪歴史博物館に寄託された個人所蔵の伝世品4点があるが、製作地・用途等については今のところ明らかでない。

今回、現段階で調査すべき項目として、保存処理作業を実施するための事前調査として、

表面観察・構造調査・素材調査を行うこととした。なお、当教育委員会に実施不可能な蛍光X線分析装置での素材分析調査は、大阪歴史博物館の協力を得て行った。

表面観察は主に実体顕微鏡を用い、肉眼では見えない表面に残された情報を検討した。

当初肉眼観察では、彩色の部分が退色しているのは釉薬が剥離しているものと考えていたが、拡大観察したところ、釉薬そのものが剥離している部分だけでなく、残存している表層自体が退色しているようであり、埋蔵環境中の風化作用で退色したものと推測される。また色ごとに様相が異なっていることが観察された。

黄・・・・・・・・ 均質で気泡を少量含む。退色は少ないと考えられる。

赤・・・・・・・・ 風化した部分（黄褐色）と赤色部分がマーブル状に混在。

紺・濃紺・青・緑・・ 気泡を多く含む。風化層は白化する。

構造調査はX線透過装置を用いて行った。地板の部分には全体的にスカ観察でき、鋳造工程上で生じたものと推測される。また色の違いがコントラストの違いに反映されるものと想像したが、明確な差は見られなかった。



fig. 320 部分マクロ写真 (2.4倍)

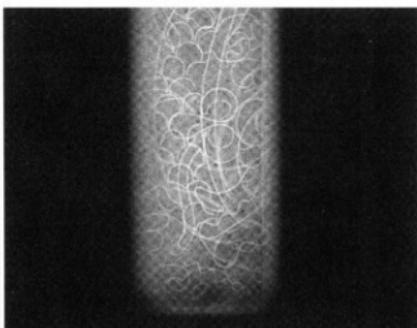


fig. 321 同左X線透過画像



fig. 322 眼球部分拡大 (35倍)

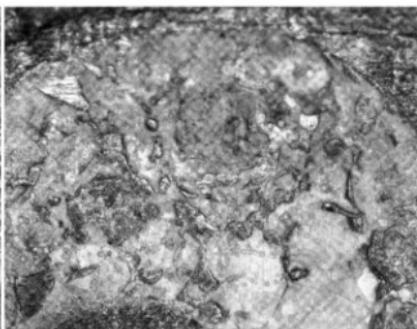


fig. 323 角部分拡大 (35倍)

素材の分析調査は、蛍光X線分析データを元素マッピング画像で観察することにより、各彩色部分の発色方法を検討することを目的とした。

マッピングに用いた元素は「珪素・カルシウム・カリウム・アルミニウム・鉄・銅・鉛」である。彩色に用いられた釉薬はガラス質であり、ガラス成分の検討を目的としたため、これらの元素を選択している (fig.14)。

結果、彩色部分全体で検出された元素は珪素・鉛であった。これは釉薬の基礎材料に用いられた珪石 (珪砂/SiO₂)・鉛丹 (酸化鉛/PbO) に由来するものと考えられる。またカリウムが全体に検出されている。これは技法として硝石 (KNO₃またはNaNO₃) を加えることを反映している可能性がある。またアルミニウムも全体に微量ながら存在するが、これも珪砂などに混在するものであろう。以上、素材の配合比率は不明であるが、ガラスとしての分類は「カリウム鉛ガラス」となり、これは平安時代以降の国産ガラス製品に一般的に見られるものである。

鉄とカルシウムは相反する分布を示した。鉄は黄→赤の順に強く、緑の部分には希薄であった。一方、カルシウムは白色 (鉛色) 部に強く検出され、それ以外の部位では強度は低かった。

銅については、金属線に顕著に検出されており、これが銅を主体とした素材で製作されたことを物語る。しかし他の元素、例えば亜鉛やスズについてはマッピングしていないため、青銅なのか亜鉛なのかといった検証はできていない。また金属線以外の部位にも赤・白 (鉛)・緑の部位にも銅は検出されている。マッピング画像では一見、微量にみえるが、金属線の検出量にベースが合わされているため、ある程度の量が検出されているものと考えられる。

現段階では他の元素について分析しておらず、着色材料そのものについて言及することはできないが、結果として色それぞれに別の着色材料を使用していたことは確実と考えられる。



fig. 324 分析作業状況

木製品

玉津田中遺跡

西区玉津町に所在する玉津田中遺跡第36次調査においては、弥生時代中期の溝状遺構の底に、木製の器台が壺を据えた状態で置かれていた。器台はかなり脆弱化が進行しており、口縁部についてはほぼ欠損した状況、また基部も5片に割れた状況であった。これについて保存科学的調査を含めた処置を行うこととなった。

個々の遺物について適切な処理方法を選定するためには、樹種の同定と、劣化度の確認が不可欠である。そのため、まずは器台の材である樹種についての調査を実施した。樹種同定作業については㈱パレオ・ラボに業務を委託した（P.180）。結果、クスノキ属を使用していることが判明した。クスノキは軸がらせん状に撫れて生長することから、保存処理の工程において形状変化を生じる恐れがある。そのため、極力含浸期間および液温を短く、低く抑えることが望ましい。

劣化度については、触れた感触としては表面の劣化が進行していると感じられた。接合不可能な小片について赤外線水分計で含水率（ドライベース水分率）を測定したところ、表層で397%、内部で93.6%との計測値が得られた。これにより材の表層と中心部では劣化度が大きく異なることが確かめられた。水浸出土木材の場合、劣化の激しいものでは含水率が1000%を超えるものもあることから、当遺物は比較的健全であるといえるが、十分な樹脂含浸強化は不可欠であると考えられた。

以上の結果、表層の劣化の観点からは①PEG4000を100%まで含浸することが望まれるが、樹種の観点からはよりスピーディーな手法、②PEG4000の低濃度（70～80%程度）含浸→真空凍結乾燥、もしくは③ラクチートール+トレハロース含浸を想定した。いずれも一長一短があると考えられ、①は最終濃度まで徐々に上げていくため、長い期間50℃前後の溶液に浸漬する必要があること、②は最終濃度が低いため、仕上がりが強度不足の可能性があること、③は今回の遺物の厚みが約4cmとやや厚いため、含浸後の結晶化の段階で、内部に残存した水分により3水和物の生成が懸念されること、などである。最終的な判断として、極力温度を上げないままPEG4000水溶液を20%から始めて90%近くまで、8ヶ月間で含浸を終え、最後に真空凍結乾燥で乾燥させることとした。実際は含浸期間約11ヶ月で最終濃度89%（処理液温度50℃）、真空凍結乾燥20日を費やす結果となった。



fig. 325 P E G含浸前養生



fig. 326 P E G含浸後水洗作業

結果、破片によって差はあるが、接線方向にやや縮小が生じた。これに伴ってクラックが若干広がった観もある。一方、放射方向、繊維方向にはさほどの変化は認められなかった。肉眼観察のみであるが、遺物を処理液から取り上げた直後にはすでに形状変化を生じていたと考えられるため、含浸方法について、期間と濃度上昇のバランス、および温度の管理に問題があった可能性はある。ただし、他の手法を用いた場合、結果がどのようになったかについては想像の域を出ないのが現状である。

含浸・乾燥処理後、表面に固着したPEGを湿風およびエタノールで洗浄、除去した。その後、各破片の接合および欠損箇所の補填を行っている。破片の接合にはエポキシ系接着剤を用い、充填にもバテタイプのエポキシ系合成樹脂を使用した。充填した合成樹脂は硬化後アクリル絵の具で補彩、復元作業を完了した。



fig. 327 真空凍結乾燥作業



fig. 328 欠損部補填作業



fig. 329 補填合成樹脂整形作業



fig. 330 復元完了状況

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
魚崎郷古酒蔵群	3	焼印 鉄釘 塵管 銀錢	100
郡家	83	鉄製品 銅錢	7
西岡本	6	火打金 鉄刀子 鉛滓	71
西郷古酒蔵群	6	鉄錠 鉄釘	18
木山中野	3	鉛滓	3
森北町	27	鉄釘	1
下山手	5	鉄製品	3
日暮	31	鉄釘 銅錢 鉛滓	19
上沢	55	鉄錠 鉄釘 鉛滓	25
横・荒田町	39	鉄製品	2
横・荒田町	40-2	鉄製品 鉛滓	2
軸・荒田町	41	鉄製品 鉛滓	2
兵庫津	46	鉄製品 鉛滓	5
塚本	4	鉄製品 鉛滓	3
日下部	—	銅錢 鉛滓	2
中		銅錢	1
長田神社境内	16	鉄製品	2
長田神社境内	7	鉄皿 鉄釘	4
御蔵	64	鉄製品	1
水笠	29	鉄製品 鉛滓	3
戎町	66	鉄釘	2
大田町	15	銅錢 純	2
垂水・口向	34	鉄釘 鉛滓	2
舞子古墳群 (東石ヶ谷2号墳)	21	鉄製品	1
今津	20	鉛滓	1
出合	37	鉄釘 鉛滓	2
出合	38	鉄釘	1
日輪寺	10-12	焼鍛 鉄刀子 鉄釘	5
芝崎	4	鉄釘 鉛滓	9

計299点

表15 平成19年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
木山中野	3	井戸材 曲物 建築部材	65
郡家	83	久板 杭 角材 刨材	246
魚崎郷古酒蔵群	3	板材 加工材	20
兵庫津	45	加工材	1
上沢	55	木棺材 柱根	11
中	—	板材	7
水笠	29	柱材	4
垂水・日向	34	容器底板 杭 加工材	23
玉津田中	36	蓋合 角材 加工材	21
山合	38	木棺 角材 板材	6
今津	20	柱根	2
芝崎	4	井戸材 闇板	35

計441点

表16 平成19年度出土木製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
郡家	83	プラントオパール	2ブロック
		大型植物化石	2ブロック
		花粉分析	2ブロック
		樹種同定(生材)	186点
		樹種同定(炭化材)	3点
二葉町	16,17, 19,20	樹種同定(生材)	175点

表17 平成19年度自然科学分析委託

平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成22年3月 印刷

平成22年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印刷 丸昌印刷工業株式会社

神戸市長田区上池田1丁目3番38号

TEL 078(643)3900

